

石川県 金沢市

直江南遺跡・直江ボンノシロ遺跡 直江ニシヤ遺跡・直江西遺跡

—金沢市副都心北部直江土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—

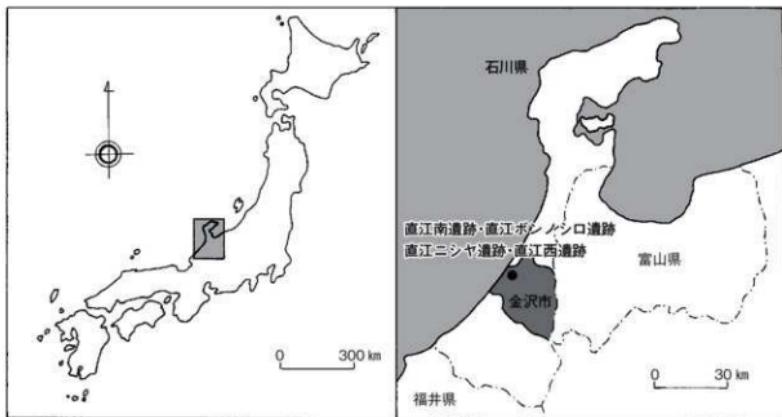
平成24年3月
(2012年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

石川県 金沢市

直江南遺跡・直江ボンノシロ遺跡 直江ニシヤ遺跡・直江西遺跡

—金沢市副都心北部直江土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—



平成24年3月
(2012年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

例　　言

1. 本書『直江南遺跡・直江ポンノシロ遺跡・直江ニシヤ遺跡・直江西遺跡』は、石川県金沢市直江町地内に所在するそれぞれの遺跡(新発見のため遺跡番号なし)の発掘調査を扱った報告書である。
2. 本調査は金沢市副都心北部直江土地区画整理組合による土地区画整理事業に伴い、平成21・22年度に金沢市が発掘調査を実施したものである。
3. 現地調査は金沢市埋蔵文化財調査委員会(会長 橋本澄夫氏、谷内尾晋司氏、垣田修児氏、横山方子氏)の指導の下で、平成21年度は前田雪恵(文化財保護課主任主事)、向井裕知(文化財保護課主任主事)が、平成22年度は向井が担当した。
4. 本書は前田が第5章、第6章を執筆し、向井がその他の執筆と編集を担当したが、「第7章 直江遺跡群の古環境」については(株)パレオ・ラボに各分析を委託し、報文を得ている。写真撮影は遺物を景山和也(文化財保護課主査)が行い、遺構を各調査担当者、航空写真を日本海航測(株)、樹種同定と塗膜分析の顕微鏡写真を(株)パレオ・ラボが行った。
5. 本書の各図及び写真図版の指示は以下のとおりである。
 - (1) 方位は全て座標北である。座標は世界測地系(第Ⅷ系)に基づき設定している。
 - (2) 各図の縮尺は、遺物は $1/2 \cdot 1/3 \cdot 1/4 \cdot 1/6 \cdot 1/8$ 、遺構は $1/40 \cdot 1/60 \cdot 1/100$ が主であるが、各図に指示しているとおりである。
 - (3) 遺物実測図の番号は通し番号とし、それぞれの本文中、観察表、写真図版のそれと一致する。
 - (4) 遺構名の略号は、SB = 掘立柱建物、SE = 井戸跡、SK = 土坑跡、SD = 溝・川跡、SX = 落ち込み・土器だまり跡などである。
 - (5) 土器については「壺」・「甕」・「高坏」・「器台」などと表記するが、用途を示すのではなく、形態による分類で、「壺形土器」などの略称である。
6. 本調査での出土遺物、記録資料は金沢市埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 発掘調査の経過.....	1

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	3

第3章 直江南遺跡

第1節 概要.....	5
第2節 検出遺構.....	5
第3節 出土遺物.....	6
第4節 小結.....	8

第4章 直江ポンノシロ遺跡

第1節 概要.....	33
第2節 検出遺構.....	33
第3節 出土遺物.....	35
第4節 小結.....	37

第5章 直江ニシヤ遺跡

第1節 概要.....	79
第2節 検出遺構.....	79
第3節 出土遺物.....	81
第4節 小結.....	82

第6章 直江西遺跡

第1節 概要.....	95
第2節 検出遺構.....	95
第3節 出土遺物.....	95
第4節 小結.....	103

第7章 自然化学分析

第1節 樹種同定.....	104
第2節 塗膜分析.....	108

第8章 総括

遺構平面図	118
写真図版	

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

今回報告する直江南遺跡、直江ポンノシロ遺跡、直江ニシヤ遺跡、直江西遺跡を含む直江遺跡群は、金沢市副都心北部直江土地区画整理事業（以下、直江土地区画整理事業）に伴う埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査で見つかった遺跡である。

遺跡の発見から発掘調査へ至るまでの経緯は以下のとおりである。

平成17年10月21日付け文書にて区画整理課長から同年11月9日開催の直江土地区画整理事業設立に向けた説明会への出席が依頼された。そこでは、大まかなスケジュール案が提示され、平成18年度の秋に埋蔵文化財試掘調査を実施し、範囲の確定と調査経費の積算を行い、本発掘調査は平成19年度からお願いしたいとのことであった。

平成17年12月6日に区画整理組合の設立準備会より埋蔵文化財の調査依頼が提出された。平成18年4月11日には区画整理課より同様の依頼があり、耕作が終了した10月からの着手を希望してきた。平成18年10月12日～同26日に試掘調査を実施した。今回の試掘調査によって、大半の対象地が終了し、直江北遺跡、直江中遺跡、直江西遺跡が確認されたが、一部未実施地区と詳細試掘調査が必要な箇所が残った。翌年の平成19年10月15日～同16日に試掘調査を実施し、直江ポンノシロ遺跡が新たに見つかった。その翌年の平成20年10月14日～同15日の試掘調査で、直江西、直江ニシヤ、直江ポンノシロ、直江南の各遺跡の範囲が確定した。

試掘調査の結果、明らかになった遺跡に関して、街路や仮設水路等の工事によって遺跡が損壊もしくは損壊と同等の状態になる箇所について、平成19年度から順次発掘調査を実施している。

第2節 発掘調査の経過

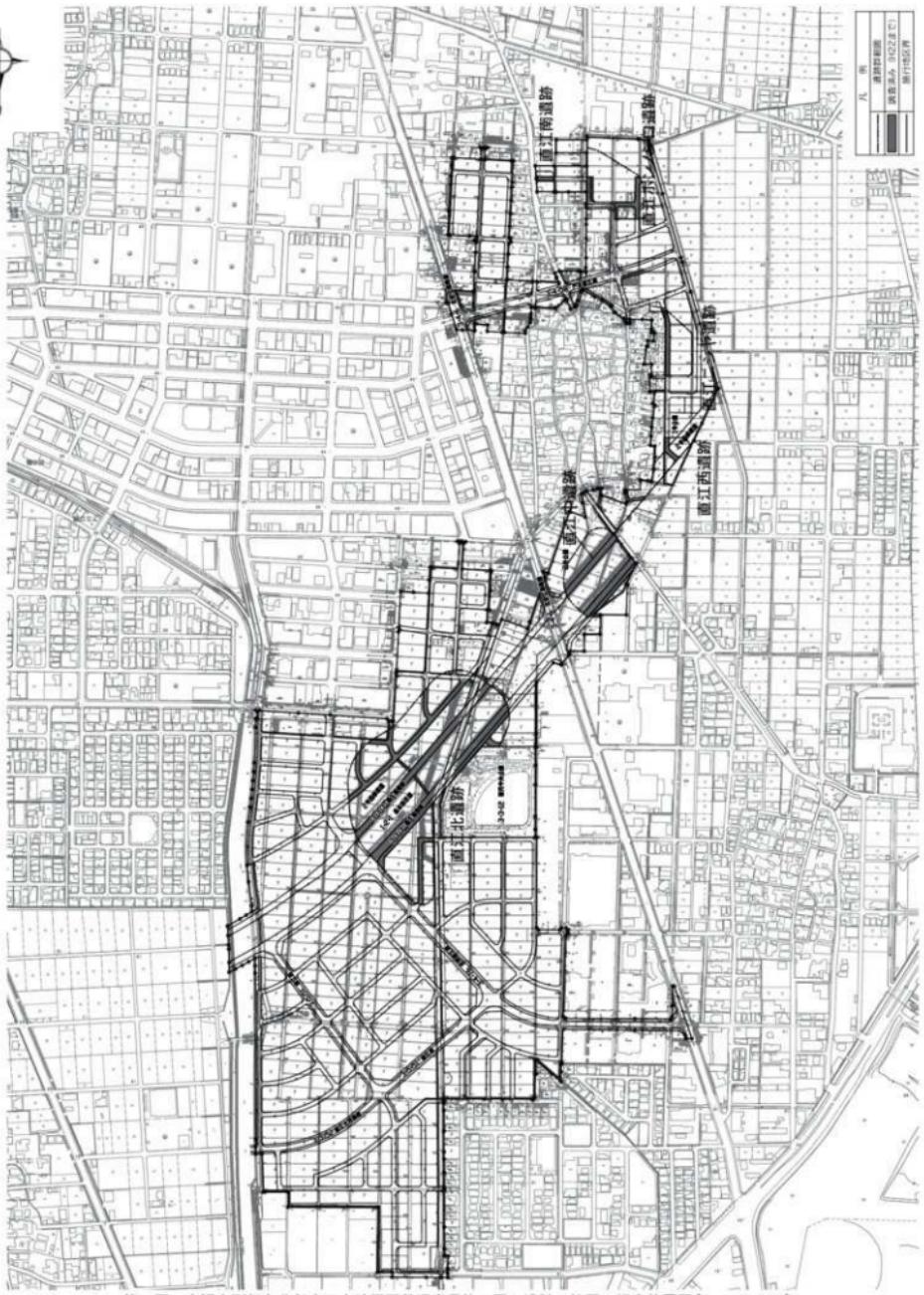
直江南遺跡、直江ニシヤ遺跡、直江西遺跡は平成21年度に、直江ポンノシロ遺跡は平成21年度および22年度に下記の日程にて発掘調査を実施した。

直江南遺跡は平成21年7月7日から同年12月9日まで、直江ポンノシロ遺跡は平成21年7月13日から同年12月9日および平成22年10月12日から同年11月26日まで、直江ニシヤ遺跡は平成21年7月14日から同年12月9日まで、直江西遺跡は7月21日から同年12月9日までである。

【発掘日誌抄】

平成21年

7月7日	南 表土掘削開始(7/9まで)	11月13日	ニシヤ・西 航空測量実施
7月13日	ポンノシロ 表土掘削開始(7/14まで)	11月16日	ニシヤ・西 調査完了
7月14日	ニシヤ 表土掘削開始(7/21まで)	12月9日	撤収等、現地調査完了
7月21日	西 表土掘削開始(7/22まで)	12月17日	西 埋戻し
7月24日	南・ポンノシロ 調査開始		
8月21日	南 ほぼ完掘		平成22年
9月8日	ポンノシロ ほぼ完掘、ニシヤ 調査開始	10月12日	ポンノシロ 表土掘削開始(10/15まで)
10月7日	南・ポンノシロ 航空測量実施	10月20日	ポンノシロ 調査開始
10月10日	南・ポンノシロ 現地説明会実施	11月19日	ポンノシロ 航空測量実施
10月19日	南・ポンノシロ 調査完了、ニシヤ 調査開始	11月26日	ポンノシロ 調査完了
10月21日	ニシヤ ほぼ完掘		
10月30日	西 ほぼ完掘		



第1図 金沢市副都心北部直江土地区画整理事業施工団と遺跡の範囲、調査位置図 [S=1/7,000]

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

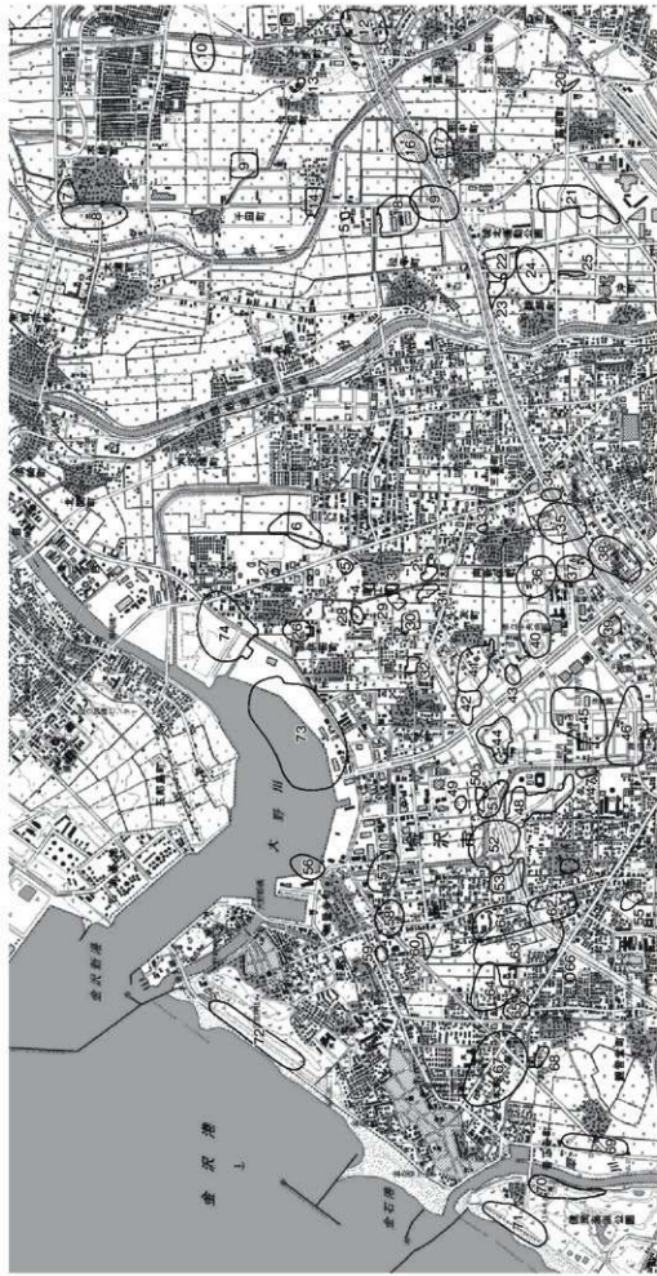
本書で報告する各遺跡は石川県金沢市直江町地内に所在する。石川県は本州日本海側のほぼ中央に位置している。北方は日本海に面し、南方は福井県、岐阜県、富山県と接する南北に細長い県であり、日本海に突き出た能登地方とその南の加賀地方に分けられる。金沢市は加賀地方の北部に位置している。その西部は日本海に接し、南東部には海拔1,500mを越える山地をかかえる。この山地からは市域を西流する二大河川、浅野川と犀川が流れ、北側に位置する前者は河北潟へ、南側の後者は日本海へ注ぐ。市域の西部に展開する平野部では両河川に挟まれた地域に市街地が形成されている。また、犀川を境として、北部平野と南部平野に分かれ、前者は犀川・浅野川やその北部を流れる金剛川・森下川によって形成された沖積平野であり、後者は手取川が形成する扇状地の北辺である。

これらの遺跡は市内の北西部、現在の海岸線からは約3km内陸側に位置する。河北潟と大野川の後背湿地のため、土壤は強い粘性をもつ。近年は地下水の汲み上げ等に伴い地下水位が低下したが、古くは豊富な地下水の自噴地帯であった。また、大野川の旧河道や中州、自然堤防が島状に分布し、田舟で往来したというように、舟運が非常に重要な役割を果たしていた。

第2節 歴史的環境

直江町には、直江南遺跡（弥生末期・古墳前期・鎌倉）、直江ポンノシロ遺跡（縄文晚期・弥生末期・古墳前・中期・平安・鎌倉・室町）、直江ニシヤ遺跡（古墳前期・平安・鎌倉・室町）、直江西遺跡（弥生末～古墳中期）、直江中遺跡（縄文晚期・古墳前期・平安・鎌倉・室町）、直江北遺跡（縄文晚期・弥生中～末期・古墳前・中期・平安・鎌倉・室町）が分布する。

これらの遺跡周辺に分布する遺跡を時代毎に概観すると、まず縄文時代には直江中遺跡で晩期の遺跡が確認できる。近岡遺跡では昭和45年の調査で花粉分析から縄文晚期の農耕について話題になった。隣接する戸水C遺跡からも土器片が少量出土している。弥生時代には戸水B遺跡、戸水C遺跡、藤江C遺跡などで前期からの遺物が確認されており、直江北遺跡においては中期から遺物が確認されている。後・終末期になると遺跡の数は多くなり、建物や墓などが多く見つかっている。古墳時代は弥生終末期の遺跡が継続されることが多いが、中・後期になると激減し、周辺では藤江B遺跡や畠田・寺中遺跡で確認できる。直江北遺跡では古墳時代前期から中期にかけての集落跡が見つかっており、掘立柱建物や布堀建物、井戸、溝などが見つかっている。奈良・平安時代は再び遺跡が広く分布し、戸水C遺跡や戸水大西遺跡、畠田遺跡群といった港湾施設や官衙に関係した遺跡が出現する。鎌倉・室町時代は、本報告の遺跡も含めて周辺には当該期の遺跡が広く分布している。畠田・寺中遺跡では、堀で囲繞された方二町×一町半程度の空間が検出されている。南新保北遺跡では銭の出納に関わる付木簡が出土している。戸水C遺跡は古代以来の津波関連遺跡と評価されている。近岡遺跡の所在する近岡町には林系の近岡九郎利明が12世紀末～13世紀初頭に館を構えたと伝えられている。このように、遺跡周辺は中世期の活動が活発な地域であり、倉月荘内に比定される直江町においても直江北遺跡、同中遺跡、同ニシヤ遺跡、同ポンノシロ遺跡、同南遺跡で活動が認められる。「直江」の初見は、「天文日記」天文五年(1536)五月二日条に「加州直江村新右衛門尉」として見える。本願寺証如によるものであり、一向一揆が盛んであった当地域との関係が垣間見え、16世紀代の遺構・遺物も確認されている。このころ、木越には木越三光と称される一向一揆の有力寺院が所在しており、直江町からもほど近い距離といえる。



第2図 位置と周辺の遺跡 (S=1/30,000)

1. 高江東跡 (古墳・古跡・墓地) (文部・学芸・平成)
2. 高江西跡 (古墳・古跡・墓地) (文部・学芸・平成)
3. 高江中跡 (古墳・古跡・墓地) (文部・学芸・平成)
4. 高江西跡 (古墳・古跡・墓地) (文部・学芸・平成)
5. 高江中跡 (古墳・古跡・墓地) (文部・学芸・平成)
6. 高江東跡 (古墳・古跡・墓地) (文部・学芸・平成)
7. 木幡跡 (古墳・古跡・墓地) (文部・学芸・平成)
8. 木幡跡 (古墳・古跡・墓地) (文部・学芸・平成)
9. 木幡跡 (古墳・古跡・墓地) (文部・学芸・平成)
10. 木幡北台跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
11. 佐冷日跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
12. 佐冷日跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
13. 佐冷日跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
14. 木幡跡 (古墳・古跡・墓地) (文部・学芸・平成)
15. 木幡跡 (古墳・古跡・墓地) (文部・学芸・平成)
16. 田原C跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
17. 田原C跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
18. 田原D跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
19. 田原E跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
20. 田原跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
21. 田原跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
22. 田原跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
23. 田原跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
24. 田原跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
25. 田原跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
26. 田原跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
27. 田原跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
28. 田原跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
29. 大河跡 (古跡・古跡・墓地) (文部・学芸・平成)
30. 大河跡 (古跡・古跡・墓地) (文部・学芸・平成)
31. 丸足下跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
32. 丸足下跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
33. 丸足下跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
34. 丸足下D跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
35. 丸足下E跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
36. 丸足下F跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
37. 丸足下G跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
38. 丸足下H跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
39. 丸足下I跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
40. 丸足下J跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
41. 丸足下K跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
42. 丸足下L跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
43. 丸足下M跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
44. 丸足下N跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
45. 丸足下O跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
46. 丸足下P跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
47. 丸足下Q跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
48. 丸足下R跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
49. 丸足下S跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
50. 丸足下T跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
51. 丸足下U跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
52. 丸足下V跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
53. 丸足下W跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
54. 丸足下X跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
55. 丸足下Y跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
56. 丸足下Z跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
57. 丸足下AA跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
58. 丸足下BB跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
59. 丸足下CC跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
60. 丸足下DD跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
61. 丸足下EE跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
62. 丸足下FF跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
63. 丸足下GG跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
64. 丸足下HH跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
65. 丸足下II跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
66. 丸足下JJ跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
67. 丸足下KK跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
68. 丸足下LL跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
69. 丸足下MM跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
70. 丸足下NN跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
71. 丸足下OO跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
72. 丸足下PP跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
73. 丸足下QQ跡 (古墳) (文部・学芸・平成)
74. 丸足下RR跡 (古墳) (文部・学芸・平成)

第3章 直江南遺跡

第1節 概要

本遺跡では、主に中世前期の遺構が見つかっており、複数の井戸と方形の竪穴遺構が検出されている。井戸は縦板組横桟留めや曲物積みによる構造がみられる。竪穴遺構からは完形品の漆器が出土しており、埋納の可能性が高く、墓などの信仰対象施設を推定している。

なお、遺跡内からは掘立柱建物などの住居施設が見つかっていないが、井戸の濃密な分布からは調査区外の周辺域に展開していることが予想される。

第2節 検出遺構

1. 井戸・土坑

SE01 (第4～12図) 方形を呈する井戸側として周囲の縦板とそれを固定する横桟で構成される縦板組横桟留めの構造をもつ井戸である。掘方の覆土は地山ブロックを多く含んだ黒褐色シルトであり、井戸側が検出された周辺は灰色を呈す暗灰色シルトである。検出段階では略円形のプランの中に略方形のプランが2重に検出され、外側の方形プランは井戸側が存在した場所、内側の方形プランは井戸側内部の覆土を示すと考えられる。内側の方形プランは地山土が多く含まれており、埋め立てたであろうことが容易に推定できる。井戸側の横桟（1～8）は上下2段設けてあり、1辺につき15枚前後（北側13枚、東側13枚、南側18枚、西側15枚）の縦板（10～46）を留めている。横桟は両端を互い違いに細く削りだしており、他の横桟と組み合わせられるようになっている。9は横桟に類似する形態をしているので、当該箇所に配置したが、両端の細く削りだした個所が互い違いにはなっていないので、他の横桟とは異なる。13世紀頃の遺物が出土している。

SE03 (第4・13図) 略円形の掘方を持ち、検出面から約70cm下方にて井戸側として用いている曲物を検出した。曲物は1段のみで、上部は欠損している。中位、下位に板築が残存しており、挟み板は3ヶ所みられる。13世紀頃の遺物が出土している。

SE04 (第4図) 略楕円形を呈する掘方のやや東よりに略円形の井戸側痕跡が検出されたが、はっきりとプランが確認できたのは、10cmほど掘り下げてからであった。略円形のプランから井戸側は曲物と考えられるが、掘方下方には井戸側が1段残っている。井戸側は残り具合が悪く、図化していないが、内面には垂直気味、外面には斜め方向のケビキを施す曲物が出土している。

遺物量は少ないが、14世紀頃と考えられる土師器皿が出土している。

SE05 (第4・14図) 略方形を呈する掘方の中央に横板と1段の曲物で構成される井戸側を伴う。横板の下端と曲物の上端の高さは重複せず、若干の空間を持っている。横板よりやや大きな幅で別の井戸側が存在したことが土層観察により確認できた。すでに木胎は残っておらず、垂直気味に延びる幅約2cmの黒褐色粘質土をそのように判断した。平面プランはしっかりしたものではないが、概ね方形を呈しており、横板が方形に設置されていることからも、何らかの方形に囲う施設が存在したのであろう。縦板組であるか横板組であるかの判断はつかないが、大半が腐食した縦板状の木製品が数点出土している。また、横板上端よりやや上位でアサリ様の貝殻つまりを確認している。13世紀頃の遺物が出土している。

SE02 (第15～18図) SK02と重複するが、SK02よりも新しいことが土層観察で判明している。略円形の掘方のやや南寄りに曲物と縦板、横板からなる井戸側を確認している。SE05と構成要素は類似しているが、横板上端よりも曲物が存在する点が異なる。曲物は、重複しているが7段分確認しており、

残りの良い55・60・63（3・6・7段目）を図化している。63は上段の板籠外面に葉のような刻画がみられる。56～59は横板の外側で検出された板板、61・62・64・65は板籠で挟まれた挟み板であり、65は底板と考えられる円形版の転用である。また55・63は上下段の曲物にわたって挟まれていたことがわかる資料である。井戸埋めに関する遺構として、井戸側内部で頭部大ほどの川原石が複数見つかっており、充填しているのではなく、数段に積み重なっている。13世紀後半頃の遺物が出土している。

SK01(第15図) SK02と重複するが、SK02より新しいことが土層観察から判明している。平面略円形、横断はすり鉢状を呈する。13世紀頃の遺物が出土している。

SK02(第15図) SK01、SE02と重複するが、両者より古いことが土層観察で明らかとなっているが、平面観察では認識できないほどの違いである。遺物は少なく、非ロクロ土師器皿片が出土している。

SK03(第15図) 調査区の北西隅で検出したために全形は不明である。SK05と重複するが、SK05より新しく、また後述するSD01と覆土が近いために、近代頃のものと考えられる。

SK04(第15図) 平面略円形を呈する土坑で、弥生時代終末期頃の土器や須恵器が出土している。

2. 竪穴遺構・ピット

SI01(第19図) 長方形を呈する大型土坑である。長辺3.1m、短辺2.4m、深さは50cm程であり、土層観察からは一度に埋められたものと考えられる。中央底付近からほぼ完形品の漆器小皿、北東隅寄りから漆器碗が出土しており、何らかの埋納行為が行われた可能性を考えている。土層観察面中に縦方向に延びる板が見えるが、穴が埋まつた後に差し込まれたものである可能性が高く、本竪穴に関係するかは不明である。13世紀後半頃から14世紀前半頃の遺物が出土している。

P01(第19図) SI01の南東隅に隣接して検出されたが、関連は不明である。平面略方形を呈し、掘方、深さ共にしっかりしている。覆土には地山ブロックが多く混入しており、SI01の覆土とは異なる。13世紀後半頃の遺物が出土しており、土錘が5点と目立つ。

3. 溝

SD01(第19図) 調査区南辺中央付近から北西方向へ延びる幅1m程の溝である。近代頃の所産であり、調査区北辺の手前で終わっているが、前述のSK03が同様の溝である可能性があり、その場合はその間が陸橋状に残されていることになる。

SD02(第19図) 調査区西辺で検出された南北に延びる溝である。SE05やSK06と重複するが、SK06は覆土が類似することから同一遺構の可能性がある。

第3節 出土遺物

1. 井戸・土坑

SE01(第20図) 1～25が出土している。1・2は口縁部に1段のナデを施す非ロクロの土師器小皿である。13世紀代の所産と考えられる。3は内面に片彫りの分割線を施す龍泉窯系青磁碗I-4類である。17は図上端部に加工痕もしくは使用痕と考えられる細かな削り状の痕跡が見られる円柱状の木製品で、側面には長さ10mm、幅3mm、深さ5mmの凹みがある。下端は欠損している可能性が高い。栓のような用途をもつものであろうか。19は図下端を鈍角に尖らせた棒状品である。上端頂部は欠損の可能性が高いが、その周辺は斜めにカットしている。用途不明品である。

SE02・SK02(第20～22図) 26～66が出土している。26～38は非ロクロ土師器皿で、法量は8cm前後と12cm前後に分かれ。31・32・36は口縁端部に面取り状のナデを施すものである。13世紀代

の所産と考えられる。39～44は珠洲焼鉢・すり鉢である。Ⅲ期もしくはⅣ期の所産であろう。45は瓷器系の壺片である。加賀焼もしくは越前焼であろう。46は土製品片である。竈や炉の構造体であろうか。48は金属製品であり、鋸に覆われている。刀子であろうか。59は折敷である。表面には推定刃物痕が多数認められる。60は穿孔をもつ木片であるが、形態から下駄の可能性が考えられる。63は端部を凸状に仕上げたものである。もう一方の端部は欠損している。65は柱材のような形態をしており、柱であれば、遺構内に柱穴を含んでいた可能性が考えられる。

SE03（第22図） 67～71が出土している。67・68は非クロコロ土師器皿で口縁端部に面取りを施している。発色は異なるが、同一個体である可能性も考えられる。13世紀後半頃の所産であろう。69は板状の製品である。図下端が若干盛り上がるよう周辺が加工されている。70は碁石と考えられる扁平で梢円形を呈する石である。

SE04（第22図） 72・73が出土している。72は10～11世紀頃のロクロ土師器碗もしくは皿の底部である。73は非クロコロ土師器皿で、ナデを1段施す口縁部はやや外反味に立ち上がる。14世紀代の所産であろう。

SE05（第22図） 74～75が出土している。75は口縁端部面取り気味の非クロコロ土師器皿である。13世紀代の所産であろう。

P01（第22図） 76の非クロコロ土師器が出土している。口縁端部に面取りを施す口縁部はやや外反して立ち上がる。口径は118mmで、13世紀後半～14世紀代の所産と考えられる。

SK01（第22図） 77～80が出土している。77は口縁端部に面取りを施す非クロコロ土師器皿で13世紀代の所産であろう。78は須恵器系陶器の小壺で、僅かに残る短い口縁部は片口状に突き出している。細い棒状工具で押し出したのである。外面には一部叩き痕のような跡が見えるが、対応する内面には痕跡は見られない。小壺や瓶などが該当しようか。79は加賀焼の壺の口縁部である。口縁部は大きく外傾し、端部は細くつまみ上げられている。12世紀後半から13世紀前半頃の所産であろう。80は炉など火処に用いられたと考えられる石製品の破片で、一部コゲが付着した面が残っている。

SK02（第22図） 81・82が出土している。81は厚めの板状材、82は須恵器瓶類の底部片である。

SK06・SD02（第22図） 83・84が出土している。83は弥生時代終末期頃の壺の口縁部である。84は非クロコロ土師器皿の小皿である。

2. 壺穴遺構

SI01（第23図） 85～101が出土している。いずれも器表面の磨滅が激しい。85～89は非クロコロ土師器皿である。85は口縁部に1段のナデを施す小皿で、やや肥厚気味の口縁部の立ち上がりは強い。86～89は78に比して大皿とすべきものである。86は平らな底部から口縁部が強く立ち上がるが、1段ナデによって口縁部が大きく外反するものである。89は口縁部に1段ナデを施すもので、口縁部上半はやや肥厚気味である。口縁端部は面取り気味を呈す。92～94は珠洲焼の鉢もしくはすり鉢である。全体的に薄作りであり、92は面取りした口縁端部の一端が外側にやや突き出している。93は同じく口縁端部の一端が内側に突き出している。94は波状の凹目が施されており、底面は静止糸切り痕が見える。いずれも珠洲Ⅰ期からⅡ期の所産であろう。95～99は土錘である。95～98は径1cm弱の円柱形を呈する細いものであるが、99は球形を呈している。他に未実測の小片2点を含めて土錘がまとまって出土しているのは本遺構のみであり、土錘のみだったのか、何らかの植物質もしくは動物質の製品についていたのか、埋納に関する遺構を想定していること也有って興味深い。100は乳白色を呈する砂岩質の砥石である。101は磨製石斧のような形状の石製品である。図の上端と右側が欠損している。図下端

の刃部に該当する箇所が丸みを帯びており、銳角になっていないが、その状態で磨かれている。転用品であろうか。102はケヤキを横木取りで用いた漆器小皿である。口縁部外面と内面に黒色漆を塗布している。外底面は口縁部境付近に塗布されているが、中央付近には面的な塗布は見られない。ただし、部分的には黒色を呈する箇所が見られるために、当初は全体に塗布してあった可能性が考えられる。遺存状態が悪いために図化できなかったが、完形品と思われる漆器椀が近い場所から1点出土している。103は箸状木製品、104は穿孔を持つ板棒状製品である。105は全体的にケズリ加工を施した棒状製品であり。図上端部付近では縱方向のケズリ、中央から下端にかけては略円形のケズリ痕が見られる。上方は折れたものか切断されたかの判別はできない。

3. 溝

SD01（第23図） 106～108が出土している。遺構自体は近代以降の所産である。106の須恵器壺や107の砥石、火打石の剥片の可能性がある108のメノウ剥片が出土している。

SD03（第23図） 109の外底部に菊花状絞り痕跡がみられる内面黒色土器碗が出土している。平安時代後半の所産である。

4. 遺構外

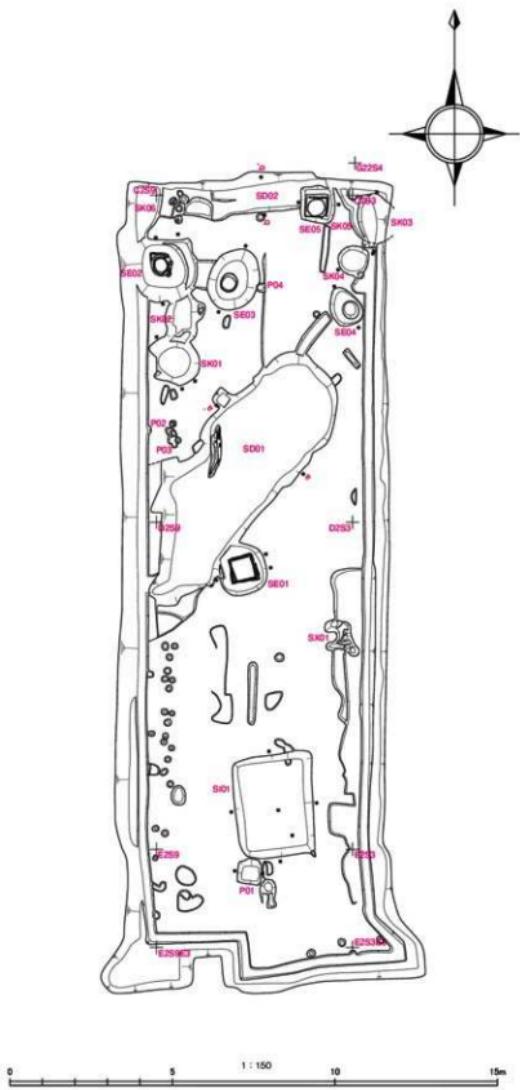
遺構外（第23図） 110・111の青磁碗が出土している。

第4節 小結

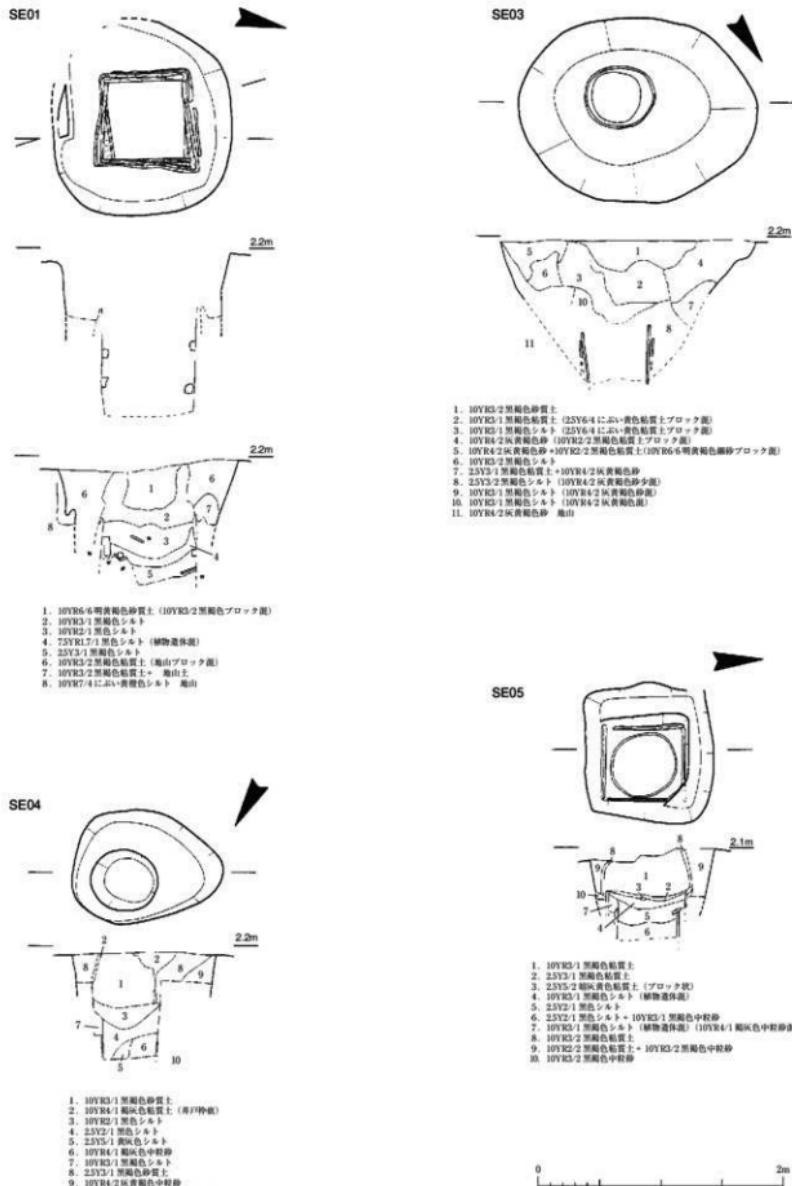
本調査区では鎌倉時代を中心とする時期の井戸と方形竪穴遺構が検出された。

井戸は5基検出しており、縦板組横桟留めや曲物積み、縦板と曲物積みを併せたもの、曲物積みと横板を併せたものなど、多様な井戸側が採用されている。出土遺物から時期は13世紀前半から14世紀前半頃までに限られると考えられ、その後に続く遺構は本調査区では見つかっていない。同様の状況は近隣の直江中遺跡でも確認できる（金沢市2011）。直江中遺跡では川と溝で挟まれた約25mほどの空間に井戸と掘立柱建物が重複して築かれている。これらも12世紀末頃から14世紀前半頃に営まれた集落と考えており、本遺跡とも共通している。調査区内では建物に関する遺構は見つかっていないが、おそらく調査区周辺には掘立柱建物が広がっているものと推定可能であろう。なお、方形竪穴遺構については、下記のとおり建物跡を想定していない。

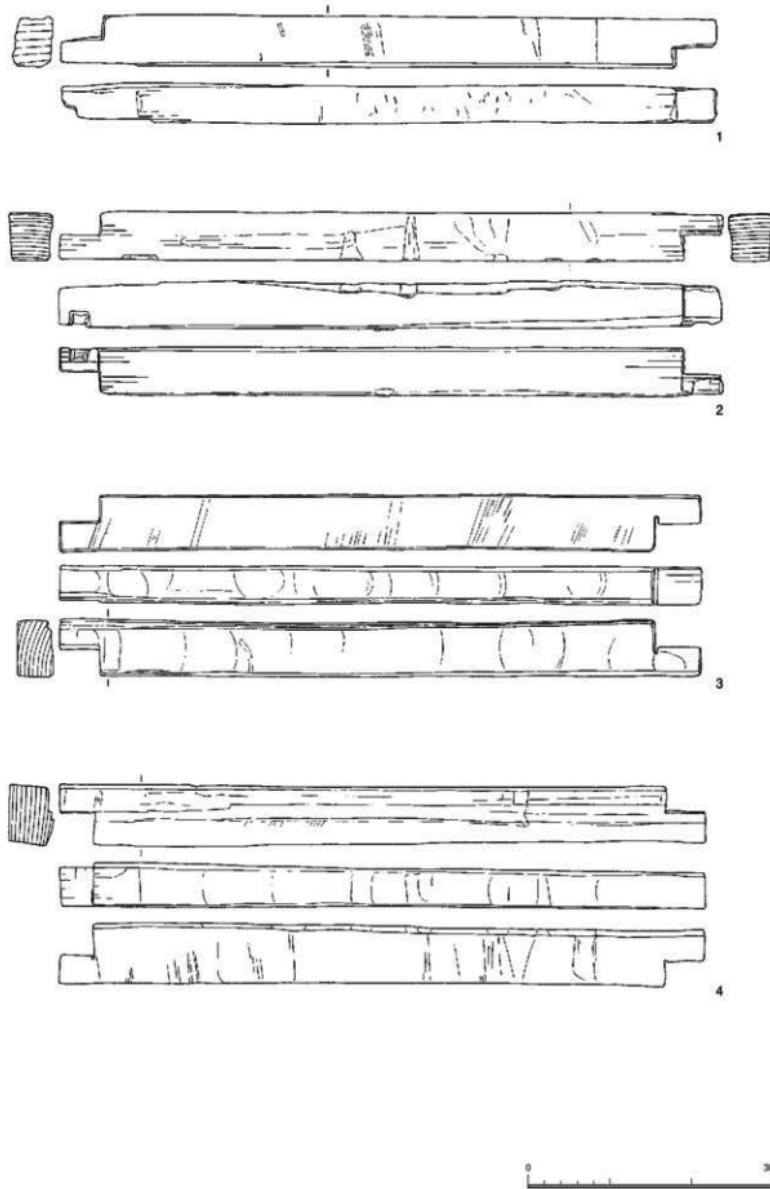
井戸群からやや東に離れた場所で方形竪穴遺構を検出しているが、地山直上付近から完形品で出土した漆器小皿と碗は、その出土状況から廃棄されたものではなく、埋納品の可能性が高いと考えている。また、地山直上の層中には植物質が面的に確認できた箇所があった。残り具合が悪いので、広い範囲で広がっていた可能性もある。これらのことから地山直上を床面として、植物質の何かを平面的に敷き、その上に漆器皿を置いたような光景が想像できる。植物質や漆器椀の遺存状態が極めて悪いことから、有機物が残り続けるには過酷な環境であったようで、他にも有機物が複数存在していた可能性も想定可能であろう。このように考えた場合には、墓のような埋葬施設としての利用が想定できるであろうか。またはその他の祭祀行為に用いられたのであろうか。いずれにせよ、漆器の出土状況や一度に埋められた痕跡からは、特殊な機能を持った遺構と考えるのが妥当であろう。



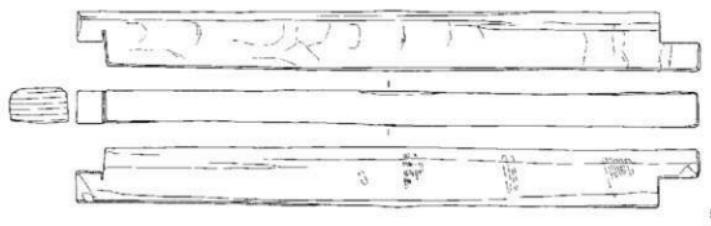
第3図 遺構全体図(S=1/150)



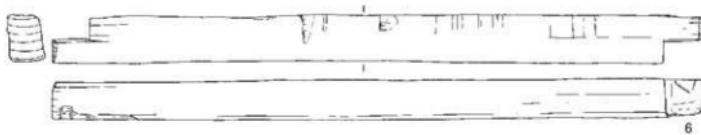
第4図 SE01、03～05 [S=1/40]



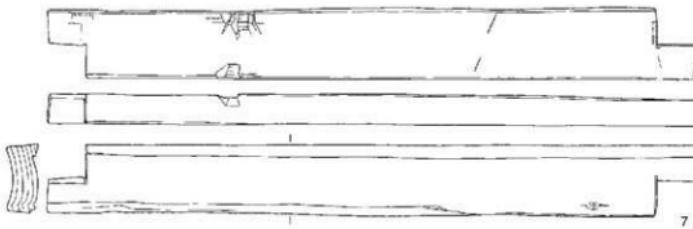
第5図 SEO1 井戸側材(1) [S=1/6]



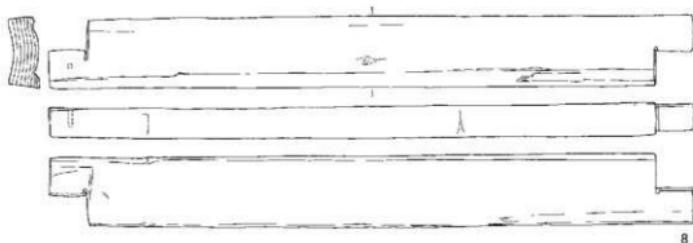
5



6



7

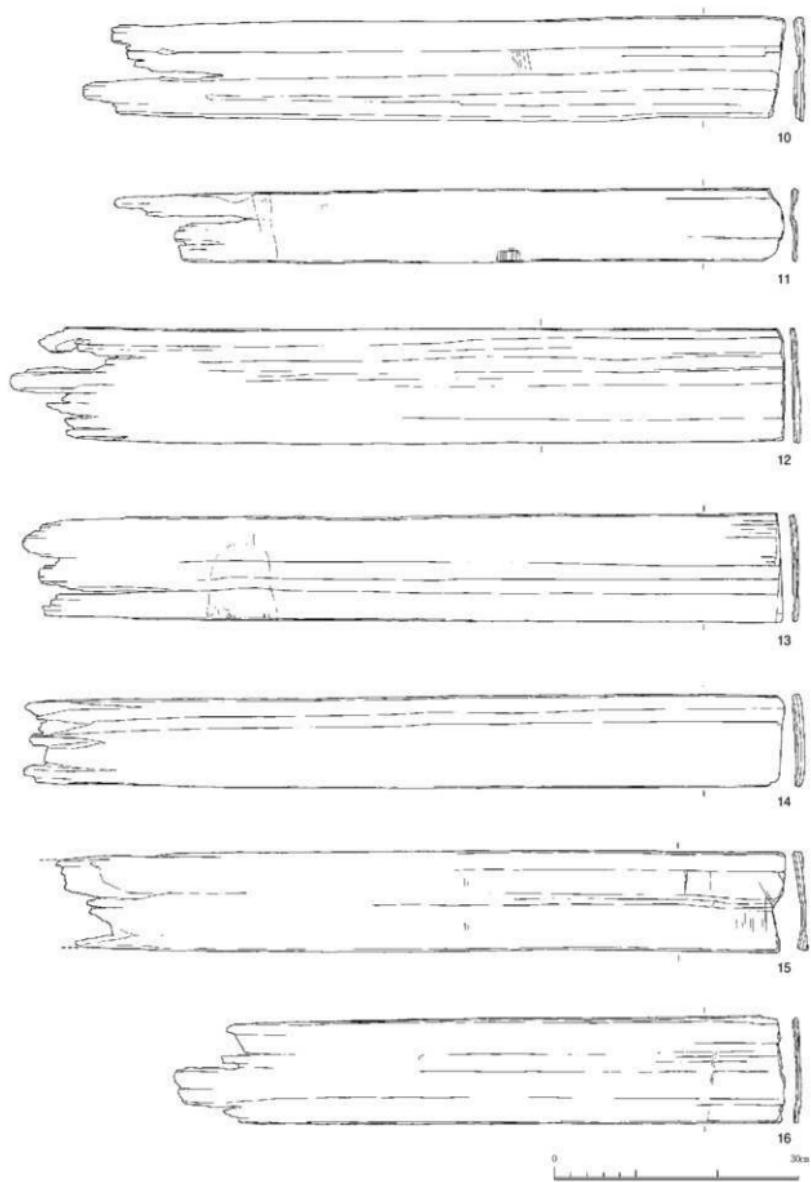


8

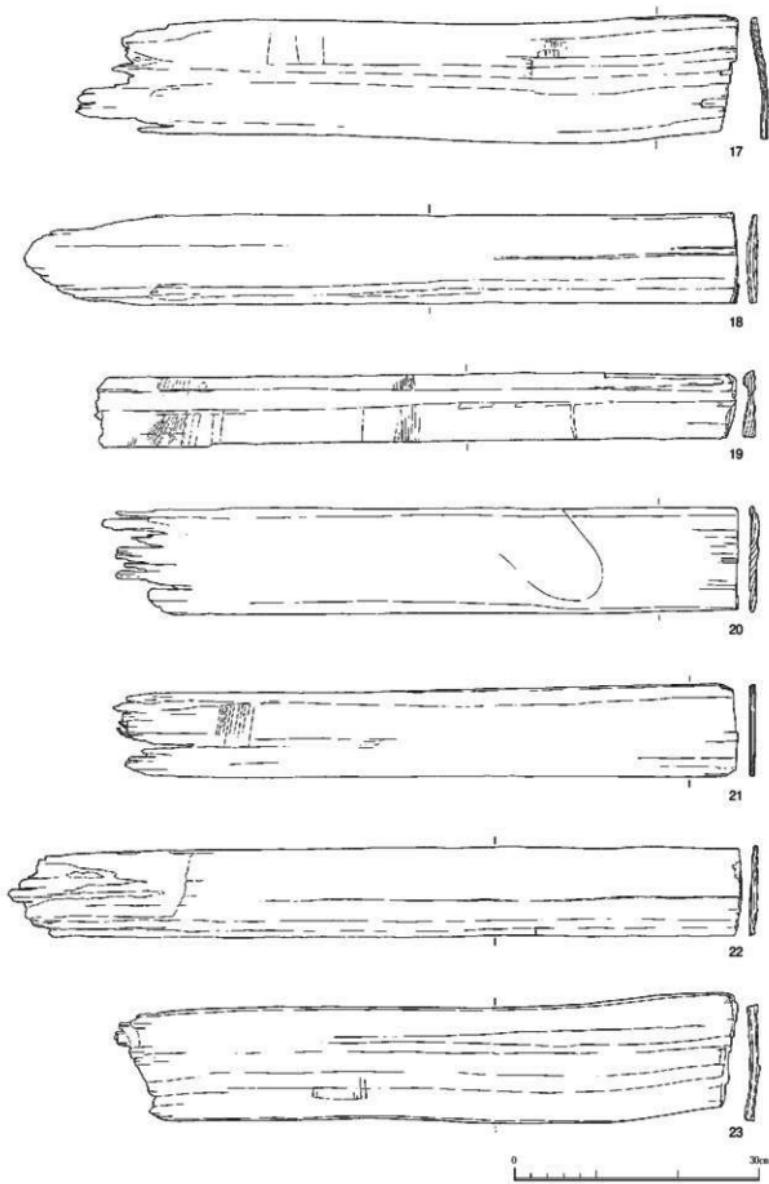


30cm

第6図 SE01 井戸側材(2) [S=1/6]



第7図 SEO1 井戸側材(3) [S=1/6]



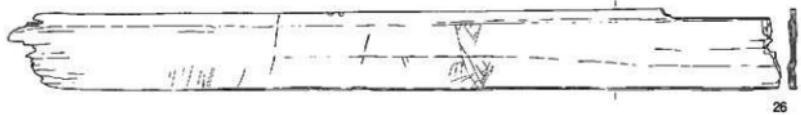
第8図 SE01 井戸側材(4) [S=1/6]



24



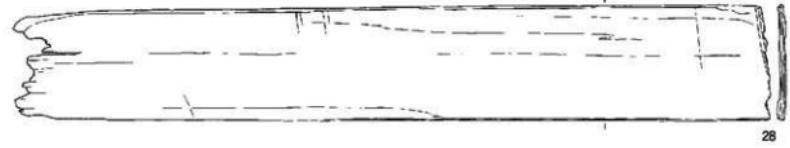
25



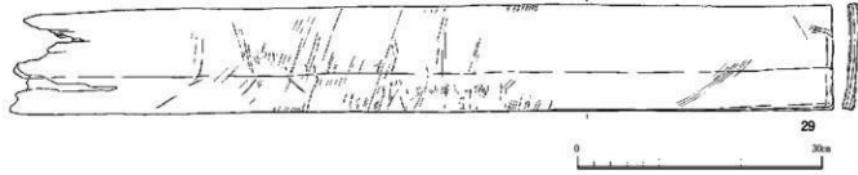
26



27



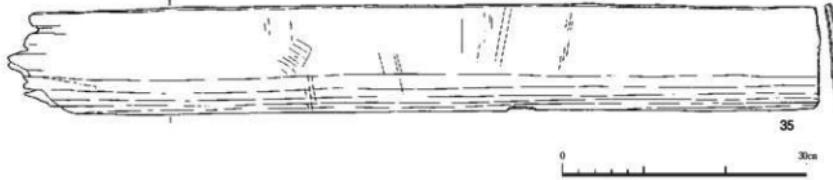
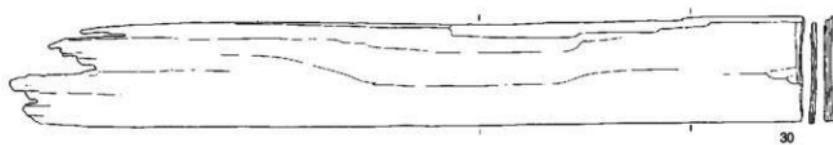
28



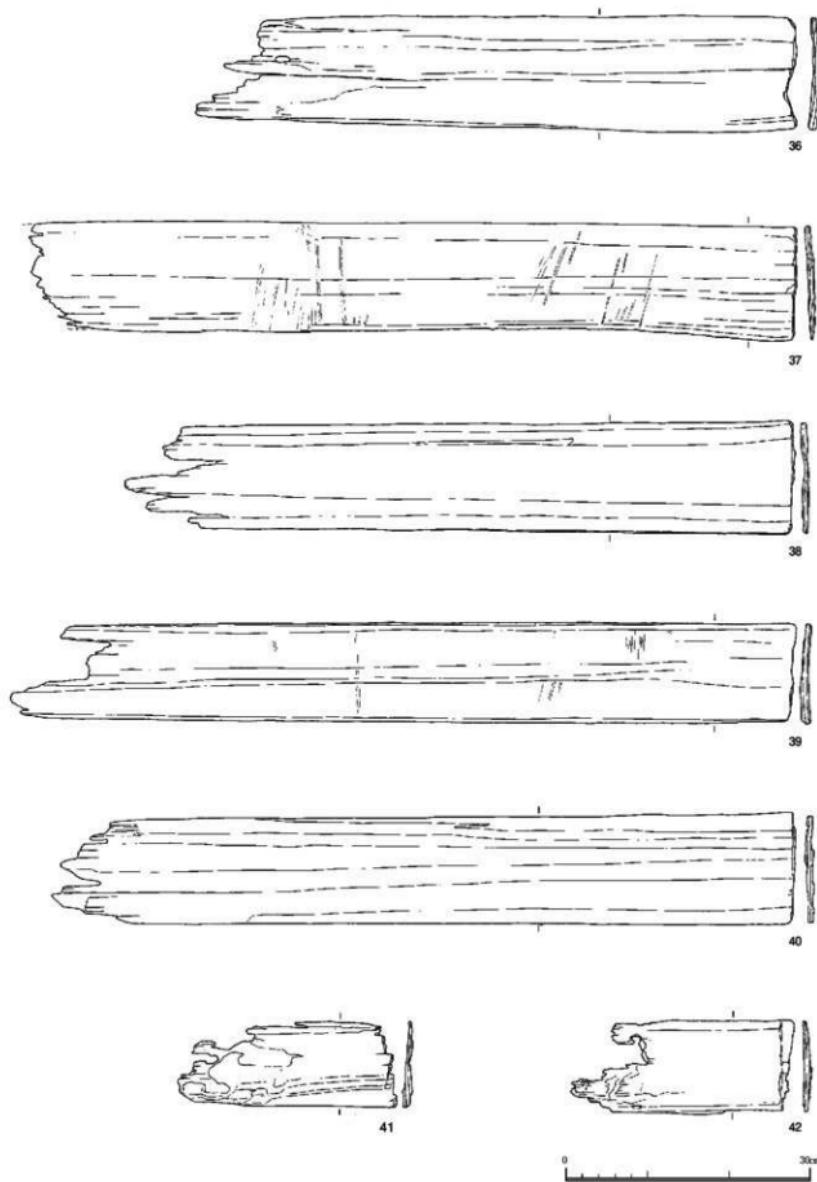
29

30mm

第9図 SEO1 井戸側材(5) [S=1/6]



第10図 SE01 井戸側材(6) [S=1/6]



第11図 SE01 井戸側材(7) [S=1/6]



43



44



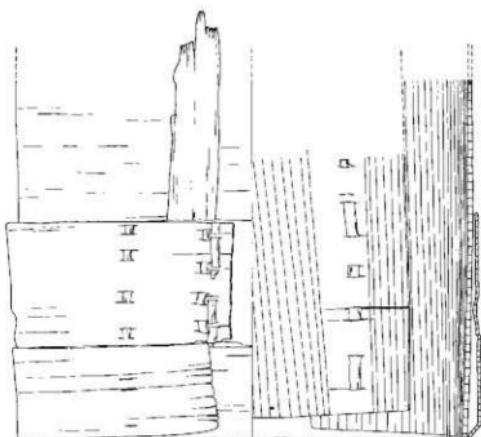
45



46



第12図 SEO1 井戸側材(8) [S=1/6]



47

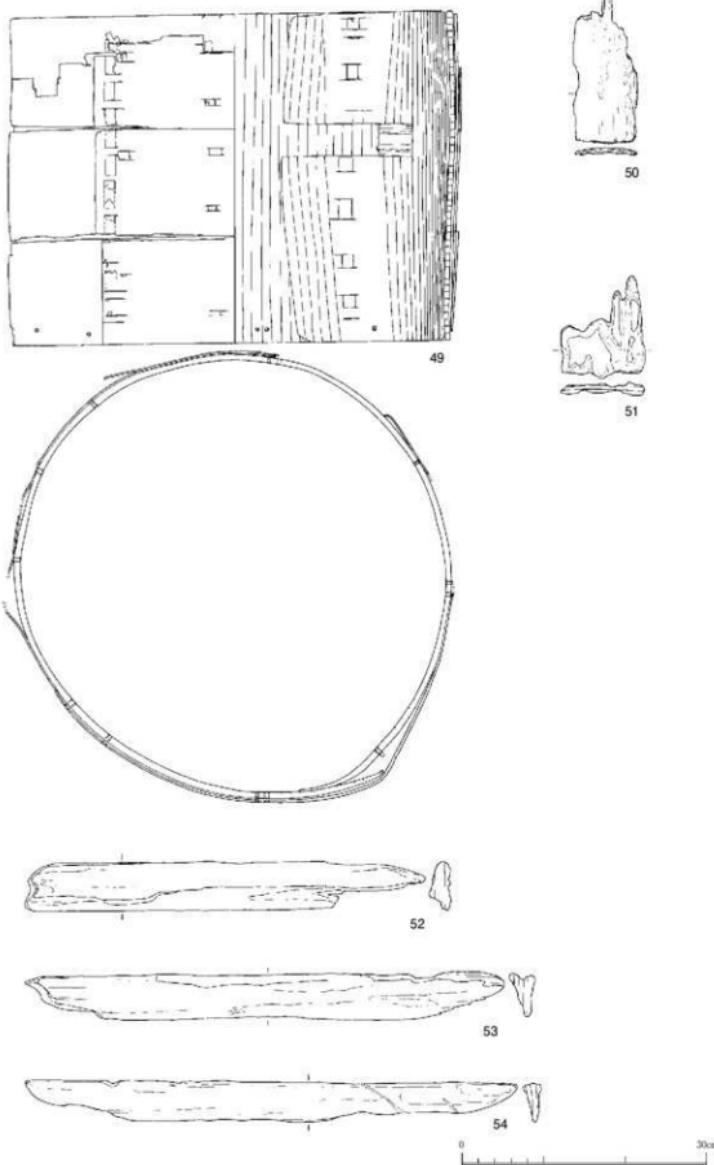


48

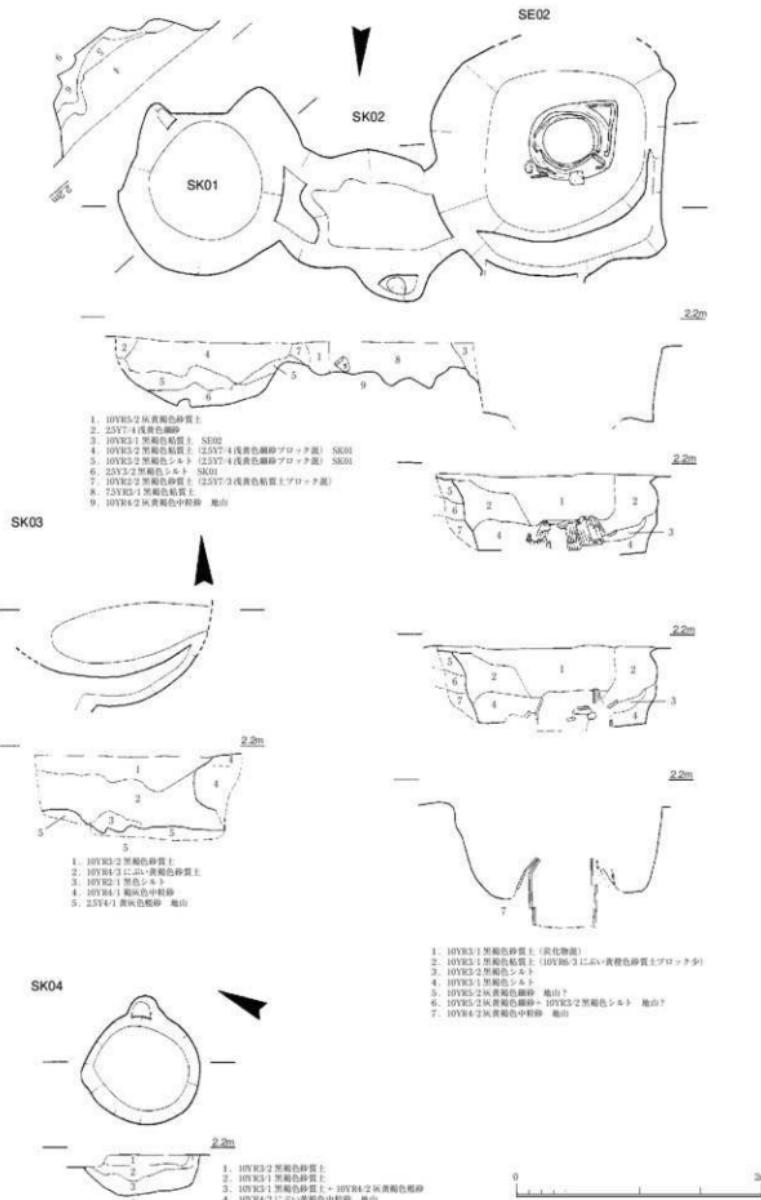


0 30cm

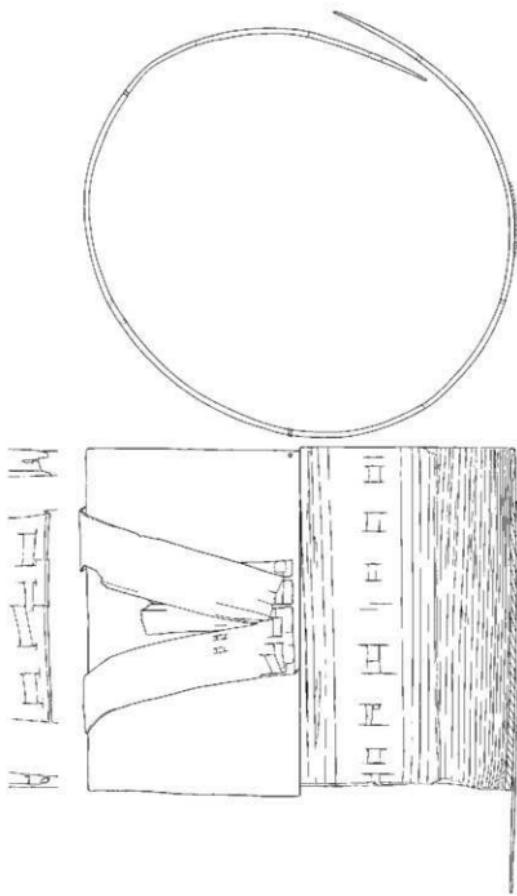
第13図 SE03 井戸側材[S=1/6]



第14図 SE05井戸側材 [S=1/6]



第15図 SK01・02・SE02、SK03、04 [S=1/40]



55



56



57



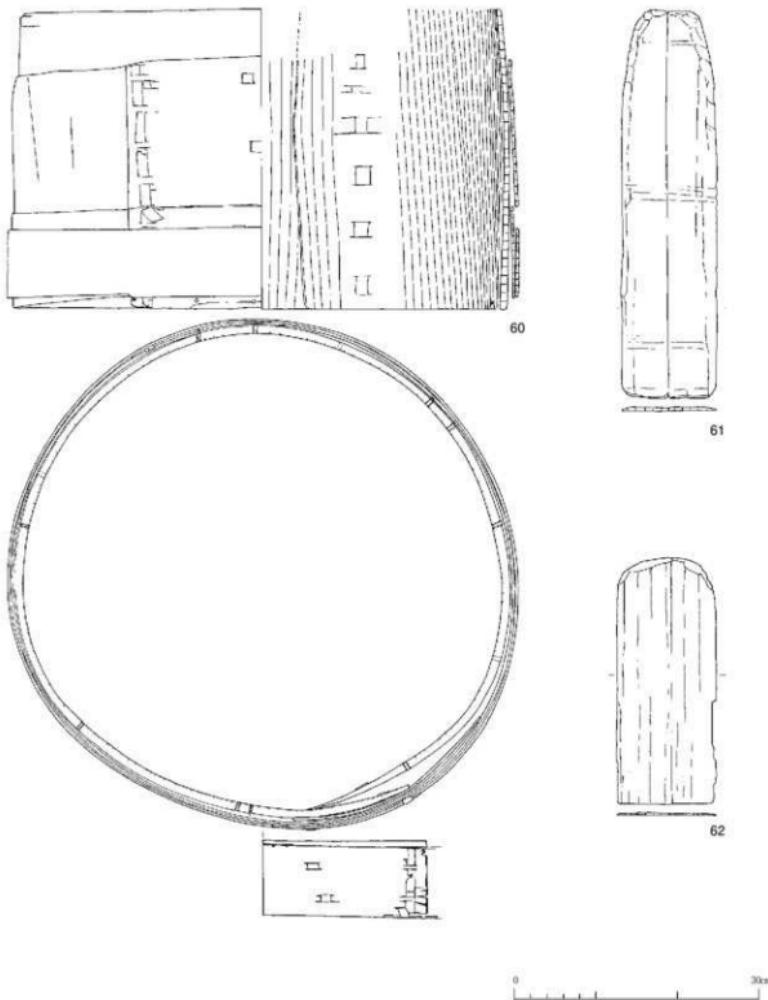
58



59

0 30m

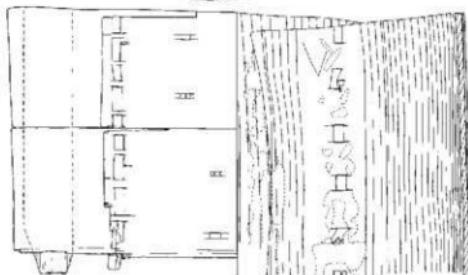
第16図 SE02 井戸側材(1) [S=1/6]



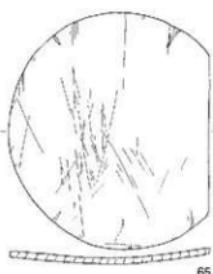
第17図 SE02 井戸側材(2) [S=1/6]



64



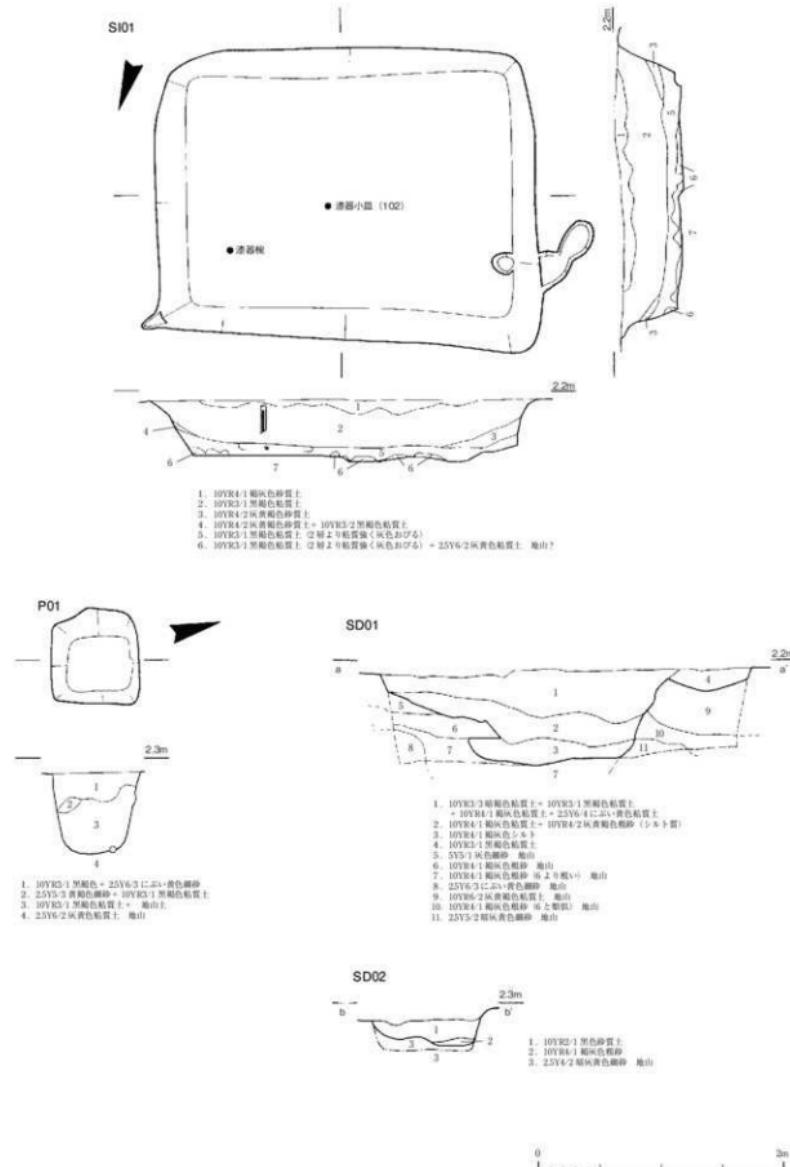
63



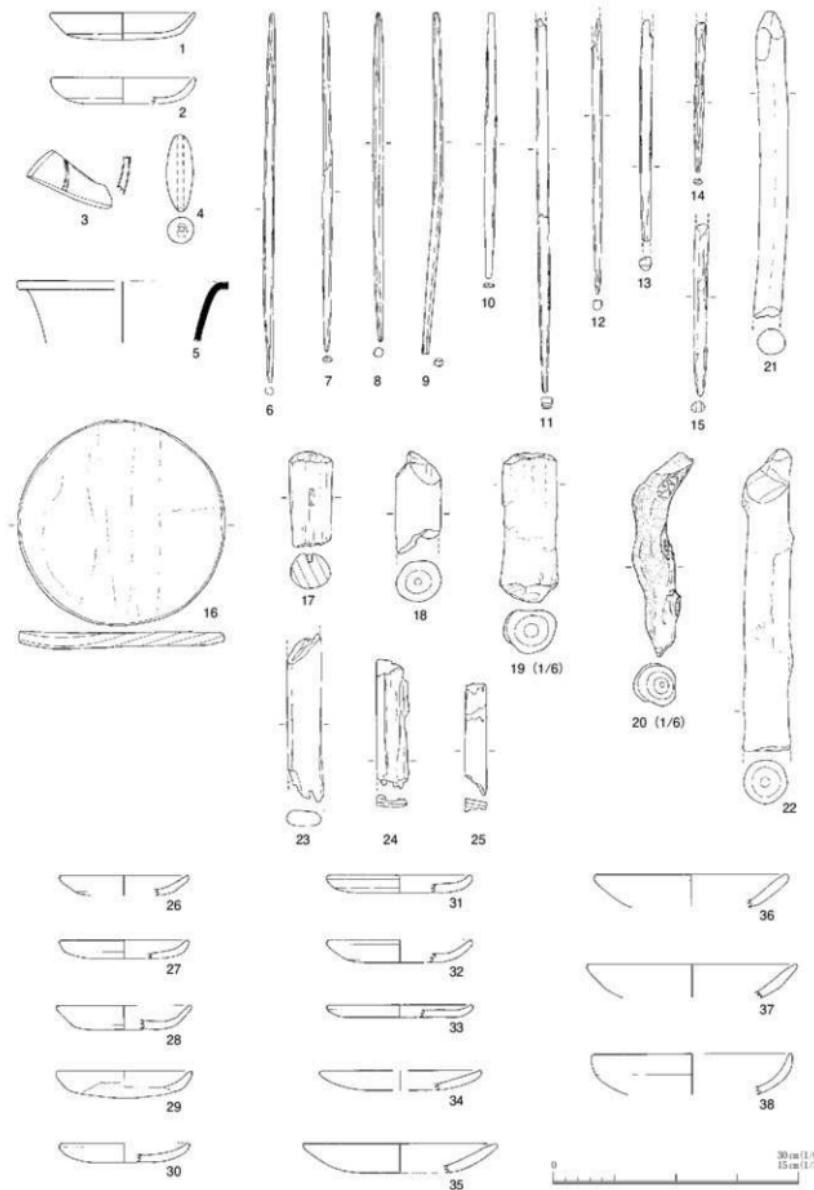
65



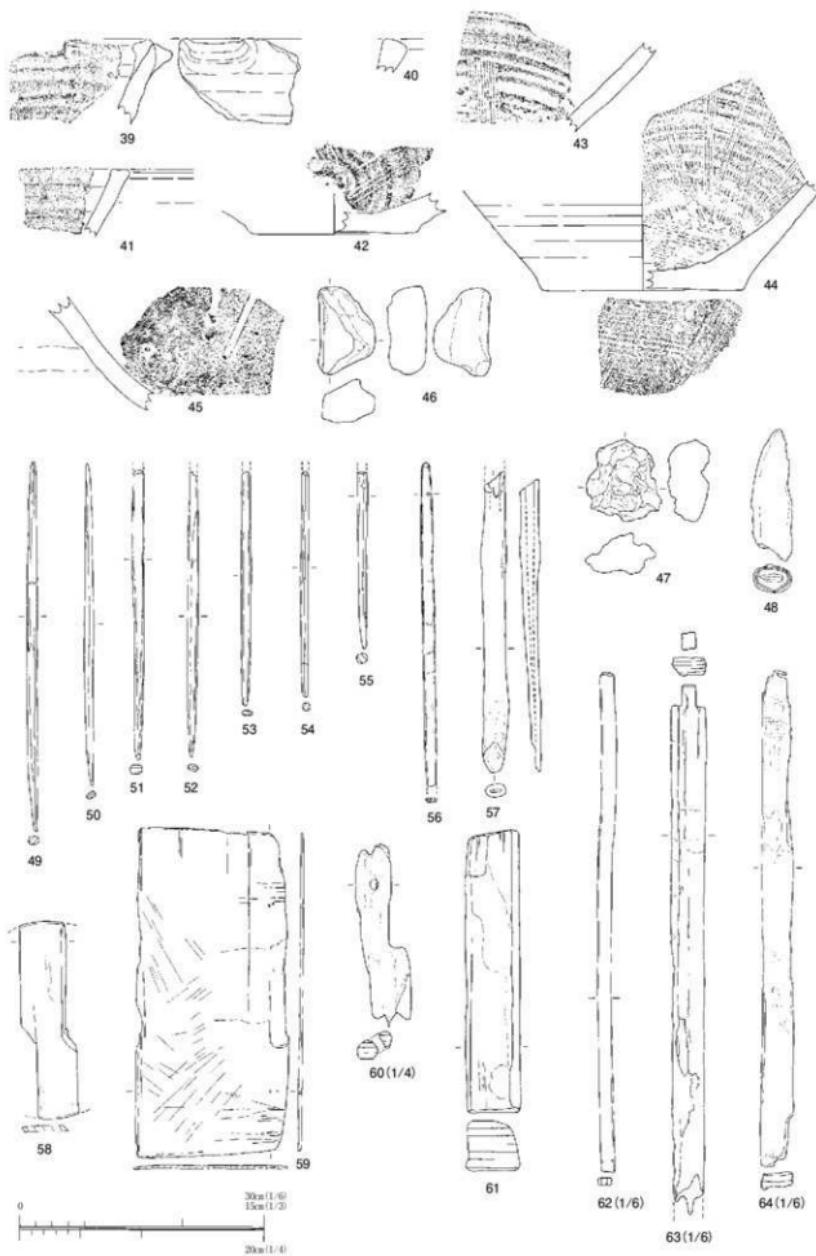
第18図 SE02 井戸側材(3) [S=1/6]



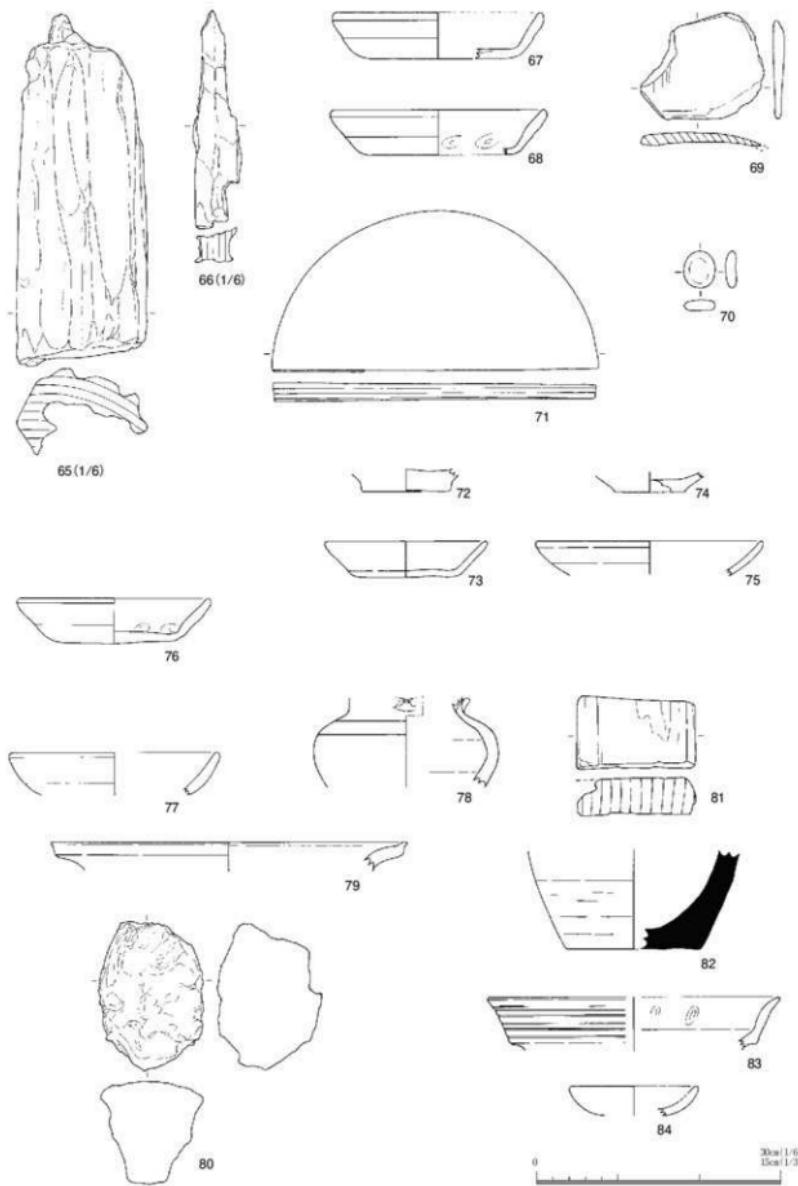
第19図 SI01、P01、SD01・02 [S=1/40]



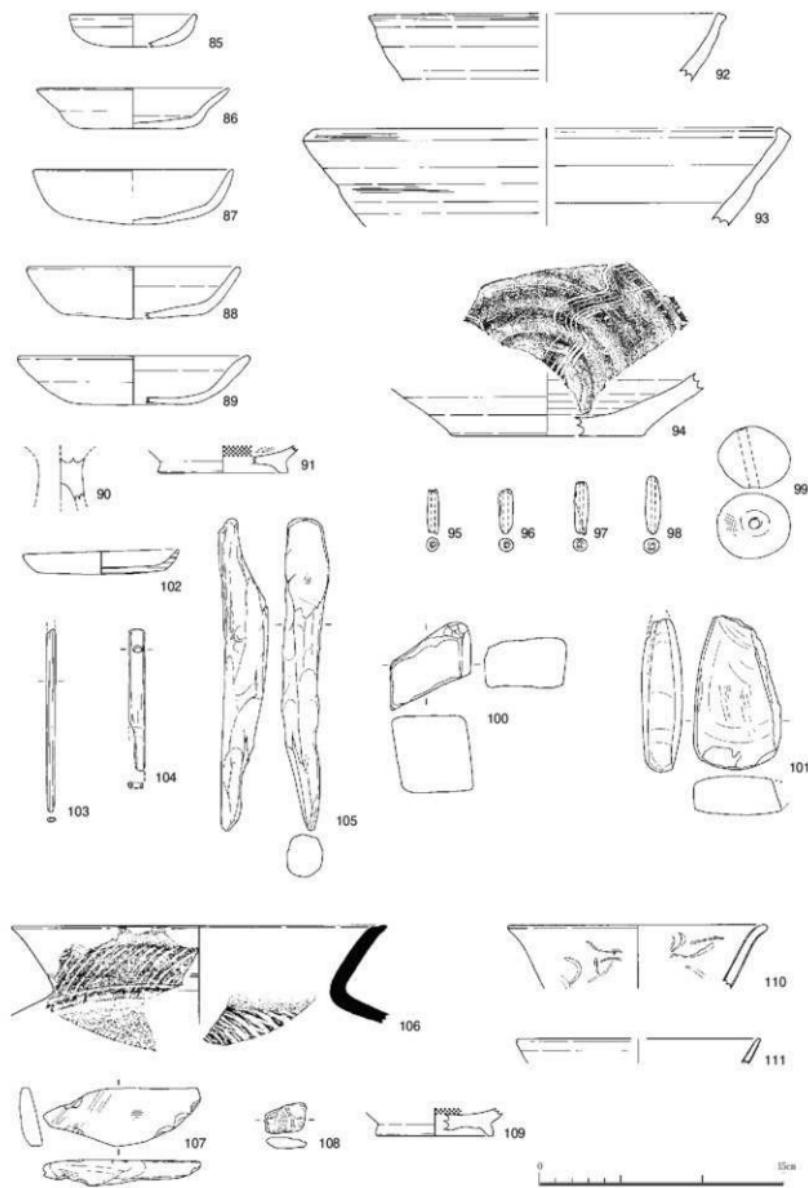
第20図 SE01 (1~25)、02 (26~38)出土遺物 (S=1/3・6)



第21図 SE02出土遺物[S=1/3・4・6]



第22図 SE02 (65, 66)、03 (67~71)、04 (72, 73)、05 (74, 75)、P01 (76)、SK01 (77~80)、02 (81, 82)、SK06・SD02 (83, 84)出土遺物 [S=1/3・6]



第23図 SI01 (85~105)、SD01 (106~108)、03 (109)、遺構外 (110、111) 出土遺物 [S=1 / 3]

第1表 井戸・土坑計測表

(単位: cm)

造標No	位置	奥	幅	深	仲	仲因	備考
SE01	E2	160	145	(135)	板	1~46	
SE02	D2	63	52	130	曲物	55~65	7段 棒枠・縦板有
SE03	D2	195	150	(120)	曲物	47~48	1段
SE04	D2	126	115	80	板		1段
SE05	D2	75	70	143	曲物	49~54	1段 棒枠・縦板有
SK01	D2	153	142	100			
SK02	D2	52	50	118			
SK03	D2	50	48	110			
SK04	D2	107	96	(125)			
SK05	D2	270	217	105			
SK06	D2	88	78	27			
SI01	E2	220	208	77			
P01	E2	275	175	65			

第2表 井戸側材(曲物)計測表

(単位: m)

No	造標No	種類	上から の位置	最大高	最大幅	最大厚	目打底	横幅	ケビキ	実測No.
47	SE03	曲物		560	440	7	2	2~	底	T302
49	SE05	曲物		558	407	10	13	3	底	M144
55	SE02	曲物	3段目	543	544	10	12	1~	底	F237
60	SE02	曲物	6段目	645	376	11	13	2~	手	E160
63	SE02	曲物	7段目	662	(436)	10		2	底	S224

第3表 井戸側材(縦板等)計測表(1)

(単位: m)

No	造標	種別	奥	幅	厚	仲	木取	備考	実測No.
1	SE01	棒枠	810	62	56	針	芯去	左・上段	F253
2	SE01	棒枠	820	60	54	針	芯去	右・上段	S229
3	SE01	棒枠	792	68	44	針	芯去	左・上段	T309
4	SE01	棒枠	796	76	54	針	芯去	西・上段	M156
5	SE01	棒枠	770	43	73	針	芯去	左・下段	F252
6	SE01	棒枠	840	59	42	針	芯去	東・下段	E162
7	SE01	棒枠	820	88	37	針	芯去	南・下段	M155
8	SE01	棒枠	796	87	40	針	芯去	西・下段	M157
9	SE01	棒枠	787	50	30	針	芯去	神内	F256
10	SE01	縦板	(832)	128	12	針	板目	北内西から7枚目	S255
11	SE01	縦板	(826)	90	7	針	板目	北側西から6枚目	S253
12	SE01	縦板	(953)	141	9	針	板目	北側内西から5枚目	T352
13	SE01	縦板	(919)	132	8	針	板目	北内西から4枚目	S254
14	SE01	縦板	(936)	114	11	針	板目	北側内西から6枚目	T263
15	SE01	縦板	(900)	122	10	針	板目	北側西から2枚目	F263
16	SE01	縦板	(754)	132	6	針	板目	北側西から1枚目	S252
17	SE01	縦板	(816)	152	9	針	板目	東内北から6枚目	M184
18	SE01	縦板	(880)	110	11	針	板目	東内北から5枚目	E190
19	SE01	縦板	(892)	86	15	針	板目	東内北から4枚目	E191
20	SE01	縦板	(786)	130	10	針	板目	東内北から3と4枚目間	S251
21	SE01	縦板	(772)	114	8	針	板目	東内北から5枚目	M183

第3表 井戸側材(縦板等)計測表(2)

(単位: m)

22	SE01	縦板	(905)	110	10	針	板目	東内北から2枚目	ETB9
23	SE01	縦板	(770)	147	13	針	板目	東内北から1枚目	S250
24	SE01	縦板	(830)	131	11	針	板目	南内西から6枚目	T356
25	SE01	縦板	(834)	116	9	針	板目	南内西から5枚目	ETB8
26	SE01	縦板	(906)	95	8	針	板目	南内西から5枚目	M189
27	SE01	縦板	910	76	17	針	板目	南内西から4枚目	S256
28	SE01	縦板	(918)	135	9	針	板目	南内西から1枚目	M190
29	SE01	縦板	(999)	126	12	針	板目	南内西から4枚目	ET97
30	SE01	縦板	(973)	130	17	針	板目	西側西から4枚目	M188
31	SE01	縦板	(970)	140	14	針	板目	西内南から3枚目	T351
32	SE01	縦板	(954)	134	6.5	針	板目	西側西内南から3枚目	M187
33	SE01	縦板	(915)	130	8	針	板目	西側西内南から2枚目	T349
34	SE01	縦板	(954)	125	11	針	板目	西側西内南から1枚目	F281
35	SE01	縦板	(1000)	131	11	針	板目	西側西内南から1枚目	T348
36	SE01	縦板	(746)	142	10	針	板目	西側西内南から6枚目	ET92
37	SE01	縦板	(986)	138	8	針	板目	西側西内南から5枚目	F282
38	SE01	縦板	(826)	138	9	針	板目	西側西内南から5枚目	ET93
39	SE01	縦板	(966)	122	12	針	板目	西内南から4枚目	T350
40	SE01	縦板	(918)	138	9	針	板目	西内南から4枚目	ET94
41	SE01	縦板	(270)	104	12	針	板目	西側西内南から4枚目	ET95
42	SE01	縦板	(276)	114	9	針	板目	西側西内南から4枚目	ET96
43	SE01	縦板	(1115)	115	9	針	板目	南内西から2枚目	T354
44	SE01	縦板	(1080)	114	8.5	針	板目	南内西から3枚目	T355
45	SE01	縦板	(1094)	126	10	針	板目	西内南から2枚目	M185
46	SE01	縦板	(966)	120	16	針	板目	西内南から6枚目	M186
47	SE03	接板	470	60	4	針		曲物内	T362
		接板	390	115	4.5	針		曲物内	
		接板	425	80	4	針		曲物内	
48	SE03	縦板	(266)	165	12	針	芯去		F268
49	SE05	接板	360	76	3.5	針		曲物内	M144
		接板	390	65	3.5	針		曲物内	
50	SE05	縦板	(184)	78	9	針	板目	東	T329
51	SE05	縦板	(119)	122	14.5	針	板目	西	T322
52	SE05	縦板	(149)	60	26	針	芯去	東	ET74
53	SE05	縦板	(590)	66	30	針	芯去	南	ET75
54	SE05	縦板	606	48	21	針	芯去	西	ET76
55	SE02	接板	414	92	3	針		曲物内	F237
56	SE02	縦板	(236)	102	9	針	板目	南	ET70
57	SE02	縦板	(206)	116	16	針	板目	北	F260
58	SE02	縦板	(198)	114	20	針	板目	北	F261
59	SE02	縦板	(170)	118	13.5	針	板目		T325
60	SE02	接板	262	17	2	針		曲物内、径4mmの孔	ET60
61	SE02	接板	480	115	4	針	板目	仲2段目	F258
62	SE02	接板	304	122	3	針	板目	仲2段目	F259
63	SE02	接板	(415)	74	3.5	針	板目	仲2・4段目	M145
65	SE02	接板	290	(244)	9	針	板目	仲2・4段目	F238

※()は最大値を示す。

第4表 土器・陶磁器・土製品観察表

(単位: mm)

No	遺構	地区	種類	器種	口 (直) (幅) (厚)	高 (幅) (厚)	外面凹面	内面凹面	底底凹面	外面色調 (褐色面)	内面色調 (素色面)	縫	沿	背	腹	底	縫成	備考	実測値
1	SE01	E2	土製品	目	88	52	16.5	ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ	泥塗燒	泥塗燒	目	少	目	側内上	目	T364	
2	SE01	E2	土製品	目	88	50	16.0	ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ	泥塗燒	泥塗燒	少	少	目	腹方	目	T365	
3	SE01	E2	青磁	瓶				青磁物	青磁物	青磁物	灰						紹内腹側	目	T366
4	SE01	E2	土製品	土鉢	47	16	3.0			青磁色		少	多	目	約11.17g				T367
5	SE01	E2	陶器	底鉢				ナデ	ナデ	灰	白灰	少	是	内側					T367
26	SE02	D2	土製品	目	79	44		ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ	泥塗燒	泥塗燒	少	少	目	側内斜上中央	目	T378	
27	SE02	D2	土製品	目	78	44	11.0	ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ	泥塗燒	泥塗燒	少	少	目	側内斜上中央	目	T381	
28	SE02	D2	土製品	目	82	46	15.0	ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ	泥塗燒	泥塗燒	少	少	目	側内斜上中央	目	T384	
29	SE02	D2	土製品	目	83	52	17.0	ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ・指痕	泥塗燒	泥塗燒	目				サブトレ	目	T377
30	SE02	D2	土製品	目	78	40	12.0	メントリ・マツフ	マツフ	マツフ	泥塗燒	泥塗燒	少	少	目	紹内面	目	T382	
31	SE02	D2	土製品	目	88	58	11.0	ナデ	ナデ	ナデ	泥塗燒	泥塗燒	目	少	目	サブトレ	目	T383	
32	SE02	D2	土製品	目	87	50	14.0	メントリ・マツフ	ナデ	ナデ	泥塗燒	泥塗燒	少	少	目	側内斜上中央	目	T380	
33	SE02	D2	土製品	目	88	70	7.5	ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ	泥塗燒	泥塗燒	少	少	目	サブトレ	目	T379	
34	SE02	D2	土製品	目				ナデ	ナデ	ナデ	泥塗燒	泥塗燒	少	少	目	裏	目	T396	
25	SE02	D2	土製品	目	119	60	18.0	ナデ	ナデ	ナデ	灰白灰	灰白灰	少	是	下北			T397	
36	SE02	D2	土製品	目	118			メントリ・ナデ	ナデ	ナデ	泥塗燒	泥塗燒	少	少	目	側内斜上中央	目	T386	
37	SE02	D2	土製品	目	128			ナデ	ナデ	ナデ	泥塗燒	泥塗燒	少	少	目	側内面	目	T388	
38	SE02	D2	土製品	目	122			ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ	紹灰燒	紹灰燒	少	少	目	サブフレ	目	T376	
39	SE02	D2	陶器	すり鉢				ナデ	ナデ・鉢目	灰白灰	灰白灰	少	多	目	紹外	目	T396		
40	SE02	D2	陶器	鉢				ナデ	ナデ	ナデ	灰	灰	目			良サブトレ	目	T389	
41	SE02	D2	陶器	すり鉢				ナデ	ナデ・鉢目	灰	灰	目	目	目	紹外	目	T396		
42	SE02	D2	陶器	すり鉢	102			ナデ	ナデ・鉢目	白灰	白灰	少	是	目	紹面	目	T392		
43	SE02	D2	陶器	すり鉢				ナデ	ナデ・鉢目	白灰	白灰	少	目	目	紹外西	目	T390		
44	SE02	D2	陶器	すり鉢	124			ナデ	ナデ・鉢目	紹止あ切り	灰白	灰	少	是	目	側外	目	T551	
45	SE02	D2	瓦製系	盤				ナデ	ナデ	灰白	青磚	目	目	目	紹外	目	T394		
46	SE02	D2	土製品	不明	54	35	26.0				泥塗燒		少	目	多	目	32.0g	目	T387
67	SE03	D2	土製品	目	128	86	29.0	メントリ・マツフ	ナデ	ナデ・ハラ起シナメ	白灰焼	白灰焼	少	少	目	紹内	目	T373	
68	SE03	D2	土製品	目	129	90	27.0	メントリ・マツフ	ナデ・鉢底	ナデ	泥塗燒	泥塗燒	少	目	目	サブトレ	目	T374	
72	SE04	D2	土製品	碗・皿		55		ナデ	ナデ	ナデ	泥塗燒	泥塗燒	少	少	目	紹外	目	T370	
73	SE04	D2	土製品	目	98	60	22.0	ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ	泥塗燒	泥白灰	少	少	目	紹内	目	T369	
74	SE05	D2	土製品	新合掌・皿	44			マツフ	マツフ	マツフ	マツフ	マツフ	少	目	方舟市上田北里(1)			T372	
75	SE05	D2	土製品	目	136			ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ	青磚	青磚	目	少	目	紹外	目	T371	
76	P01	F2	土製品	目	118	78	28.0	メントリ・マツフ	ヨコナデ	マツフ	泥塗燒	泥塗燒	目	目	目			S262	
77	SK01	D2	土製品	目	126			メントリ・マツフ	マツフ	ナデ	泥塗燒	泥塗燒	少	少	目			S266	
78	SK01	D2	陶器	會				ナデ	ナデ	ナデ	陶灰	陶灰	少	目	目	珠洲(2)	目	S265	
79	SK01	D2	加賀	盤	238			ナデ	ナデ	ナデ	泥	泥	目	目	目	島下層	目	S267	
82	SK02	D2	瓦製系	盤	84			ナデ・ナスリ	ナデ	紹止あ切り	底灰	底灰	少	目	北近			S261	
83	SK06-S02	D2	生糸	盤				ナデ	ナデ・鉢底	青磚	青磚	青磚	目	目	南平			S263	
84	SK06-S02	D2	土製品	目	78			マツフ	ナデ	ナデ	泥塗燒	泥塗燒	少	目	南平			S264	
85	SK1	E2	土製品	目	78	56	20.0	ヨコナデ・ナデ	ナデ	マツフ	泥赤燒	泥赤燒	少	目	目	南西	目	S277	
86	SK1	E2	土製品	目	118	78	25.0	マツフ	マツフ	マツフ	泥塗燒	泥塗燒	少	少	目	北西	目	S276	
87	SK1	E2	土製品	目	122	98	34.0	マツフ	マツフ	マツフ	泥塗燒	泥塗燒	目	少	目	サブトレ	目	S273	
88	SK1	E2	土製品	目	130	92	32.0	マツフ	マツフ	マツフ	泥塗燒	泥塗燒	目	少	目	サブトレ	目	S275	
89	SK1	E2	土製品	目	142	88	30.0	ナデ	ナデ	マツフ	泥塗燒	泥塗燒	少	目	目	西セゼ	目	S274	
90	SK1	E2	土製品	底盆				マツフ	ナデ	ナデ	青磚	青磚	少	目	目	南東	目	S279	
91	SK1	E2	内窓	青白釉	80			マツフ	ミカキ	マツフ	泥塗燒	泥塗燒	少	少	目	南西	目	S278	
92	SK1	E2	陶器	鉢				ナデ	ナデ	ナデ	泥灰	泥灰	少	目	目	サブトレ	目	S270	
93	SK1	E2	陶器	鉢				ナデ	ナデ	ナデ	泥灰	泥灰	少	目	目	南東	目	S285	
94	SK1	E2	陶器	すり鉢	120			ナデ・鉢目	ナデ・鉢目	ケスリ・工具痕	灰	灰	少	目	目	北西	目	S269	
95	SK1	E2	土製品	土鉢	(27)	7	2.0				泥塗燒		少	目	西アゼ0.8g			S283	
96	SK1	E2	土製品	土鉢	(27)	9	3.0				泥灰		少	目	西アゼ1.15g			S284	
97	SK1	E2	土製品	土鉢	(32)	9	3.0				泥塗燒		少	目	北アゼ1.46g			S281	
98	SK1	E2	土製品	土鉢	(35)	10	3.0				泥塗燒		少	目	北アゼ1.61g			S282	
99	SK1	E2	土製品	土鉢	37	44	7.0				泥塗燒		目	目	西アゼ55g			S280	
106	SD01+D2	D2	土製品	盤	228			ナデ・タキ	ナデ・タキ	ナデ・タキ	灰	灰	少	目	目			S286	
109	SD03	D2	内窓	青白釉	72			マツフ	マツフ	マツフ	泥塗燒	泥塗燒	少	少	目			S287	
110	通標外	青磁	瓶	158			青磁物	青磁物	青磁物	泥灰	泥灰	目			青土胎舌		S291		
111	通標外	青磁	瓶	158			青磁物	青磁物	青磁物	泥灰	泥灰	目			西半		S290		

※()は最大値を示す。

第5表 漆製品観察表

(単位: mm)

No.	造形	地区	器種	口	底	高	外底漆	内底漆	外底漆	標識	木取	備考	実測No.
102	S01	E2	直	96	77	14.0	黒色漆	黒色漆	黒色漆	ケヤキ	椎木	東サフトレ西端地山直上	ET26

第6表 木製品観察表

第7表 石製品観察表

(単位: mm)

No.	造形	地区	様式	口 (底) (幅)	底 (幅)	高 (厚)	被覆	木取	備考	実測No.	
6	SE01	E2	著状	226	6	4.0	針	神内多角	S236		
7	SE01	E2	著状	208	6	3.0	針	神内平・直	S243		
8	SE01	E2	著状	202	6	5.0	針	神内多角	S237		
9	SE01	E2	著状	210	5	5.0	針	神内多角	S238		
10	SE01	E2	著状	163	7	2.0	針	神内平	S241		
11	SE01	E2	著状	(229)	7	6.0	針	神内角	S242		
12	SE01	E2	著状	(170)	5	6.0	針	神内角	S239		
13	SE01	E2	著状	(137)	7	8.0	針	神内多角	S240		
14	SE01	E2	著状	(92)	6	4.0	針	神内多角	F272		
15	SE01	E2	著状	(106)	8	6.0	針	神内多角	F271		
16	SE01	E2	円形板	127	127	10.0	針	板	神内	S233	
17	SE01	E2	柱n	(59)	25	21.0	針	辺	神内	S235	
18	SE01	E2	棒状	(62)	28	25.0	針n	芯	神内	F270	
19	SE01	E2	棒状	184	66	52.0	玄	芯	神内	S232	
20	SE01	E2	棒状	(250)	52	52.0	玄n	芯	神内	S233	
21	SE01	E2	棒状	(186)	18	18.0	針n	芯	神内	S234	
22	SE01	E2	棒状	(186)	29	28.0	針n	芯	神内	F269	
23	SE01	E2	棒状	(103)	21	10.0	針n	神内	F273		
24	SE01	E2	棒状	(80)	(19)	7.0	針	神内	F274		
25	SE01	E2	棒状	(68)	13	7.0	針	神内	F275		
49	SE02	D2	著状	228	6	5.0	針	北多角	T316		
50	SE02	D2	著状	199	6	3.5	針	神内平角	T327		
51	SE02	D2	著状	(178)	7	5.0	針	神上段2×1 内角	F263		
52	SE02	D2	著状	(175)	7	4.0	針	南	F257		
53	SE02	D2	著状	(145)	6	3.0	針	神内外上部神 内角	T321		
54	SE02	D2	著状	(139)	5	5.0	針	神内多角	T326		
55	SE02	D2	著状	(19)	6	6.0	針	神内外上部神 内角	T320		
56	SE02	D2	著状	200	8	4.0	針	神内平角	T328		
57	SE02	D2	棒状	(185)	16	13.0	針	神上段2×1	F262		
58	SE02	D2	板状	122	(28)	5.0	針	円形板n	F265		
59	SE02	D2	折板	270	(127)	3.0	針	神内、芯	S394		
60	SE02	D2	下鉢n	(151)	(33)	(21.0)			F266		
61	SE02	D2	棒状	173	34	31.0	針	神周辺	T324		
62	SE02	D2	棒状	614	16	8.0	針	南	ET71		
63	SE02	D2	棒状n	(652)	41	22.0		南	F254		
64	SE02	D2	棒状n	(607)	36	18.0		神外南	ET73		
65	SE02	D2	柱n	(434)	(160)	(530.0)		神外	ET77		
66	SE02	D2	棒状	(266)	(28)	(43.0)	針	北	F264		
69	SE03	D2	板状	(65)	(74)	7.0	針n	サブトレ	T318		
71	SE03	D2	円形板	201	(98)	12.0	針	板	神内	F267	
81	SK02	D2	板状	44	73	22.0	針	柱	F276		
103	S01	E2	著状	(112)	5	2.5	針	北東(東アガ 合)字	T323		
104	S01	E2	棒状	87	9	3.5	針	北西	T319		
105	S01	E2	棒状	191	26	26.0	芯	南西	T317		

第8表 金属製品観察表

(単位: mm)

No.	造形	地区	器種	長	幅	厚	重量 (g)	備考	実測No.
47	SE02	D2	缸津	50	43	25.0	61.25		T390
48	SE02	D2	不明	(81)	25	17.0	25.0	鉄	T391

※ ()は最大値を示す。

第4章 直江ポンノシロ遺跡

第1節 概要

本遺跡では、古墳時代の川跡や平安時代から室町時代の遺物が確認できる川跡とその川跡と重複する江戸時代から明治時代頃の川（用水）跡、また江戸時代から明治時代頃の墓跡が見つかっている。遺物は古墳時代の土器や木製品、平安時代の土師器、須恵器、鎌倉時代から室町時代の土師器や国産陶器、中国産陶器、漆器、木製品などが多く出土している。墓については、近世以降に営まれており、近代以降の墓も含んでいる。件数は多く見つかっているが、ここでは近世のものについて詳しく触ることとし、近代以降のものについては、その全てについて述べることはしないので、ご容赦願いたい。

なお、隣接調査区で鞍月文化会館建設工事に伴う発掘調査が実施されており、縄文時代晚期後葉の土器が出土している。また、第24、25、81、82、84、85図にはその際の遺構図を含んでいる。

第2節 検出遺構

1. 土坑・墓坑

SK07（第30図） 方形棺に隣接して29の小型の早桶と第3節第36図2の土器壺が埋納されていた墓坑である。壺は木棺の上端とほぼ同じ高さで検出されたが、早桶はかなり下からの検出であった。方形棺と早桶、土器壺がセットとして埋納している墓坑は本遺構のみである。副葬品はない。

SK09（第26・27図） SK28を壊して造られた墓坑である。棺は1枚物の側板と底板からなり、天井板は未検出である。側板の縁部にはそれぞれ縱方向、横方向の細い板が鉄釘によって留められており、同様に留められた内側の角にある縱方向の棒状材は底板よりも下方に延びて、脚となっている。長辺側の側板外面には菊花と冂をモチーフにした飾板が釘によってつけられていたようで、1のように復元した。飾板と側板の間には4・6・7のような板が当たられており、復元に際しては、その痕跡や板を置けるスペースを考慮した。それらの飾板から端側には格子が木釘によって留められている。飾板は5→6→3→4→側板の順に木釘を用いた鉢によって留められていた。7は冂と側板の間に入れられた板である。9・10も側板の飾板と考えられるが、反対側の長辺側にも同様の飾板が入ることから、短辺側の飾板、もしくは底板の下から出土していることから底板に関係したものである可能性が高い。2は宝珠状の棒材である。棒材を角状にカットしているので、棺の角につけられていたのかもしれないが、詳細は不明である。副葬品はない。

SK13（第28・29図） 本墓坑群で、木棺、人骨とともに最も残りの良かった遺構の1つである。11の木棺は、飾板の模様などが若干異なるが、SK09木棺と類似している。菊花と葉を用いた飾板や冂がある。また、短辺の横板両端には墨書き状の草模様が描かれており、中央部分には簾状の植物質が部分的に付着している。短辺側の図で、網掛けで示した部分は墨痕のような痕跡が認められた箇所である。横板下端部の細い横板には「メ」の様な墨書きが見える。16の冂はSK09と異なり冂の向きが反対方向である。飾板や横材、縦材を留める鉢は出土時には金色に光って見えた。17はSK09出土品と同様に底板の下から出土している。12は2同様に棒部を角状にカットしているので、木棺の四隅につけるような機能を持っている可能性がある。副葬品は出土していない。

SK14（第29図） 方形に近い木棺をもつ墓坑である。18～22は木棺の上部に取り付けられる天蓋の一部である可能性を考えている。18・19は天蓋の笠の部分が想定される。20～22は中央にあって、その笠の部分を固定するための板が想定される。6ヶ所の切込みが確認できるので、6枚の笠部品がついていたのであろう。副葬品は出土していない。

SK18(第26・30図) 長方形を呈する木棺をもつ墓坑である。底板と側板の接合には木釘を用いている。底板上に側板が乗り、外底面から木釘を打ちつけて固定している。26～28は漆塗りの板材であり、底板の下から出土しているが、用途は不明である。

SK19(第26・29図) 早桶を用いた棺をもつ墓坑である。第26図遺構図の左側が底板側であり、西側に倒れた状態で検出されている。倒れた状態で上側となる東半の側板を外して図化しており、側板の内面が見えた状態である。23は蓋板であり、木釘状のジョイントによって板を繋ぎ合せて蓋としている。図上部左寄りと、図下部右寄りに平らな面から打ち込んだ木釘が残っている。24は出土側板を並べて復元した桶である。外面上半部には蓋が残っている。蓋の径と口径の大きさが合わないが、桶図が復元によるものであることに起因する可能性がある。

SK28(第26図) SK09と重複する墓坑であり、SK09よりも古いことが土壤の平面観察によってわかる。SK09によって、北半の大半が失われているが、板状品が見えるので、木製棺が設置されていたのであろう。漆器碗2点の他、鉄鍋が逆位で出土しており、いわゆる鍋被り葬の事例に該当しよう。

SK30(第31図) 厚い蓋板を伴う長方形を呈する木棺をもつ墓坑である。検出時には明確な輪郭は確認できなかったが、SD08を掘り下げていく中で検出された。木棺の側板は組み合わせ式になっており、接合箇所を木釘で固定している。底板には外周に棒材が木釘と鉄釘で固定されており、台となっている。外底面には一部縄のような痕跡があり、また端部に凹んだ痕跡が2ヶ所あることから、運搬の際には木棺の短辺側2ヶ所に縄をかけていたことが想定される。側板には木釘を多用し、荷重のかかる底板の接合には鉄釘と木釘を併用している。

SK31(第34図) SK30に隣接して検出されたが、こちらもSD08を掘り下げる際に検出された。平面図には掲載できていない。長方形を呈する木棺をもつ墓坑であり、蓋板も検出したが、天井板は薄くもろいために図化できなかった。ただし、蓋板の側板は図化しており、33の上部に掲載した細長い板は蓋板の側板で、端部を桜の皮と木釘で固定している。また天井板と側板は木釘で固定していた痕跡が見える。側板は組み合わせ式であり、平たい面から木口に向かって木釘が打たれている。また、長辺の側板には横幅を3等分するかのように縦板が2本木釘で固定されている。底板の外周には台となる細長い棒材が木釘によって固定されており、中央にはやや幅広の板材が木口からと表面からの木釘によって設置されている。外底面には縄の痕跡が見られる。副葬品はない。

SK32(第26・32・33図) 蓋を伴う長方形を呈する木棺をもつ墓坑である。SD07と重複しており、遺構検出時には確認できずに、SD07の掘削によって見つかった遺構である。木棺、副葬品共に最も残り具合の良い資料である。第26図は棺内の検出状況であり、34は木棺の蓋である。天井板は幅細の板を木釘状のジョイントを用いて接合しており、短辺側の蓋側板の形状に合わせて、緩やかに湾曲している。蓋板の中央部右寄りのところに四角で囲んだ箇所があるが、その内部の図は天井板の内面の同位置で見られる縦状のものが当たったような痕跡を示している。図左側の蓋側板には木棺と接する側に2ヶ所の金具痕が認められる。木棺側にも同様の痕跡と鉄釘が認められるので、蓋の開閉を可能とする蝶番状の金具が付けられていた可能性が高い。また蓋板同様に四角く囲んで示した箇所の内部の図は木棺内面の同位置を表しており、縦状のものが当たっていたような痕跡がうかがえる。木棺側板は3枚の横板材を木釘状のジョイントを用いて組み合わされている。側板上端部よりやや下がった位置には蓋の受けとして棒状の横材が取り付けられている。蓋側板の長辺側中央の天井板と接する部分には凹みが設けられており、36のような横架材状の棒材が設置されていた可能性がある。また、第33図の長辺側の側板上端部中央にも凹みと孔があり、そこと接する蓋板にも同様の凹みと共に何かが当たっていた痕跡と孔が存在することから、蓋板を留めるような仕掛けが施されていた可能性が考えられる。

第26図の北端部から鉄鍋（第39図34）が、そして漆器椀が鉄鍋の南東端（同図33）、同東端（同図32）、木棺の南東隅（同図31）、鉄鍋の下に包丁（同図35）、木棺中央に鎌（同図36）が入っていた。蓋が残っていたことから、墓坑陥没による棺外からの流れ込みは無い。

2. 溝・川

SD01（第35図） 調査区東端を南北に流れる川跡である。最終埋没は近代である。a-a'層位図の1～6層、c-c'層位図の1～6層、d-d'層位図が該当する。

SD02（第35図） SD01と重複しながら南北に流れる川跡である。a-a'層位図の7～19層、b-b'層位図、c-c'層位図の7～9層が該当する。古代から中世にかけての遺物が多く出土しており、古代は不明ながらも中世には機能していた川跡と考えられる。中世後半には流路をSD01の方に変えていると想定しているが、上層からは近世遺物が出土しているので、徐々にSD01寄りに変わっていったものと考えられる。

SD03（第35図） SD01・02が重複しつつ南北に流れる調査区の、中央付近西寄りで検出された東西溝の一端である。c-c'層位図の10～13層、e-e'層位図が該当する。古代から中世の溝跡であろう。

SD05（第35図） 調査区西寄り、墓坑群が位置する付近で検出された東西溝である。墓坑群と火葬骨を含む溝状遺構のSX05により一端途切れるが、その西側に所在するSD20に繋がる同一溝と考えている。弥生時代から古墳時代の土器が出土している。

SD10（第35図） 調査区西端中央やや南寄りで検出された東西に流れる川跡と推定している。北岸は検出できたが、南岸は近代以降に埋没したSD11によって削られているようだ。弥生時代終末期から古墳時代前期頃の遺物が多く出土している。

SD20（第35図） SD05から続く東西溝と考えている。

第3節 出土遺物

遺物については、紙幅の都合もあって、遺構の年代を決定するために必要なものや特殊なものについて扱うこととする。文中で触れないものや法量等については章末の観察表をご参照願いたい。

1. ピット・土坑・墓坑

P02（第36図） 1の土師器甕底部片が出土している。

SK02（第37図） 13は9世紀代の須恵器無台壺、14は12世紀頃の口縁部に小さな玉縁をもつ白磁碗、15は近世の外面に鉄軸を施す陶器瓶類で、16は中世の珠洲焼甕である。

SK07（第36図） 2は土師器の骨壺である。胴部上半に横方向の波状文を施している。近代か。

SK11（第37図） 17は鎌の刃部片と考えられる。

SK14（第37図） 18・19は秉燭である。18は芯立部が欠損している。近世から近代か。

SK17（第37図） 20は越前焼の甕で、陶棺として利用したものであろう。胴部上半に刻印がみえる。口縁部および胴部形態から18世紀前半頃の所産と考えられる。

SK18（第36図） 12は外面および外底面は黒色漆塗りで、内面および外表面の漆絵は褐色を呈する漆を塗布する漆器椀である。外底面のケズリは粗い。近世の所産であろう。

SK19（第36図） 3は須佐唐津のすり鉢で18世紀後半頃、4は肥前の碗で18世紀頃、5は肥前片口鉢で18世紀～19世紀頃の所産であろう。6～8は寛永通宝で7は古寛永、他は新寛永である。

SK21（第36図） 9～11は土師器骨壺とその蓋である。10・11は同一個体であろう。近世末から明治期の所産と考えられる。

SK27（第38図） 棚については他墓坑との重複によってか、よくわからなかったが、21・22の箱膳と26・27の筆箱およびそれらの中身が出土した。21・22は部分的に黒色漆が残っており、全体的に黒ずんでいるので、黒色漆塗りの製品と考えられる。底板内面には図の右側に23の口縁端部痕、左側には入子で出土した24と25の口縁端部痕が見える。天井板内面には23の高台端部痕が見える。22の長辺側側板の中央やや下寄りのところに2ヶ所の木釘が見える。23は外面に扇を赤色漆で描いた内面赤色、外面黒色の漆器椀、24は外外面に赤色漆で絵を描いた外外面黒色の漆器椀、25は外面に赤色漆で扇を描いた内面赤色、外面黒色の漆器椀である。26・27は21・22同様に黒ずんでいることから黒色漆塗りの製品と考えられる。蓋、身共に外面に刃物痕が多く認められる。27の身は内部に棒材による筆置きがあり、2ヶ所の凹みが見られる。また底板中央には2ヶ所の孔が開けられている。28は筆箱に入っていた硯である。近世の所産と考えられる。

SK28（第39図） 29は三足をもつ丸型湯口の鉄鍋である。30は内面に赤色漆絵を施す外外面黒色の漆器椀である。共に近世の所産と考えられる。

SK32（第39図） 34は相対する位置に2ヶ所の吊耳をもつ鉄鍋である。吊耳には4ヶ所の孔が開いている。35・36は包丁と鎌であるが、両者ともに刃部に布状の付着物が認められる。布様の繊維で巻いてあった可能性がある。いずれも近世の所産と考えられる。

3. 落ち込み等

SX01（第40図） 38は古漁戸前・中期頃の瓶子類の口縁から頸部と考えられる。口縁端部内面から外面にかけて薄い灰釉が施されている。胎土はやや赤みを帯びた灰色を呈す。

SX03（第40図） 平安時代前期の須恵器と土師器が出土している。

SX05（第40図） 火葬骨を多く含んだ黒色砂質土を主体とする近世から近代の溝状遺構である。44～46は14～15世紀頃の土師器皿、48・49は竈などの構造物片と考えられる。

4. 溝・川

SD01（第40～42図） 古墳時代頃から近代にいたる土器、陶磁器等が出土している。51は外底部に墨書が見られる。

SD01・02（第42～45図） 両川跡の境周辺から出土した遺物であり、弥生時代中期後半頃から近代まで見られる。104は外底面に「井」のような墨書が見える。130～139、141は白磁碗・皿であり、131は見込みに笠書き文が、141は外面に笠書き文、内面に櫛目文が見える。140・141は青磁碗であり、140は外面に片彫りの蓮弁文と櫛目文を描き、内面には櫛目が見え、漆緋の痕跡もある。

SD02（第46～53・56図） 取り上げ層位ごとに掲載しており、遺物観察表の備考欄に記載しているが、対応する層位は第35図の層位図注記を参照願いたい。概ね弥生時代終末期から古墳時代前期、9世紀頃、11世紀前後、12世紀後半から13世紀頃、15・16世紀頃の遺物が多いようだ。186は外底面に墨書が認められる須恵器だが、破片であり詳細不明である。199は外底面にヘラ記号をもつ綠釉陶器で、釉は黒褐色を呈す。209は古墳時代の須恵器环身である。212は外底部に「大」もしくは「六」墨書をもつ須恵器である。219は装飾器台の破片である。221は焼成された粘土塊であり、竈などの構造物片を想定している。224は外底面に筋痕が見えるが、調整痕であろうか。227は外底部に「井」墨書をもつ須恵器無台坏である。228・229も外底部に墨書が見えるが、断片であり詳細不明である。230は9世紀代の無台坏の外底部に推定「池」墨書が見える。265は灰釉陶器の碗であり、9～10世紀頃の所産であろうか。279は赤彩した装飾器台であり、透かしの一部が残存している。284は外底面に「依」墨書をもつ有台坏

である。290～294は外底面に墨書をもつ無台坏だが、290～293は墨書の詳細は不明である。290は底部から口縁部への境付近に打ち欠きのように見える破損部がある。293は「千」のように見える。295は壺もしくは瓶類口縁部の内面に「依」と墨書されている。296は高坏で、外面赤彩のように見えるが、須恵器でもあるので、断面白抜き・赤彩表示なしで図示した。307は、逆位で転用硯として使用されている。高台内には墨痕が見え、高台は3ヶ所を打ち欠いており、筆置きなどとして使用した可能性がある。319は白磁の碗で見込みに箒描き文を施す。321は内面に片彫りの推定蓮花文を施す龍泉窯系青磁碗である。323・324は近世の白磁である。326は緑色凝灰岩の剥片である。327・338はメノウの剥片で火打石の可能性が考えられる。331～333は有台・無台坏の外底面に墨書を持つもので、331は「井」墨書があるが高台内全体的に墨痕が残っており、転用硯の可能性がある。332は墨書内容不明、333は「殿」墨書が想定され、直江中遺跡でも1点「殿カ」墨書土器が出土している。

SD03 (第54図) 365～367の平安時代の須恵器や白磁などが出土している。

SD05 (第54図) 368・369など弥生時代中期後半頃の土器が出土している。

SD06 (第54図) 近世・近代の川跡であり、370など当該期の土器が出土している。

SD07 (第54図) 近世・近代の溝跡であり、371など当該期の土器が出土している。

SD09 (第54図) 近世・近代の溝跡であるが、386～391の平安時代の土師器や須恵器、古瀬戸の可能性がある鉄釉瓶子類、青磁碗などを掲載した。

SD09・11・12 (第56図) 421は表面に削った際の筋が残る砥石である。

SD10 (第55・56図) 弥生時代終末期から古墳時代前期の土器が出土している。393・394は表面に赤彩の痕跡が見えるもので、外面および口縁部内面を丁寧に磨いている。同一個体の可能性がある。395は赤彩の痕跡が認められないが、393・394と類似した形態・調整をしている。410は土鉢片であり、外面を丁寧に磨いている。407は近世以降の所産であり、混入と考えられる。

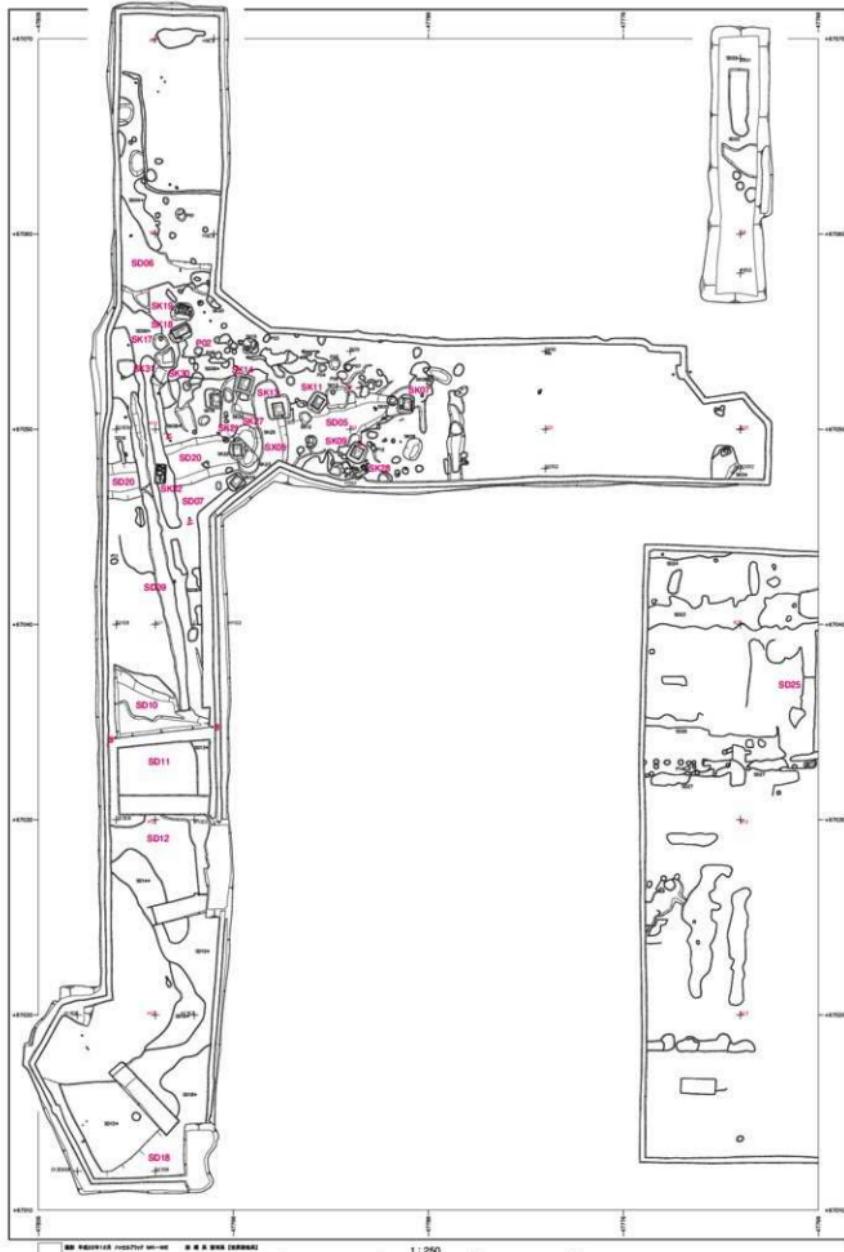
SD18 (第56図) 覆土観察から近世・近代の川跡と考えられる、422・423の弥生時代末から古墳時代初頭頃の器台もしくは高坏の他、古墳時代前期頃の土器が出土している。

SD20 (第54図) 372～376の弥生時代中期後半、古墳時代前期、9世紀頃の土器、須恵器などが出土している。

第4節 小結

発掘調査では、調査区東側を流れる鞍月用水沿いで川を検出している。川からは弥生時代後半～古墳時代・奈良・平安時代・鎌倉・室町時代・江戸時代以降の遺物が出土しており、周辺に当該期の集落などが存在した可能性を感じさせる。しかしながら、建物跡などの具体的な遺構は検出されず、耕地整理などによる削平によって失われたのか、未調査範囲に含まれるのかは、調査の進展がないと明らかにならない。SD01、02周辺は複数の川が重複しており、徐々に流路が整備されて調査区に隣接する現在の鞍月用水へ姿を変えたものと考えられる。

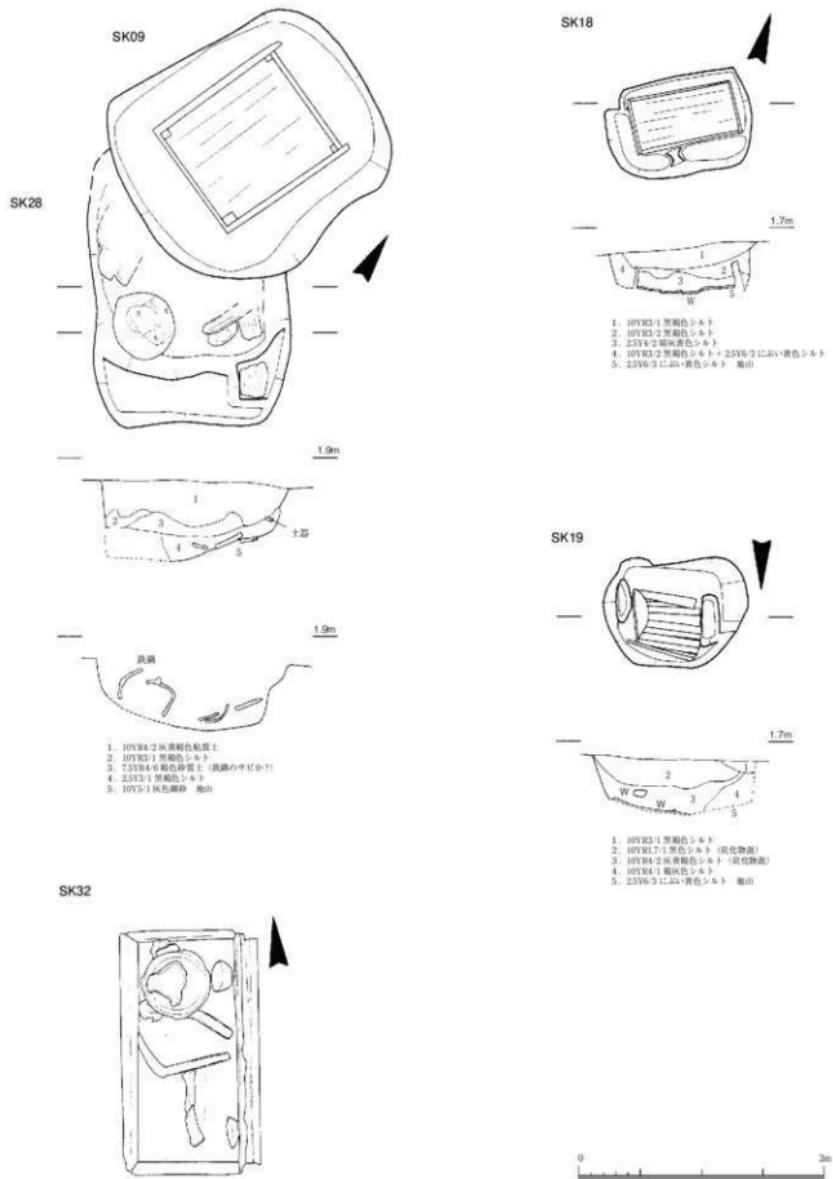
また、区画整理によって移転となった墓地跡からは近世の墓坑が複数検出された。出土遺物を伴わない墓坑が多いので、大まかな変遷となるが、概ね長方形木棺および早桶木棺など、SK18、19、28、30～32は近世、その他は近世末頃から近代にかけての墓坑と推定できる。特筆すべきはSK28、32にみられる鍋被り葬であり、東日本では認められるが、当地ではほとんど知られていない墓制である。



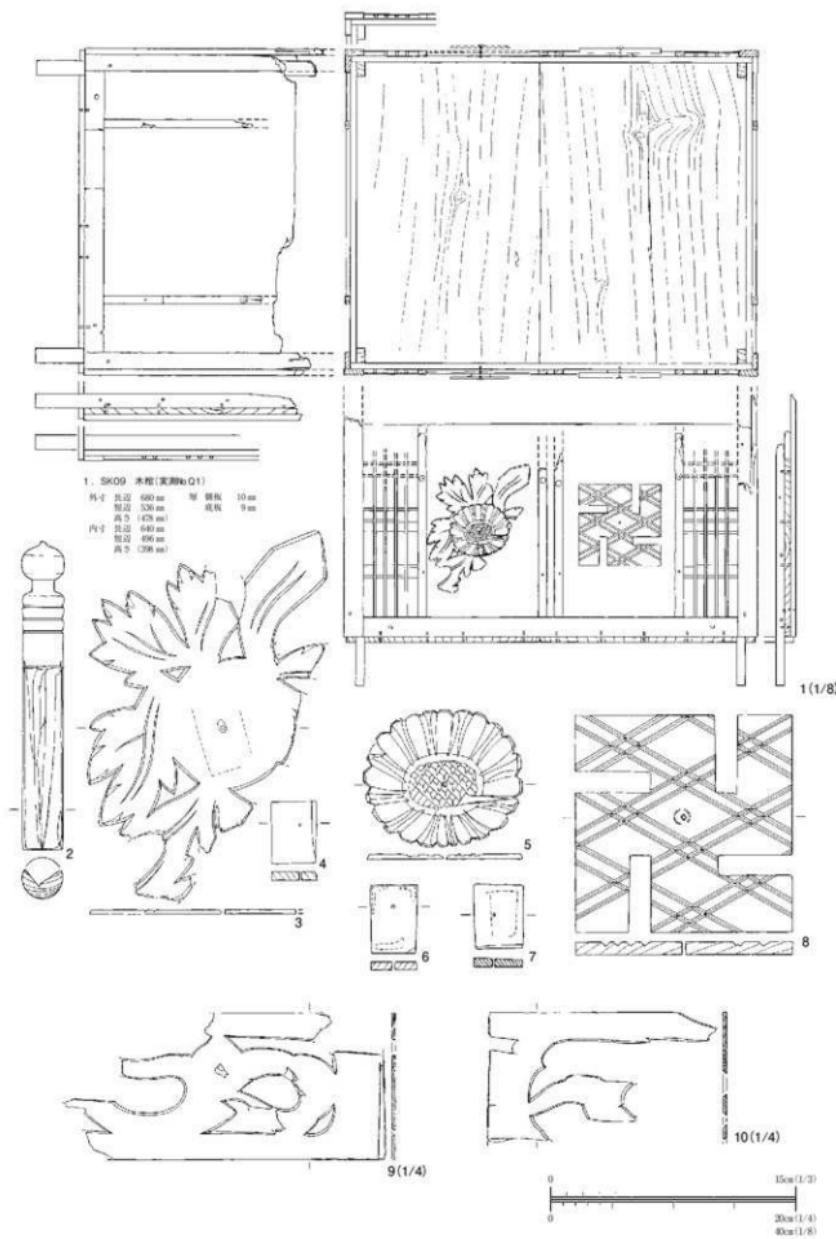
第24図 遺構全体図(1) [S=1/250]



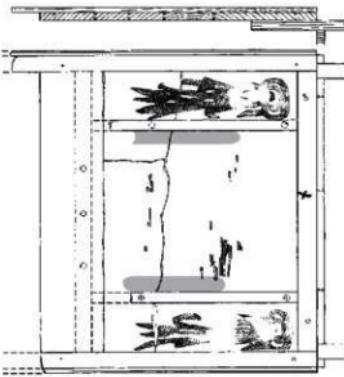
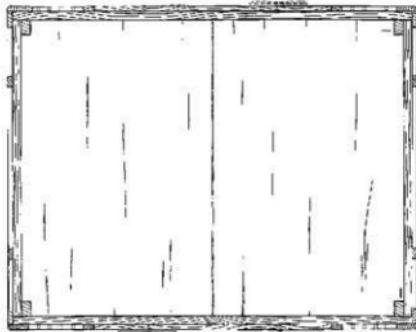
第25図 遺構全体図(2) [S=1/250]



第26図 SK09・28、SK18、19、32 [S=1/40]

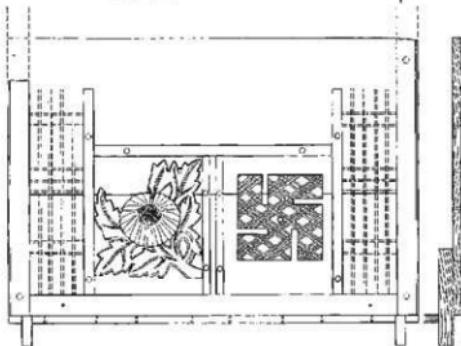


第27図 SK09 棺材 [S=1/3・4・8]

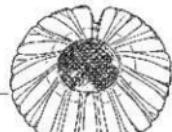


11. SK13木棺(実測版)

外寸
長辺 675 mm
幅 520 mm
高さ 500 mm
内寸
長辺 630 mm
幅 485 mm
高さ 490 mm
厚
側板 15 mm
底板 12 mm



11(1/8)



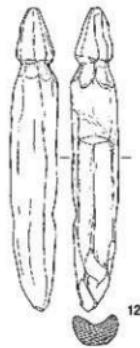
13



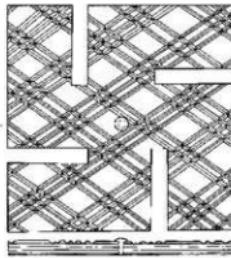
14



15



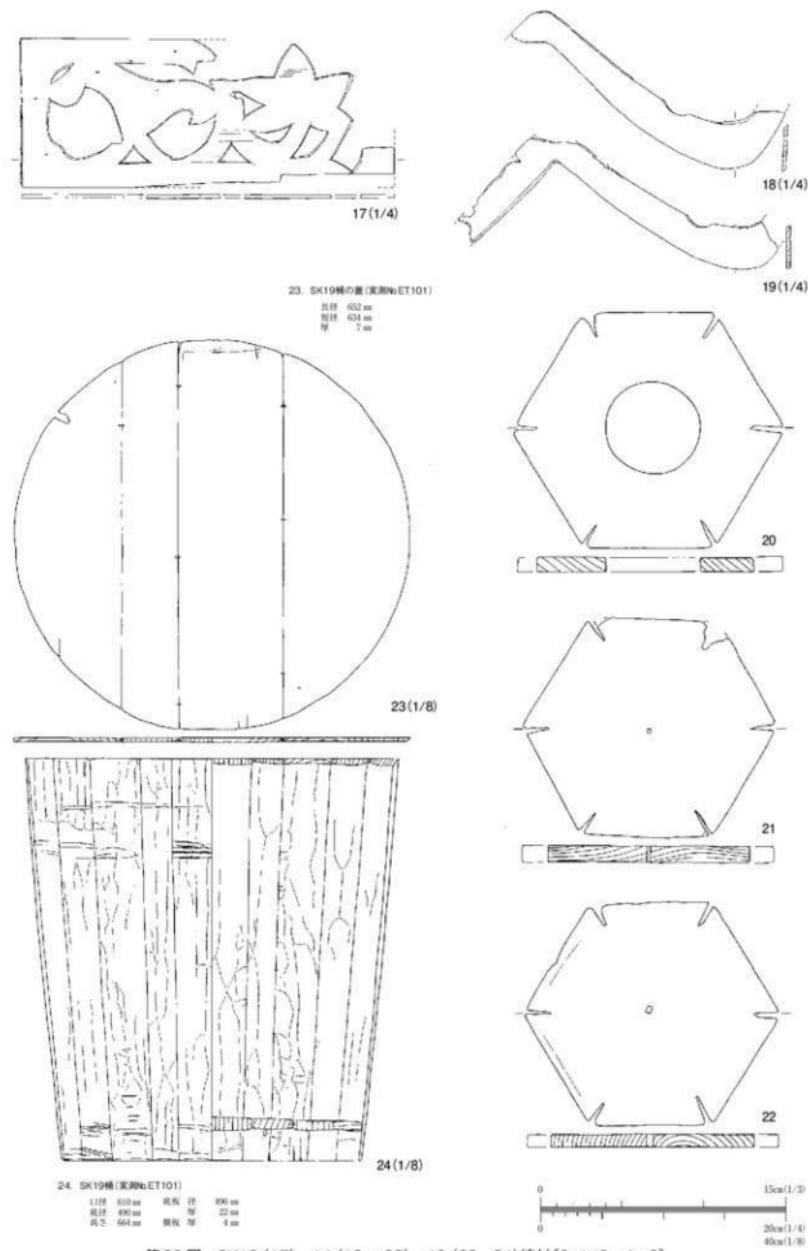
12



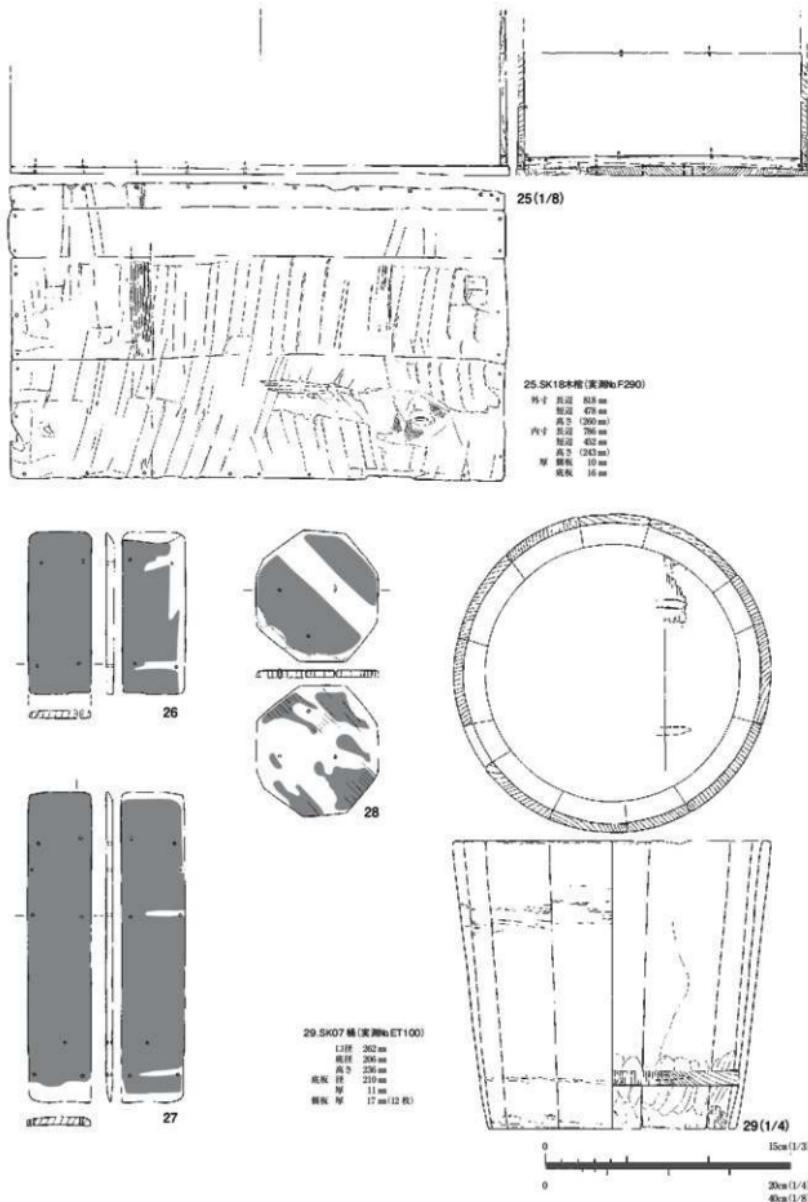
16



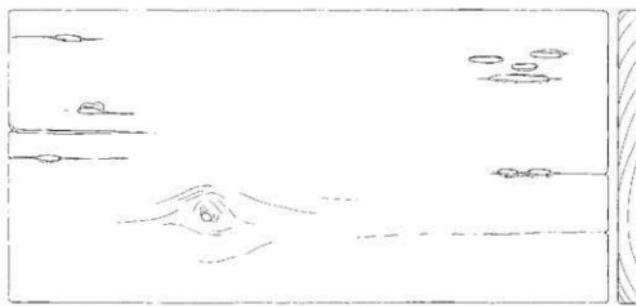
第28図 SK13棺材[S=1/3・8]



第29図 SK13 (17)、14 (18~22)、19 (23, 24)棺材 (S=1/3・4・8)



第30図 SK18 (25~28)、07 (29) 棚材 (S=1/3・4・8)



30



31



30 SK30裏 (実測縮M194)

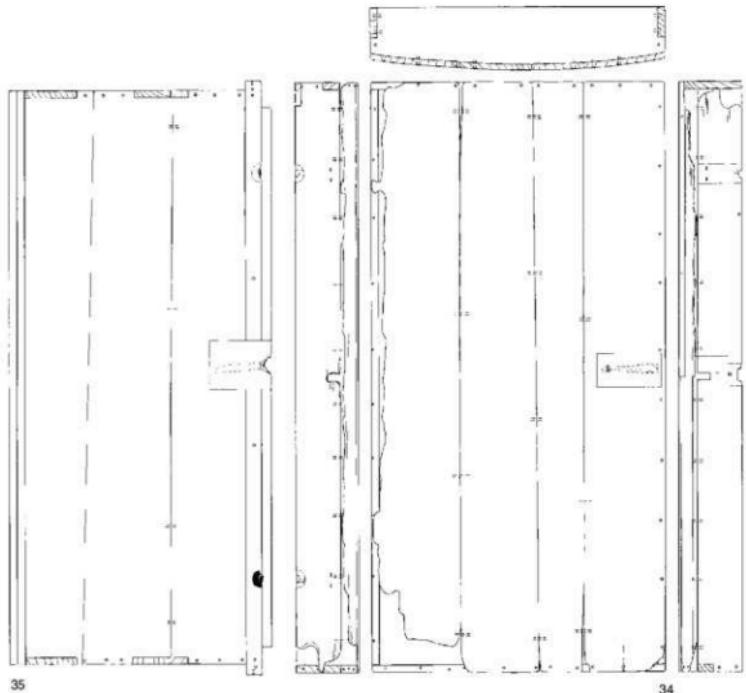
長辺	990 mm
短辺	480 mm
厚	38 mm

31 SK30 木棺 (実測縮M194)

外寸	880 mm
内寸	430 mm
高さ	392 mm
内寸	860 mm
外寸	410 mm
高さ	379 mm
外寸	14 mm
内寸	10 mm



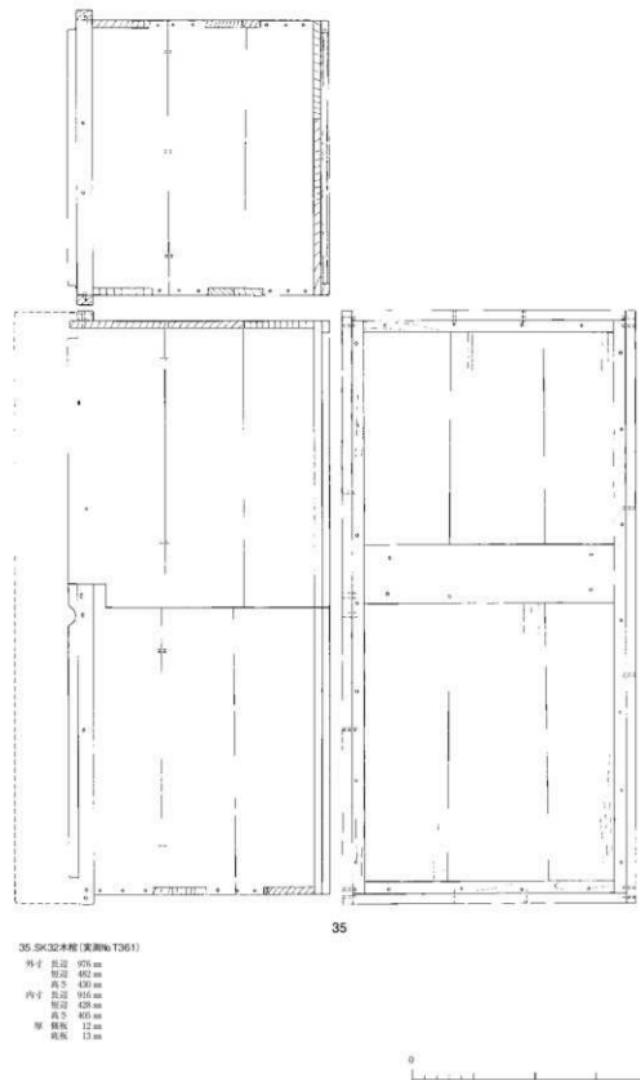
第31 図 SK30 棺材 [S=1/8]



34.SK32 木棺 棺(実測値T361)

外寸	長さ	995 mm
	幅	854 mm
	高	104 mm
内寸	長さ	944 mm
	幅	809 mm
	高	94 mm
厚	板厚	12 mm
	天板	30 mm

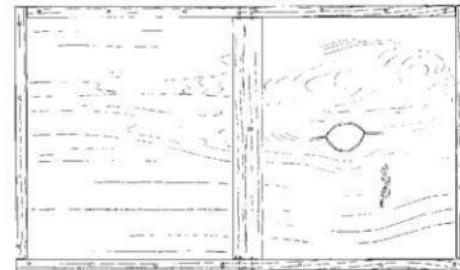
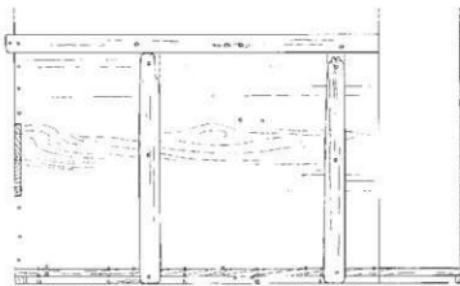
第32図 SK32棺材(1) [S=1/8]



第33図 SK32棺材(2) [S=1/8]



32



33



32. SK31 木棺蓋(実測No.S259)

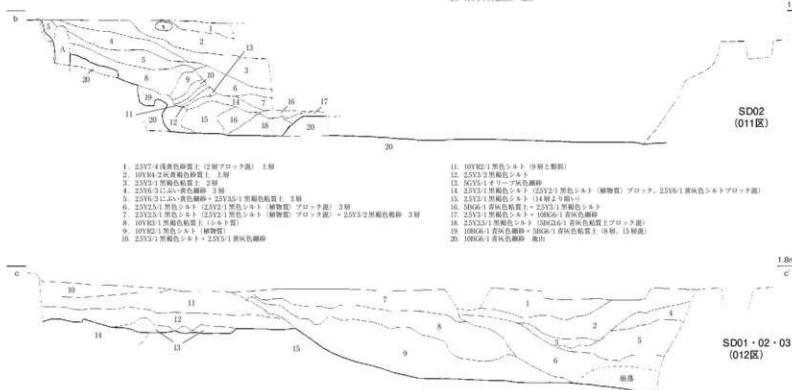
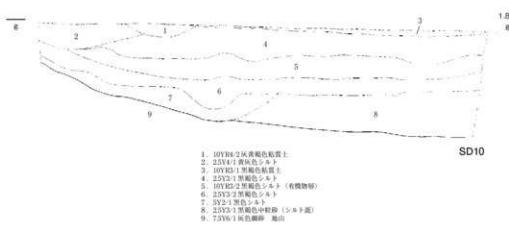
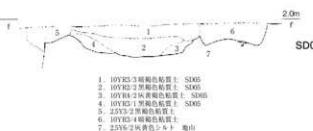
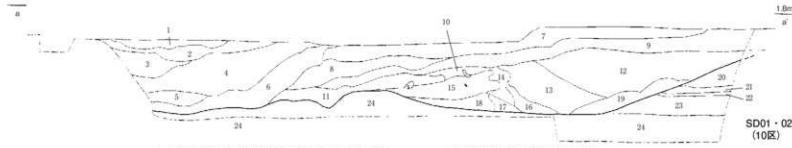
外寸	高さ	772 mm
	幅	436 mm
	厚	32 mm
内寸	高さ	750 mm
	幅	436 mm
	厚	64 mm
厚	側板	11 mm

33. SK31 木棺(実測No.S259)

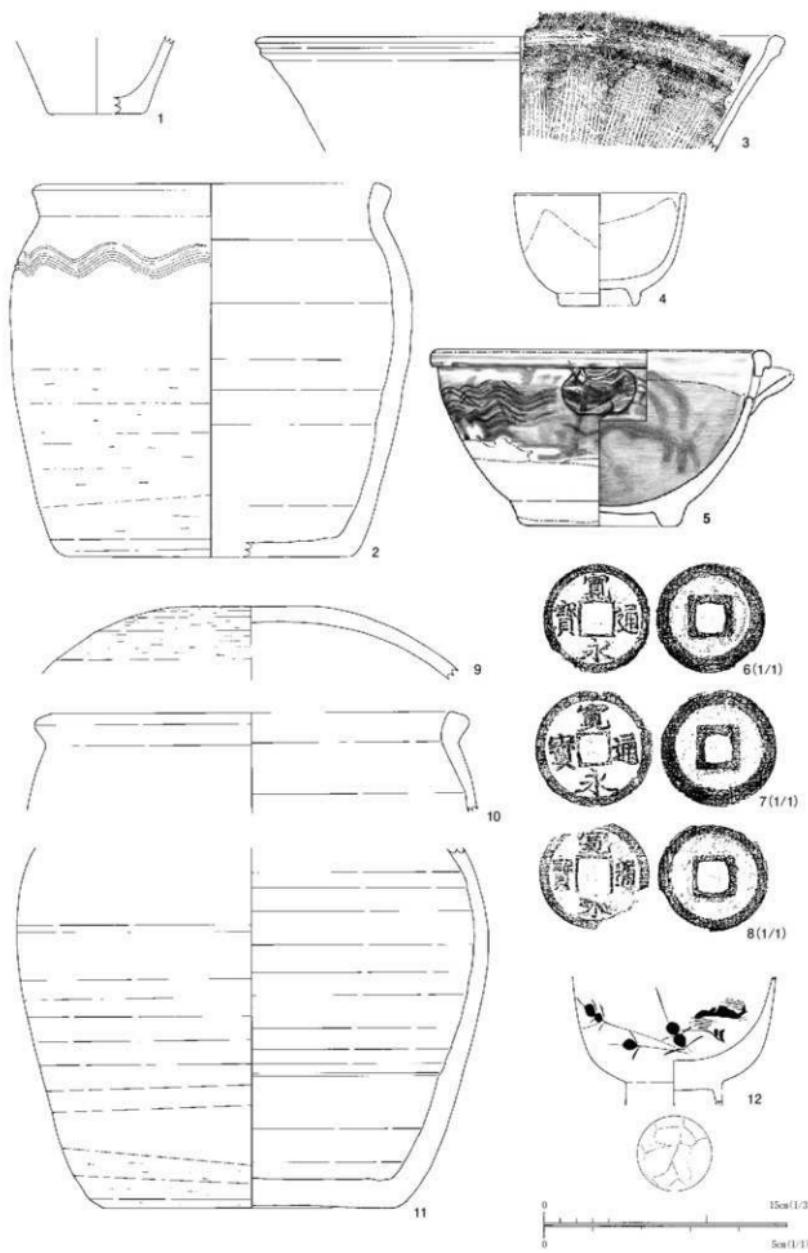
外寸	高さ	770 mm
	幅	464 mm
	厚	35 mm
内寸	高さ	730 mm
	幅	412 mm
	厚	65 mm
厚	側板	10 mm
	底板	12 mm

※天井板無し

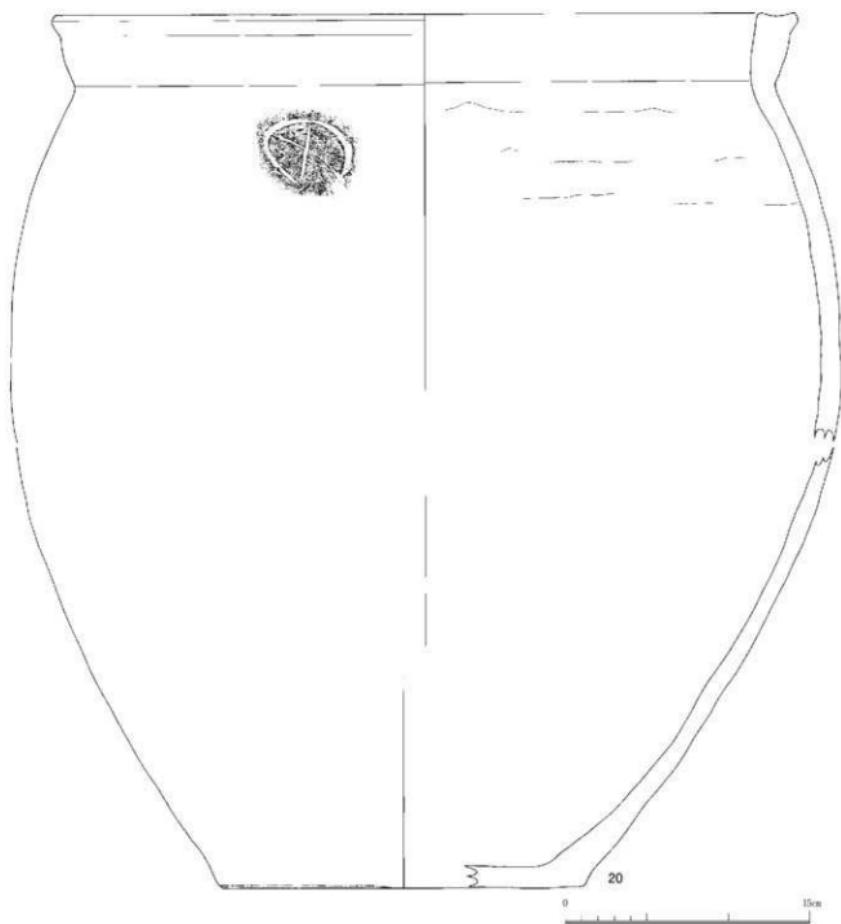
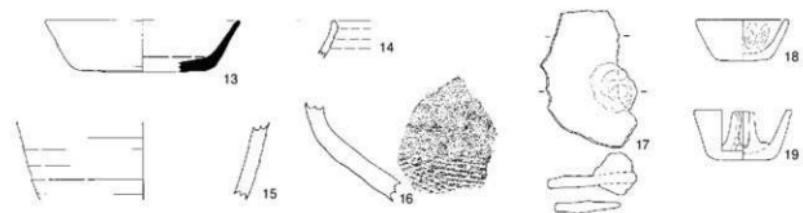
第34図 SK31 棺材[S=1/8]



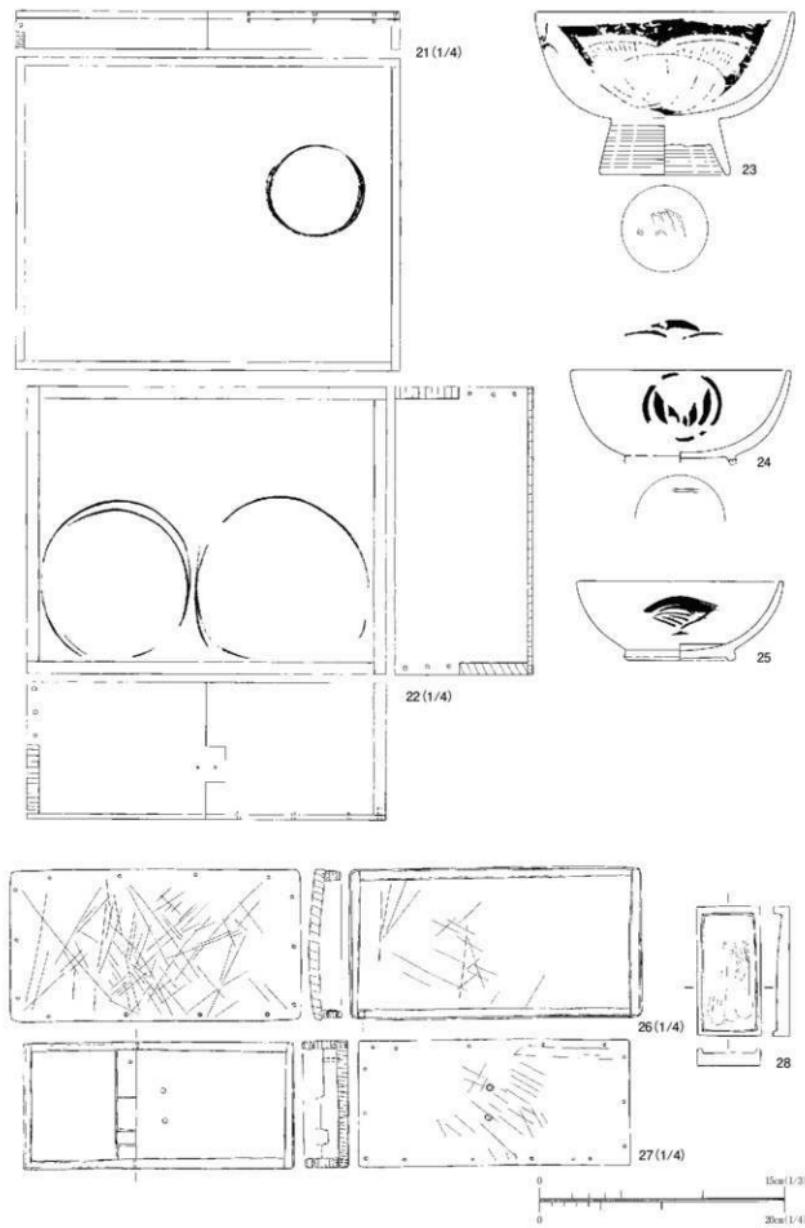
第35図 SD01・02、03、05、10、20 [S=1/40]



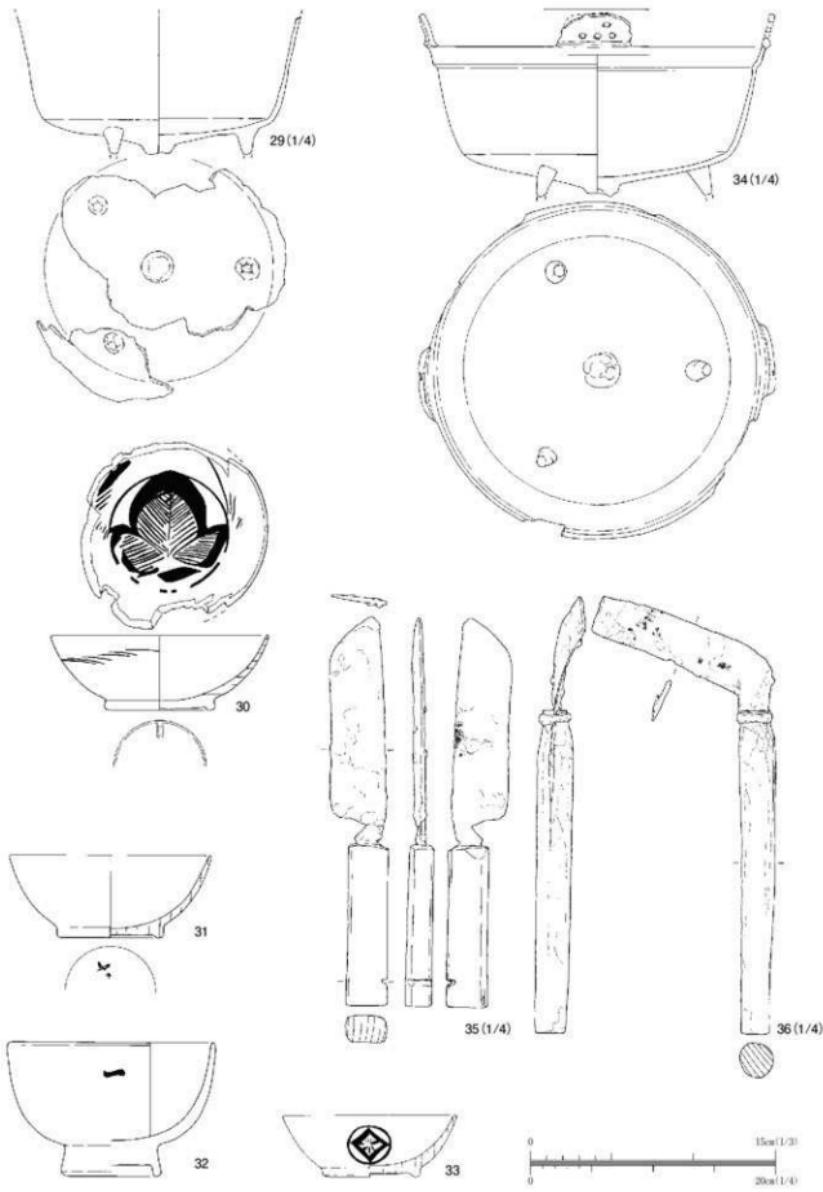
第36図 P02 (1)、SK07 (2)、19 (3~8)、21 (9~11)、18 (12) 出土遺物 (S=1/1・3)



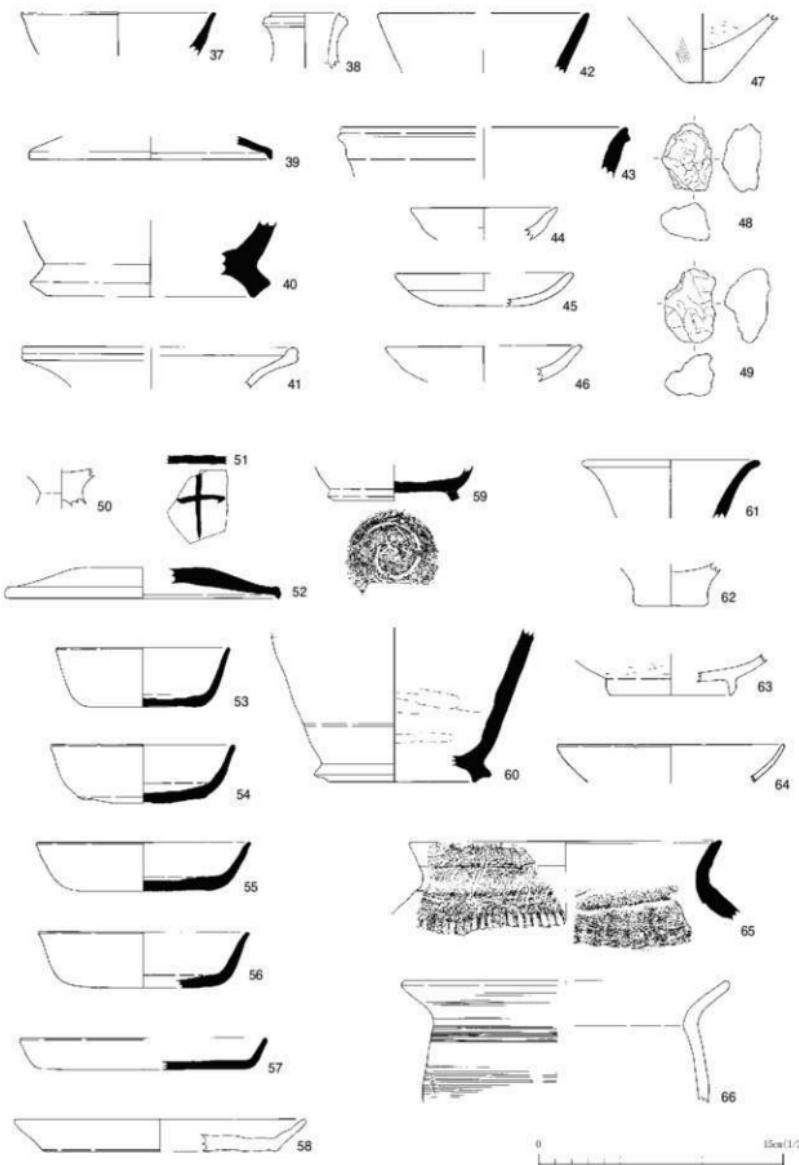
第37図 SK02 (13~16)、11 (17)、14 (18、19)、17 (20)出土遺物 [S=1/3]



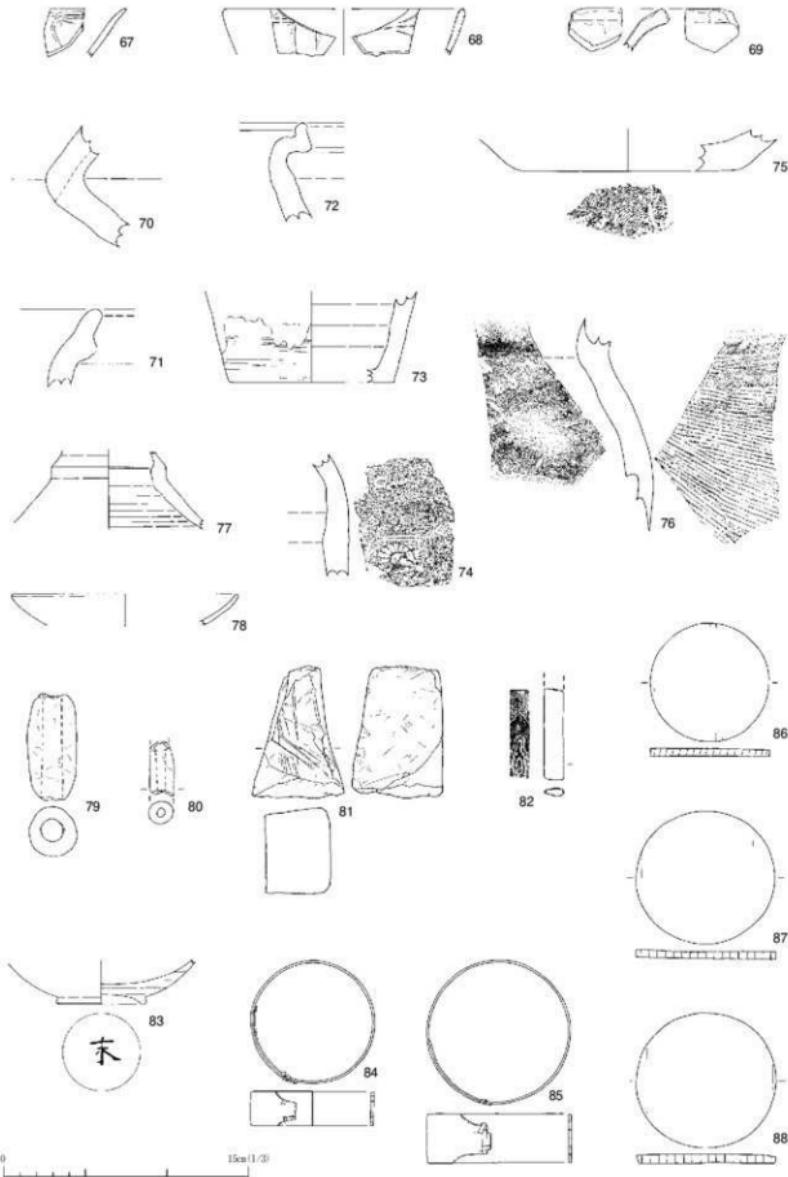
第38図 SK27出土遺物 [S=1/3・4]



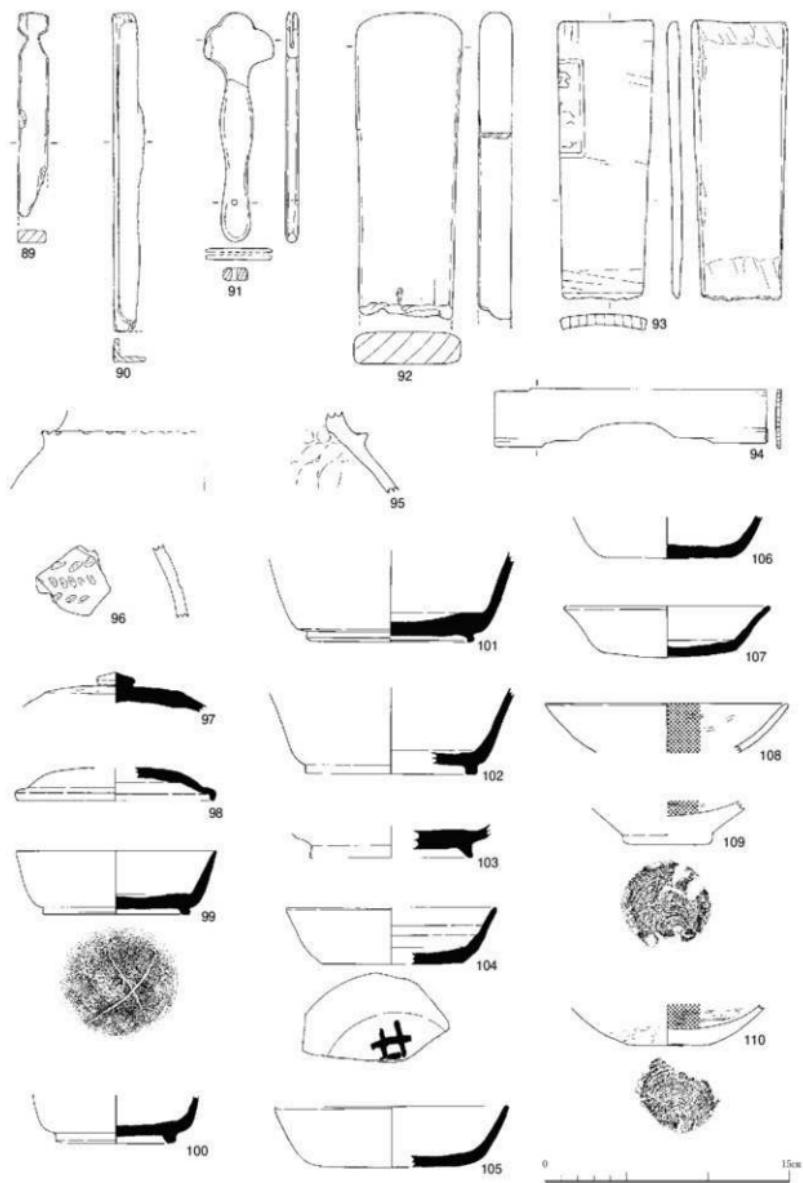
第39図 SK28 (29、30)、32 (31～36) 出土遺物 [S=1/3・4]



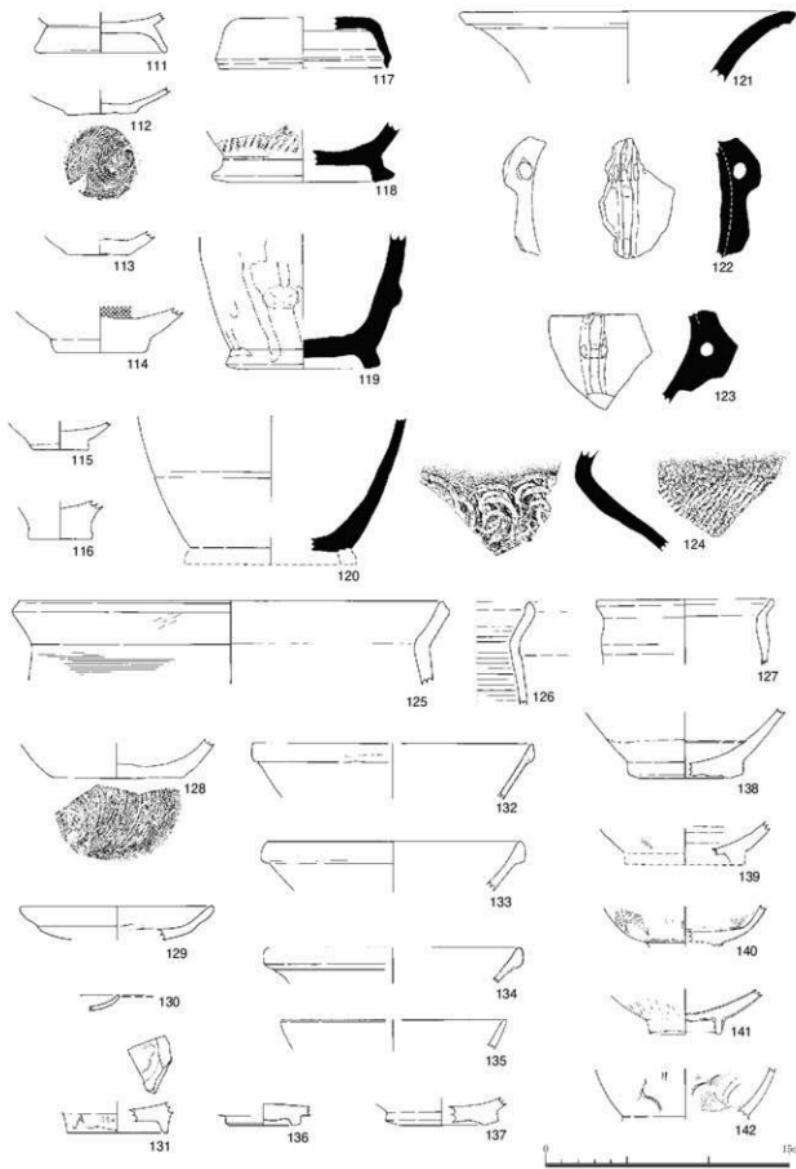
第40図 SX01(37、38)、O3(39~41)、SD01(50~66)出土遺物[S=1/3]



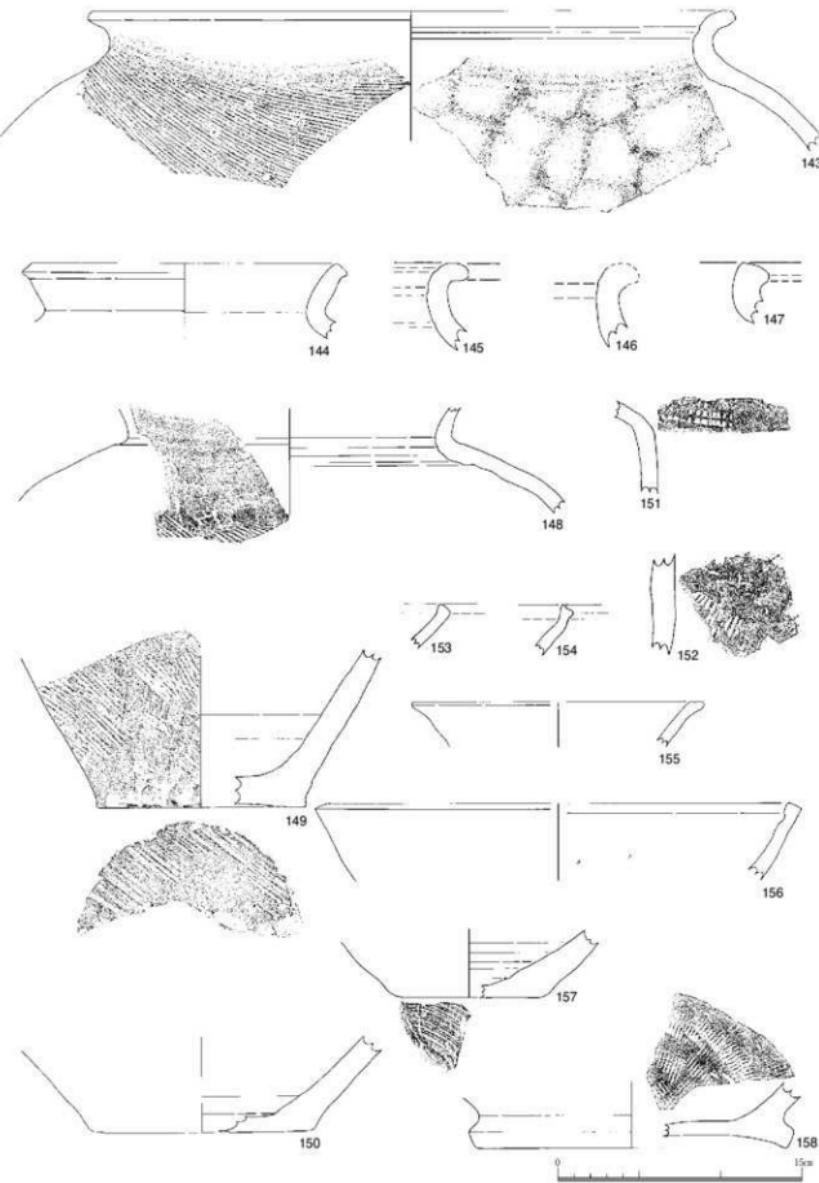
第41図 SD01出土遺物 [S=1/3]



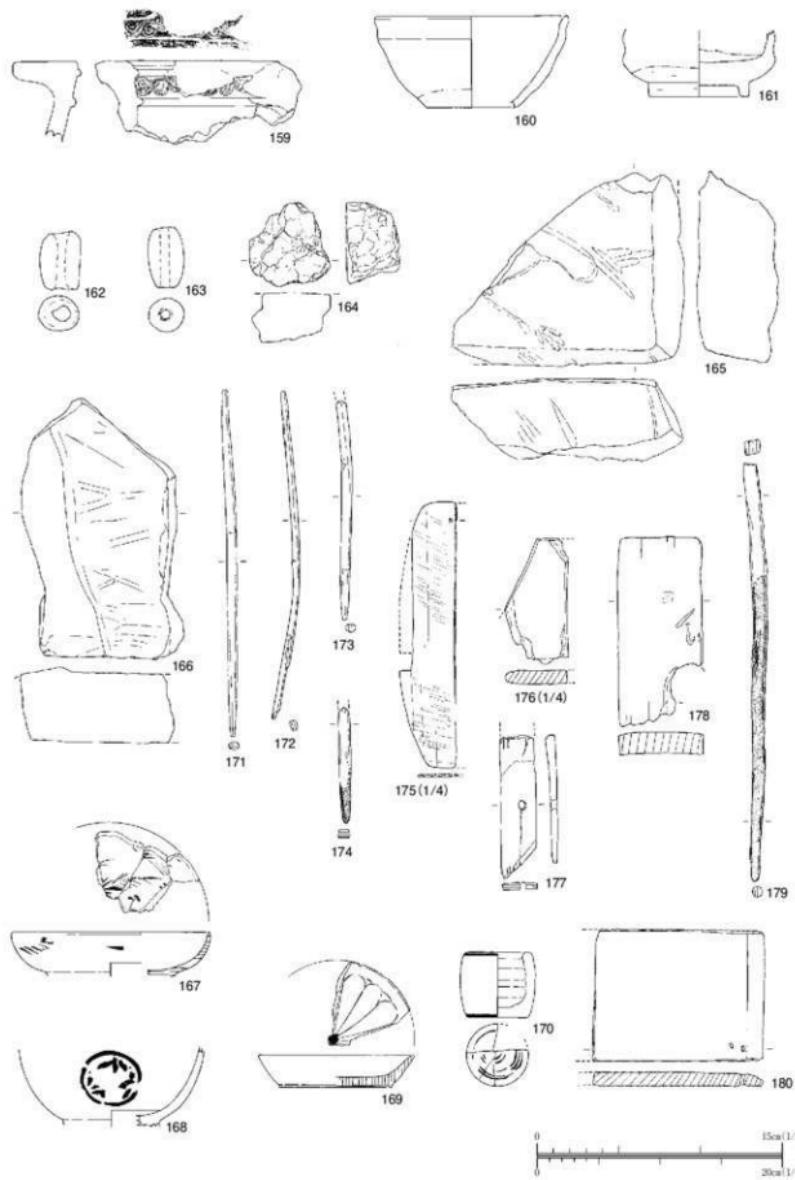
第42図 SD01(89~94)、SD01・02(95~110)出土遺物[S=1/3]



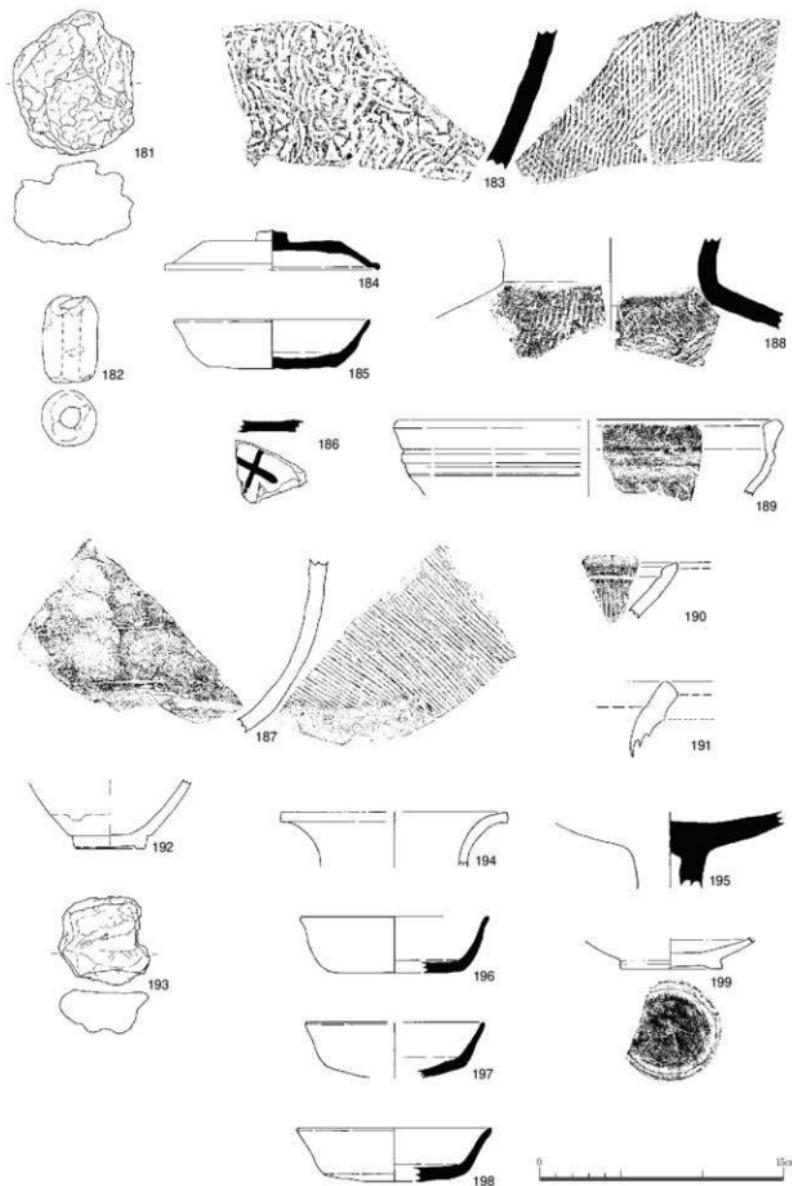
第43図 SD01・02出土遺物(1) [S=1/3]



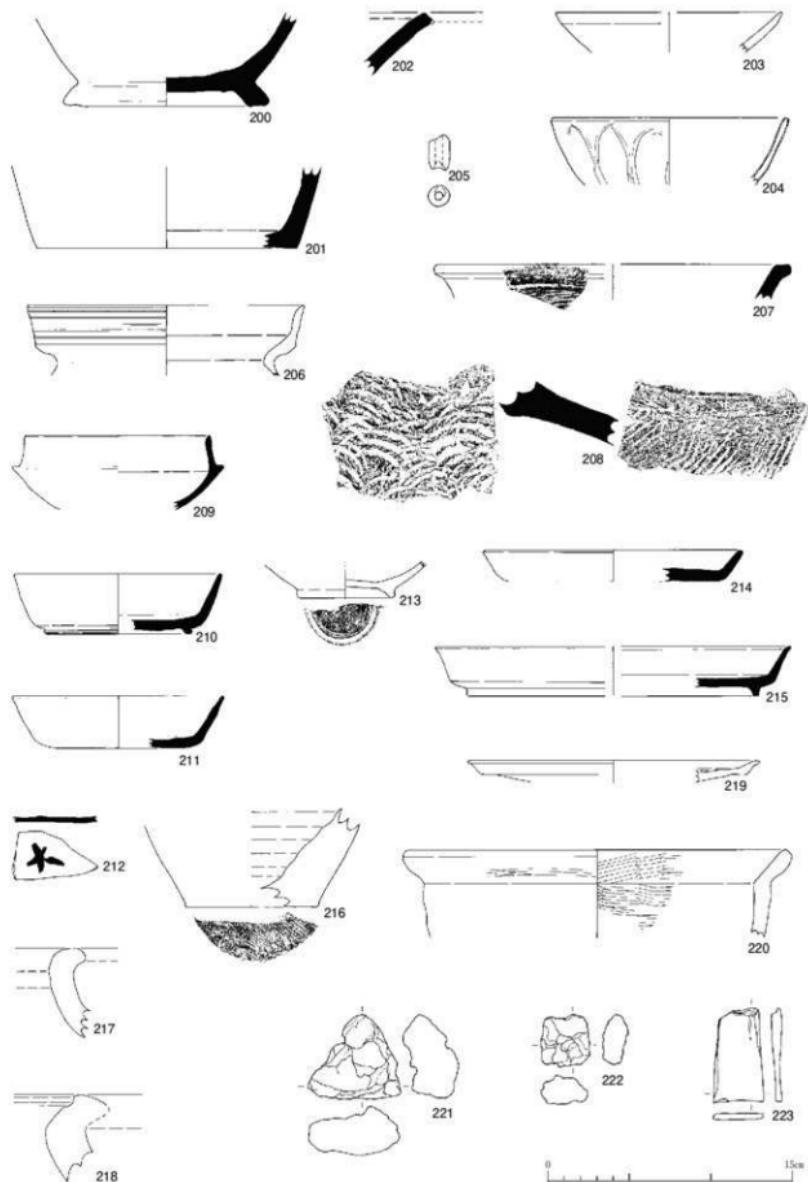
第44図 SD01・02出土遺物(2) [S=1/3]



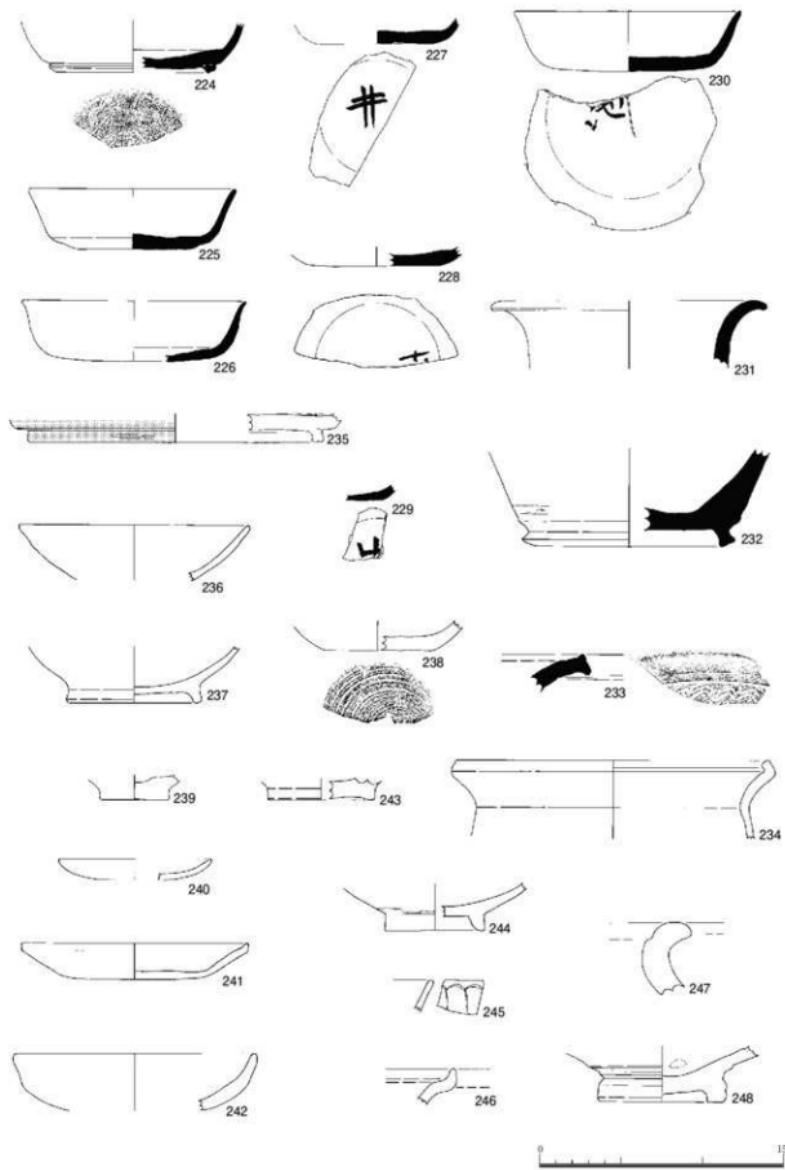
第45図 SD01・02出土遺物(3) [S=1/3・4]



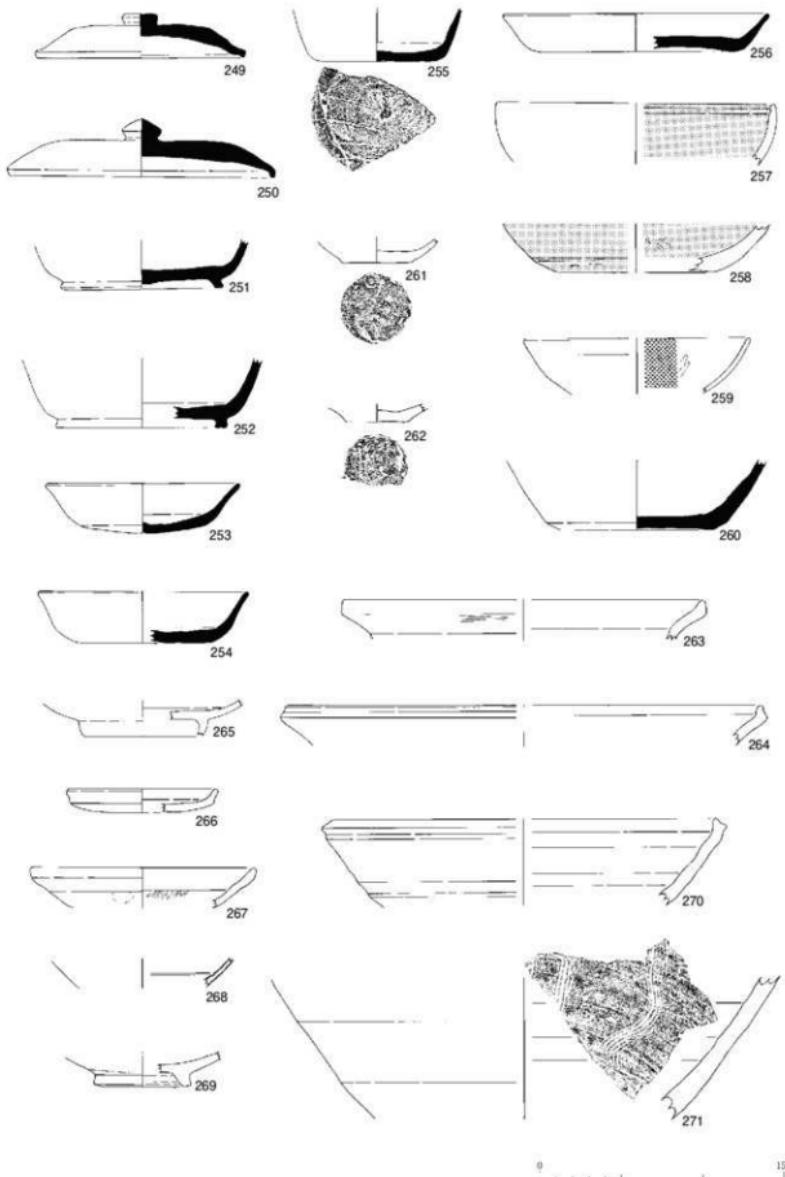
第46図 SD02出土遺物(1) [S=1/3]



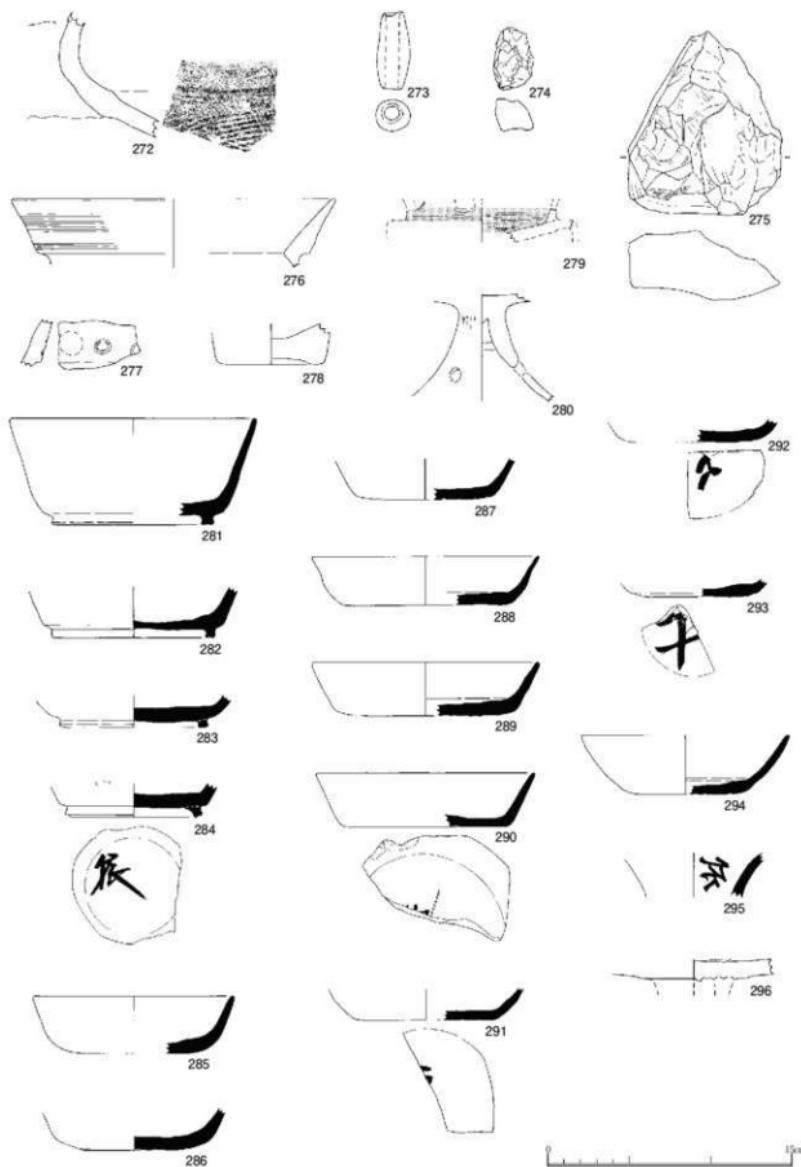
第47図 SD02出土遺物(2) [S=1/3]



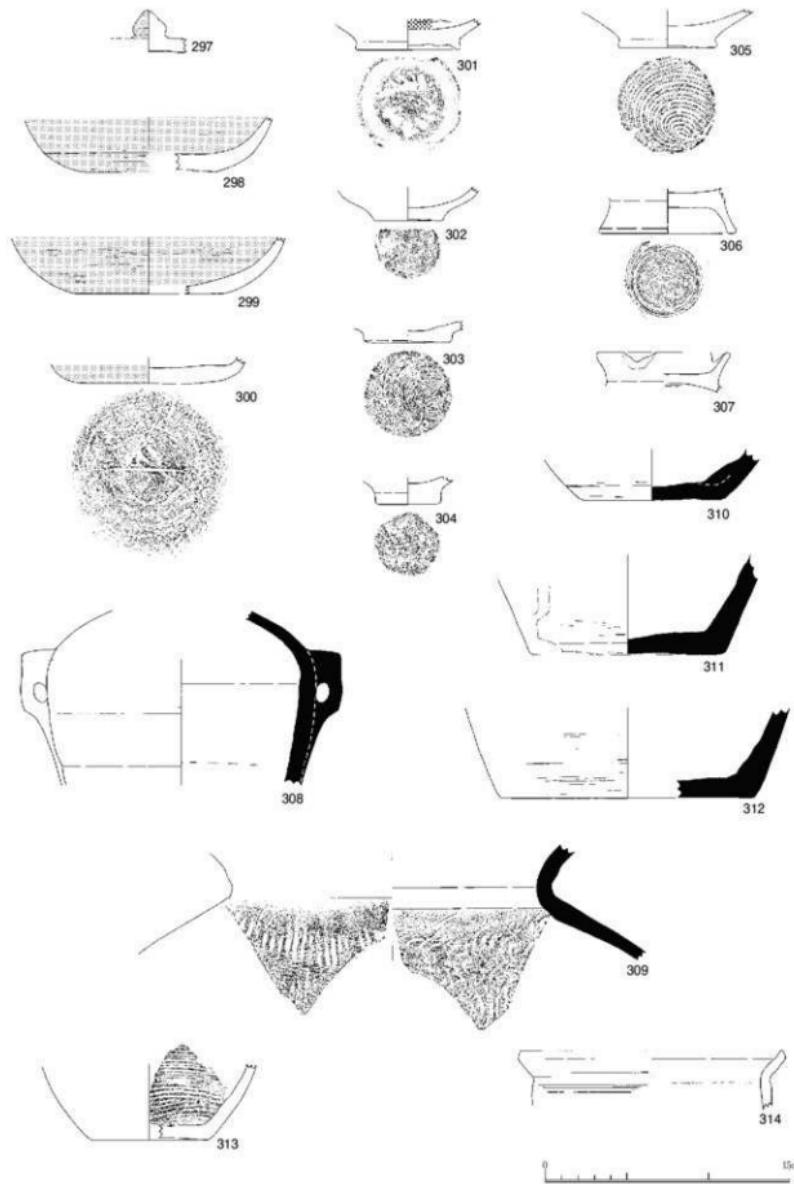
第48図 SD02出土遺物(3) [S=1/3]



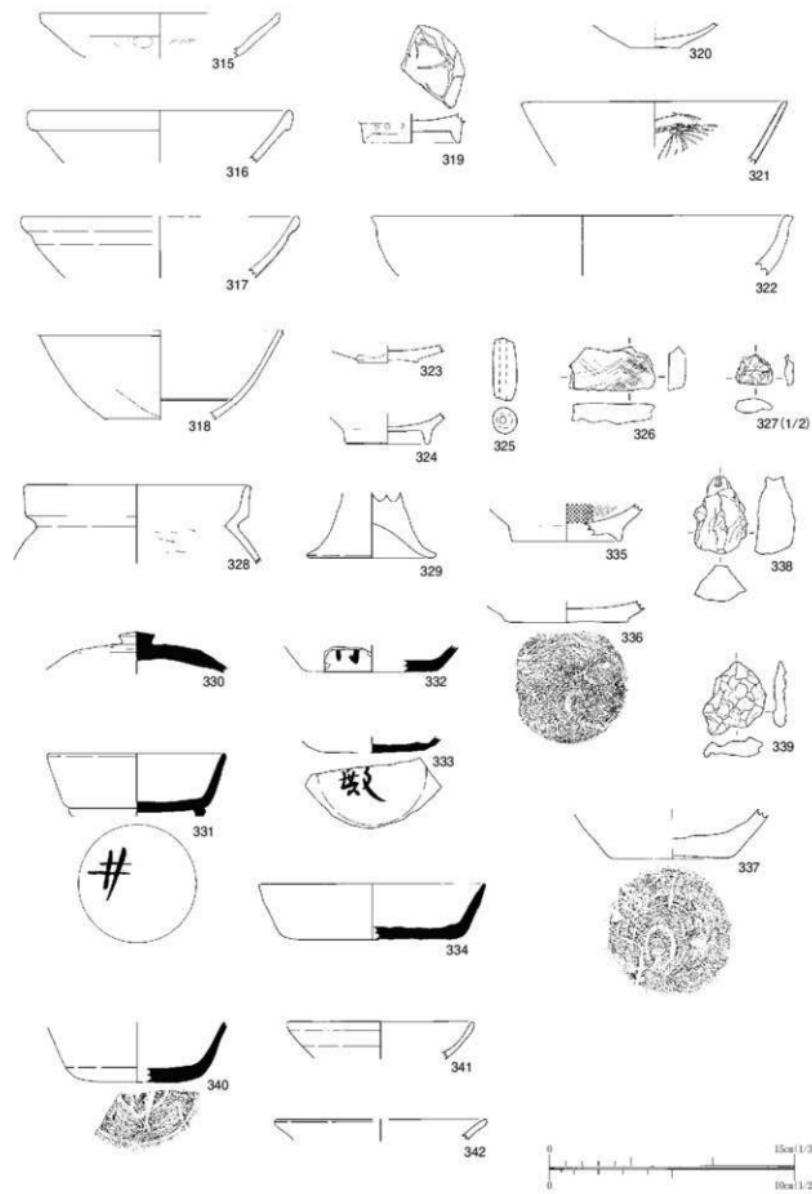
第49図 SD02出土遺物(4) [S=1/3]



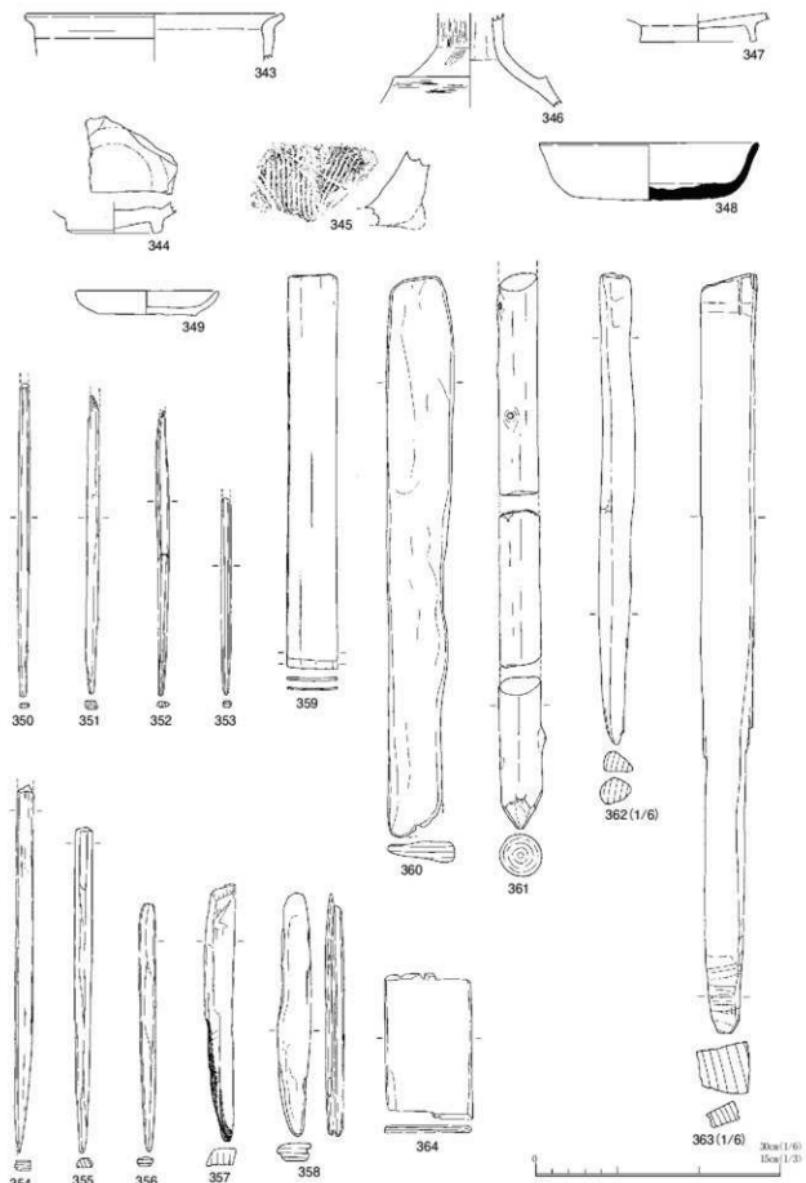
第50図 SD02 出土遺物(5) [S=1/3]



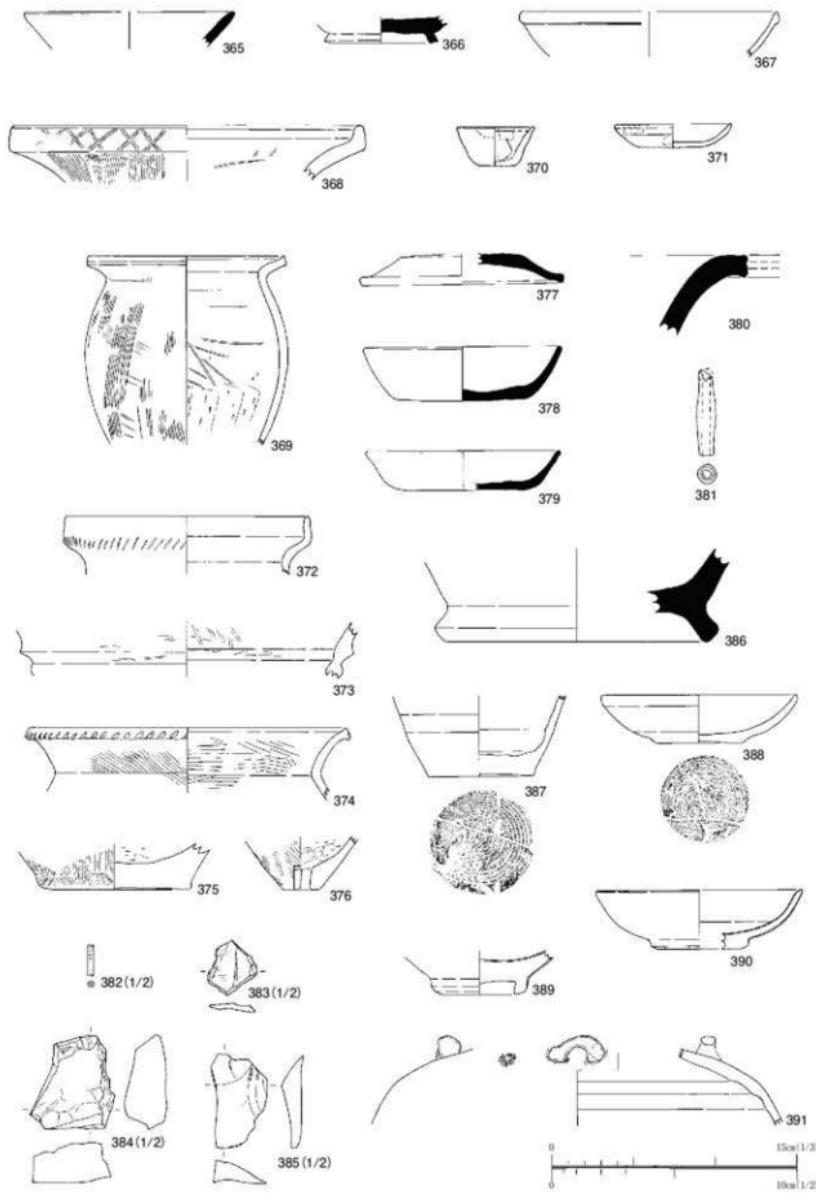
第51図 SD02出土遺物(6) [S=1/3]



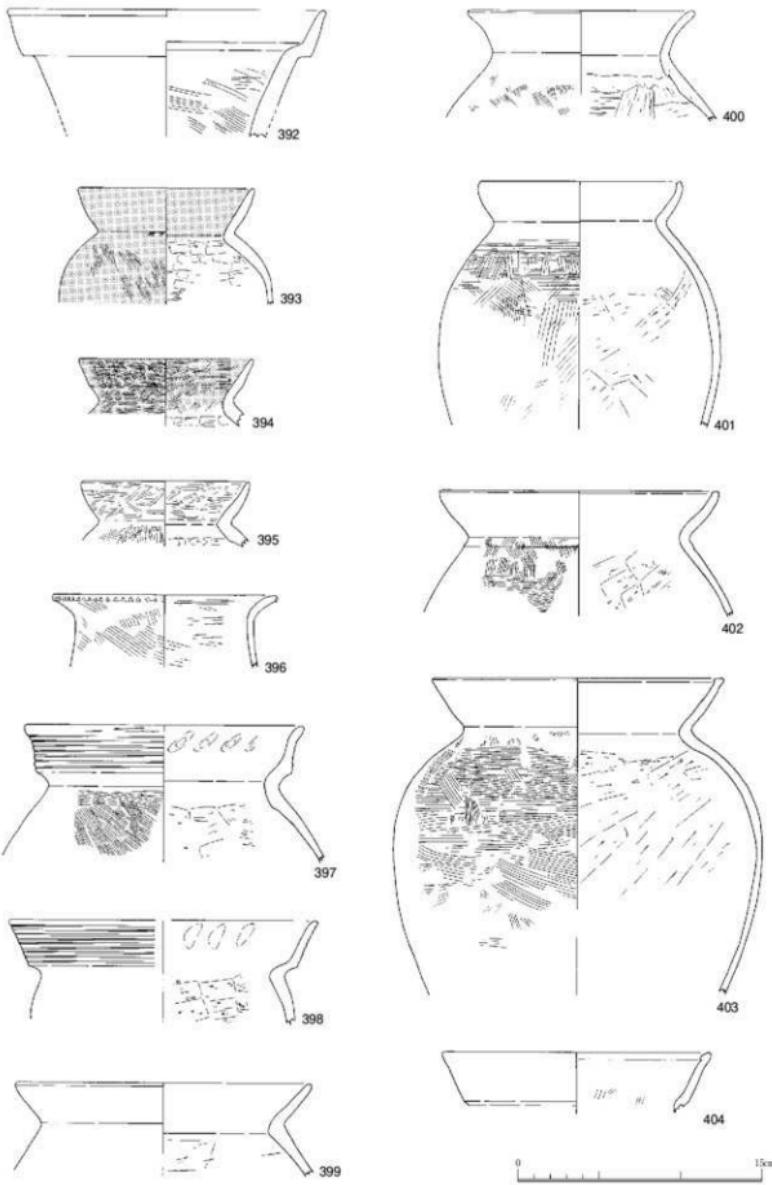
第52図 SD02出土遺物(7) [S=1/2・3]



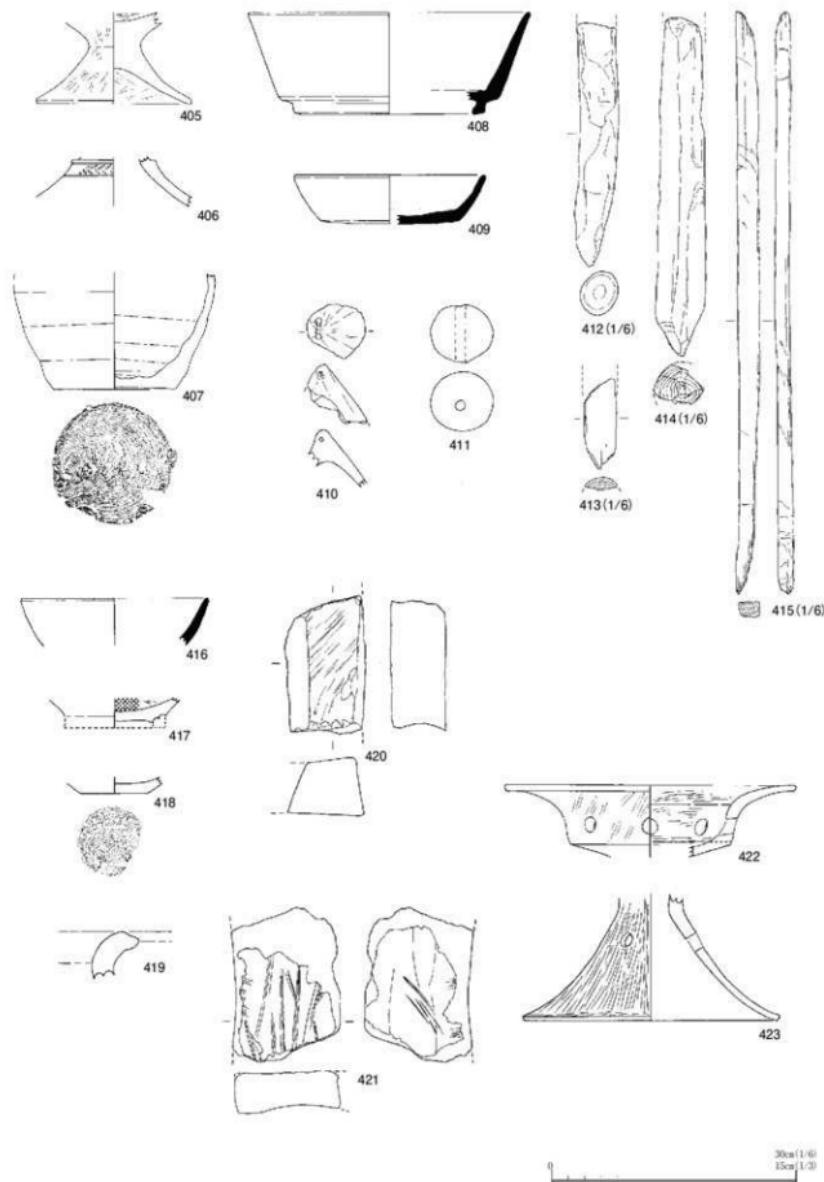
第53図 SD02出土遺物(8) [S=1/3・6]



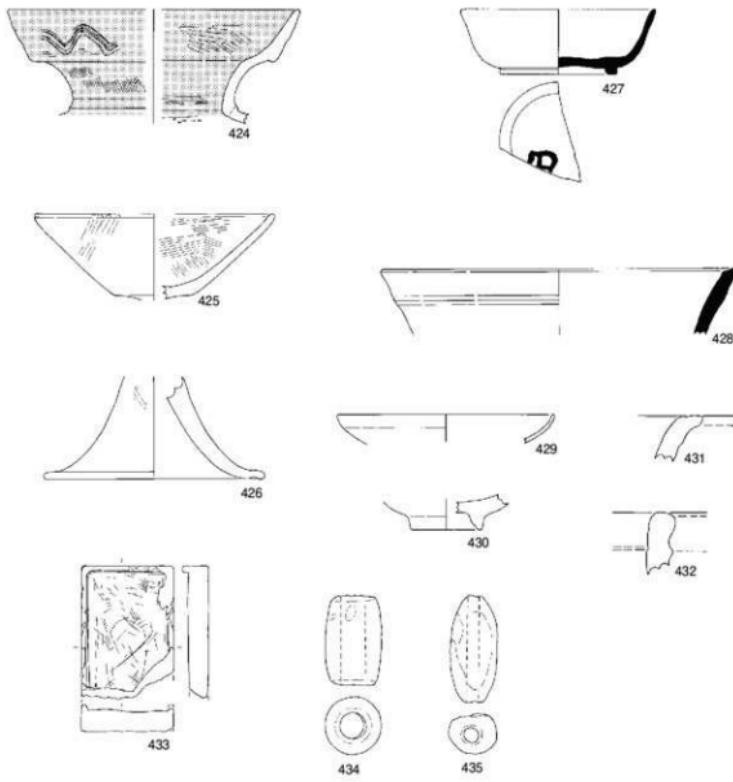
第54図 SD03(365～367)、05(368, 369)、06(370)、07(371)、20(372～385)、09(386～391)出土遺物[S-1/2-3]



第55図 SD10出土遺物[S=1/3]



第56図 SD10 (405~415)、O2 (416~420)、19・11・12 (421)、18 (422、423)出土遺物 (S=1/3・6)



0 15cm

第57図 遺構外出土遺物[S=1/3]

第9表 棺材計測表(1)

No.	造構	地区	種別	長	幅	厚	標位	木取	備考	(単位: mm)		測定No.
										左	右	
2	SK09	J10	棺路 板	190	25	3	芯板	東北側	Q2			
3	SK09	J10	棺路 板	207	126	3			Q1			
4	SK09	J10	棺路 板	38	26	5	4目目	裏と板の間	Q1			
5	SK09	J10	棺路 板	84	98	3			Q1			
6	SK09	J10	棺路 板	42	29	5	板目	板と裏の間	Q1			
7	SK09	J10	棺路 板	40	30	5	4目目	六と板の間	Q1			
8	SK09	J10	棺路 板	133	133	8	板目		Q1			
9	SK09	J10	棺路 板	167	120	3	4目目	裏板の下	Q3			
10	SK09	J10	棺路 板	187	106	3	板目	裏板の下	Q4			
12	SK13	I9	棺路 織物	187	29	26	正二	芯板	T363			
13	SK13	I9	棺路 織物	89	99	4	・	側板裏	F291			
14	SK13	I9	棺路 織物	46	19	8	4目目	側板裏花と茎葉	F292			

第10表 土器・陶磁器・土製品観察表(1)

No.	造構	地区	種別	詰移	口(底) (幅)	底 (深)	外周調整	内周調整	底面調査	外面部 (特色)		内面部 (特色)	縁 移 替 修 成	備考	測定No.
										左	右				
1	P02	19	土器部	壺	60		マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	T569
2	SK07	29	土器部	壺	202	177	23	テナキテナキテナ	ナデ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	T557
3	SK19	19	陶器	すり鉢	316		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	F496
4	SK19	19	陶器	碗	102	50	69	灰釉-白泥	灰釉-白泥	灰釉	灰釉	灰釉	灰釉	灰釉	F487
5	SK19	19	陶器	戸口鉢	208	50	19	白-透窓-底正	透明窓-白泥	白-透窓-白泥	白-透窓-白泥	白-透窓-白泥	白-透窓-白泥	白-透窓-白泥	F491
9	SK21	I10	土器部	壺			タズリ着付ナナ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T560
10	SK21	I10	土器部	壺	246		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T558
11	SK21	I10	土器部	壺	179		ナデ-ケズリ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T559
13	SK02	010	陶器	舞台杯	118	82	32	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T438
14	SK02	010	白磁	碗			灰釉	灰釉	灰釉	灰釉	灰釉	灰釉	灰釉	灰釉	T441
15	SK02	010	陶器	瓶			ナデ-鉢輪	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T440
16	SK02	010	陶器	壺			タクナ	タクナ	タクナ	タクナ	タクナ	タクナ	タクナ	タクナ	T439
18	SK14	19	土器部	壺	54	32	16	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T554
19	SK14	19	土器部	壺	58	32	31	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T555
20	SK17	19	陶器	壺	455	225	鉢底	鉢底	鉢底	鉢底	鉢底	鉢底	鉢底	鉢底	F484
37	SK01	N/010	圓筒器	計	118		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T436
38	SK01	N/010	圓筒器	扇	42		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T437
39	SK03	M/N/0	圓筒器	蓋	148		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T443
40	SK03	M/N/0	圓筒器	扇-底	126		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T444
41	SK03	M/N/0	土器部	壺			マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	T445
42	SK05	19	圓筒器	計			ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T566
43	SK05	19	圓筒器	扇-瓶			ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T564
44	SK05	19	土器部	壺	86		ヨコナコナナ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T565
45	SK05	19	土器部	壺	106	24	ヨコナコナナ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T561
46	SK05	19	土器部	皿	118		ヨコナコナナ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T562
47	SK05	19	土器部	壺	22		ハケ垂ナ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T563
48	SK05	19	土器部	紺-底底	42	30	23			底灰	底灰	底灰	底灰	底灰	T568
49	SK05	19	土器部	紺-土塊	45	30	26			底灰	底灰	底灰	底灰	底灰	T567
50	SD01	O12	土器部	壺			ナデ	マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	F370
51	SD01	O11	圓筒器	底底			ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T403
52	SD01	O11	圓筒器	蓋	167	86	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	F379
53	SD01	O11	圓筒器	舞台杯	105	74	37	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	F381
54	SD01	O11	圓筒器	舞台杯	111	80	36	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	F383
55	SD01	O11	圓筒器	舞台杯	130	84	30	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T462
56	SD01	O10	圓筒器	舞台杯	128	90	34	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T460
57	SD01	O11	圓筒器	舞台杯	150	135	20	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	F382
58	SD01	O11	土器部	皿	178	146	20	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T453
59	SD01	O11	圓筒器	瓶	81		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	F380
60	SD01	O11	圓筒器	壺-瓶	100		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T466
61	SD01	O13	圓筒器	底底	105		ナデ	ナデ	ナデ	マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	F377
62	SD01	O12	土器部	壺	45		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	F368
63	SD01	O12	灰瓶	74			ケズリナ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T454
64	SD01	O12	綠瓶	碗	138		緑瓶	緑瓶	緑瓶	緑瓶	緑瓶	緑瓶	緑瓶	緑瓶	T458
65	SD01	O12	圓筒器	蓋	190		ナデ-タクナ	ナデ-当具	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T469
66	SD01	O10	圓筒器	壺			ナデ-カキメ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	F367
67	SD01	O11	青磁	碗			青磁碗	青磁碗	青磁碗	青磁碗	青磁碗	青磁碗	青磁碗	青磁碗	F378
68	SD01	O12	青磁	碗			青磁碗	青磁碗	青磁碗	青磁碗	青磁碗	青磁碗	青磁碗	青磁碗	F373
69	SD01	O12	青磁	盤			青磁盤	青磁盤	青磁盤	青磁盤	青磁盤	青磁盤	青磁盤	青磁盤	F376
70	SD01	O12	青磁	壺			青磁壺	青磁壺	青磁壺	青磁壺	青磁壺	青磁壺	青磁壺	青磁壺	T467
71	SD01	O12	青磁	瓶			青磁瓶	青磁瓶	青磁瓶	青磁瓶	青磁瓶	青磁瓶	青磁瓶	青磁瓶	T468
72	SD01	O11	加賀	壺	102		ケズリ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T466
73	SD01	O11	加賀	瓶			ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T456
74	SD01	O11	加賀	壺			ナデ-押印	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	T455
75	SD01	O12	青磁	計	136		ナデ	ナデ	ナデ	紺-先切り	紺-先切り	紺-先切り	紺-先切り	紺-先切り	T464
76	SD01	O12	青磁	壺			ナデ-タクナ	ナデ-当具	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	F374
77	SD01	O11	青磁	不明			青磁物	青磁物	青磁物	青磁物	青磁物	青磁物	青磁物	青磁物	T457
78	SD01	O10	津波丸	皿			青磁物	青磁物	青磁物	青磁物	青磁物	青磁物	青磁物	青磁物	F372

第9表 棺材計測表(2)

No.	造構	地区	種別	長	幅	厚	標位	木取	備考	(単位: mm)		測定No.
										左	右	
15	SK13	I9	棺路 板	193	175	3	ナデ	側板束	F290			
16	SK13	I9	棺路 板	189	139	9	ナデ	側板束	N2			
17	SK13	I9	棺路 板	307	123	3	ナデ	側板束	S260			
18	SK14	I9	棺路 板	230	155	10	ナデ	側板束	E108			
19	SK14	I9	棺路 板	137	151	8	ナデ	側板束	E109			
20	SK14	I9	棺路 板	100	39	5	ナデ	側板束	E106			
21	SK14	I9	棺路 板	129	155	10	ナデ	側板束	E103			
22	SK14	I9	棺路 板	137	151	8	ナデ	側板束	E104			
26	SK16	I9	棺路 板	146	165	9	ナデ	側板束	E106			
27	SK16	I9	棺路 板	139	139	4	ナデ	側板束	E105			
28	SK18	I9	棺路 板	80	71	4	ナデ	側板束	E107			
36	SK32	I10	棺路 板	178	43	11	ナデ	側板束	E106			

※()は最大値を示す。

第10表 土器・陶磁器・土製品観察表(2)

(単位:mm)

No	通横	地区	種類	器形	口(直) (幅)	底 (幅)	高 (厚)	外面型質	内部型質	底面底部	外面部色 (褐色色調)	内面部色 (褐色色調)	縦	横	高	底	底面	備考	実測%
79	SD01	011	土器品	土器	66	30	13			泥面	灰白	多	少	少	是	56.0g	P375		
80	SD01	011	土器品	土器	(31)	15	5			泥灰褐	灰	少	是	中	是	中厚5.70g	F371		
95	SD01-02	012	免生	土器				マツメ	マツメ・指圧痕	泥壇	青褐	少	是	底	是	底下厚	S333		
96	SD01-02	012	免生	不明				ナデ	ナデ	泥壇	灰褐	少	是	底	是	底下厚	S343		
97	SD01-02	012	免生	土器	24			タヌリ縁ナナメ	ナデ	灰白	灰	少	是	是	是	免側トレンチ	T473		
98	SD01-02	012	免生	土器	124			ナデ	ナデ	泥灰	灰	少	是	是	是	免下厚	S349		
99	SD01-02	012	免生	有台坪	123	90	39	ナデ	ナデ	ヘラ切リナメ	灰	少	是	是	是	シート剥離法ヘア	T545		
100	SD01-02	012	免生	有台坪	66			ナデ	ナデ	ヘラ切リナメ	泥灰	少	是	是	是	免側レシテ0.25cm	T471		
101	SD01-02	012	免生	有台坪	98			ナデ	ナデ	ヘラ切リナメ	灰	少	是	是	是	免側レシテ0.25cm	T470		
102	SD01-02	011	免生	有台坪	105			ナデ	ナデ	ヘラ切リナメ	灰	少	少	少	是	免側上	F409		
103	SD01-02	011	免生	有台坪	100			ナデ	ナデ	ヘラ切リナメ	泥灰	少	少	是	是	免側中	F401		
104	SD01-02	012	免生	無台坪	126	86	40	ナデ	ナデ	泥灰白	淡灰白	少			是	免側留置層	S345		
105	SD01-02	012	免生	無台坪	144	100	38	ナデ	ナデ	ヘラ起シナメ	灰	少	是	是	是	免下厚	S346		
106	SD01-02	012	免生	無台坪	80			ナデ	ナデ	ヘラ切リナメ	灰白	少	是	是	是	免下厚	S347		
107	SD01-02	011	免生	無台坪	125	84	31	ナデ	ナデ	ヘラ切リナメ	白灰	少	是	是	是	免側上	F400		
108	SD01-02	011	内底	縦				ナデ	ミガキ	泥灰	黑	少	是	是	是	免側中	F387		
109	SD01-02	011	内底	柱状突出部	55			ナデ	ミガキ	四輪軋切り	泥灰	少	是	是	是	免側留置層	S345		
110	SD01-02	010	内底	無台坪	48			ナデ	ミガキ	四輪軋切り	泥灰白	少	是	是	是	免側上	S389		
111	SD01-02	012	土器品	有台輪	80			ナデ	ナデ	四輪軋切り	泥灰	少	少	是	是	免側レシテ0.25cm	T476		
112	SD01-02	011	土器品	無台輪	45			ナデ	ナデ	四輪軋切り	泥灰	少	是	是	是	免側中	F385		
113	SD01-02	011	土器品	無台輪	40			ナデ	ナデ	四輪軋切りナメ	泥灰	少	是	是	是	免側中	T475		
114	SD01-02	011	内底	柱状突出部	56			ナデ	ミガキ	泥灰	黑	少	少	是	是	免側中	F384		
115	SD01-02	011	土器品	柱状突出部	36			ナデ	ナデ	泥灰	泥灰	少	是	是	是	免側中	F386		
116	SD01-02	011	土器品	柱状突出部	40			ナデ	ナデ	泥灰	灰褐	少	是	是	是	免側北n	F402		
117	SD01-02	012	泥灰	土器	103	80	31	ナデ	ナデ	泥灰	灰	少	是	是	是	免側レシテ0.25cm	T472		
118	SD01-02	012	泥灰	瓶-壺	112			タヌキ-ナデ	ナデ	泥灰	灰	少	是	是	是	免側留置層	S348		
119	SD01-02	011	泥灰	瓶-壺	95			ナデ	ナデ	泥灰	泥灰	少	是	是	是	免側南	F404		
120	SD01-02	012	泥灰	瓶-壺				ナデ	ナデ	泥灰	泥灰	少	是	是	是	免側留置層	S344		
121	SD01-02	010	泥灰	瓶-壺	200			ナデ	ナデ	泥灰	泥灰	少	是	是	是	免側留置層	F405		
122	SD01-02	010	泥灰	双耳瓶				ナデ	ナデ	泥灰	泥灰	少	是	是	是	免側留置層	F475		
123	SD01-02	012	泥灰	双耳瓶				ナデ	ナデ	泥灰	灰白	少	是	是	是	免側留置層	T474		
124	SD01-02	012	泥灰	瓶				ナデ-タヌキ	ナデ-タヌキ	泥灰	灰	少	是	是	是	免側留置層	F415		
125	SD01-02	012	土器品	壺	260			ナデ-タヌキ	ナデ	泥灰	泥灰	少	是	是	是	免側留置層	S330		
126	SD01-02	011	土器品	壺				ナデ-カキ	ナデ	泥灰	泥灰	少	是	是	是	免側中	F403		
127	SD01-02	012	土器品	壺	108			ナデ	ナデ	泥灰	泥灰	少	是	是	是	免側留置層	S331		
128	SD01-02	012	土器品	壺	90			ナデ	ナデ	四輪軋切り	泥灰	少	是	是	是	免側留置層	S335		
129	SD01-02	012	土器品	壺	115			ヨコナデ-ナデ	目ナデ	泥灰	泥灰	少	是	是	是	免側留置層	S332		
130	SD01-02	011	白器	皿				透明	透明	透明	透明	透明	透明	透明	是	是	是	F392	
131	SD01-02	0	白器	瓶	62			透明	透明	透明	灰白	少	是	是	是	是	F393		
132	SD01-02	011	白器	瓶				透明	透明	透明	灰白	少	是	是	是	是	F399		
133	SD01-02	011-12	白器	瓶	156			透明	透明	透明	灰白	少	是	是	是	是	F480		
134	SD01-02	011	白器	瓶				透明	透明	透明	灰白	少	是	是	是	是	F398		
135	SD01-02	012	白器	瓶				透明	透明	透明	灰白	少	是	是	是	是	S340		
136	SD01-02	012	白器	瓶	46			—	無輪	透明	白	少	是	是	是	是	S337		
137	SD01-02	011	白器	瓶				—	無輪	透明	白	少	是	是	是	是	F397		
138	SD01-02	012	白器	瓶	70			透明	透明	無輪	透明	底	是	是	是	是	S336		
139	SD01-02	012	白器	瓶				透明	透明	無輪	灰白	少	是	是	是	是	F395		
140	SD01-02	012	青器	瓶				青器輪	青器輪	透明	青白	少	是	是	是	是	F339		
141	SD01-02	011	青器	瓶				青器輪	青器輪	透明	青白	少	是	是	是	是	F391		
142	SD01-02	012	白器	瓶				透明	透明	透明	泥灰	少	是	是	是	是	S338		
143	SD01-02	012	珠州	壺	388			ナデ-タヌキ	ナデ-目	泥灰	灰白	少	是	是	是	是	S327		
144	SD01-02	012	珠州	壺	195			ナデ	ナデ	泥灰	灰白	少	是	是	是	是	O12クイン	T483	
145	SD01-02	011	珠州	壺				ナデ	ナデ	泥灰	泥灰	少	是	是	是	是	F388		
146	SD01-02	011	珠州	壺				ナデ	ナデ	泥灰	灰	少	是	是	是	是	F389		
147	SD01-02	011	珠州	壺				ナデ	ナデ	泥灰	灰	少	是	是	是	是	F407		
148	SD01-02	012	珠州	壺				ナデ-タヌキ	ナデ	泥灰	灰	少	是	是	是	是	T484		
149	SD01-02	012	珠州	壺	130			タヌキ	ナデ	泥灰	泥灰	少	是	是	是	是	S329		
150	SD01-02	012	陶器	壺-瓶	140			ナデ	ナデ	泥灰	灰	少	是	是	是	是	T481		
151	SD01-02	010	麦器系	穀印				押印	押印	泥灰	灰	少	是	是	是	是	T482		
152	SD01-02	011	麦器系	穀印				ナデ-タヌキ	ナデ	泥灰	泥灰	少	是	是	是	是	F408		
153	SD01-02	010	麦器系	口片跡				ナデ	ナデ	泥灰	灰	少	是	是	是	是	F477		
154	SD01-02	010	麦器系	跡				ナデ	ナデ	泥灰	灰	少	是	是	是	是	F476		
155	SD01-02	011	麦器系	跡				ナデ	ナデ	泥灰	泥灰	少	是	是	是	是	F406		
156	SD01-02	012	麦器系	跡				ナデ-目	ナデ	泥灰	灰	少	是	是	是	是	F394		
157	SD01-02	012	麦器系	跡	90			ナデ	静止軋切り	泥灰	灰白	少	是	是	是	是	T477		
158	SD01-02	012	麦器系	目	190			ナデ	目	ナデ	泥灰	少	是	是	是	是	S334		
159	SD01-02	010	瓦器	火鉢				ミガキ	ナデ	泥灰	黑	少	是	是	是	是	F480		
160	SD01-02	010	瓦器	天日蒸桶	116	55	56	鉄輪	鉄輪	泥灰	黑	少	是	是	是	是	F482		
161	SD01-02	012	瓦器	穀印	62			鉄輪	鉄輪	泥灰	泥灰	少	是	是	是	是	T478		
162	SD01-02	012	瓦器	陶碗	35	24	9			陶碗	泥	是	是	是	是	是	F396		
163	SD01-02	012	土器品	土器	37	22	6			陶碗	灰	少	是	是	是	是	是	S342	
164	SD01-02	012	土器品	カニカマ	(51)	(25)	(26)			陶碗	泥	少	是	是	是	是	是	S341	
165	SD02	011	土器品	土器	53	34	12			陶碗	泥	少	是	是	是	是	是	F462	

申〔 〕は最大値を示す。

第10表 土器・陶磁器・土製品観察表(3)

(単位:mm)

No.	遺構	地区	種類	器種	口 (直 幅)	底 (幅 厚)	高 (厚)	外面面型	内面面型	底部断面	外側色調 (褐色面)	内側色調 (黒褐色)	縦	横	背	腹	備考	実測値	
183	SD02	O10	直江	壺				タキ	タキ		濃褐色	法灰陶	口 少	底 少	背 少	腹 少	不 2層中南O10+2層	F465	
184	SD02	O10	直江	壺	130	18	24	ナデ	ナデ	ヘラ切り・ヘラ起シ	灰	灰	少	多	少	多	2層北	F471	
185	SD02	O10	直江	壺	無台形	118	76	30	ナデ	ナデ	ヘラ切り・ヘラ起シ	灰	灰	少	多	少	多	2層北中	F454
186	SD02	O10	直江	壺					ナデ	ヘラ切り	底面	底面	少	少	少	少	2層北中西裏	F470	
187	SD02	O11	直江	壺				タキ・タケ	当真	底面	灰	少	少	少	少	上層	F467		
188	SD02	O11	直江	壺				ナデ・タキ	ナデ・タキ	底面	灰	少	多	少	多	上層	F468		
189	SD02	O10	直江	壺				ナデ	ナデ	赤灰陶	法灰陶	少	少	少	少	2層北	F469		
190	SD02	O10	直江	壺				ナデ	ナデ・御目	底面	底面	少	多	少	多	2層北中	F466		
191	SD02	O10	直江	壺				ナデ	ナデ	底面	底面	少	少	少	少	2層北中	F461		
192	SD02	O10	直江	陶瓶	白瓦形瓶	44			鉢輪	鉢輪	開始	黑褐	白褐	少	少	少	少	2層北中	F460
193	SD02	O10	土器品	粘土塊	54	54	37				法灰陶	法灰陶	少	少	少	少	2層中南	F463	
194	SD02	O10	土器品	壺				ナデ	ナデ	底面	褐灰陶	褐灰陶	多	少	少	少	2層B	F419	
195	SD02	O10	直江	壺				ナデ	ナデ	底面	油面	少	少	少	少	2層B中	F414		
196	SD02	O11	直江	壺	無台形	115	82	35	ナデ	ナデ	濃褐色	底面	少	少	少	少	2層B中	F410	
197	SD02	O11	直江	壺	無台形	115	82	35	ナデ	ナデ	ヘラ切り	濃褐色	少	少	少	少	2層中南	F411	
198	SD02	O10	直江	壺	無台形	118	86	33	ナデ	ナデ	ヘラ切り・ヘラ起シ	灰	灰	少	少	少	少	2層B中	F412
199	SD02	O10	直江	壺	緑	63		綠輪	綠輪	緑輪	灰	灰	少	少	少	少	2層B中	F479	
200	SD02	O10	直江	壺	灰	126		ナデ	ナデ	ナデ	灰	油面	少	少	少	少	2層B中	F416	
201	SD02	N11	直江	壺	160			ナデ	ナデ	底面	灰	灰	少	多	少	多	2層B中	F432	
202	SD02	O10	直江	壺				ナデ	ナデ	底面	灰	少	少	少	少	2層B中	F413		
203	SD02	O10	白堀	壺				透明白	透明白	透明白	透明白	透明白	少	少	少	少	2層A中南	F417	
204	SD02	O10	青磁	壺	143			青磁輪	青磁輪	青磁輪	青磁灰	白灰	少	少	少	少	2層B中	F478	
205	SD02	O11	土器品	土錠	22	14	13.0				法灰陶	法灰陶	少	少	少	少	2層中北G	F418	
206	SD02	O11	生糞	壺	169			マツフ	マツフ	底面	褐灰陶	褐灰陶	少	少	少	少	2層B中南側	F420	
207	SD02	O10	直江	壺				ナデ・カヌカ	ナデ	底面	灰	灰	少	少	少	少	2層中南	F428	
208	SD02	O11	直江	壺				ナデ・タキ	タキ	底面	灰	灰	少	少	少	少	2層B中南	F422	
209	SD02	O11	直江	壺	片	112		ナデ	ナデ	底面	灰	灰	少	少	少	少	2層B中南	F430	
210	SD02	O11	直江	壺	有台形	126	91	37	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	褐灰	褐灰	少	少	少	少	2層B中花	T525
211	SD02	O11	直江	壺	無台形	128	100	32	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰	灰	少	少	少	少	2層B中花	F426
212	SD02	O11	直江	壺	有台形			ナデ	ナデ	ヘラ切り	灰	灰	少	少	少	少	2層B中南裏書	F424	
213	SD02	O10	土錠	有台輪	60			ナデ	ナデ	四輪切	法灰陶	法灰陶	少	少	少	少	2層中南	F421	
214	SD02	O11	直江	壺	無台輪	158	40	19	ナデ	ナデ	ヘラ切り	灰	灰	少	少	少	少	2層B北	F425
215	SD02	O10	直江	壺	有台輪			ナデ	ナデ	ヘラ切り	灰	灰	少	少	少	少	2層中南	F429	
216	SD02	O11	直江	壺	82			ナデ	ナデ	静止系切り	油面	油面	少	少	少	少	2層B花	F423	
217	SD02	O10	直江	壺				ナデ	ナデ	底面	灰	灰	少	少	少	少	2層中南	F427	
218	SD02	O12	直江	壺				ナデ	ナデ	底面	灰	灰	少	少	少	少	中下層	S379	
219	SD02	O11	生糞	試驗台	180			マツフ	マツフ	底面	法灰	法灰	少	少	少	少	3層中	T490	
220	SD02	O11	土器品	壺	232			ハケ	ハケ	ハケ	法灰陶	法灰陶	多	少	少	少	3層中	T493	
221	SD02	O11	土器品	粘土塊	52	52	33.0				法灰陶	法灰陶	少	少	少	少	3層中北2.25g	T505	
222	SD02	O10	直江	壺				ナデ	ナデ	ヘラ切り	灰	灰	少	少	少	少	2層中南	F429	
223	SD02	O11	直江	壺				ナデ	ナデ	底面	灰	灰	少	少	少	少	2層中花	F423	
224	SD02	O10	直江	壺				ナデ	ナデ	ヘラ切り	灰	灰	少	少	少	少	2層中南	T498	
225	SD02	O11	直江	壺	94			ナデ	ナデ	ヘラ切り	灰	灰	少	少	少	少	2層中	T498	
226	SD02	O10	直江	壺	126	72	37	ナデ	ナデ	ヘラ切りナデ	法灰	法灰	少	少	少	少	2層中	T499	
227	SD02	O10	直江	壺	136	96	37	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰	白灰	少	少	少	少	2層中	T497	
228	SD02	O11	直江	壺	72			ナデ	ナデ	ヘラ切りナデ	灰	灰	少	少	少	少	2層中底部裏書	T512	
229	SD02	O11	直江	壺	76			ナデ	ナデ	ヘラ切りナデ	法灰	法灰	少	少	少	少	3層中裏書	T501	
230	SD02	O10	直江	壺	138	100	37	ナデ	ナデ	ヘラ切りナデ	白灰	白灰	少	少	少	少	2層中底部裏書	T552	
231	SD02	O10	直江	壺	156			ナデ	ナデ	底面	灰	灰	少	少	少	少	3層中	T504	
232	SD02	O10	直江	壺	114			ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰	灰	少	少	少	少	3層中	F502	
233	SD02	O10	直江	壺				ナデ	ナデ	底面	灰	白灰	少	少	少	少	3層中	T503	
234	SD02	O11	直江	壺	192			ナデ	ナデ	底面	法灰	法灰	少	少	少	少	3層中南	T491	
235	SD02	O11	直江	壺	180			ミカキ	ミカキ	ナデ	法灰	法灰	少	少	少	少	3層中	T495	
236	SD02	O11	直江	壺	140			ナデ	ナデ	底面	法灰陶	法灰陶	少	少	少	少	3層中	T487	
237	SD02	O10	直江	壺	78			ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	法灰	法灰	少	少	少	少	3層中南	T496	
238	SD02	O11	直江	壺	66			ナデ	ナデ	四輪切	法灰	法灰	少	少	少	少	3層中	T489	
239	SD02	O11	土器品	有台輪	42			ナデ	ナデ	マツフ	素面	素面	少	少	少	少	3層中腰	T494	
240	SD02	O10	土錠	目	92	46	13	ヨコナデ	ナデ	ナデ	法灰	法灰	少	少	少	少	2層北中	T496	
241	SD02	O11	土錠	目	138	80	22	ヨコナデ	ナデ	ナデ	反面	反面	少	少	少	少	3層中	T492	
242	SD02	O10	土錠	目	148			ナデ	ナデ	底面	法灰	法灰	少	少	少	少	3層中	T498	
243	SD02	O10	直江	壺	66			ナデ	ナデ	底面	白灰	白灰	少	少	少	少	2層北中	T500	
244	SD02	O10	直江	壺	62			透明白	透明白	底面	透明	反面	少	少	少	少	3層中南	T548	
245	SD02	O10	直江	壺				青磁	青磁	底面	法灰	白灰	少	少	少	少	3層中	T511	
246	SD02	O10	青磁	壺	71			青磁輪	青磁輪	青磁輪	白褐	白褐	少	少	少	少	2層北中	T510	
247	SD02	O11	直江	壺				ナデ	ナデ	底面	灰	灰	少	少	少	少	3層	S328	
248	SD02	O10	陶器	目	76			ナデ	ナデ	底面	灰	灰	少	少	少	少	3層北中	T509	
249	SD02	O11	直江	壺	130	21	27	ナデ	ナデ	底面	灰	灰	少	少	少	少	3層中	F451	
250	SD02	O11	直江	壺	162	24	35.0	ナデ	ナデ	ケズリ	油面	油面	少	少	少	少	3層中	F450	
251	SD02	O11	直江	壺	100			ナデ	ナデ	ヘラ切りナデ	油面	油面	少	少	少	少	3層中	F455	
252	SD02	O11	直江	壺	106			ナデ	ナデ	ヘラ切りナデ	油面	油面	少	少	少	少	3層中	F456	
253	SD02	O11	直江	壺	117	76	31	ナデ	ナデ	ヘラ切り・ヘラ起シ	油面	油面	少	少	少	少	3層中	F453	
254	SD02	O11	直江	壺	128	80	32	ナデ	ナデ	ヘラ切り	油面	油面	少	少	少	少	3層中	F452	
255	SD02	O11	直江	壺	76			ナデ	ナデ	ヘラ切り	油面	油面	少	少	少	少	3層中	F447	
256	SD02	O11	直江	壺	161	130	23	ナデ	ナデ	ヘラ切りナデ	油面	油面	少	少	少	少	3層中	F454	
257	SD02	O11	土錠	目				マツフ	マツフ	底面	法灰陶	法灰陶	少	少	少	少	3層中	F442	

第10表 土器・陶磁器・土製品観察表(4)

(単位:mm)

No.	遺構	地区	種類	器形	口 (直) 底 (横) (深)	外表面質	内面形状	底部型式	外表面色 (輪郭色)	内面色調 (輪郭色調)	縁	芯	脊	赤	黒	白	緑	備考	実測値			
258	SD02	O11	赤印	蓋板器		ナデ・ケズリ	ミガキ・ナデ	マツフ	浅縁	漆褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	F441		
259	SD02	O11	内裏	板		ヨコテナシナ	ミガキ	板	漆褐色	漆褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	F445		
260	SD02	N11	赤印器	春・底	110	ナデ	ナデ	へら起・ナデ	漆灰	漆灰	且多	3層壁付	F431									
261	SD02	N11	土師器	輪郭付	44	ナデ	ナデ	四輪孔切リ	浅縁	漆褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付	F435		
262	SD02	O11	土師器	輪台付	38	ナデ	ナデ	四輪孔切リ	灰褐色	灰褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付	F439		
263	SD02	N11	土師器	變		ナデ・カキメ	ナデ	板	浅縁	漆褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付	F434		
264	SD02	N11	土師器	縁		ナデ	ナデ	板	浅縁	漆褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付	F433		
265	SD02	O11	灰輪	縁					漆灰	漆灰	且多	3層壁付北半	S392									
266	SD02	O11	土師器	轟	90	70	15	ヨコナデ	指压	浅縁	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	F440		
267	SD02	N11	土師器	轟	136	ヨクナデ・指压	ヨコナデ・轟目ナデ	漆表面	漆表面	漆表面	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付	F436		
268	SD02	O11	白磁	縁					透明階	透明階	透明	3層壁付北半	F444									
269	SD02	O11	白磁	縁	58				透明階	透明階	無輪	透明	3層壁付北半	S393								
270	SD02	O11	後脚	鉢		ナデ	ナデ	板	漆灰	漆灰	且多	3層壁付	F449									
271	SD02	O11	後脚	すり鉢		ナデ	ナデ	脚目	漆灰	漆灰	且多	3層壁付北半	F446									
272	SD02	O11	後脚	壺		ナデ・タタキ	ナデ	板	漆灰	漆灰	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	F448		
273	SD02	O11	土製品	土謹	48	20	7			漆灰	且多	3層壁付北半	F443									
274	SD02	O11	生糞	變		マツフ	マツフ	板	漆灰	漆灰	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	S362		
277	SD02	O10	生糞	壺		マツフ	マツフ	板	漆灰	漆灰	且多	3層壁付北半	S364									
278	SD02	O10	生糞	壺・垂	64	マツフ	マツフ	マツフ	漆灰	漆灰	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	S361		
279	SD02	O10	生糞	鍋蓋部分		ミガキ	ミガキ	板	漆灰	漆灰	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	S352		
280	SD02	O10	生糞	高杯		ミガキ	ミガキ	板	漆灰	漆灰	多	多	多	多	多	多	多	多	3層壁付北半	S351		
281	SD02	O10	後脚器	有台杯	150	100	65	ナデ	ナデ	ヘラ切・後ナデ	灰白	灰白	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	T528	
282	SD02	O10	後脚器	有台杯	100	ナデ	ナデ	ヘラ切・後ナデ	灰	灰	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	T527		
283	SD02	O10	後脚器	有台杯	92	ナデ	ナデ	ヘラ切・後ナデ	淡黃褐色	淡黃褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	T526		
284	SD02	O10	後脚器	有台杯	76	ナデ	ナデ	ヘラ切・後ナデ	灰	灰	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付中高輪圓腹	T517		
285	SD02	O10	後脚器	無台杯	122	80	35	ナデ	ナデ	ヘラ切・後ナデ	灰白	灰白	且多	3層壁付北半	T522							
286	SD02	O10	後脚器	蓋台杯	64	ナデ	ナデ	ヘラ切・後ナデ	灰	灰	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	T519		
287	SD02	O10	後脚器	蓋台杯	66	ナデ	ナデ	ヘラ切・後ナデ	灰白	灰白	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	T520		
288	SD02	O10	後脚器	蓋台杯	137	100	30	ナデ	ナデ	ヘラ切・後ナデ	灰	灰	且多	3層壁付北半	T523							
289	SD02	O10	後脚器	蓋台杯	136	110	33	ナデ	ナデ	八重切・ヘラ切・ナデ	灰白	灰白	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	T521	
290	SD02	O10	後脚器	蓋台杯	134	100	32	ナデ	ナデ	ヘラ切・後ナデ	灰白	灰白	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	T514	
291	SD02	O10	後脚器	蓋台杯	68	ナデ	ナデ	ヘラ切・後ナデ	灰	漆褐色	且多	3層壁付中高輪圓腹	T513									
292	SD02	O10	後脚器	蓋台杯	68	ナデ	ナデ	ヘラ切・後ナデ	灰白	漆褐色	且多	3層壁付中高輪圓腹	T515									
293	SD02	O10	後脚器	蓋台杯	64	ナデ	ナデ	ヘラ切・後ナデ	灰白	漆褐色	且多	3層壁付中高輪圓腹	T516									
294	SD02	O10	後脚器	蓋台杯	126	70	37	ナデ	ナデ	ヘラ切・後ナデ	灰白	灰白	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	T524	
295	SD02	O11	後脚器	春・底		ナデ	ナデ	板	灰	灰	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付中高輪圓腹	T518		
296	SD02	O10	土師器	高杯		ナデ	ミガキ	板	漆褐色	漆褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	T543		
297	SD02	O10	赤印	蓋	21	ミツメ	ミツメ	板	漆褐色	漆褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付中高輪圓腹	S368		
298	SD02	O10	赤印	輪台	64	ナデ・ケズリ	ミガキ	カキメ	漆褐色	漆褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	S367		
299	SD02	O10	赤印	輪台	92	ミガキ	カキメ	カキメ	漆褐色	漆褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	S366		
300	SD02	O10	赤印	輪台	100	マツフ	ナデ	ヘラ切・ヘラシナ	赤漆褐色	赤漆褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付中高輪圓腹	S365		
301	SD02	O10	内裏	有輪	64	ナデ	ミガキ	板	漆褐色	漆褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	S369		
302	SD02	O10	土師器	輪台・皿	42	ナデ	ナデ	四輪孔切リ	漆褐色	漆褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	S356		
303	SD02	O10	土師器	輪台・皿	54	ナデ	マツフ	四輪孔切リ	漆褐色	漆褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	S358		
304	SD02	O10	土師器	春・底	40	ナデ	マツフ	四輪孔切リ	漆褐色	漆褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付中高輪圓腹	S359		
305	SD02	O10	土師器	輪台器	60	ナデ	ナデ	四輪孔切リ	漆褐色	漆褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付中高輪圓腹	S367		
306	SD02	O10	土師器	輪台器	84	ナデ	マツフ	四輪孔切リナデ	漆褐色	漆褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	S365		
307	SD02	O11	土師器	有輪	82	ナデ	ナデ	ナデ	漆表面	漆表面	少	少	少	少	少	少	少	少	E.III・E.IV・E.V	F483		
308	SD02	O10	後脚器	有輪		ナデ	ナデ	板	灰	灰	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	T544		
309	SD02	O10	後脚器	變		ナデ・タタキ	ナデ・高輪圓	板	漆表面	漆表面	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	T540		
310	SD02	O10	後脚器	春・底	88	ナデ・ケズリ	ナデ	ナデ	ヘラ切・後ナデ	原白	原白	且多	3層壁付北半	T538								
311	SD02	O10	後脚器	春・底	120	ナデ・ケズリ	ナデ	ナデ	黒	灰	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	T539		
312	SD02	O10	後脚器	春・底	156	ナデ・ケズリ	ナデ	ナデ	漆表面	漆表面	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	T541		
313	SD02	O10	土師器	變	72	マツフ	カキメ	カキメ	漆表面	漆表面	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	S363		
314	SD02	O10	土師器	春	160	ナデ・カキメ	ナデ	ナデ	漆表面	漆表面	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	F437		
315	SD02	O10	土師器	轟	146	ヨコナデ・轟压	ヨコナデ・脚目ナデ	ナデ	漆表面	漆表面	少	少	少	少	少	少	少	少	3層壁付北半	T547		
316	SD02	O10	白磁	轟	160				透明階	透明階	透明	E.III・E.IV・E.V	S483									
317	SD02	O10	白磁	轟	260				透明階	透明階	透明	S371										
318	SD02	O10	白磁	轟	38				透明階	透明階	透明	T560										
319	SD02	O10	白磁	轟	60				透明階	透明階	無輪	透明	T548									
320	SD02	O10	白磁	轟・皿	30				透明階	透明階	無輪	透明	S390									
321	SD02	O10	青磁	轟	164				青磁階	青磁階	漆表面	E.III・E.IV・E.V	F481									
322	SD02	O12	珠	鉢	260				ナデ	ナデ	板	漆表面	漆表面	少	少	少	少	少	少	少	T542	
323	SD02	O10	白磁	轟	38				透明階	透明階	無輪	透明	S373									
324	SD02	O10	白磁	轟	52				透明階	透明階	透明	S372										
325	SD02	O10	土製品	土謹	38	16	5		ナデ・ケズリ	ナデ	板	漆表面	漆表面	少	少	少	少	少	少	少	T537	
326	SD02	O12	生糞	變	130				ナデ・ケズリ	ナデ	板	漆表面	漆表面	少	少	少	少	少	少	少	T532	
327	SD02	O12	生糞	脚	76				ナデ	ナデ	板	漆表面	漆表面	少	少	少	少	少	少	少	T526	
328	SD02	O12	生糞	脚	22				ナデ・ケズリ	ナデ	板	漆表面	漆表面	少	少	少	少	少	少	少	T534	
329	SD02	O12	生糞	脚	22				ナデ・ケズリ	ナデ	板	漆表面	漆表面	少	少	少	少	少	少	少	T532	
330	SD02	O11	後脚器	蓋	22				ナデ・ケズリ	ナデ	板	漆表面	漆表面	少	少	少	少	少	少	少	T534	
331	SD02	O11	後脚器	蓋	110	82	39		ナデ	ナデ	板	漆表面	漆表面	少	少	少	少	少	少	少	E.III・E.IV・E.V	T534
332	SD02	O11	後脚器	蓋	84				ナデ	ナデ	板	漆表面	漆表面	少	少	少	少	少	少	少	T562	
333	SD02	O12	後脚器	蓋	78				ナデ	ナデ	板	漆表面	漆表面	少	少	少	少	少	少	少	T561	
334	SD02	O12	後脚器	蓋	138	110	34		ナデ	ナデ	板	漆表面	漆表面	少	少	少	少	少	少	少	T529	

第10表 土器・陶磁器・土製品観察表(5)

(単位:mm)

No.	遺構	地区	種類	器種	口 底 (直 幅)	高 (直 幅)	基 (厚)	外面面型	内面面型	底底部型	外面部色 (褐色斑)	内面部色 (褐色斑)	縦	横	背	腹	側	端	備考	実測値		
335	S002	O11	内窓	有柄碗	66			ナデ	ミガキ	ナデ	透明	黒	少	直	直	武上		T531				
336	S002	O12	土器類	合掌形壺	76			ナデ	ナデ	四輪み切り	透明	黒	少	直	直	直	直	直	直上斜	T530		
337	S002	O12	土器類	壺	76			ナデ	ナデ	四輪み切り	透明	黒	少	直	直	直	直	直	直上斜	T533		
340	S002	O11	圓底器	無台坪	84			ナデ	ナデ	八切リ縁ナデ	透明	黒白	少	直	直	直	直	直	直上斜	S374		
341	S002	O11	白陶	碗	114			透明輪	透明輪	透明	透明	白		直	直	直	直	直	直上斜	S375		
342	S002	O11	灰陶	不明				灰輪	灰輪	透明	透明	灰	少	直	直	直	直	直	直	直	S376	
343	S002	O11	土器類	壺	138			ナデ	ナデ	四輪み切り	透明	黒	少	直	直	直	直	直	直	直	S377	
344	S002	O11	白陶	碗・皿	60			無輪	透明輪	無輪	透明	黒白		直	直	直	直	直	直	直	S378	
345	S002	O11	越前	すり鉢				ナデ	割目	ナデ	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	S383	
346	S002	O11	白陶	基部-蓋合				ミガキ	ナデ	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	直	S381	
347	S002	O11	土器類	合掌形壺	36			マツツ	マツツ	ナデ	透明	透明		直	直	直	直	直	直	直	S382	
348	S002	O11	圓底器	無台坪	114	96	35	ナデ	ナデ	八切リ-ハラシナデ	灰	灰	少	直	直	直	直	直	直	直	S380	
365	S003	O11	圓底器	盤	114			ナデ	ナデ	透明	透明	灰	少	直	直	直	直	直	直	直	F474	
366	S003	O11	圓底器	有台坪	70			ナデ	ナデ	八切リ縁ナデ	透明	黒	少	直	直	直	直	直	直	直	F473	
367	S003	O11	白陶	盤				透明輪	透明輪	透明	透明	灰		直	直	直	直	直	直	直	F472	
368	S005		白陶	盤	222			ハケ	マツツ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	S401	
369	S005		白陶	盤	120			ナデ/ハケ	ナデ/カズリ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	S400	
370	S006	H/19	土器類	束腰	48	24	24	ナデ	ナデ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	S402	
371	S007		土器類	盘	72	40	14	ナデ/直底	マツツ	ナデ/指痕	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	S403	
372	S020	H/10	白陶	盤	148			ナデ	マツツ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	F507	
373	S020	H/10	白陶	盤	n			ミガキ	ミガキ	白輪	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	F499	
374	S020	H/10	白陶	盤	194			ナデ/ハケ	ナデ/ハケ	透明	透明	透明	多	直	直	直	直	直	直	直	F501	
375	S020	H/10	白陶	盤	93			ハケ	ミカズリ	ナデ	透明	透明	多	直	直	直	直	直	直	直	F498	
376	S020	H/10	白陶	有丸輪	23			ハケ/ナデ	ミカズリ	透明	透明	透明	多	直	直	直	直	直	直	直	F500	
377	S020	H/10	圓底器	盤	122			ナデ	ナデ	透明	透明	透明	多	直	直	直	直	直	直	直	F504	
378	S020	H/10	圓底器	無台坪	120	80	35	ナデ	ナデ	八切リ	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	F502	
379	S020	H/10	圓底器	無台坪	118	92	24	ナデ	ナデ	八切リ	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	F503	
380	S020	H/10	圓底器	盤				ナデ	ナデ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	F506	
381	S020	H/10	土器類	土鍋	52	12	6			四輪み切り	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	F500	
386	S009		圓底器	盤	162			ナデ	ナデ	ナデ	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	S408	
387	S009		土器類	盤	64			ナデ	ナデ	四輪み切り	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	S404	
388	S009		土器類	盤	118	54	30	ナデ	ナデ	四輪み切り	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	S405	
389	S009		青磁	碗	60			青磁輪	青磁輪	輪	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	S407	
390	S009		青磁	碗	126	60	36	青磁輪	青磁輪	輪	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	S406	
391	S009		圓底器	子母盤				輪	輪	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	S409	
392	S010	H/111	白陶	盤	194			ナデ	ナデ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	S410	
393	S010	H/111	白陶	盤	107			ナデ/ミガキ	ナデ/カズリ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	Q7	
394	S010	H/111	白陶	盤	106			ミガキ/ナデ	ミガキ/カズリ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	Q11	
395	S010	H/111	白陶	盤	102			ミガキ	ミガキ/カズリ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	S412	
396	S010	H/111	白陶	盤	135			ナデ/ハナキ/ナデ	ハナキ	透明	透明	透明	多	直	直	直	直	直	直	直	F510	
397	S010	H/111	白陶	盤	169			ナデ/ハケ	ナデ/指痕-カズリ	透明	透明	透明	多	直	直	直	直	直	直	直	Q14	
398	S010	H/111	白陶	盤				マツツ	ナデ/指痕-カズリ	透明	透明	透明	多	直	直	直	直	直	直	直	Q8	
399	S010	H/111	白陶	盤	182			ナデ	ナデ/カズリ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	S411	
400	S010	H/111	白陶	盤	137			ナデ/ハケ	ナデ/カズリ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	F509	
401	S010	H/111	白陶	盤	122			ナデ/ハケ	ナデ/カズリ	透明	透明	透明	多	直	直	直	直	直	直	直	F493	
402	S010	H/111	白陶	盤	169			ナデ/ハケ	ナデ/カズリ	透明	透明	透明	多	直	直	直	直	直	直	直	F494	
403	S010	H/111	白陶	盤	177			ナデ/ハケ	ナデ/カズリ	透明	透明	透明	多	直	直	直	直	直	直	直	Q10	
404	S010	H/111	白陶	盤	168			ナデ	ナデ/ハケ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	F497	
405	S010	H/111	白陶	盤	96			ミガキ	ケルキ-ナデ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	G497	
406	S010	H/111	白陶	盤				マツツ	マツツ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	G12	
407	S010	H/111	土器類	盤	76			ナデ	ナデ	四輪み切り	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	Q9	
408	S010	H/111	土器類	有台坪	172	118	63	ナデ	ナデ	ナデ	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	Q5	
409	S010	H/111	土器類	無台坪	116	85	30	ナデ	ナデ	八切リ	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	F496	
410	S010	H/111	土器類	盤	30	35	36				透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	F496	
411	S010	H/111	土器類	土鍋	35	38	6				透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	S384	
416	S002	O11	内窓	圓底器	盤	116			ナデ	ナデ	四輪み切り	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	S386
417	S002	O11	内窓	布白碗				マツツ	ミガキ	マツツ	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	E1115	
418	S002	O11	土器類	合掌形壺	42			マツツ	マツツ	四輪み切り	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	J442	
419	S002	O11	土器類	盤				ナデ	ナデ	四輪み切り	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	S385	
422	S018	H/113	白陶	盖-合掌	180			ミガキ	ミガキ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	T577	
423	S018	H/113	白陶	蓋-合掌	156			ミガキ	ミガキ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	T576	
424	造構内	H/11	白陶	盤	180			ハケ	ミガキ-ナデ/カズリ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	N5	
425	造構内	H/13	土器類	盤	148			ミガキ	ミガキ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	N4	
426	造構内	M11	白陶	盤	136			ミガキ	マツツ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	E1115	
427	造構内	O11	圓底器	有台坪	118	72	40	ナデ	ナデ	八切リ縁ナデ	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	J442	
428	造構内	圓底器	盤	216			ナデ	ナデ	四輪み切り	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	T447		
429	造構内	N10	白陶	盤	132			透明輪	透明輪	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	T450	
430	造構内	O10	陶器	盤	44			透明輪	透明輪	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	T451	
431	造構内	O12/13	陶器	盤				ナデ	ナデ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	T449	
432	造構内	O11	陶器	盤				ナデ	ナデ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	T448	
434	造構内	O11	陶器	陶器	55	35	16	ナデ	ナデ	透明	透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	T452	
435	造構内	O11	土器類	土鍋	66	25	9				透明	透明	少	直	直	直	直	直	直	直	T446	

第11表 漆製品観察表

(単位: mm)

No	通横	地区	目録	口 (幅)	高 (厚・径)	外周漆	内周漆	外底周漆	柄様	木目	備考	実測値
12	SK18	110	桜	156	78	100	黒漆・赤漆組	赤漆	黒漆	フナ属		F285
21	SK27	110	福彌(重)	315	256	31	黒漆	黒漆				M199
22	SK27	110	福彌(身)	295	237	113	黒漆	黒漆				M196
23	SK27	110	桜	156	78	100	黒漆・赤漆組	赤漆	黒漆			T257
24	SK27	110	桜	136			黒漆・赤漆組	黒漆・赤漆組	黒漆	フナ属		M192
25	SK27	110	桜	128	69	49	黒漆・赤漆組	赤漆	黒漆	フナ属	桜木	M191
26	SK27	110	葉彌(重)	241	125	26						M197
27	SK27	110	葉彌(身)	223	103	36						M196
30	SK28	110	桜	132	64	46	黒漆・赤漆組	黒漆・赤漆組		フナ属	桜木	E199
31	SK32	110	桜	124	66	50	赤漆	赤漆	黒漆・赤漆文字	フナ属	桜木	F284
32	SK32	110	桜	126	62	83	黒漆・赤漆文字	赤漆	黒漆	トネノキ	桜木	S257
33	SK32	110	桜	106	62	38	黒漆・赤漆組	赤漆		フナ属	桜木	S258
83	SD01	012	桜		55		赤漆	赤漆	黒漆	桜木	昌下分層	E127
167	SD01/02	011	桜	122			黒漆・赤漆組	黒漆・赤漆組	黒漆	桜木	上層下分層	S395
168	SD01/02	011	桜				黒漆・赤漆組	赤漆	黒漆		地山以上	M169
169	SD01/02	012	桜	96	38	20	黒漆	黒漆・赤漆	黒漆	桜木	底上	S396
349	SD02	012	田	86	61	15.0	黒漆	黒漆			下層D12ライン	ET26

第12表 木製品観察表

(単位: mm)

No	通横	地区	種別	高	幅	厚	種類	木形	備考	実測値
B4	SD01	013	舟形舟板	71	71	21	針	板目	厚2mm	M160
85	SD01	012	舟形舟板	69	89	30	針	板目	中下層厚2mm	M175
86	SD01	013	舟形舟	73	73	5	針	板目		M161
B7	SD01	012	舟形舟	86	86	5	針	板目	中下層	M173
88	SD01	012	舟形舟	86	86	6	針	板目	中下層	M174
89	SD01	012	舟板	(126)	18	8	針	板目	中下層	M180
90	SD01	012	葉彌(上)	195	(19)	14	針	板目	中下層	M179
91	SD01	012	ウツクイリ替	142	42	7	針	板目	中下層全面漆	M171
92	SD01	011	舟被状	(186)	66	20	針	板目	中下層	M178
93	SD01	011	被状	173	59	8	針	板目	中下層被	M176
94	SD01	012	被状	167	36	3	針	板目	中下層被、裏方	M172
170	SD01/02	011/12	小型替器	42	38	40	黒墨	木		M170
171	SD01/02	011	被狀	213	6	5	針	芯去	南北方形	M163
172	SD01/02	011	被狀	203	4	6	針	芯去	南北方形	M164
173	SD01/02	011	被狀	(135)	6	4	針	芯去	南北方形	M165
174	SD01/02	011	被狀	(71)	7	5	針	芯去		M166
175	SD01/02	012	草彅芯	218	(45)	2	針	板目	底下層	T338
176	SD01/02	012	舟板	(103)	(51)	11	針	板目	底下層厚2mm/?	T339
177	SD01/02	011	被狀	(89)	22	5	針	板目		M167
178	SD01/02	012	被状	(117)	52	13	針	板目	底下層被	M159
179	SD01/02	011	被状	257	9	9.0	針	芯去	南北方形	M162
180	SD01/02	012	被状	81	(105)	9	針	芯去	3層以上	T336
350	SD02	011	被状	(192)	7	4.0	針	芯去	3層以上	T344
351	SD02	011	被状	(184)	7	5.0	針	芯去	3層以上半身	M182
352	SD02	011	被状	(176)	8	4	針	芯去	3層以上	T345
353	SD02	011	被状	(122)	6	4.0	針	芯去	3層以上多角	T346
354	SD02	010	被状	(226)	9	6.0	針	芯去	3層以上方形	T334
355	SD02	011	被状	200	11	8.0	針	芯去	3層以上台形	T343
356	SD02	010	被状	153	10	7.0	針	芯去	半方角	T336
357	SD02	011	被状	159	19	10.0	針	芯去	3層以上半身	M181
358	SD02	010	板被状	149	21	11.0	正?	芯去	3層以上	T335
359	SD02	011	被状	243	31	2	針	芯去	3層以上	T342
360	SD02	011	被状	344	41	13	針	板目	3層以上	T341
361	SD02	011	板被状	(326)	29	27	正?	芯去	3層	T337
362	SD02	010	板被状	580	40	33.0	針	芯去	3層以上	M168
363	SD02	011	板被状	934	66	64	針	芯去	3層	E763
364	SD02	011	被状	90	53	5.0	針	板目	3層以上	T347
412	SD10		被状	(298)	49	55	針	芯持	下層	ET111
413	SD10		被状	(101)	(40)	(15)	針	芯持	下層	ET110
414	SD10		被状	(415)	(61)	(44)	針	芯持	下層	ET113
415	SD10		被状	(714)	27	19	針	芯去	下角	ET112

第13表 石製品観察表

(単位: mm)

No	通横	地区	種別	高	幅	厚	重量	備考	実測値
28	SK27	110	桜	80	40	11			M198
61	SD01	011	結石	(81)	(56)	53	中下層285g		F369
165	SD01/02	012	四	(140)	(113)	50	中下層706g		T485
166	SD02	010	結石	57	31	7.0	3層中15.67g		T507
274	SD02	011	剥片	38	24	20	3層薄砂半		F458
275	SD02	011	石核	112	94	40	45.00g		F457
326	SD02	010	剥片	53	27	14	18.50g		S353
327	SD02	010	火打石	11	15	6	0.90g		S354
338	SD02	012	火打石	48	31	22	36.00g		T537
362	SD02	H110	葉石	13	3	2	0.16g		T583
363	SD02	H110	剥片	21	20	4	1.26g		F505
384	SD02	H110	剥片	39	32	17	24.88g		T585
385	SD02	H110	剥片	39	21	9	6.16g		T584
420	SD02	011	結石	(85)	(60)	35	230.00g		S388
421	SD02/11/12		結石	(100)	(67)	29	255.00g		Q15
433	通横	H10	硯	(82)	57	13	85.00g		N3

第14表 金属製品観察表

(単位: mm)

No	通横	地区	目録	口 (幅)	高 (厚)	重量	備考	実測値
6	SK19	19	鏡	22		1	2.50	丸孔6mm
7	SK19	19	鏡	24		1	1.73	丸孔6mm
8	SK19	19	鏡	23		1	0.99	丸孔6mm
17	SK11	19	鏡	(84)	59	26	65.27g	鏡
29	SK26	110	鏡			190		足3孔株
34	SK32	110	被状	277	220			M199
35	SK32	110	包丁	319	45	22	刃186×45×5	M193
36	SK32	110	諺	359	39	27	刃155×30×4	F286
82	SD01	011	刀子小柄	(56)	12	5	8.12	中下層鉄
181	SD02	011	弧洋	88	74	51	390.00g	牛
222	SD02	010	弧洋	30	31	19.0	17.32	3層北
339	SD02	012	弧洋	41	37	12	16.49	表上研
								T526

※ ()は最大値を示す。

第5章 直江ニシヤ遺跡

第1節 概要

本遺跡は南北に長い調査区の全体に複数の溝が設けられ、北方に井戸、ピット、土坑が集中している。これらには弥生時代から鎌倉時代の土器、石器、木製品などが含まれている。所々に初穀の入った大型の土坑(SX01～03)や近世、近代の遺物を含む溝があり、近世、近代は農村となっている。地山は北に向かって緩く傾斜している。

第2節 検出遺構

1. 井戸

SE01 (第59・60図) 調査区の北方、他のピットや土坑から孤立して存在する。平面形は座標北より約30度東に傾く正方形を呈し、一辺約1m、深さ約50cmを測る。井壁に沿って縦板組隅柱横棟留めの井戸側が据えられている。隅柱は北角の第59図1と南角の2が角柱状で、底から32～42cm上に全方向に貫通する納穴を開けている。東角の3と西角の4は板状で、少なくとも1・2と対応する高さには納穴がない。縦板は幅80～140cm前後、厚さ1.0～1.2cmの板状で、北東辺は5・6の他6枚、南東辺は7の他8枚、南西辺は8の他8枚、北西辺は9の他10枚が残っていた。北西辺は下方からの土圧で縦板が倒れており、南西辺もかなり孕んでいる。横棟は3方向が残っており、北西の棟が失われている。残り3本の横棟は底から約40cm上にあり、本来は隅柱の納穴に組み込まれていたものと思われる。南西は土圧によって折れているが、3本とも長さ88～81cm、幅42～58cm、厚さ1.3～1.5cmの板状である。井戸側内の上方、土層7の上面中央で、完形の土師器皿が上向きに4枚(第61図1・3～5)出土した。井戸鎮めを行ったのであろう。よって13世紀前半に埋められたと考えられる。またその下の、北東辺の縦板のそばから漆器椀が出土した。井戸側内からは他に、砥石や加賀焼・越前焼の破片が出土している。井戸側外からは土師皿と土師器の細片が1点ずつ出土した。

SE02 (第60図) 調査区の南方、SD04の底にある。上方の構造は不明であるが、下方は曲物組の井戸側が検出された。曲物は4個あるが、全て厚さ0.6～0.8cmの板を1～2cm間隔でケビキし樹皮で縫い止めたもので、下段にはたがが残っている。下段は地山に直接埋められている。土圧で長軸50cmの長楕円に歪み折れ、高さは23.6cmを測る。下段の上に長さ37.5cm、高さ20.8cmの2段目が乗る。3段目は少しづれて2段目の上に乗り、高さ12.3cm分のみ残る。上段は3段目の外に回りこんでおり、高さ13.7cmを残して上は削り取られる。井戸側内は地盤が不安定で崩落の危険があったため掘りきれなかつたが、本来の地山(SD04の上面)からの深さは1.4m以上となり、覆土は黄灰色のシルトであった。井戸側内から土師器と須恵器の細片が1、2点出土した。

2. 土坑

SK01 (第60図) 調査区中央に孤立している。南北に長い長方形で、箱形に掘られ、南の底が一段低くなっている。長軸136cm、最深部47cmを測る。古代の土師器・須恵器の細片が数点出土した。

3. ピット

P01 調査区中央に孤立して存在する。東西に長い楕円形で、東西端の底に小穴がある。長軸56cm、最深部28cmを測る。覆土は暗褐色粘質土で、土師器の細片数点と須恵器の細片2点が出土した。

P03 調査区北方の、ピットが集中している箇所に存在する。南北に長い楕円形で、長軸24cm、深さ30cmを測る。覆土は灰褐色粘質土で、珠洲焼の破片が出土した。

4. 溝・川

SD01（第60図） 調査区南端にあり、西でSD02に切られ、東に流れる。SD02付近では幅190cm、深さ30cm程度の広く浅い溝であるが、東では幅90cm程度、深さ50cm程度の断面逆台形に緊縮する。東の方が本来の姿であろう。覆土は3段階に分かれて堆積している。合計で36Lコンテナケースに1/3程度の土器が出土した。上層からは土師器・須恵器の細片が10点前後ずつ、珠洲焼が2点、土製品1点(21)、石製品1点(22)が出土した。下層からは土師器有台杯2点(15・16)、土師器・須恵器の細片が数点、珠洲焼の片口鉢(19)、加賀焼のすり鉢(20)が出土した。深さを知るために調査区東端に入れたサブトレーナーからは土師器・須恵器、中世陶器の細片が少量出土した。

SD01・02（第60図） SD01とSD02の上下関係を確認するためにサブトレーナーを入れたところである。土師器・須恵器の細片数点、赤瓦1点、面戸瓦1点、縁軸陶器らしきもの1点が出土した。

SD02（第60図） 調査区南西端に片岸だけ現れる。北でSD01を、南東でSD03を切る。幅3.4m以上で、岸辺は広く浅いテラスとなり、中央で60cm深さに落ち込む。覆土はテラス部分が砂質土の水平堆積、中央は大半が砂質土や砂のレンズ状堆積であるが、所により粘質土も堆積していた。弥生時代から近世までの遺物が定量ずつ混在し、合計で36Lコンテナケースに1/2程度の量がある。サブトレーナー、SD02上層、SD02下層、SD02に分けて取り上げているが、どの区域も異なる時期の遺物が混在している点では同じである。サブトレーナー、SD02上層から骨片が1点ずつ出土している。

SD03（第60図） 調査区南半にあり、南北に流れる。幅3.4m、深さ60cmで、底の両端が20cmほど深くなっているため、断面W字状に見える。覆土は単純なレンズ状堆積であるが、最深部が埋まった後に地山が流れ込んでいる。古代の土師器・須恵器、中世・近世の陶磁器が細片や破片の状態で、36Lコンテナケース1箱分出土した。出土量は古代が若干多く、近世は少ない。上層、下層、その他に分けて取り上げているが、上層と下層は出土量が同様で1/3箱程度である。

SD03・04（第60図） SD03とSD04の上下関係を見るためにサブトレーナーを入れたところである。弥生土器から近世陶磁器までの中片が36Lコンテナケース2/3程度出土した。

SD04（第60図） 調査区南寄りにあり、東西方向に流れる。断面の観察から、土層5・4で埋まる溝が最初にあり、後に土層3のみで占められる幅4mの溝に切られ、拡幅されたことがわかる。そのため覆土中の遺物は年代が逆転している。弥生土器から近世陶磁器までの中片と小石が36Lコンテナケース2/3程度出土した。

SD05（第60図） 調査区南寄りにあり、東西方向に流れる。まず南側に幅50cm深さ40~60cmの溝ができる、それが埋まった後で北へ拡幅し、幅180cm深さ30cmの深い溝へと変化する。先行する溝から須恵器と土師器の細片が少量出土し、上層からは弥生土器、土師器・須恵器、中世陶器が細片で少量ずつ、図示した瓦質土器の火鉢と小石が出土した。

SD06（第60図） 調査区北方にあり、東西方向に流れる。幅1.4m、深さ30cmで、断面逆台形に掘られる。覆土は単純な2層のレンズ状堆積である。東端のサブトレーナーからは弥生土器と須恵器の細片が1、2点ずつ出土した。上層からは須恵器と近世陶磁器の細片と土錐が数点ずつ出土した。下層の遺物は比較的の時期がまとまっている。珠洲焼・越前焼と中世土器の破片、鉄鍋1点が出土した。

SD07 調査区北方にあり、東西方向に流れる。幅3.0m、深さ20cmで、覆土は黒褐色の粘質土のみの堆積である。土師器の細片、須恵器の中片、中世陶器・土器、近世の陶胎染付の破片が36Lコンテナケース

に1/6程度、木杭が1本出土した。最も多いのは須恵器で、末産と高松産の様々な器種の小片がある。末産には墨書き土器が1点含まれる。

SD08 調査区北方にあり、東西方向に流れる。幅2.2m、深さ10cmと浅く、覆土は黒褐色の粘質土のみの堆積である。土師器・須恵器の細片が数点と砥石などが出土した。

5. 近代の土坑

SX03 調査区北方の東端に存在する。東西端は遺構と調査区端に切られて検出できなかったが、南北軸約2.3mの長方形になると思われる。深さ15cmを測る。覆土は黄褐色粘質土で、瀬戸焼の小片が出土した。

第3節 出土遺物

1. 井戸

SE01(第61図) 1~10を図示した。1・3~5は完形で、井戸側内の上層から出土した一括資料である。非ロクロ成形の土師器皿で、13世紀前半のものと捉えておきたい。5は口縁の周囲1/3ほどに淡い被熱痕が見られ、灯明皿のような使い方が想定できる。また体部外面の下半に、黒い付着物が見られる。2・6・8も井戸側内から出土したが、6は火鉢や風呂の脚であり、混入である可能性がある。7は内外黒漆塗りの椀で、口縁をはじめ体部の所々の漆が摩耗している。8は角柱状の砥石で、4つの側面全てが使用されている。

2. 土坑

SK01(第61図) 11は高松産の須恵器で、広口瓶の口縁である。

3. ピット

P01(第61図) 12・13を図示した。高松産の須恵器蓋と無台坏の細片で、時期は不明である。

P03(第61図) 14を図示した。珠洲焼の片口鉢と思われる。細片で、著しく摩耗している。

4. 溝・川

SD01(第61図) 15~22を図示した。15・16・19・20は下層から、他は上層から出土した。17~19は珠洲焼で、17・19は13世紀前半、18は14世紀前半と捉えておきたい。20は一方の断面に漆継ぎの痕跡がある。21はかなり摩滅し上下も欠けている、器種不明の土製品である。22は図の両端にあたる面は敲打痕があり、他の面は自然面となっている。

SD01・02(第61図) 23・24を図示した。23は面戸瓦と思われる土製品である。24は暗緑灰色の釉がほとんど剥離しているが、陶胎が明るい灰白色を呈しており、緑釉陶器かと思われる。

SD02(第62図) 25~35を図示した。全て破片である。サブトレーナーからは25・27が、上層からは35が、下層からは26・28・29・31・34が出土した。30・32・33の出土層位は不明である。26~27の弥生土器はかなり摩滅している。30は外表面の自然釉が剥落している。32は波佐見焼の皿である。34は越前焼の壺の口縁で、端部に降灰による自然釉がかかっている。

SD03(第62・63図) 36~61を図示した。出土量が多く、時期幅も大きいため詳述はしないが、希少なものおよび特筆すべきものとして38の初期須恵器、47~49の輸入青磁がある。

SD03・04(第63・64図) 62~78を図示した。77はごく軟らかく軽い石を磨き、穿孔したものである。

石錘であろうか。

SD04 (第64図) 79～98を図示した。88～90は輸入青磁の碗である。92は内面赤漆、外面黒漆塗りの小ぶりの椀である。ほぼ完形であるが、口縁と高台の端部はほとんどが摩耗および欠損している。

SD05 (第65図) 99～101を図示した。99は壺の頸部で、ごく小さな破片である。外面は棱線の上下に精巧な波状文を施している。内面は降灰している。101は瓦質土器の火鉢の小片である。外面の凸帯のうち上方は貼り付けによるもので、一部が剥がれています。また上下の凸帯の間にはかなり摩滅しているが菊花のような押印がわずかに認められる。生産地である奈良では、14世紀後半から15世紀前半の年代が与えられている。

SD06 (第65図) 102～109を図示した。105～107の土錘だけが上層、他は下層からの出土遺物である。103・104は越前焼の壺である。104の体部下端から底部外面にかけて著しく摩耗している。また底部内面から体部下半にかけて、全面が煤化している。壺としての機能を終えてから、たとえば口縁から体部上半が欠けてから内部で火を使うような再利用をするのであろうか。体部外面の下半以外が変色しているのも、被熱によるものかもしれない。109の鉄鍋は小さな破片であるが、あまり腐食が進んでおらず、やや新しい印象を受ける。

SD07 (第65図) 110～116を図示した。110～112は末産の須恵器である。110・111は8世紀後半と考えられる。114は天目茶碗で、産地・時期は不明である。116はすり鉢で、口縁端部から内面にかけて著しく摩耗している。図の右側にあたる断面には全面に漆継ぎの痕跡がある。

SD08 (第65図) 117を図示した。凝灰岩製の砥石片である。残存している面は3面あり、全て使用されている。

5. 近代の土坑

SX03 (第65図) 118を図示した。瀬戸焼のおろし皿である。

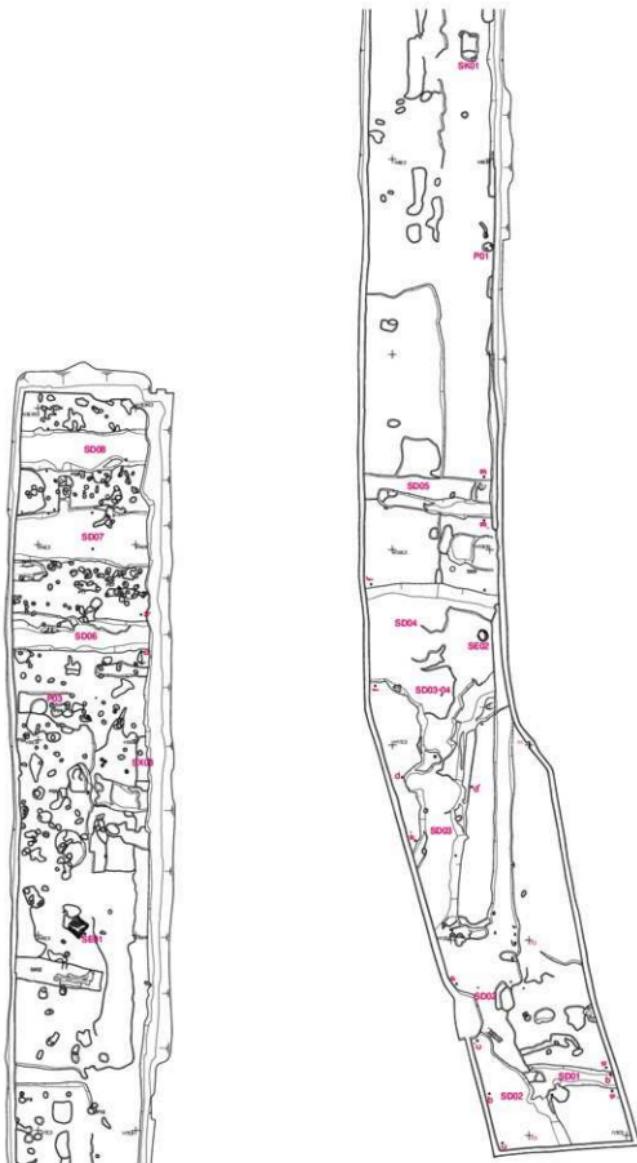
6. 遺構外(第65・66図)

119～136を図示した。その他に、弥生土器から近代までの遺物が36Lコンテナケース1/2程度出土している。119～121は初期須恵器である。119・121は高坏で、明るい青灰色を呈し、坏部の外外面は摩耗している。120は明るい灰白色を呈し、外面に降灰が見られ、内面は摩耗している。126・128は須恵器の壺の破片で、126は降灰が、128には外面に別個体の破片が付着している。127は土師器の瓶か壺の把手である。表面が著しく摩滅・剥離している。7世紀頃のものであろうか。129は越前焼のすり鉢の細片であるが、内面の摩耗は認められない。130は瓦質土器の火鉢である。133は陶器の細片で、灰色の地に白泥で文様を描いている。朝鮮陶器か近世の三島手のふたつの可能性をあげておきたい。134・135は輸入陶磁器の白磁と青磁である。136は火箸で、緑色に変色しているが腐食が進んでおらず、新しいものとの印象を受ける。

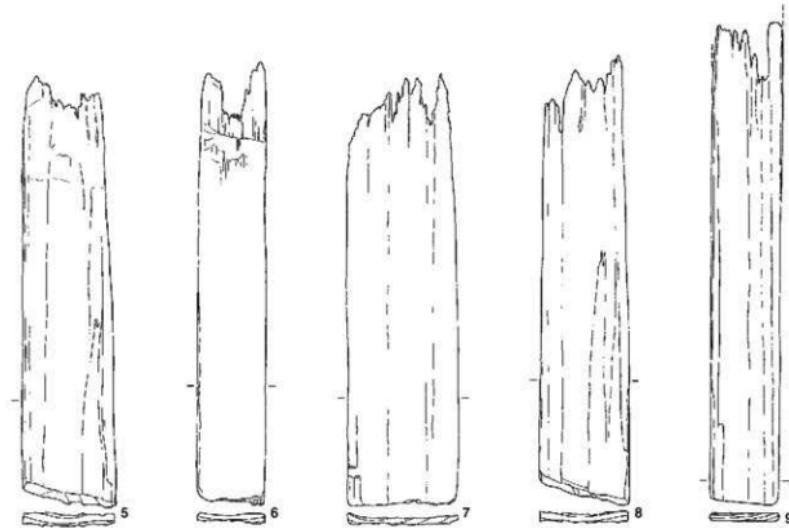
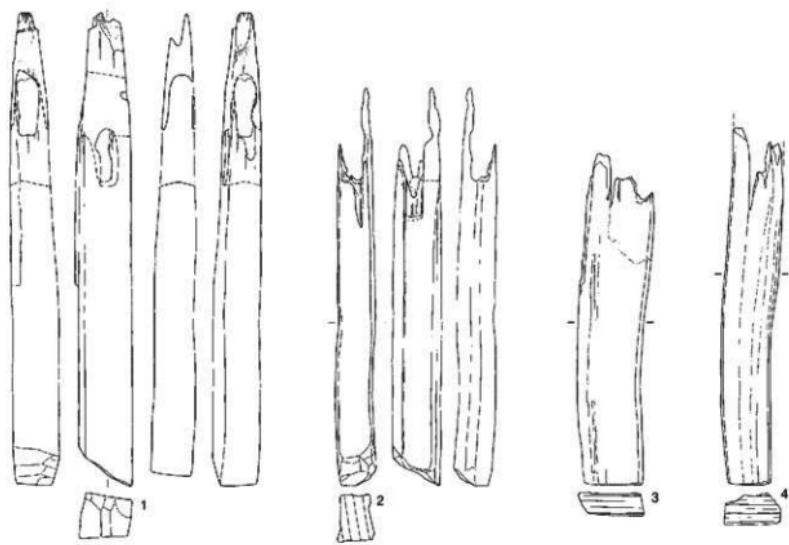
第4節 小結

包含層や溝の中に弥生時代、古墳時代中期、古代、中世の遺物が定量含まれるので、調査区内かその近辺にはこれらの時代の集落があったと想定される。

しかし時期が特定できる、良好な出土遺物を伴う遺構は、13世紀前半に埋まったと考えられる井戸SE01しかない。SD04に切られているSE02に象徴されるように、近世以前の遺構は地山ごと削平されているのであろうか。

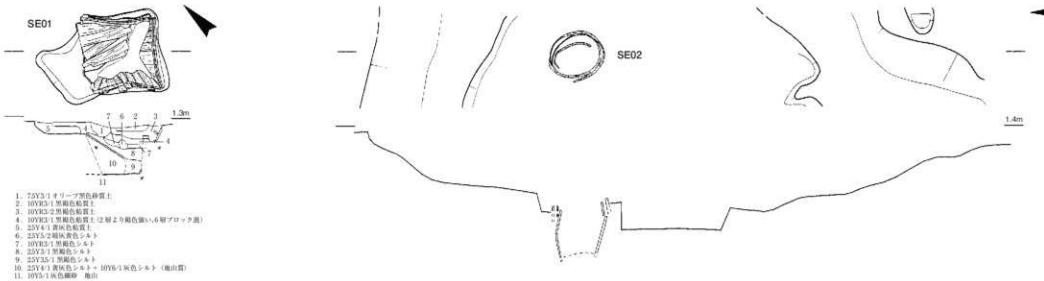


第58図 遺構全体図 [S=1/250]

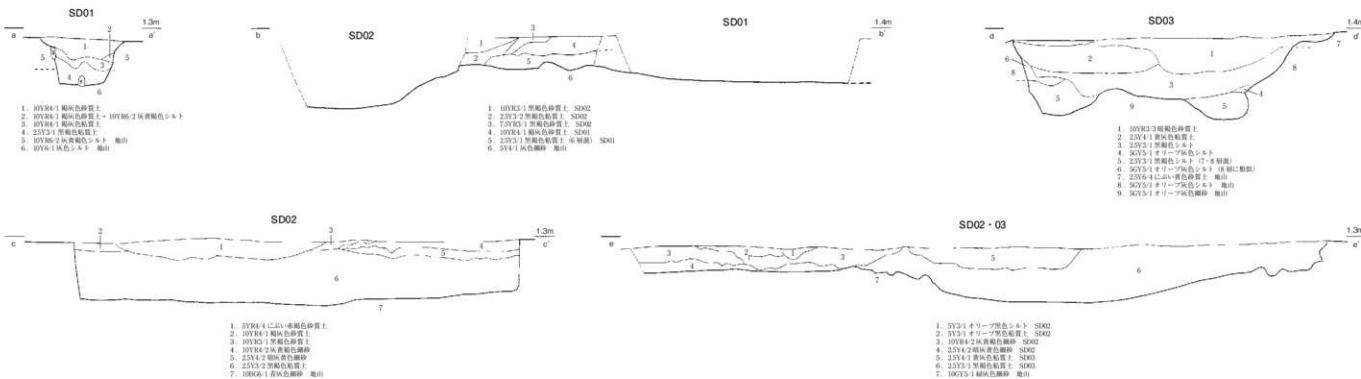


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10cm

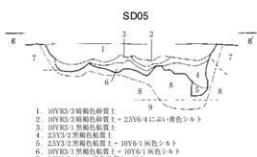
第59図 SE01 井戸側材 [S=1/6]



1. 725Y3/1黒銀色シルト
2. 10YR3/1黒銀色土質
3. 10YR3/2黒銀色土質
4. 10YR3/2黒銀色土質(2層より色調違い、右側ブロック面)
5. 25Y4/1 黒銀色土質
6. 25Y5/2 黑銀色シルト
7. 10YR2/1 黑銀色シルト
8. 25Y3/1 黑銀色シルト
9. 25Y3/5 黑銀色シルト
10. 25Y4/1 黑銀色シルト/10YY6/1灰白色シルト(地山質)
11. 10YR5/1灰白色細砂 地山



1. 25Y4/1 黒褐色砂質土
2. HOYR1/3 黑褐色砂質土
3. 25Y3/1 黑褐色砂質土
4. 25Y4/1 黑褐色砂質土
5. 25Y3/1 黑褐色砂質土 (シルト質、7割混、3層とはほぼ同じ)
6. 5GYS1/1 オリーブグリーンシルト 地山
7. 5GYS1/1 オリーブ灰褐色粘土 地山

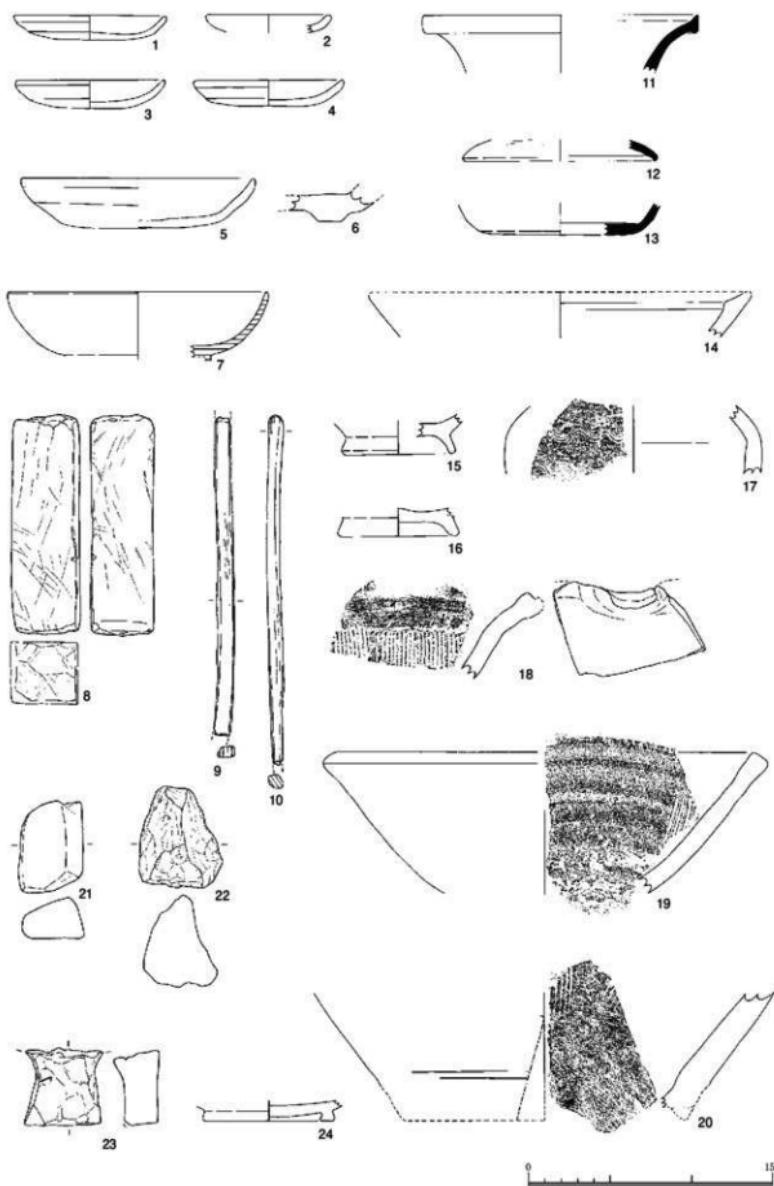


9

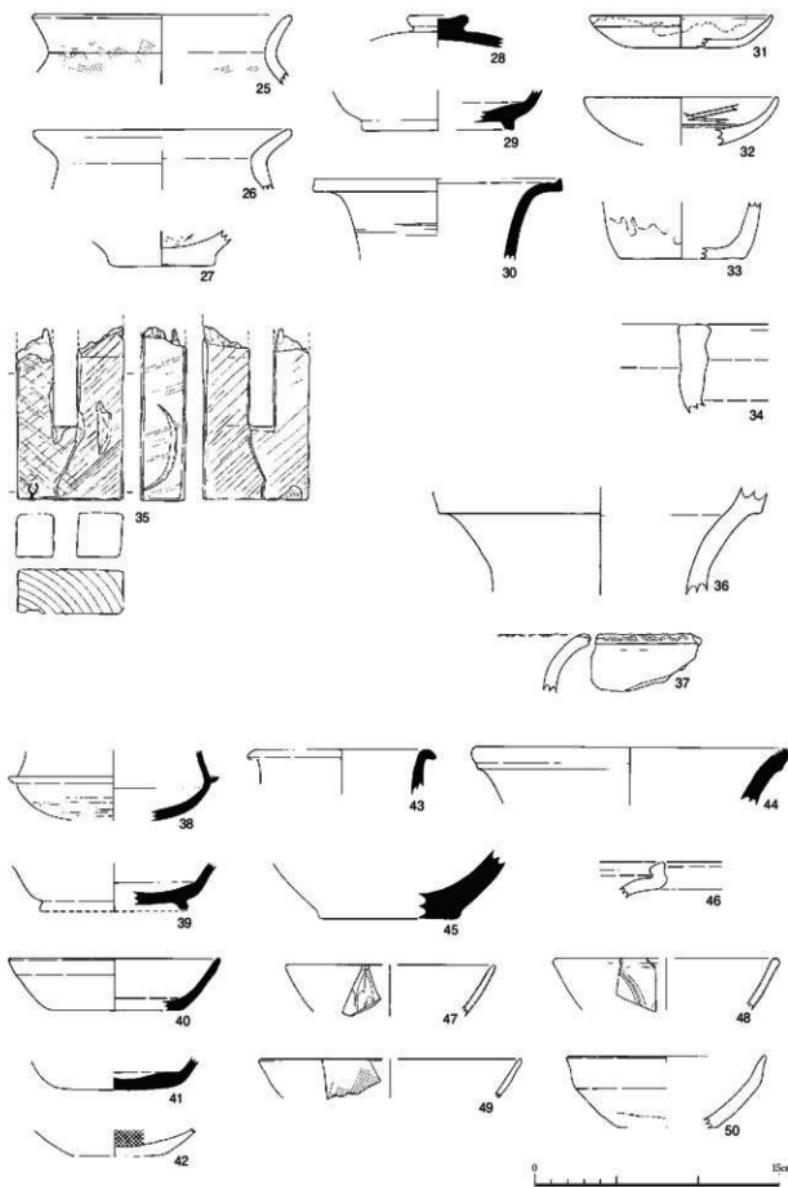
1. 10YR3-2暗褐色砂質土
2. 10YR3-2暗褐色砂質土 + 2.5Y6/4に赤い黄色シート
3. 10YR3-1黒褐色粘質土
4. 2.5V3-2黒褐色粘質土
5. 2.5V3-2黒褐色粘質土 + 30Y6/1灰色シート
6. 10YR3-1黒褐色粘質土 + 10Y6/1灰色シート



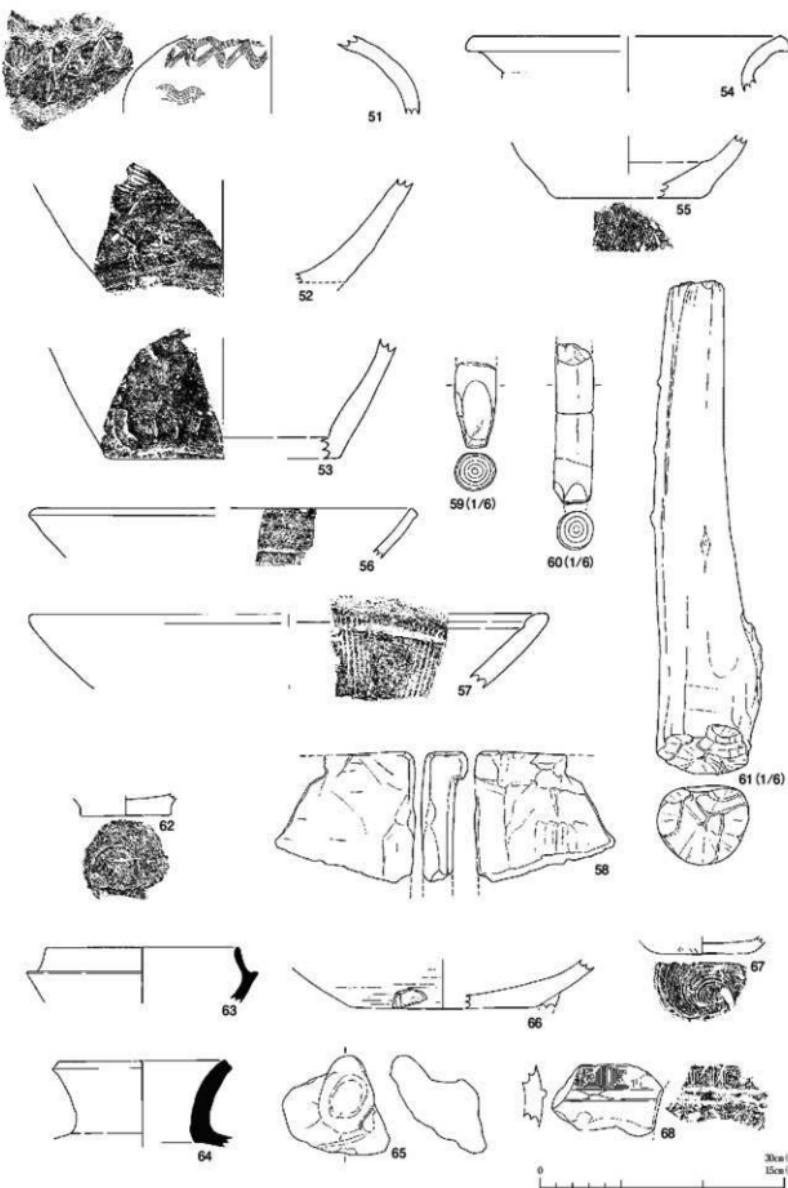
1. 16YR4/2底黄褐色私面上
2. 25Y3/3暗オリーブ褐色私面上



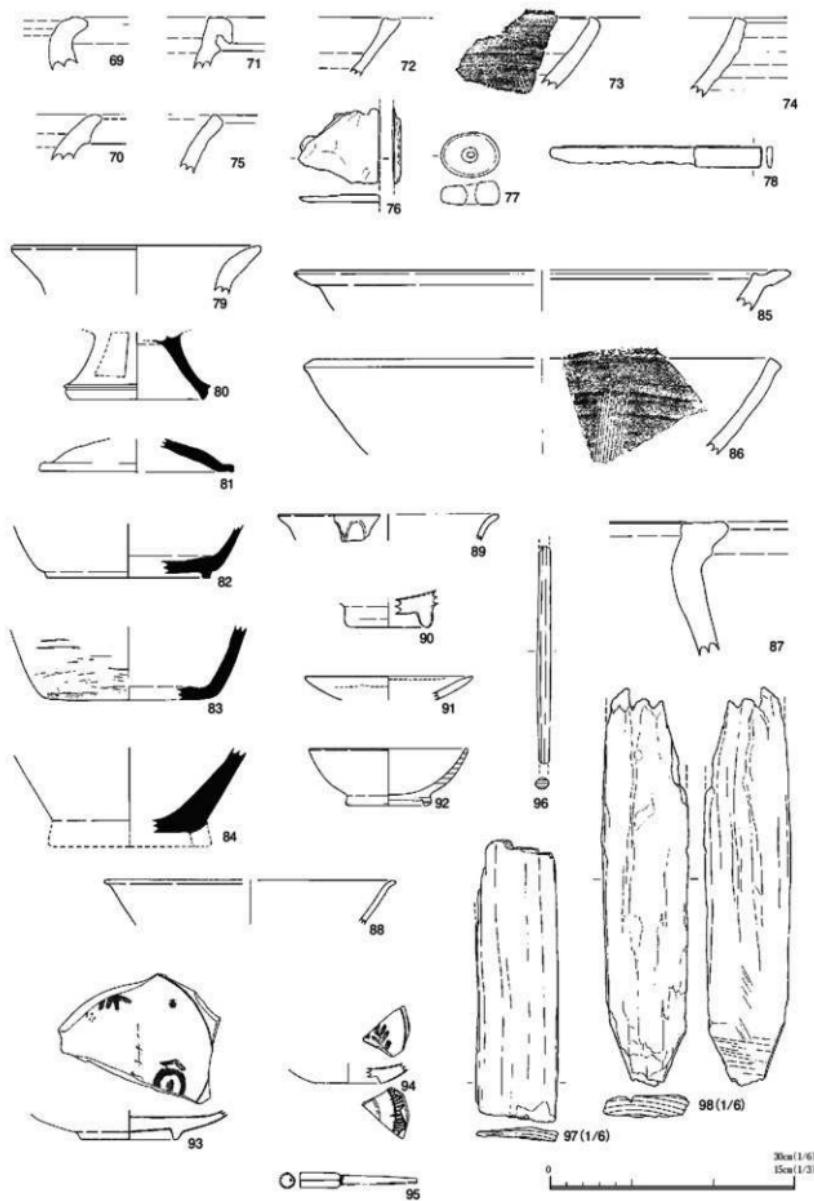
第61図 SE01(1~10)、SK01(11)、P01(12、13)、O3(14)、
SD01(15~22)、O1・O2(23、24)出土遺物(S=1/3)



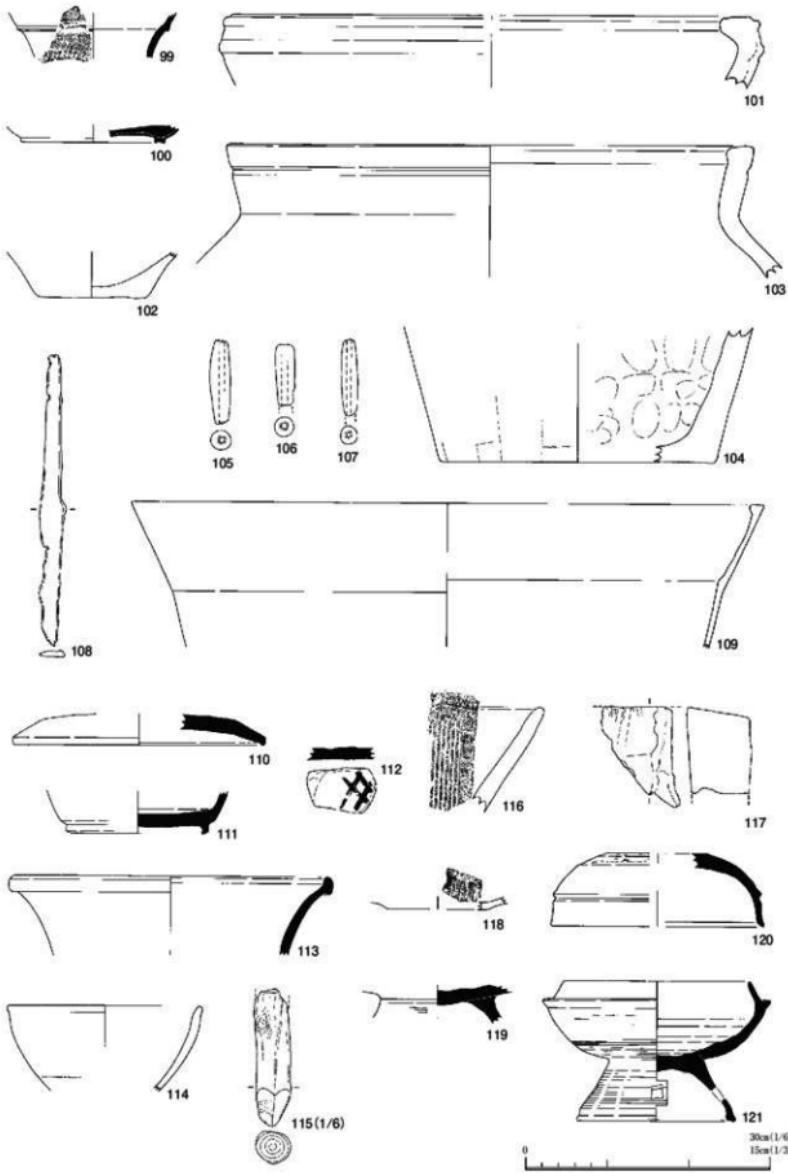
第62図 SD02(25~35)、03(36~42、45~50)、03・02(43、44)出土遺物 [S=1/3]



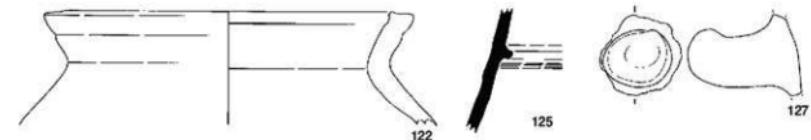
第63図 SD03 (51~61)、03・04 (62~68)出土遺物 [S=1/3・6]



第64図 SD03・04 (69~78)、04 (79~98)出土遺物 [S=1/3・6]



第65図 SD05 (99～101)、06 (102～109)、07 (110～116)、08 (117)、SX03 (118)、
遺構外 (119～121)出土遺物 [S=1/3・6]



0 1 15cm(1/3)

第66図 遺構外出土遺物[S=1/3]

第15表 井戸枠(縦板等)計測表(1)

No.	遺構	地区	基盤	長	幅	厚	種類	木取	備考	実測No.
3	SE01	15/6	柱	(562)	70	70	芯去	北東	M154	
2	SE01	15/6	柱	(409)	46	58	芯去	南西	E161	
3	SE01	15/6	柱	(408)	84	32	針	芯去	S228	
4	SE01	15/6	柱	(440)	65	40	針	芯去	T310	
5	SE01	15/6	柱	(532)	116	16	針	柱目	北東	E166

第16表 土器・陶磁器・土製品観察表

No.	遺構	地区	種類	器形	口 (高)	底 (幅)	高 (厚)	外側面型	内側面型	底部型	外側色調 (褐色調)	内側色調 (褐色調)	律	砂	青	赤	緑	黒	備考	実測No.
1	SE01	15/6	土器	皿	92	50	15.0	ノットリ-ヨコナフタ	ナデ	ナデ	法灰褐	法灰褐	少	少	上層内					T546
2	SE01	15/6	土器	皿	40	46	58	ナデ	ナデ	法灰褐	法灰褐	少	少	サトウ					F295	
3	SE01	15/6	土器	皿	90	60	18.0	ノットリ-ヨコナフタ	ナデ	ナデ	法黄灰	法黄灰	多	多	砂	上	砂			E116
4	SE01	15/6	土器	皿	92	54	16.0	ノットリ-ヨコナフタ	ナデ	ナデ	法黄灰	法黄灰	多	多	砂	中	砂			E117
5	SE01	15/6	土器	皿	142	94	31	ノットリ-ヨコナフタ	ナデ	ナデ-物数	法灰褐	法灰褐	少	少	上層内					T547
6	SE01	15/6	土器	皿				ナデ	ナデ	法灰褐	法灰褐	少	少	少	少	少	少	少	F297	
11	SK01	17	陶器	瓶	168			ナデ	ナデ	瓶	瓶	少	少	少	少	少	少	少	F294	
12	P01	18	陶器	蓋				ケズリ-ナデ	ナデ	瓦白	瓦白	多	多	多	多	多	多	多	T415	
13	P01	18	陶器	輪台合	90			ナデ	ナデ	ナデ	灰	灰	少	少	少	少	少	少	少	T416
14	P03	14	陶器	片口鉢				ナデ	ナデ	瓶	瓶	少	少	少	少	少	少	少	T417	
15	SD01	I/12	土器	有台碗	70			ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	下	下	下	下	下	F338	
16	SD01	I/12	土器	有台碗	74			ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F337	
17	SD01	J/12	陶器	瓶				ナデ	ナデ	灰白	灰白	少	少	少	少	少	少	少	F339	
18	SD01	J/12	陶器	平鉢				ナデ	ナデ	灰白	灰白	少	少	少	少	少	少	少	F340	
19	SD01	J/12	陶器	平鉢				ナデ	ナデ	灰白	灰白	少	少	少	少	少	少	少	F335	
20	SD01	J/12	陶器	平鉢				ナデ-ケズリ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F336	
21	SD01	J/12	土器品	不明				ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F354	
23	SD01/J/12	J/12	陶器	瓶				ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F352	
24	SD01/J/12	J/12	陶器	瓶	81			ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F353	
25	SD02	I/12	陶器	裏	158			ナデ-ハケ	ナデ-ハケ	法模灰	法模灰	多	多	多	多	多	多	多	F342	
26	SD02	I/12	陶器	裏	155			マツリ	マツリ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F348	
27	SD02	I/12	陶器	裏	65			ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F341	
28	SD02	I/12	陶器	蓋	38			ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F349	
29	SD02	I/12	陶器	有台杯	94			ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	多	多	多	多	多	多	多	F351	
30	SD02	I/2	土器	瓶	150			ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F344	
31	SD02	I/12	土器	有台碗	110	72	20	ヨコナフタ-ヨコナフタ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F350	
32	SD02	I/2	陶器	瓶	118			透明物	透明物	透明物	透明物	少	少	少	少	少	少	少	F345	
33	SD02	I/1	陶器	瓶	76			鉢輪-泥足	無輪	鐵正	鐵正	少	少	少	少	少	少	少	F343	
34	SD02	I/12	陶器	瓶				ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F347	
35	SD03	I/1	陶器	裏				ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	多	多	多	多	多	F310	
37	SD03	I/1	陶器	裏				ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F301	
38	SD03	I/1	陶器	片				ナデ-ケズリ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F308	
39	SD03	I/1	陶器	有台杯				ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F300	
40	SD03	I/1	陶器	無台杯	128	84	32	ナデ	ナデ	ヘラ切り-ヘラ點	灰	少	少	少	少	少	少	少	F303	
41	SD03	I/1	陶器	無台杯	74			ナデ	ナデ	ヘラ切り	灰	少	少	少	少	少	少	少	F298	
42	SD03	I/1	陶器	無台杯	55			ナデ	ナデ	ミガキ	ミガキ	少	少	少	少	少	少	少	F311	
43	SD03/02	I/1	陶器	裏	105			ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	多	多	多	多	多	多	多	F319	
44	SD03/02	I/1	陶器	裏	90			ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F318	
45	SD03	I/1	陶器	裏	86			ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	少	少	少	少	少	少	少	F304	
46	SD03	I/1	土器	裏				ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F309	
47	SD03	I/1	陶器	裏				ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F302	
48	SD03	I/1	陶器	裏				ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F314	
49	SD03	I/1	陶器	裏				ナデ	ナデ	ナリーフ	ナリーフ	少	少	少	少	少	少	少	F320	
50	SD03	I/1	陶器	天目青瓷	122	62	44	鉢輪	鉢輪	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F313	
51	SD03	I/1	陶器	裏				ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F306	
52	SD03	I/1	陶器	裏				タクナ-ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F317	
53	SD03	I/1	陶器	加須	146			ナフ-工具	ナフ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F315	
54	SD03	I/1	陶器	裏				ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F306	
55	SD03	I/1	陶器	鉢	100			ナデ	ナデ	脚止あ切り	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F299	
56	SD03	I/1	陶器	ナリーフ				ナデ	ナデ	脚止あ切り	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F307	
57	SD03	I/1	陶器	ナリーフ				ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	F316	
62	SD03/04	I/0/11	土器	有台板	56			ナデ	ナデ	脚止あ切り	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	T406	
63	SD03/04	I/0/11	土器	把手				ナデ	ナデ	灰白	灰白	少	少	少	少	少	少	少	T401	
64	SD03/04	I/0	土器	把手	102			ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	T412	
65	SD03/04	I/0	土器	把手				ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	T411	
66	SD03/04	I/0/11	漏斗	大皿	118			ケズリ	ナデ	ヘラ切り	灰	少	少	少	少	少	少	少	T402	
67	SD03/04	I/0/11	漏斗	粗筋	56			ナデ	ナデ	脚止あ切り	灰	少	少	少	少	少	少	少	T403	
68	SD03/04	I/0/11	漏斗	瓦鉢				マツリ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	T409	
69	SD03/04	I/0/11	漏斗	便				ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	T407	
70	SD03/04	I/0/11	漏斗	便				ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	T404	
71	SD03/04	I/0/11	便器部	便				ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	T400	
72	SD03/04	I/0/11	便器部	便				ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	T406	
73	SD03/04	I/0/11	便器部	便				ナデ	ナデ	法模灰	法模灰	少	少	少	少	少	少	少	T399	

第15表 井戸枠(縦板等)計測表(2)

No.	遺構	地区	基盤	長	幅	厚	種類	木取	備考	実測No.
6	SE01	15/6	板	(546)	82	12	針	板目	北東	ET64
7	SE01	15/6	板	(532)	136	10	針	板目	南東	ET67
8	SE01	15/6	板	(552)	108	10	針	板目	南西	ET66
9	SE01	15/6	板	(564)	84	10	針	板目	北西	ET65

第16表 土器・陶磁器・土製品観察表

(単位:mm)

No	通横	地区	種別	器形	口	底	高	基 準 高	外面部調	内部調	底部調	外面部色 (褐色)	内部面部色 (褐色)	幅	縦	高	底	底	備考	実測値
74	SD03/04	I10	鉢	鉢					ナデ	ナデ	穂伏	灰	少	且		且	下層	T413		
75	SD03/04	I10	越前	片口鉢					ナデ	ナデ	直面	赤	且	多		且	上層	F408		
79	SD04	I10	免生	壺	150				ハクリ	ハクリ	深埋伏	深	多	且	且	且	上層	F323		
80	SD04	I10	須器	壺		87			ナデ	ナデ	穂伏	灰	少	且		且	SE02砂井	F321		
81	SD04	I10	須器	壺	118				ナデ	ナデ	穂伏	灰	少	且		且	上層	F324		
82	SD04	I10	須器	有台坪	101				ナデ	ナデ	ヘラ切り	灰	少	且		且	既(5E02)	F334		
83	SD04	I10	須器	瓶	104				ナデ	ナデ	ケズリ・ナデ	灰	少	且		且	既(5E02)	F332		
B4	SD04	I10	須器	瓶					ナデ	ナデ	穂伏	灰	少	且		且	既(5E02)	F330		
B5	SD04	I10	漏斗	荷緑皿					灰釉	灰釉	深綠灰	白					上層	F329		
B6	SD04	I10	鉢	すり鉢					ナデ	ナデ	灰	灰	少	且		且	既(5E02)	F311		
B7	SD04	I10	鉢	漆					ナデ	ナデ	灰	灰	少	且		且	既(5E02)	F333		
B8	SD04	I10	緑釉	碗					緑釉	緑釉	灰	緑					サブトレ	F485		
B9	SD04	I10	青釉	碗					青釉	青釉	穂伏	灰					既	F328		
90	SD04	I10	青釉	瓶	54				青釉	青釉	深青綠	灰					下層	F327		
91	SD04	I10	土器	壺	102				ナデ	ナデ	穂伏	灰	少	且		且	上層	F322		
93	SD04	I10	陶器	壺	61				透明白	透明白	透明	灰白					既	F325		
94	SD04	I10	陶器	壺	40				透明白	透明白	透明	灰白					既	F326		
99	SD05	19	須器	瓶					ナデ	ナデ	穂伏	灰	少	且			既	S293		
100	SD05	9	須器	有台坪	88				ナデ	ナデ	ヘラ切り・ナデ	灰	少	且			既	S300		
101	SD06	9	瓦器	火鉢							深椎	少	且	少		且	上層	S292		
102	SD06	14	土器	直底	62						淡綠白	白	少	且			下層	S299		
103	SD06	14	埴輪	轆轤	320				ナデ	ナデ	茶窓	茶窓	少	且			下層	S297		
104	SD06	14	埴輪	直底	168				ナデ・クズリ	ナデ・直底	茶窓	茶窓	少	且			下層	S298		
105	SD06	14	土器	土錐	152	13	3				灰灰	少	且			少	既(5E1.5g)	S295		
106	SD06	14	土器	土錐	136	12	4				灰灰	少	且			少	既(3.5g)	S296		
107	SD06	14	土器	土錐	147	10	3				灰灰	少	且	上層3.6g				S294		
110	SD07	13/4	須器	壺	156				ナデ	ナデ	灰	灰	少	且			既	S303		
111	SD07	13/4	須器	有台坪	88				ナデ	ナデ	ヘラ切り・ナデ	灰	少	且			既	S301		
112	SD07	13/4	須器	不明					ナデ	ナデ	ヘラ切り	灰	少	且			既	S305		
113	SD07	13/4	須器	甕・壺	194				ナデ	ナデ	灰	灰	少	且			既	S302		
114	SD07	13/4	陶器	天日手鏡	118				鉢	鉢	茶窓	茶窓	少	且			既	S304		
116	SD07	13/4	陶器	すり鉢					ナデ	ナデ	赤増青	少	且					S307		
118	SD03	15/6	漏斗	鉢					ナデ	ナデ	深綠灰	灰	少	且					S420	
119	通横外	須器	高坪					ナデ	ナデ	深灰	灰	少	且					T434		
120	通横外	14	須器	壺					ナデ・クズリ	ナデ	灰	灰	少	且				T418		
121	通横外	須器	壺	114	96	86	ナデ・クズリ		ナデ	ナデ	穂伏	灰	少	且					T424	
122	通横外	15	須器	壺	202				ナデ	ナデ	灰	灰	少	且					T426	
123	通横外	須器	壺	146				ナデ	ナデ	底白	底白	少	且					T423		
124	通横外	15	須器	壺・底					ナデ	ナデ	灰	灰	少	且					T427	
125	通横外	112	須器	双耳瓶					ナデ	ナデ	底白	底白	少	且					T429	
126	通横外	須器	壺					タタキ	タタキ	当て真	底白	少	且						T421	
127	通横外	11	土器	把手					ナデ	ナデ	灰	灰	少	且					T435	
128	通横外	須器	壺					タタキ	タタキ	当て真	底白	少	且						T422	
129	通横外	15/6	埴輪	目隠					ナデ	ナデ	底真	底真	少	且					T428	
130	通横外	15	瓦器	火鉢					ナデ	ナデ	重	重	少	且					T419	
131	通横外	9	陶器	天日手鏡	118				鉢	鉢	底茶	底茶	少	且					T431	
132	通横外	9	陶器	天日手鏡	118				ナビ	ナビ	底茶	底茶	少	且					T430	
133	通横外	14	陶器	壺					ナデ	ナデ	透明	透明	少	且					T429	
134	通横外	5	白磁	壺					ナデ	ナデ	透明	透明	少	且					T433	
135	通横外	13	青磁	壺	126				青磁	青磁	深綠灰	底白	少	且					T432	

第17表 漆製品観察表

(単位:mm)

No	通横	地区	種別	口	底	高	外面部調	内部調	底部調	木底	漆木	備考	実測値
7	SE01	15/6	桶	160			黒漆	黒漆	木底		漆木	内側内	S398
92	SD04	I10	桶	96	52	35	黒漆	黒漆	木底		漆木		F397

第18表 木製品観察表

(単位:mm)

No	通横	地区	種別	長	幅	厚	樹種	木型	参考	実測値
9	SE01	15/6	桶状	196	11	7	针	芯	角	T330
10	SE01	15/6	桶状	215	9	8	针	芯	角	T331
35	SD02	112	糸筒	106	65	27	針	芯	北	T332
59	SD03	111	板状	105	50	45	広	芯	北	S246
60	SD03	111	板状	197	46	47	広	芯	北	S247
61	SD03	111	柱	610	126	106	広	芯	北	M158
96	SD04	I10	板状	126	8	6	针	芯	南	S245
97	SD04	I10	板状	359	100	13	针	芯	南	S244
98	SD04	I10	板状	1490	104	26	広	芯	北	SE02 斜方
99	SD04	I10	板状	166	43	42	広	芯	北	F255
105	SD07	13/4	机	166			ナビ	芯	北	T333

第19表 石製品観察表

(単位:mm)

No	通横	地区	種別	長	幅	厚	重量(g)	参考	実測値
8	SE01	15/6	桶石	135	42	38	426.00	内側	F296
22	SD01	J12	火打石	61	51	56	180.00	上層メノウ	F340
58	SD03	J11	火打	80	(85)	27	120.75	厚層	F312
76	SD03/04	H2	砥石	(46)	(50)	5	15.62	サブトレ	T414
77	SD03/04	I10	石磨	35	27	14	12.67	上層孔径5mm	T410
117	SD08	13	植石	(62)	44	40	85.00		S306

第20表 金属製品観察表

(単位:mm)

No	通横	地区	種別	長	幅	厚	重量(g)	参考	実測値
78	SD03/04	I10	刀子	130	13	5	18.58	武上鉄	T578
95	SD04	I10	摩擦石	72	9	9	4.93	下層	T580
108	SD06	14	刀子	(179)	(11)	(4)	12.69	下層	T579
109	SD06	14	鉋	300					S391
136	通横	15	火鉢	226	7	5	20.03	鉄	T563

辛()は最大値を示す。

第6章 直江西遺跡

第1節 概要

本遺跡では主に弥生時代中期から古墳時代前期の土坑や川跡が見つかっており、同時期の土器や木製品が出土している。ただし川跡は、大半が江戸時代から明治時代の川跡と重複しているため、その大半が失われている。調査区の東方には幾つかピットがあるが、塀や建物を構成するものは認められない。地山は灰白色の軟らかい粘質土で、南西に向かって緩く傾斜している。

第2節 検出遺構

1. 土坑

SK01 (第68図) 調査区の中央、SD03の縁辺にある。東西方向の浅い溝状を呈し、底は細かい凹凸がある。西端は切れているが長さ約3.1m、幅0.6m、深さ約0.2mを測る。埋土は自然に堆積したようなシルトで、古墳時代前期の土師器の細片が数点と小石が出土している。

SK02 調査区の中央、SK01とSD03の間にある。SK01と同様の形態で、SD03に切られる。古墳時代の土師器の細片が数点出土した。それらはまとまりがなく、混入したものようである。

SK03 調査区の中央に孤立して存在する。長軸約2.2mの不整楕円形を呈し、深さ0.15mを測る。弥生・古墳時代の甕の細片が数点出土した。

SK04 調査区の中央、SD03の縁にある。長軸約1.9m、短軸1.2mの楕円形を呈し、深さ約0.2mを測る。埋土は暗灰色の粘質土で、同一個体と思われる古墳時代の甕の体部片が2点出土した。1点は内面に厚くコゲのようなものがついており、1点は外面が煤化している。

2. 溝・川

SD01 (第68図) 遺物への注記は、「SD01」と「南北トレンチ・東西トレンチ 河」の2種類がある。調査区の南半にあり、緩く蛇行して南北方向に流れる。調査区内では幅も底も検出できず、表層とトレンチ部分だけを掘削した。埋土は水平に3層堆積している。上層からは弥生土器、中世陶器、近世陶磁器が小片で数点ずつ出土した。中・下層からは弥生土器、須恵器、中世陶器および近世陶磁器の破片が多く(36Lコンテナの1/3程度)出土し、小石や珪化木10点余りが混じっていた。

SD02 (第68図) 調査区の北端にあり、東西方向に流れる。幅1.3~1.5mであるが、調査区の両端では拡張している。深さ0.5m前後を測る。断面図から、上層と下層で埋土の堆積状況が異なることがわかる。珠洲焼と加賀焼の細片、土錐、石皿の破片、炭化材の細片、小礫が出土した。また、底から完形に近い漆器碗が1点出土した。SD04を切っているため、弥生土器も混入している。

SD03 (第68図) 調査区の南半にあり、北東-南西方向に流れる。SD01に切られて南岸が検出できないため、幅は6.6m以上と推測する。また底も検出できおらず、深さ1.2m以上としか推測できない。埋土は上下に分かれ、水平に堆積する。上層からは弥生土器の細片が数点出土した。また中央部には自然木や板状、棒状、木材が集積していた。下層からは大量(36Lコンテナの1/3程度)の弥生土器、大量の木製品、および礫と堅果の殻が数点出土した。

SD04 (第67図) 調査区の北端にある。北から南へ流れ、SD02に切られる。溝本体は幅0.6m、南へ行くと上面が広がって幅約3.4mになる。深さ0.2mを測り、溝としてはやや浅い。弥生土器が数点出土した。ほとんどが摩滅した細片である。

3. ピット

P01 調査区の中央、SD01 の縁辺にあり、直径約 30 ~ 40 cm、深さ約 23 cm の円筒形に掘られる。埋土は黒色粘質土で、古墳時代の土師器の細片が 1 点出土した。

第3節 出土遺物

1. 土坑

SK01 (第69図) 1 は近江系の甕の、受け口状口縁の細片である。櫛状工具による斜行短線文があり、外面全体が煤化している。弥生時代後期のものであろう。2 はくの字状口縁の甕で、口縁端部から体部外面にかけて煤化している。胎土に大粒の砂礫を含み、体部内面のケズリや、体部外面に残る粘土紐接合痕から、やや作りが粗いように感じられる。

SK03 (第69図) 3 は焼成が甘く内外面がかなり摩滅している。口縁端部は櫛状工具によりキザミが施され、内面も同じ工具による刺突が面的に行われている。弥生時代中期後葉の甕である。

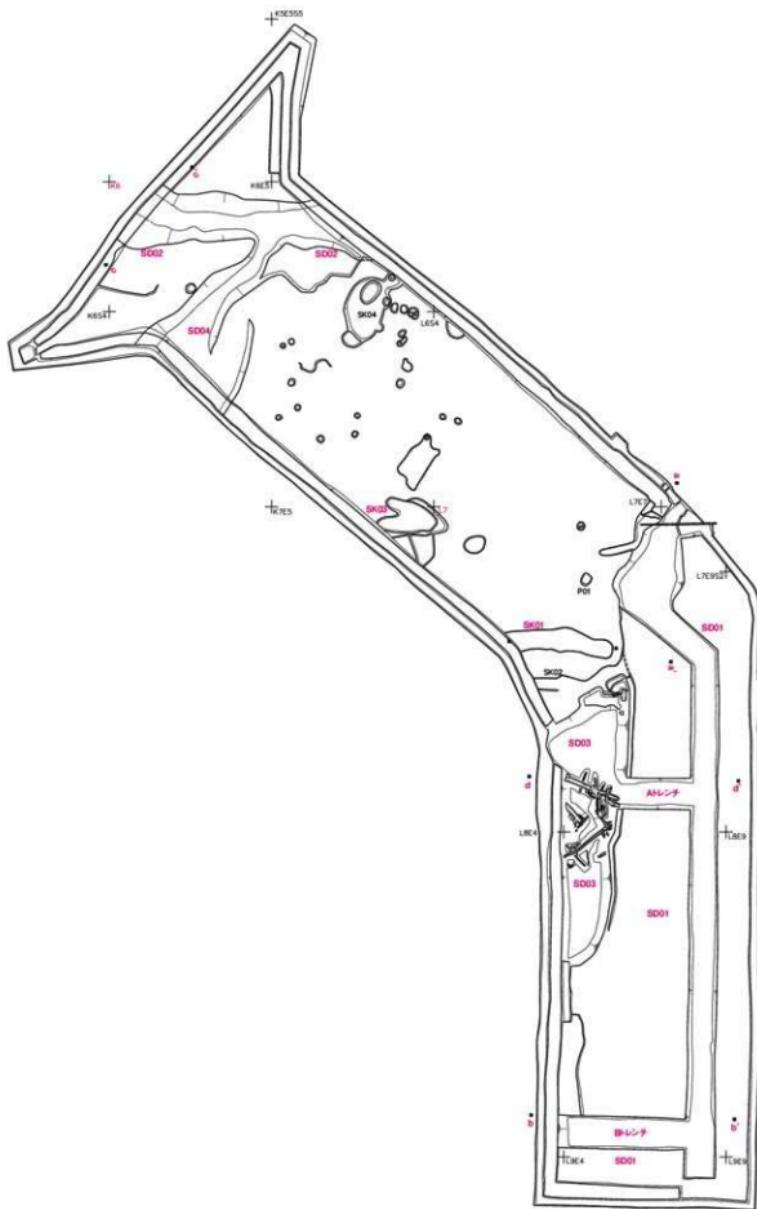
2. 溝・川

SD01 (第69図) 4 ~ 12 を図示した。6・7 は肥前焼の陶器である。6 は 1/4 程度残存している口縁の全てと体部内面一部に灯明痕がある。見込みと高台内外の 3 箇所に砂目がある。17世紀 30 年代のものである。7 は京焼風の碗であるが、高台内は施釉されている。体部外面に鉄絵の一部が見える。体部上半に被熱痕がある。17世紀後半代のものである。9・10 は弥生時代中期後葉の甕である。発色は異なるが胎土や外面の調整および外面全体が煤化している点がよく似ている。12 は越前焼のすり鉢のごく小さな破片で、内面全てが摩耗している。16世紀後半のものと考えられる。

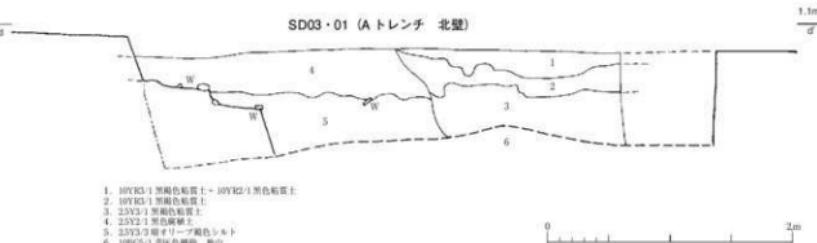
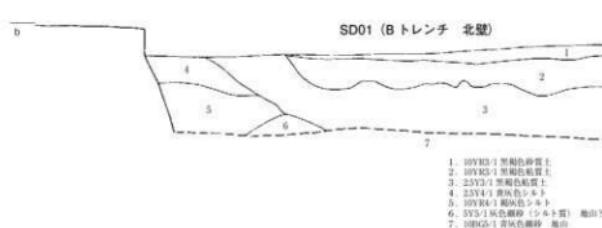
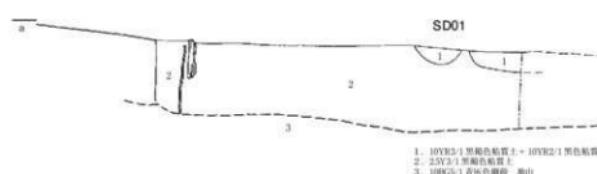
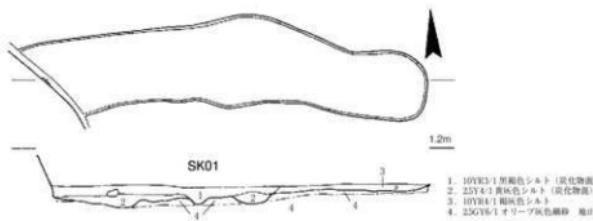
SD02 (第69・72図) 13・14・40・41 を図示した。13 は 18 世紀前半の波佐見焼の皿である。高台端部が著しく摩耗している。14 は石皿である。小さな破片で、内面全体が著しく摩耗している。40 は漆器椀である。表面は所々が剥落しているが、黒漆の地に赤漆の絵が描かれている。高台内に「小」のような記号が、体部外面の 3 方と見込みに肩が、稚拙な筆遣いで描かれている。41 は大型の土鍾である。表面に横方向の指頭圧痕が見られる。孔の上端が側面に及ぶまで著しく摩耗している。

SD03 (第70 ~ 72図) 17 ~ 27 の弥生土器と 28 ~ 39 の本製品を図示した。18・19 は加飾する甕の肩部である。それぞれ櫛状工具により直線文、簾状文、列点文などを施している。18 は外面が煤化しており、上層に同一個体の破片が 2 点ある。20 ~ 23 は弥生中期後葉の甕の口縁で、さまざまな技法で端部を波状に見せている。21 のみ外面全体が煤化している。24・25 はくの字状口縁で、同一個体である可能性がある。24 の口縁の一部が煤化している。図示していないが、有段振四凹口縁の甕も 1 点ある。よって土器の年代は弥生時代中期後葉から終末期の幅をもつが、主体となるのは中期であろう。28 は履物の可能性を想定しているものであり、図の上辺が右上がりであることから左足用と考えられる。上、左右辺は短く立ち上がるが、下辺に立ち上がりは見られない。左側側面の中央付近に略方形の孔があり、紐を通して足の甲にかけたものと考えられる。内面は平滑に調整されているが、図の断面で示したように平坦ではない。裏面は凹凸が多く、使用の痕跡であろう。30 は火鑽臼である。火鑽溝はほぼ等間隔に 8 箇所あいているが、その上で火起こしが行われたのは 4 箇所だけである。32 は丁寧に細工された木針状である。上方は断面円形で幅 1.2 cm の溝を水平に巡らしている。中央から下方は断面長楕円形で、中央が太くなっている。南新保 D 遺跡の溝(金沢市教委 1981)に類例がある。有頭棒、または儀器と分類される(山田昌久 2003)。

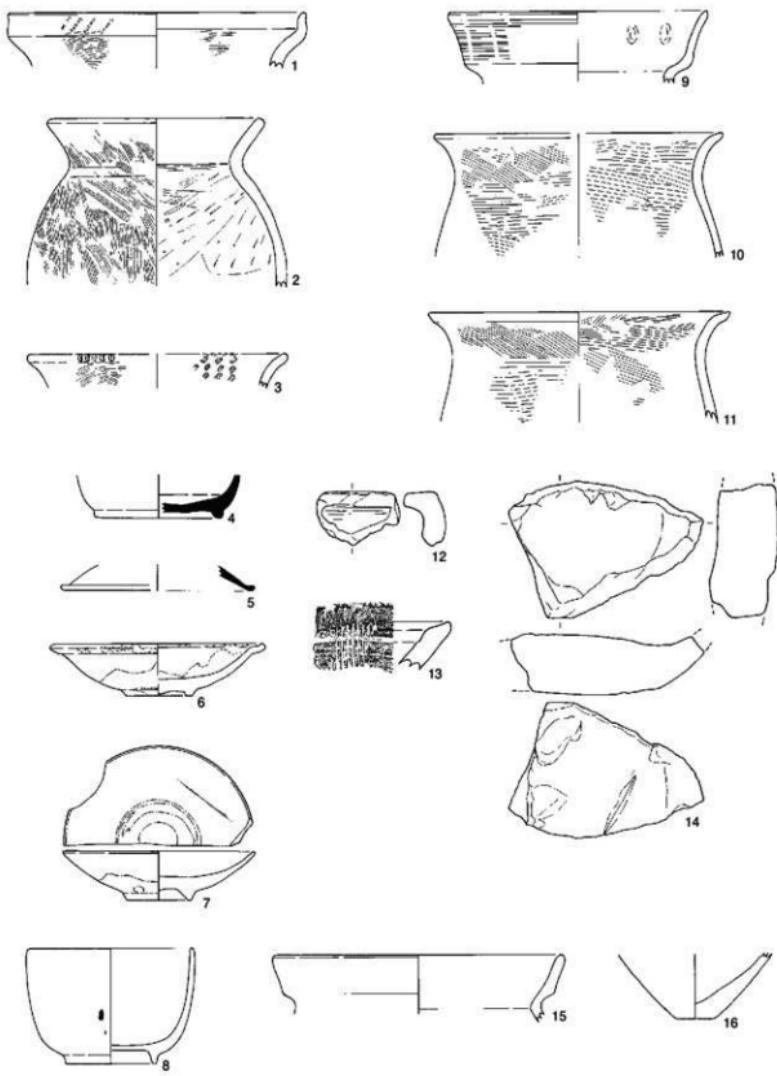
SD04 (第69図) 15 は無文の有段口縁の甕、16 は別個体の甕の底で、内外面に板状工具の施工痕がある。ともに弥生時代終末期のものであろう。



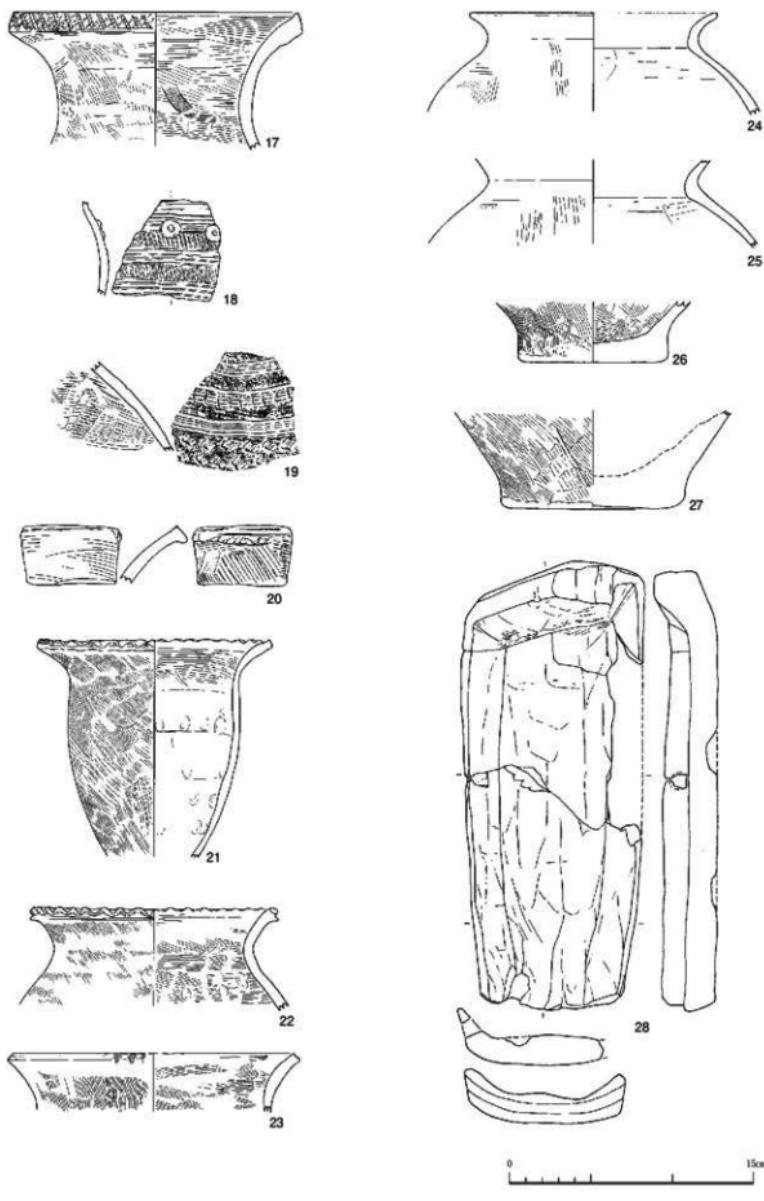
第67図 遺構全体図(S=1/200)



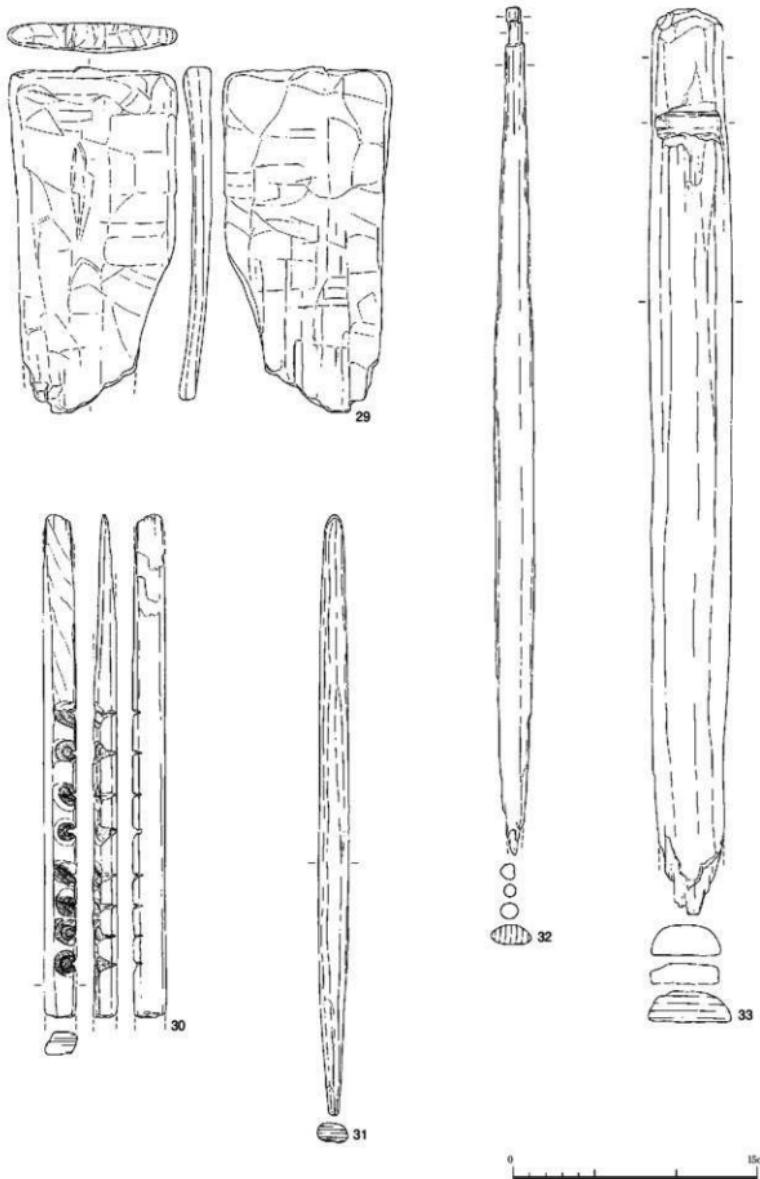
第68図 SK01、SD01、02、03・01 [S=1/40]



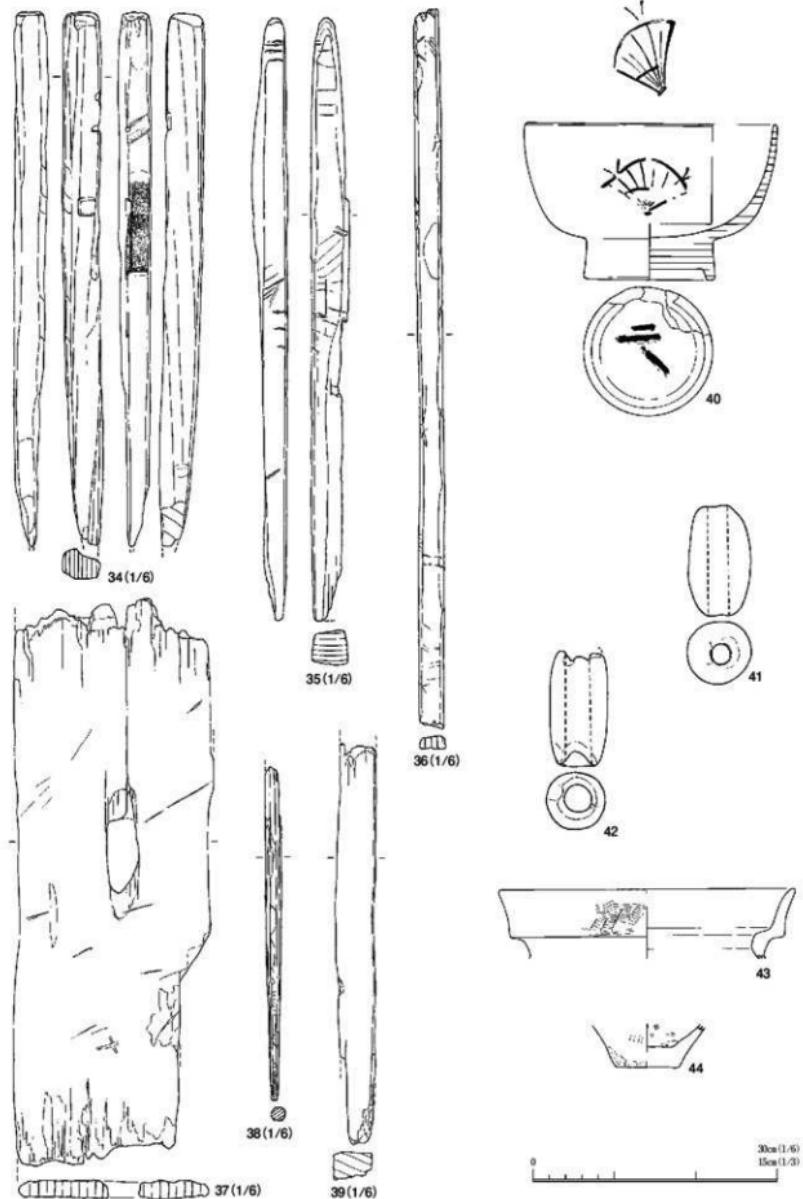
第69図 SK01 (1, 2), 03 (3), SD01 (4~12), 02 (13, 14), 04 (15, 16)出土遺物 (S=1/3)



第70図 SD03出土遺物(1) [S=1/3]



第71図 SD03出土遺物(2) [S=1/3]



第72図 SD03 (34～39)、02 (40、41)、遺構外(42～44)出土遺物 [S=1/3・6]

第21表 土器・陶磁器・土製品観察表

(単位: mm)

No	遺構	地区	種別	器種	口	底	高	外面面	内面型	底底部	外側色調 (褐色面)	内側色調 (黒色面)	縦	横	背	腹	残 成	備考	実測値
1	SKD1	M7	生土	便	182			ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	法被模	法被模	少	少	少	少	是	S308		
2	SKD1	M7	生土	便	126			ナデ・ハケ	ナデ・ハケ・カズリ	板模	板模	且	且	少	少	是	S309		
3	SKD3	L6-7	生土	便				ナデ・ハケ・キザリ	ナデ	法被模	法被模	目	目	少	少	是	S310		
4	SD01	M8	陶器	有台环	79			ナデ	ナデ	ヘラ切り・ナデ	深灰	深灰	目	目	目	目	是	南北トレニテ河	F355
5	SD01	M8	陶器	蓋				ナデ	ナデ	灰	灰	灰	少	少	少	少	是	南北トレニテ河	F357
6	SD01	M8	陶器	目	126	41	32	灰釉	灰釉	無縫	灰	深灰	目	目	目	目	是	南北トレニテ河	F358
7	SD01	M7	陶器	瓶	100	56	71	透明釉	透明釉	透明釉	透明	透明	目	目	目	目	是	東西トレニテ河	F360
8	SD01	M8	陶器	蓋	156			ナデ	ナデ	法被模	法被模	少	多	少	目	是	日本レンジ	S311	
9	SD01	M7	生土	便				ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	板模	板模	目	目	少	少	是	東北トモトレ	F364	
10	SD01	M7	生土	便	184			ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	板模	板模	目	目	少	少	是	東北トモトレ	F366	
11	SD01	M7	瓦器	火鉢				ナデ	ナデ	板模	板模	少	多	少	少	是	S312		
12	SD01	M8	磁器	すり鉢				ナデ	ナデ・部目	深茶灰	灰釉	少	目	目	目	是	南北トレニテ河	F356	
13	SD02	L6	陶器	目	116	40	30	透明釉	透明釉	無縫	透明	白	目	目	目	目	是		F363
15	SD04	L7	生土	便	178			ナデ	ナデ	灰	灰	少	目	少	少	是	S314		
16	SD04	L7	生土	便	24			マツメ	ナデ	板模	板模	少	目	少	少	是	S315		
17	SD03	M7	生土	會	174			ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	板模	板模	少	目	目	目	是	S316		
18	SD03	M7	生土	便				ナデ	ナデ	板模	板模	少	少	少	少	是	S323		
19	SD03	M7	生土	便				ナデ	ナデ	板模	板模	目	目	少	少	是	S324		
20	SD03	M7	生土	便				ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	板模	板模	少	目	少	少	是	S322		
21	SD03	M7	生土	便	142			ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	板模	板模	少	目	少	目	是	S319		
22	SD03	M7	生土	會	148			ナデ・ハケ	ナデ・ハケ・指压	板模	板模	少	目	少	目	是	S320		
23	SD03	M7	生土	便	172			ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	板模	板模	少	目	少	目	是	S321		
24	SD03	M8	生土	便	152			ナデ・ハケ	マツメ・ツクツリ	板模	板模	目	目	目	目	是	S317		
25	SD03	M8	生土	便				ナデ・ハケ	ナデ・ツクツリ	板模	板模	少	目	少	目	是	S318		
26	SD03	M7	生土	便	92			ハケ	ハケ	ナデ・ハケ・工具痕	板模	板模	少	目	少	目	是	S326	
27	SD03	M7	生土	便	114			ハケ	ハケリ	ナデ	板模	板模	目	目	少	目	是	S325	
41	SD02	L7	土製品	土錐	68	39	13				板模	板模	少	目	少	目	是	83.5g	S313
42	遺構外	L6-7	土製品	土錐	70	35	15				板模	板模	目	目	多	少	是	78g	F361
43	遺構外	L5	生土	便	180			ナデ・ハケ	ナデ・ツクツリ		板模	板模	目	目	少	目	是	F360	
44	遺構外	L6-7	生土	便	40			ハケ・ツクツリ・ナデ	ナデ・ツクツリ	ナデ	板模	板模	少	目	目	目	是	F359	

第22表 漆製品観察表

(単位: mm)

No	遺構	地区	種別	口	底	高	外面漆	内面漆	外表面漆	樹脂	木取	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	実測値
40	SD02	L6	漆	154	80	96	黒漆・赤漆	黒漆・赤漆	黒漆・赤漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	S399

第23表 木製品観察表(1)

(単位: mm)

No	遺構	地区	種別	長	幅	厚	樹脂	木取	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	実測値
28	SD03	M7	便	(274)	110	30	漆木	下層木	漆木	F183									
29	SD03	N7	單丸	(201)	104	17	漆木	下層木	漆木	ET29									
30	SD03	M/N7	大頭臼	(309)	18	14	針	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	T311
31	SD03	M/N7	棒状	369	18	11	正丸	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	T312
32	SD03	M/N7	棒状	(521)	24	12	正丸	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	T313
33	SD03	M/N7	棒状	(556)	51	19	正丸	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	T314
34	SD03	M/N7	板	(658)	46	37	針	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	漆木	T315
35	SD03	N7	板・針	(742)	23	22	針	漆木	下層	漆木	S231								

第23表 木製品観察表(2)

(単位: mm)

No	遺構	地区	種別	長	幅	厚	樹脂	木取	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	漆	実測値
36	SD03	M/N7	棒状	894	32	16	針	漆木	ET66										
37	SD03	M/N7	板状	(700)	244	21	針	漆木	ET69										
38	SD03	N7	棒状	(410)	20	16	針	漆木	S230										
39	SD03	N7	棒状	(494)	48	30	正丸	漆木	ET72										

第24表 石製品観察表

(単位: mm)

No	遺構	地区	種別	長	幅	厚	重量(g)	備考	実測値
14	SD02	L5	石器	(116)	(82)	37	350.00		F366

※ ()は最大値を示す。

3. 遺構外(第72図)

国示した他に、弥生土器の細片80点余り、中世の陶器片3点、近世の磁器2点が出土した。42は大型の土錐である。点対称となる位置の孔の端部は摩耗によって深く抉れている。43・44は弥生土器の甕である。43は小さな破片であり、全体に黒斑が広がっている。

第4節 小結

弥生時代中期後葉と弥生時代後期終末から古墳時代前期にかけての2時期に少数のピット、土坑、溝が使われており、集落の縁辺であったと考えられる。その後、16・17世紀にはSD01、18世紀にはSD02が用水として設けられており、周囲は農村となっていたと思われる。

第7章 自然科学分析

第1節 樹種同定

1. 直江ポンノシロ遺跡出土漆・木製品

黒沼 保子(バレオ・ラボ)

1)はじめに

金沢市に位置する直江遺跡群の近世墓から出土した漆器を中心とする木製品7点の樹種同定結果を報告する。なお、漆器については塗膜分析も行なっている(第2節1参照)。

2)試料と方法

試料は、直江遺跡群の墓から出土した17～18世紀の木製品である。SK32から出土した鎌と包丁の柄が各1点(No.1,2)と漆器椀3点(No.3～5)の計5点、SK27から出土した漆器椀1点(No.6)、SK28から出土した1点(No.7)の合計7点である。

方法は、以下の通りである。木取りの確認後、剃刀を用いて試料の3断面(横断面・接線断面・放射断面)から切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。作製したプレパラートは金沢市教育委員会に保管されている。

3)結果

樹種同定の結果、針葉樹はアスナロ1分類群、広葉樹はブナ属とトチノキの2分類群、合計3分類群が確認された。木取りは、鎌・包丁の柄は芯無削出、漆器椀はすべて横木取りであった。結果一覧を表25に示す。

第25表 樹種同定結果一覧

No.	報告No.	遺構	器種	樹種	木取り
1	36	SK32	鎌(柄)	アスナロ	芯無削出
2	35	SK32	包丁(柄)	アスナロ	芯無削出
3	32	SK32	漆器椀	トチノキ	横木取り
4	33	SK32	漆器椀	ブナ属	横木取り
5	31	SK32	漆器椀	ブナ属	横木取り
6	25	SK27	漆器椀	ブナ属	横木取り
7	30	SK28	漆器椀	ブナ属	横木取り

以下に同定された分類群の木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を写真図版10上段に示す。

(1)アスナロ *Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. ヒノキ科 写真図版10上段 1a-1c (No.1)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。樹脂細胞は散在し、放射組織内にも豊富に樹脂を含む。分野壁孔は小型のスギ型～ヒノキ型で、1分野に不揃いに3～4個存在する。

アスナロは温帯に分布する常緑高木で、耐陰性が大きく湿潤地によく生育する。材は加工性・割裂性は中庸だが、耐朽・保存性が高い。

(2)ブナ属 *Fagus* ブナ科 写真図版10上段 2a-2c (No.4)

単独の道管が密に散在し、晩材部ではやや径を減ずる散孔材である。道管の穿孔は单一となる。放射組織はほぼ同性で、單列のもの、2～数列のもの、広放射組織の3種類がある。

ブナ属は温帯に分布する落葉高木で、ブナとイヌブナがある。材は堅硬・緻密で觀性があるが、保存性は低い。

(3)トチノキ *Aesculusturbinata* Blume トチノキ科 写真図版10上段 3a-3c (No.3)

やや小型の道管が單独もしくは数個放射方向に2個複合して均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は單一で、道管内壁にはらせん肥厚がみられる。道管相互壁孔は交互状で大型である。放射組織は單列で、すべて平伏細胞で構成される同性である。放射組織は層階状に配列する。

トチノキは温帯から暖帯に分布する落葉高木で、やや湿り気のある肥沃な土地の深い谷間や中腹の緩傾斜地によく生育する。材は柔らかく緻密であるが、保存性はない。

4)まとめ

鎌および包丁の柄の樹種は、2点ともアスナロで、木取りは芯無削出であった。農工具の柄にはアカガシ亜属が用いられることが多いが、ユズリハ属やクヌギ節などの広葉樹のほか、カヤやヒノキなどの針葉樹まで比較的幅広く利用する傾向があり、周辺に生育する樹木から緻密な材を利用していたと思われる（島地・伊東、1988）。北陸地方では縄文時代から近世まで木製品にスギを多用する傾向があるが、アスナロを含むヒノキ科の樹種も中世以降増加している（山田、1993）。アスナロは割裂性が良く加工が容易であり、材質も緻密であることから、農工具の柄にも有用であったと思われる。

漆器の樹種はトチノキが1点で、残りはすべてブナ属であった。漆器の木取りはすべて横木取りである。ブナ属は堅硬、トチノキは軽軟な材であるが、両者とも緻密な材と言える。漆器に利用される樹種は、全国的にブナ属やトチノキ、サクラ属などの散孔材が多く、時代や地域によってはケヤキなどの環孔材や、スギなどの針葉樹が用いられることがある（島地・伊東、1988）。しかし、地城・時代を通じて使用される樹種は比較的限定されている。近世の北陸地方においても、漆器類はブナ属、ケヤキ、トチノキの利用が多く（山田、1993）、本遺跡の樹種利用と一致すると言える。

引用文献

島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧。259p. 雄山閣出版。

山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史－。

植生史研究特別第1号。242p. 日本植生史学会。

2. 直江北遺跡・直江中遺跡・直江西遺跡・直江ポンノシロ遺跡・直江南遺跡出土漆・木製品

小林克也・藤根 久(パレオ・ラボ)

1)はじめに

直江遺跡群は石川県金沢市に所在し、日本海へは約3km、河北潟と日本海を結ぶ大野川へは約1kmの距離という臨海地帯に立地する、縄文時代～近世にかけての複合遺跡である。直江遺跡群では弥生末から中世・近世にかけての木製品が出土し、それら木製品の保存処理に伴って樹種同定を実施した。なお切片採取は小林と藤根が、同定および本文作成は小林が行った。

2)試料と方法

試料は弥生時代末～古墳時代前半の柵と加工木が各1点、古墳時代前半の木錐が1点、12・13世紀頃の漆器小皿2点と人形、柄が各1点、13・14世紀頃の木筒と木札が各1点、14～16世紀か?と考え

られている漆器椀が1点、中世末～近世か?と考えられている漆器椀が1点の計11点の木製品である。各試料は切片採取前に木取りの確認を行った。また漆器と考えられているNo.1～4の試料について、塗膜分析が行われている(第2節2参照)。

樹種同定は、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)についてカミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡で検鏡および写真撮影を行った。なお、作製したプレパラートは金沢市埋蔵文化財センターに保管されている。

3)結果

同定の結果、針葉樹のスギ1分類群と、広葉樹のヤナギ属とコナラ属コナラ節(以下コナラ節と呼ぶ)、ケヤキ、クワ属、トチノキ5分類群の計6分類群が産出した。スギが最も多く4点、ケヤキが3点、ヤナギ属とコナラ節、クワ属、トチノキが各1点産出した。同定結果を第26表に、第27表に一覧を示す。

第26表 直江遺跡群出土木製品の樹種同定結果

器種/樹種	弥生時代末～古墳時代前半		古墳時代前半		12・13世紀頃		13・14世紀頃		14・16世紀か?		合計
	椿	加工木	木鍵	漆器小皿	人形	柄	木筒	木札	漆器椀	漆器椀	
スギ					1	1	1	1			4
ヤナギ属		1									1
コナラ属コナラ節			1								1
ケヤキ					2				1		3
クワ属				1							1
トチノキ									1	1	
合計	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	11

次に同定された材の特徴を記載し、1分類群1点の光学顕微鏡写真を示す。

(1)スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 写真図版10下段 1a-1c (No.5)

仮道管と放射組織、脂質細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は高さ2～15列となる。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に2個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で切削などの加工が容易な材である。

(2)ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 写真図版10下段 2a-2c (No.9)

小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや密に散在する散孔材である。道管は單穿孔を有する。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、單列となる。

ヤナギ属にはタチヤナギやバッコヤナギなどがあり、水湿に富んだ日当たりのよい土地を好む落葉小高木の広葉樹である。材は軽軟で強度が強く、切削加工などは容易である。

(3)コナラ属コナラ節 *Quercus* *Prinoides* ブナ科 写真図版10下段 3a-3c (No.10)

年輪のはじめに大型の道管が1列並び、晩材部では急に径を減じた、壁が薄くて角張った道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は單穿孔を有する。放射

組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重くて強韌だが切削加工はやや難しい。現在でも薪炭材として多く用いられている。

(4) ケヤキ *Zelkovaserrata* (Thunb.) Makino ニレ科 写真図版11上段 4a-4c (No.4)

年輪のはじめに大型の道管が1~2列並び、晩材部では急に径を減じた道管が集まって集団道管となり、接線~斜線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は單穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が方形となる異性で、1~7細胞幅となる。上下端の方形細胞には結晶がみられる。

ケヤキは温帯から暖帯にかけての肥沃な谷間などに好んで生育する落葉高木の広葉樹である。材はやや重くて硬いが、切削などの加工はそれほど困難でない。

(5) クワ属 *Morus* クワ科 写真図版11上段 5a-5c (No.11)

年輪のはじめに大型の道管が数列並び、徐々に径を減じた道管が晩材部では数個複合し、斜めに断続する半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状、翼状となる。道管は單穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1~2列が直立する異性で、幅1~6列となる。

クワ属にはヤマグワやマグワなどがあり、ヤマグワは温帯から亜熱帯に分布し日本全国の山中にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で保存性が高いが、切削加工はやや困難である。

(6) トチノキ *Aesculusibirinata* Blume トチノキ科 写真図版11上段 6a-6c (No.3)

小型の道管が単ないし2~3個複合して密に散在する散孔材である。道管は單穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で単列である。また放射組織は層階状に配列する。

トチノキは北海道南部から九州にかけての低山地帯の谷筋の肥沃な土地に分布し、特に東北地方に多く見られる落葉高木である。材はやや軽軟で、切削加工は極めて容易である。

4) 考察

同定の結果、弥生時代末~古墳時代前半の木製品では、槽はヤナギ属、加工木はコナラ節、古墳時代前半の木鍤はクワ属であった。木取りでは、槽は板目、加工木は柾目、木鍤は芯持丸木であった。ヤナギ属の槽は、半削の材の中心部を削り貫いた作りであったが、ヤナギ属は軽軟で加工性の良い樹種である。またコナラ節やクワ属は、強韌で耐朽性に優れた樹種である。加工木の用途は不明であるが、槽は材を削り貫くために加工が容易なヤナギ属を用い、重硬さが必要な木鍤では、重硬なクワ属を用いたと考えられる。

また中世~近世代の木製品は、漆器小皿はケヤキ2点、漆器椀はケヤキとトチノキ、人形と木簡、木札、柄はいずれもスギであった。木取りでは漆器小皿と漆器椀は横木取り、人形と木札は板目、木簡は柾目、柄は芯無削出であった。スギは木理が通直で加工性の良い樹種である。またケヤキは重硬であるが加工性が良く、トチノキは軽軟で加工性は極めて良い樹種である。漆器類では加工性が良くて材の狂いが少ないケヤキ、材の狂いが多いが加工性が良く、大木となって材が得られ易いトチノキを用い、人形や木簡などの板状木製品や柄では、木理通直で加工性の良いスギを用いたと考えられる。

金沢市西念・南新保遺跡では、弥生時代後半の槽が6点出土し、スギとヤナギ属、ヤマグワが各2点産出している(鈴木・能城、1992)。そして小松市の千代・能美遺跡では、古墳時代前期の大溝から木鍤が出土し、シキミと同定されている(津田・(株)東都文化財研究所、2003)。シキミはやや重硬で粘りが強い材である。木鍤に重硬なクワ属を用いた直江遺跡群と用材傾向が一致している。小松市の白

江梯川遺跡では12～14世紀を中心とした木製品の樹種同定が行われており、漆器の挽物ではケヤキやカツラ属、トチノキなどが、木筒ではスギが産出している（鈴木・能城、1989）。直江遺跡群の木製品は、石川県内の時期を同じくする遺跡と用材傾向が類似していた。

引用文献

鈴木三男・能城修一(1989)白江梯川遺跡出土木製品の樹種。

石川県埋蔵文化財センター編「白江梯川遺跡Ⅱ」: 93～102. 石川県埋蔵文化財センター.

鈴木三男・能城修一(1992)金沢市西念・南新保遺跡出土木製品の樹種。

金沢市編「金沢市西念・南新保遺跡Ⅲ」: 285～294. 金沢市教育委員会.

津田隆志・(株)東都文化財研究所(2003)出土木製品の樹種同定結果。

小松市教育委員会編「千代・能美遺跡」: 70～72. 写真図版1～3. 小松市教育委員会.

第27表 直江遺跡群出土木製品の樹種同定結果一覧

No.	道路・報告No	遺構	器種	樹種	木取り	法量(mm)	時代
1	ポン・349	SD02	漆器小皿	ケヤキ	横木取り	86×61×15	12・13世紀頃
2	南・102	SI01	漆器小皿	ケヤキ	横木取り	96×77×14	12・13世紀頃
3	ポン・83	SD01	漆器椀	トチノキ	横木取り	底径55、残存器高26	中世末～近世か?
4	中・561	SD02	漆器椀	ケヤキ	横木取り	口径130、器高40	14～16世紀か?
5	中・233	SK23	人形	スキ	板目	377×31×7	12・13世紀頃
6	中・169	SE06	木筒	スキ	板目	190×39×3	13・14世紀頃
7	中・393	SD01	木札	スキ	板目	231×25×4	13・14世紀頃
8	北・未刊	SE01	柄	スキ	芯無削出	181×22×15	12・13世紀頃
9	西・28	SD03	槽	ヤナギ属	板目	274×110×17・30	弥生時代末～古墳時代前半
10	西・29	SD03	加工木	コナラ属コナラ	板目	201×104×17	弥生時代末～古墳時代前半
11	北・未刊	SE06	木鍤	クワ属	芯持丸木	171×78×78	古墳時代前半

*遺跡標の「ポン」は

を、他は直江●遺跡を示す。

直江北遺跡は平成22年度に報告書を刊行しており、直江北遺跡は平成25年度に刊行予定である。

第2節 塗膜分析

1. 直江ポンノシロ遺跡出土漆製品

藤根久・米田恭子(パレオ・ラボ)

1)はじめに

直江遺跡群の調査では、17世紀～18世紀の墓から鎌や包丁あるいは漆器が出土した。ここでは、出土した漆器について、それぞれ塗膜薄片を作製し、顕微鏡観察、X線分析および赤外分光分析を行い、塗膜の構造および材料を検討した。なお、鎌や包丁の柄と漆器については樹種同定が行われている(第1節1参照)。

2)試料と方法

分析試料は、墓から出土した漆器5点である(第28表)。各塗膜試料は、第28表に示す各漆器の塗膜層を本胎とともに極少量採取した。なお、試料No.7以外の漆器は、内面と外面からそれぞれ試料を採取し、試料No.7は内面の漆絵部から採取した。塗膜試料は、高透明エポキシ樹脂を使用して試料を包埋した後、薄片作製機を用いて断面の薄片を作製した。

各塗膜薄片は、あらかじめ塗膜構造を調べるために光学顕微鏡で観察した。

無機成分を調べるためにエネルギー分散型X線分析装置が付属した走査型電子顕微鏡で調べた。観察および測定は、走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製JSM-5900LV、以後SEM）による反射電子像の観察および付属するエネルギー分散型X線分析装置（同JED-2200）による定性・簡易定量分析を行った。

また、漆成分を調べるために、赤外分光分析を行った。試料は、各塗膜の表面部分において手術用メスなどを用いて2mm角程度を薄く削り取った。採取した試料は、押しつぶして厚さ1mm程度に截断した臭化カリウム(KBr)結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光㈱製FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

第28表 塗膜分析を行った漆器椀とその詳細

試料No.	種類	報告No.	造構	部位	塗り	その他の特徴	分析位置
3	漆器椀	32	SK32	内面	赤色		口縁部
				外面	黒色	“—”の赤色文字	高台側面
4	漆器椀	33	SK32	内面	赤色		口縁部
				外面	黒色	褐色漆絵	脚部破断部
5	漆器椀	31	SK32	内面	赤色		口縁部
				外側底面	黒色	底面赤色漆文字	底面
6	漆器椀	25	SK27	内面	赤色		口縁部
				外面	黒色	赤色漆絵	高台側面
7	漆器椀	30	SK28	内面	黒色	赤色漆絵	赤色漆絵

3)結果および考察

塗膜薄片の光学顕微鏡観察および分析の結果は、以下の通りである。

なお、各試料の塗膜についてのX線分析は、測定位置を写真図版11下段～13の1bおよび2bに、測定結果を第29表に示した。また、各試料の表面部分の赤外吸収スペクトル図は写真図版11下段～13

第29表 各漆器椀塗膜層のX線分析結果

(単位%)

試料No.	遺物	測定面	点No.	C	Na ₂ O	Al ₂ O ₃	SiO ₂	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	FeO	HgO	Total
3	漆器椀	内面	1	62.28	—	—	1.53	9.65	—	—	—	0.74	25.80	100.00
			2	62.54	—	0.29	0.96	9.39	—	0.44	—	0.63	25.77	100.02
			3	76.06	—	1.20	0.61	8.20	—	4.93	—	9.01	—	100.01
		外面	1	62.25	—	4.82	4.19	4.16	0.32	5.46	—	18.81	—	100.01
			2	91.32	—	—	0.51	3.02	0.43	0.58	—	4.14	—	100.00
		内面	1	34.55	—	0.19	0.12	1.63	0.06	0.18	0.09	63.18	—	100.00
			2	38.25	—	1.54	0.54	1.78	—	0.29	0.00	57.61	—	100.01
			1	49.32	—	—	0.29	2.31	—	0.07	—	48.01	—	100.00
			2	54.08	0.12	—	0.39	2.95	0.20	0.45	—	41.80	—	99.99
5	漆器椀	内面	1	60.28	0.49	0.09	30.91	0.38	0.03	0.24	0.13	7.45	—	100.00
			2	27.43	—	0.57	1.71	0.35	—	0.29	0.08	69.57	—	100.00
			3	84.58	0.85	0.60	0.45	2.32	0.11	1.65	—	9.43	—	99.99
6	漆器椀	内面	1	66.94	0.35	0.18	2.22	7.19	—	1.69	—	1.78	19.66	100.01
			2	73.68	0.29	0.23	1.12	6.18	—	1.01	0.41	3.72	13.36	100.00
		外面	3	92.21	0.12	—	1.15	5.60	0.12	—	0.18	0.62	—	100.00
			1	62.90	0.87	8.91	22.67	—	0.11	3.41	0.09	1.05	—	100.01
			2	89.18	0.35	0.93	—	0.68	—	2.18	—	6.68	—	100.00
7	漆器椀	内面	1	70.86	—	0.38	3.05	6.69	0.03	1.90	—	1.21	15.88	100.00
			2	68.62	0.78	1.37	1.24	7.74	0.19	1.56	—	1.43	17.07	100.00
			3	90.52	0.94	0.93	1.21	3.29	0.21	1.71	—	1.19	—	100.00

に示した。縦軸が透過率(%)、横軸が波数(Wavenumber (cm⁻¹) : カイザー)である。各スペクトル図は、ノーマライズしており、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す(第18表)。

[漆器椀No.3]

この漆器椀は、内面には赤色漆、外面には黒色漆が塗布され、外側面に“一”的赤色文字が書かれている(図版1-1a・1b)。

口縁部内面から採取した赤色塗膜の観察では、木胎のほか下地層b層、塗膜層c1層～c3層からなる。下地層b層は微細な炭粉からなる。塗膜c1層はやや不透明の褐色層、塗膜c2層は透明の黄褐色層、塗膜c3層は不透明な黒色層である(写真図版11下段-1a・1b)。塗膜c3層のX線分析では、水銀(HgO)が最大25.80%含まれており(第29表)、水銀朱からなる赤色顔料が含まれていたと考えられる。

高台外側面から採取した黒色塗膜の観察では、木胎のほか下地層b層、塗膜層c1層およびc2層からなる。下地層b層は微細な炭粉からなる。塗膜c1層はやや不透明の赤褐色層、塗膜c2層は透明の黄褐色層である(写真図版11下段-2a・2b)。

内面および外面の表面塗膜層の赤外分光分析では、いずれも漆の成分であるウルシオールの吸収ピーク(No.6～No.8)と一致しており、漆塗膜層である(写真図版11下段-3)。

[漆器椀No.4]

この漆器椀は、内面には赤色漆、外面には黒色漆が塗布され、外側面に褐色の漆絵が描かれている。口縁部内面から採取した赤色塗膜の観察では、木胎のほか下地層b層、塗膜層c1層およびc2層からなる。下地層b層は微細な炭粉からなる。塗膜c1層はやや不透明～不透明の黒色層、塗膜c2層は不透明の黒色層である(写真図版12上段-1a・1b)。塗膜c2層のX線分析では、鉄(Fe₂O₃)が最大63.18%含まれており(第29表)、ベンガラからなる赤色顔料が含まれていたと考えられる。

褐色の漆絵のある胴部外側の破断部から採取した黒色塗膜の観察では、木胎のほか下地層b層、塗膜層c1層～c3層からなる。下地層b層は微細な炭粉からなる。塗膜c1層は透明の黄褐色層、塗膜c2層は不透明の黒色層である(写真図版12上段-2a・2b)。塗膜c3層のX線分析では、鉄(Fe₂O₃)が最大48.01%含まれており(第29表)、ベンガラからなる赤色顔料が含まれていたと考えられる。

内面および外面の表面塗膜層の赤外分光分析では、いずれも漆の成分であるウルシオールの吸収ピーク(No.6～No.8)と一致しており、漆塗膜層である(写真図版12上段-3)。

[漆器椀No.5]

この漆器椀は、内面には赤色漆、外側面は赤色漆、外側底面には黒色漆が塗布され、底面に褐色の漆文字が書かれている。

口縁部内面から採取した赤色塗膜の観察では、木胎のほか下地層b層、塗膜層c1層およびc2層からなる。下地層b層は微細な炭粉からなる。塗膜c1層はやや不透明の褐色層、塗膜c2層は不透明の黒色層である(写真図版12下段-1a・1b)。塗膜c2層のX線分析では、鉄(Fe₂O₃)が最大69.57%含まれていたことから(第29表)、ベンガラからなる赤色顔料が含まれていたと考えられる。なお、不純物と

第30表 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収 No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

して鉱物類も多く含まれていた(第29表の点No.1)。

外側底面から採取した黒色塗膜の観察では、木胎のほか下地層b層、塗膜層c1層およびc2層からなる。下地層b層は微細な炭粉からなる。塗膜c1層は透明の赤褐色層、塗膜c2層は透明の黄褐色層である(写真図版12下段-2a・2b)。なお、表面部は酸化層である。

内面および外面の表面塗膜層の赤外分光分析では、いずれも漆の成分であるウルシオールの吸収ピーク(Na6~Na8)と一致しており、漆塗膜層である(写真図版12下段-3)。

[漆器椀No.6]

この漆器椀は、内面には赤色漆、外面には黒色漆が塗布され、外側面に赤色の漆絵が描かれている。口縁部内面から採取した赤色塗膜の観察では、木胎のほか下地層b層、塗膜層c1層およびc2層からなる。下地層b層は微細な炭粉からなる。塗膜c1層はやや不透明の褐色層、塗膜c2層は不透明の黒色層である(写真図版13上段-1a・1b)。塗膜c2層のX線分析では、水銀(HgO)が最大19.66%含まれており(第29表)、水銀朱からなる赤色顔料が含まれていたと考えられる。

外側底面から採取した黒色塗膜の観察では、木胎のほか下地層b層、塗膜層c1層およびc2層からなる。下地層b層は微細な炭粉からなる。塗膜c1層はやや不透明の赤色層、塗膜c2層は透明の黄褐色層である(写真図版13上段-2a・2b)。なお、表面部は酸化層である。

外面の表面塗膜層の赤外分光分析では、いずれも漆の成分であるウルシオールの吸収ピーク(Na6~Na8)と一致しており、漆塗膜層である(写真図版13上段-3)。なお、外面の表面塗膜層の赤外分光分析では、水銀の影響のためウルシオールの吸収ピークは確認できなかった。

[漆器椀No.7]

この漆器椀は、内面・外面とも黒色漆が塗布され、内面に赤色漆絵が描かれている。

内面底部の赤色の漆絵部から採取した赤色塗膜の観察では、木胎のほか下地層b層、塗膜層c1層およびc2層からなる。下地層b層は微細な炭粉からなる。塗膜c1層は透明の黄褐色層、塗膜c2層は不透明の黒色層である(写真図版13下段-1a・1b)。塗膜c2層のX線分析では、水銀(HgO)が最大17.07%含まれており(第29表)、水銀朱からなる赤色顔料が含まれていたと考えられる。

内面の表面塗膜層の赤外分光分析では、いずれも漆の成分であるウルシオールの吸収ピーク(Na6~Na8)と一致しており、漆塗膜層である(写真図版13下段-2)。

第31表 各漆器椀の塗膜分析結果(塗膜数、無機成分、下地成分、塗膜材料)

試料 No.	種類	報告 No.	造構	部位	塗り	分析位置	下地	塗膜層		
								c1層	c2層	c3層
3 漆器椀	32	SK32		内面	赤色	口縁部	微細な炭粉	やや不透明の褐色層	透明の黄褐色層	赤色漆膜(水銀朱)
				外面	黒色	高台側面	微細な炭粉	やや不透明の赤褐色層	透明の黄褐色層	-
4 漆器椀	33	SK32		内面	赤色	口縁部	微細な炭粉	やや不透明~不透明の黒色層	赤色漆膜(ベンガラ)	-
				外面	黒色	胴部破断部	微細な炭粉	透明の黄褐色層	不透明の黒色層	漆絵~褐色漆膜(ベンガラ)
5 漆器椀	31	SK32		内面	赤色	口縁部	微細な炭粉	やや不透明の褐色層	赤色漆膜(ベンガラ)	-
				底面	黒色	底面	微細な炭粉	透明の赤褐色層	透明の黄褐色層	-
6 漆器椀	25	SK27		内面	赤色	口縁部	微細な炭粉	やや不透明の褐色層	赤色漆膜(水銀朱)	-
				外面	黒色	高台側面	微細な炭粉	やや不透明の赤色層	透明の黄褐色層	-
7 漆器椀	30	SK28		内面	黒色	赤色漆絵	微細な炭粉	透明の黄褐色層	漆絵~赤色漆膜(水銀朱)	-

4) おわりに

直江遺跡群から出土した漆器碗について、それぞれ塗膜薄片を作製し、顕微鏡観察、X線分析および赤外分光分析を行い、塗膜の構造および材料を検討した。

その結果、漆器碗No.3とNo.6の内外面には、下地層および塗膜2層があり、漆に水銀朱を混ぜた赤色漆を内面に塗布した漆器碗であった。漆器碗No.4とNo.5の内外面には、下地層および塗膜2層があり、漆にベンガラを混ぜた赤色漆を内面に塗布した漆器碗であった。なお、漆器碗No.4の外面にはベンガラを混ぜた褐色の漆絵が描かれていた。漆器碗No.7内面には、下地層および塗膜1層があり、水銀朱を混ぜた赤色漆絵が描かれていた。

2. 直江中遺跡・直江ポンノシロ遺跡・直江南遺跡出土漆製品

藤根 久(パレオ・ラボ)

1)はじめに

直江遺跡群は石川県金沢市に所在する縄文時代～近世にかけての複合遺跡である。遺跡では中世～近世にかけての木胎漆器が出土した。ここでは出土した木胎漆器の塗膜について、顕微鏡観察、X線分析および赤外分光分析を行い、塗膜の構造および材料を検討した。なお、これらの木胎漆器の樹種同定を行っている(第1節2参照)。

2)試料と方法

分析対象試料は、木胎漆器4点である(第32表)。

各試料の内外面の塗膜を極少量採取した後、塗膜断面のプレパラートを作製し、光学顕微鏡による観察、X線分析および塗膜表面の赤外分光分析を行った。

第32表 塗膜分析等を行った漆器試料

No	遺跡・報告番号	遺構	品名	樹種	木取り	法量(mm)	備考	時代	塗膜分析位置
1	ポン・349	SD02	漆器小皿	ケヤキ	横木取り	86×61×15	内外面黒漆	12・13世紀頃	内面
2	南・102	SI01	漆器小皿	ケヤキ	横木取り	96×77×14	内外面黒漆	12・13世紀頃	内面
3	ポン・83	SD01	漆器碗	トチノキ	横木取り	底径55 残存高26	外面朱漆外表面底面に達文字	中世末～近世?	外側
4	中・561	SD02	漆器碗	ケヤキ	横木取り	底径55 残存高26	内外面黒漆	14～16世紀か?	内面

* 遺跡標の「ポン」は直江ポンノシロ遺跡を、他は直江●遺跡を示す。

直江中遺跡は平成22年度に報告書を刊行しており、直江北遺跡は平成25年度に刊行予定である。

各試料は、包埋樹脂に注型用高透明エポキシ樹脂を使用して試料を包埋した後、薄片作製機を用いて断面の薄片を作製した。薄片試料は、アランダムの#3000、ダイヤモンド粒子の1 μmの順で研磨し、観察・分析面とした。

各薄片は、あらかじめ塗膜構造を調べるために光学顕微鏡で観察した。その後、エネルギー分散型X線分析装置が付属した走査型電子顕微鏡を用いて無機成分を調べた。光学実体顕微鏡による観察の後、走査型電子顕微鏡(日本電子株式会社製JSM-5900LV、以後SEM)による反射電子像の観察および付属するエネルギー分散型X線分析装置(同JED-2200)による定性・簡易定量分析を行った。

また、漆成分を調べるために、赤外分光分析を行った。試料は、各塗膜の表面部分において手術用メスなどを用いて0.2 mm角程度を薄く削り取った。採取した試料は、押しつぶして厚さ1.0 mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計(日本分光㈱FT/IR-410、IRT-30-16)を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

3)結果および考察

塗膜薄片の光学顕微鏡観察および分析の結果は、以下の通りである。

漆器小皿(試料No1)

内面塗膜は、下地層(b層)がやや不明瞭であったが、木胎(a層)、黒色の塗膜c1層および透明褐色の塗膜c2層からなる(写真図版14上段-1a)。X線分析では、黒色の塗膜層c1層において鉄(FeO)が56.27および64.01%検出され(写真図版14上段-1b、第21表)、鉄分が含まれていると考えられる。塗膜層c2層の赤外分光分析では、ウルシオール(吸収ピークNo6~8)と一致したことから漆である(写真図版14上段-c)。

漆器小皿(試料No2)

内面塗膜は、下地層(b層)、塗膜層が一部であるが黒色の塗膜c1層からなる(写真図版14上段-2a)。下地層(b層)は、10 μm以下の炭粒が含まれ、X線分析においてカリウム(K2O)などが多く含まれていた(写真図版14上段-2b、第33表)。塗膜層c1層の赤外分光分析では、ウルシオール(吸収ピークNo6~8)と一致したことから漆である(写真図版14上段-c)。

漆器椀(試料No3)

内面塗膜は、木胎(a層)、下地層(b層)、透明褐色の塗膜c1層および黒色の塗膜c2層(反射では赤色を呈す)からなる(写真図版14下段-3a)。X線分析では、黒色の塗膜層c2層において鉄(FeO)が88.23および90.80%検出され(写真図版14下段-3b、第33表)、ベンガラが含まれていると考えられる。なお、透明褐色の塗膜c1層では若干鉄が含まれるものカリウム(K2O)などの元素が多い。また、塗膜層c2層の赤外分光分析では、ウルシオール(吸収ピークNo6~8)と一致したことから漆である(写真図版14下段-c)。

漆器椀(試料No4)

内面塗膜は、木胎(a層)、下地層(b層)、黒色の塗膜c1層および透明褐色の塗膜c2層からなる(写真図版14下段-4a)。X線分析では、黒色の塗膜層c1層において鉄(FeO)が62.56%検出され(写真図版14下段-4b、第33表)、鉄分が含まれていると考えられる。なお、透明褐色の塗膜c2層では鉄が多く含まれるが塗膜c1層の一部が検出されたものと考えられる。また、塗膜層c2層の赤外分光分析では、やや吸収が小さいもののウルシオール(吸収ピークNo6~8)とほぼ一致したことから漆である(写真図版14下段-c)。

第33表 塗膜のエネルギー分散型X線分析結果

(単位%)

試料No	点No.	C	Na ₂ O	Al ₂ O ₃	SiO ₂	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	FeO	HgO	Total	
1	1	1.35	3.17	8.36	0.70	16.97	2.45	8.52	0.87	1.33	56.27	100.0	
	2	1.21	1.77	1.22	0.37	6.42	1.39	21.52	0.13	1.94	64.01	100.0	
2	1	4.09	9.46	11.35	1.95	30.74	7.21	25.46	3.30	-	6.43	100.0	
	2	0.46	7.46	11.97	4.67	29.08	5.11	23.06	3.67	3.06	11.45	100.0	
3	1	0.67	1.84	3.37	0.32	0.71	0.04	2.69	-	2.13	88.23	100.0	
	2	-	1.47	1.93	0.54	0.86	-	2.49	0.04	1.88	90.80	100.0	
4	1	-	0.55	7.67	2.27	2.66	7.97	2.55	39.94	-	1.24	35.15	100.0
	2	0.35	6.68	5.57	2.20	4.40	0.50	17.22	0.53	-	62.56	100.0	

写真図版14に、各試料表面部の赤外吸収スペクトル図を示す(試料が実線、生漆が点線で示す)。縦軸が透過率(%R)、横軸が波数(Wavenumber (cm⁻¹) : カイザー)である。なお、スペクトルは、ノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す(第34表)。赤外分光分析を行った結果、いずれの試料の表面部分において漆の成分であるウルシオールの吸収ピーク(No.6～No.8)と一致したことから、漆と同定された。

4) おわりに

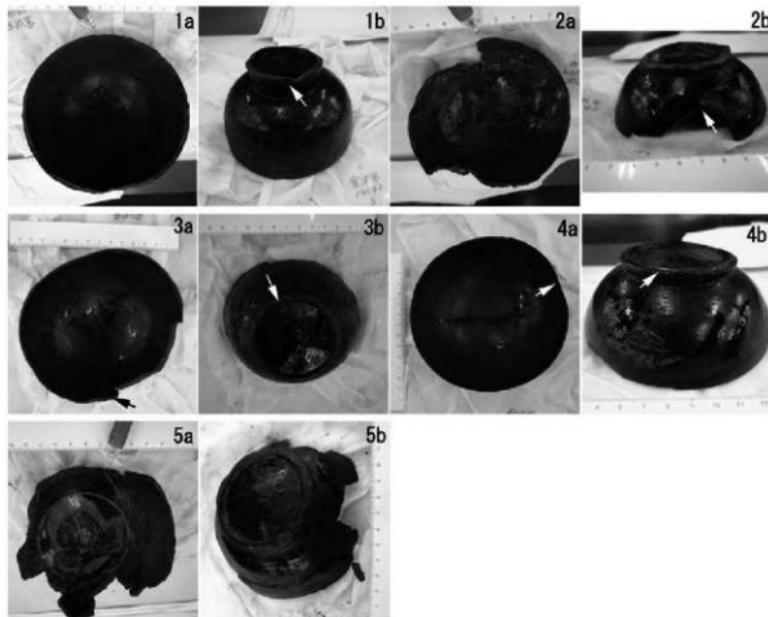
中世から近世の漆器小皿および漆器椀の各外面と内面の塗膜を観察し、無機成分と漆について検討した。その結果、

12・13世紀頃の試料No.1の漆器小皿と中世末から近世?の試料No.3の漆器椀では、鉄分を混ぜた黒色塗膜c1層と透明褐色塗膜c2層の2層塗りで、塗膜表面は漆であった。なお、12・13世紀頃の試料No.2の漆器小皿は、黒色塗膜c1層のみであったが、本来試料No.1や試料No.3と同様の塗膜構造をもつと考えられる。

14世紀から16世紀か?と想定されている試料No.3は、ベンガラを含む黒色の塗膜c1層(反射では赤色を呈す)および透明褐色の塗膜c2層の2層塗りで、塗膜表面は漆であった。この漆器椀は、透明漆を塗った後に、全体にベンガラを混ぜた赤漆を塗ったことが明らかとなった。

第34表 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収 No	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	



第73図 塗膜分析を行った漆器椀と採取位置

第8章 総括

ここでは、旧直江村の在所を取り巻くように展開している本書で扱った遺跡および直江中遺跡（金沢市2011）、直江北遺跡をひとつの遺跡群と捉えて、時代ごとに動向を述べることで総括とする。なお、直江北遺跡については現在整理中であるので、現段階での見解とさせていただきたい。

【縄文時代晚期】ポンノシロ・中・北遺跡（直江省略、以下同）

ポンノシロ遺跡の鞍月文化会館建設用地の調査（金沢市2012）では、地山がやや汚れたような土質の箇所から、明確な遺構プランをもたない状態で晚期後葉下野式期の土器がまとまって出土している。地山形成時に入り込んだのであろうか。中遺跡では、川の縁辺から同じように晚期後葉下野式期の土器が集中して出土しており、同様の地山形成時の所産と考えられる。北遺跡では、晚期の川と土坑が見つかっている。川からは土器の他、ヒスイ製とみられる勾玉が出土している。川沿いに見つかった土坑は、クルミなどが出土していることから、貯蔵穴の可能性が考えられる。また、柱穴の可能性がある大きな穴も検出されている。

【弥生時代中期】ポンノシロ・西・北遺跡

ポンノシロ遺跡では溝、川から中期後半の土器が比較的まとまって出土している。部分的な調査であるために遺構の詳細は不明ながら、西遺跡でも川と考えられる流路から中期後半の土器がまとまって出土している。北遺跡では集落を囲繞するような中期後半の溝が見つかっているが、周辺に建物などは見つからず、土器も少ない。

【弥生時代終末期～古墳時代初頭】ポンノシロ・西・北遺跡

ポンノシロ遺跡では川から当該期の遺物がまとまって出土しており、近隣に集落域が想定される。約50m西に所在する大友F遺跡で当該期の集落が見つかっている。西遺跡でも川が見つかっているが、建物などは確認できていない。こちらも隣接する大友E遺跡で当該期の建物など集落域が見つかっている。特筆すべきは履物と想定される木製品の出土であり、同川からは弥生時代中期後半の土器群も出土しているが、形態的にこの時期に位置づけるのが妥当であろう。出土事例が少なく、貴重な事例といえる。北遺跡では溝や井戸などが見つかっており、集落域を区画するような溝も検出されている。建物には掘立柱建物や布堀建物があり、井戸は素掘りのものや4枚の板材を方形に組んで井戸側としているものが見つかっている。

【古墳時代前・中期】ポンノシロ・ニシヤ・西・北遺跡

ポンノシロ遺跡では川から前期の土師器や中期の須恵器が出土している。ニシヤ遺跡では、当該期の遺構に伴うわけではないが、中期の須恵器が複数出土しており、周辺に集落が展開していることを予想させる。西遺跡では前期の土坑が見つかっているが、隣接する大友E遺跡では当該期の集落が確認できる。北遺跡で集落を区画すると考えられる溝と掘立柱建物、井戸、土坑などが見つかっている。溝からは多くの遺物が出土しており、井戸からは完形の土器や木製品が出土している。掘立柱建物の柱穴には柱根が残っており、その多くは平面形が長方形の柱材であった。

【奈良・平安時代】ポンノシロ・ニシヤ・中・北遺跡

ほとんどの遺跡で、溝や土坑、川などから土師器や須恵器が出土しているが、建物が見つからず、集落の構造が定かではない。ポンノシロ遺跡では川から綠釉陶器や灰釉陶器、墨書き土器などが出土しており、一般集落の出土遺物とは様相を異にする。9世紀代が主体であるが、平安時代後半の土師器なども多数出土している。墨書き土器には「殿」、「依」、「井」などがある(第74図)。ニシヤ遺跡では、土坑が見つかっている。中遺跡では9世紀を主体とする遺物群が中世の川などから出土しており、「殿カ」墨書き土器や綠釉陶器、灰釉陶器などがある。北遺跡では「諸刀自女」と書かれた墨書き土器が出土している。

【平安時代末～鎌倉・室町時代】南・ポンノシロ・ニシヤ・中・北遺跡

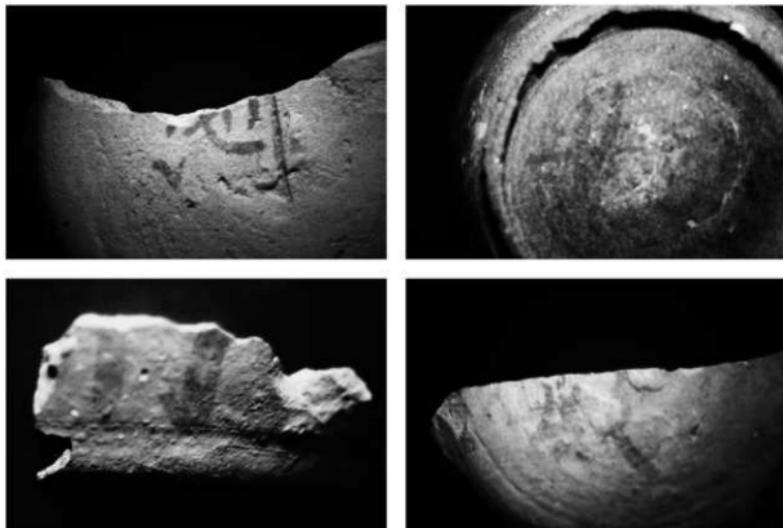
南遺跡で13世紀前半から14世紀前半頃の複数の井戸と竪穴遺構が見つかっている。建物は未検出であるが、近隣に展開しているのであろう。ポンノシロ遺跡では川から16世紀までの遺物が出土している。貿易陶器は中世前期の白磁が目立っているので、12・13世紀が主体となろう。15・16世紀の遺物も定量見られ、このころには文献でも直江の名が見られることから(第2章参照)、旧在所を中心とした位置に当該期の集落が存在した可能性が考えられる。ニシヤ遺跡でも、建物跡は確認できないが、鎌倉時代の井戸が見つかっている。また、近世に埋没する溝を複数検出しているが、底付近で16世紀頃の遺物が出土する溝については、中世段階で掘削したものが近世にも継続して使用されたものと推定している。中遺跡では鎌倉時代から南北朝時代頃の掘立柱建物や井戸、土坑、川などを確認しており、川からは杭と横板を用いた治水施設のような遺構が見つかっている。北遺跡では柱穴から白磁壺類の破片が出土した12世紀頃の大型掘立柱建物や呪符木簡が出土した鎌倉時代の井戸、平安時代末から鎌倉時代のものとみられる鳥帽子が出土した方形土坑などが見つかっている。鎌倉時代頃からは広範囲に遺構が分布しており、中世の莊園開発に伴うかは不明ながら、人々の活動が活発になっているのを感じる。

【江戸時代】南・ポンノシロ・ニシヤ・西・中・北遺跡

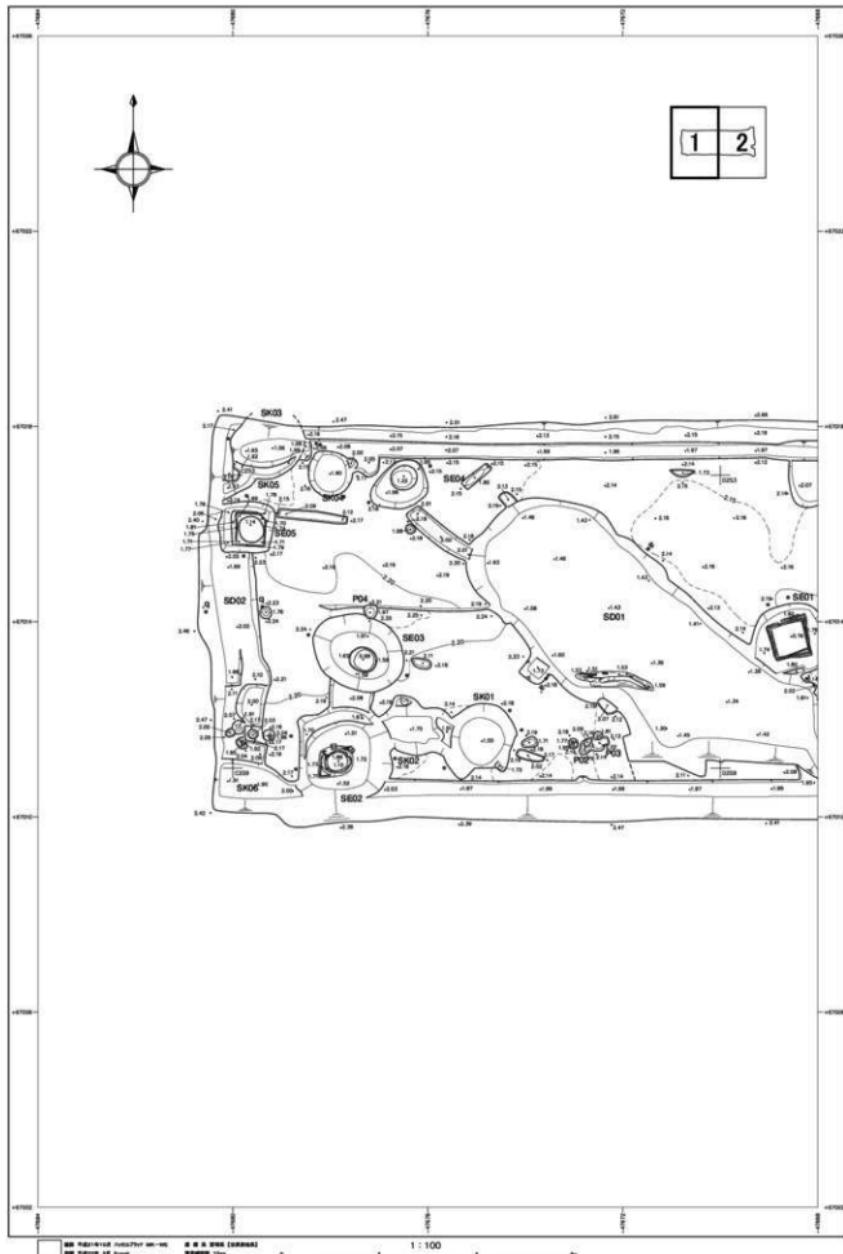
全ての遺跡で当該期の溝や川を検出している。ここでは、ポンノシロ遺跡の鍋被り葬についてのみ記述する。第4章で報告したが、概ね長方形木棺と早桶木棺が近世段階のもので、副葬品も定量見られる。その他の正方形に近い木棺や甕棺は近世末期から近代のものと推定している。鍋被り葬については、長方形木棺と副葬品の漆器から、詳細年代は絞り切れていないが近世段階のものと考えている。鍋被り葬は15世紀から18世紀にかけて東日本の太平洋側で出土事例が知られるが、出土人骨の鑑定結果や伝承調査によって、ハンセン病などの特殊な病気の感染者が亡くなった際や盆中に亡くなった人に鍋を被せる風習であった可能性が指摘されている(桜井2004)。埋葬場所については村境での単独葬の場合と墓域に埋葬される場合があり、ポンノシロ事例は後者となる。また、墓地の調査が多い江戸市中では確認されておらず、金沢城下町で見つかっていない状況と類似している。今回の事例がどのような理由で鍋被り葬となったかは明らかにできないが、これまで事例に乏しかった日本海側の北陸にも確実に鍋被り葬が存在することを提示できたこと、また江戸時代の村の墓地および埋葬施設様相も不十分ながら提示できたことは大きな成果といえよう。

【引用・参考文献】

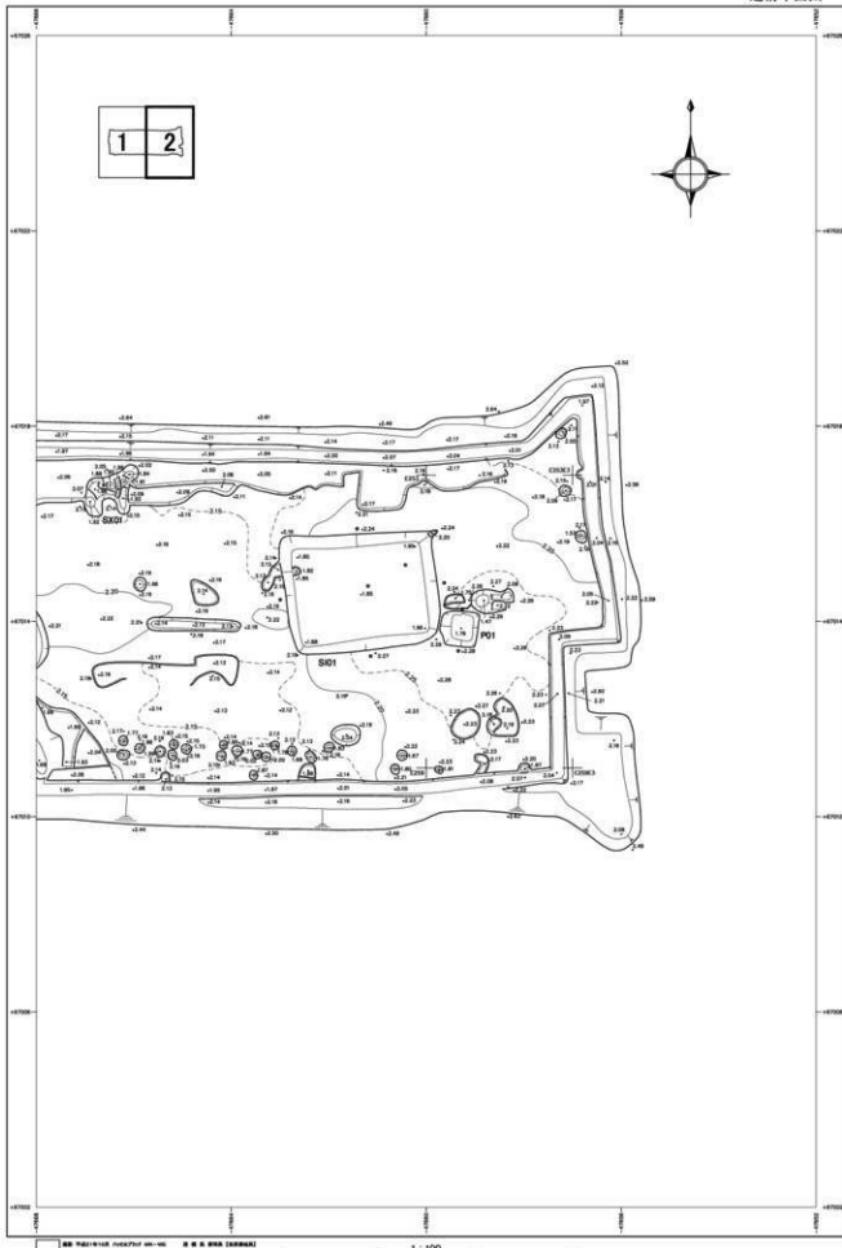
- 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会
 江戸遺跡研究会 2001『図説江戸考古学研究辞典』柏書房
 堀内光次郎 2001「中世の焼物生産」『新修小松市史資料編3 九谷焼と小松瓦』小松市
 金沢市 2004「久昌寺遺跡」
 金沢市 2011「直江中遺跡」
 金沢市 2012「直江ポンノシロ遺跡」
 金沢市教育委員会 1981「金沢市南新保D遺跡」、p221
 本村孝一郎 2011「越前焼の編年の研究と生産地の動向」『山陰地方における越前・常滑系土器』山陰中世土器検討会
 九州近世陶磁学会 2000「九州陶磁の編年」
 越田賢一郎 2004「鉄鍋再考」「アイス文化の成立」北海道出版企画センター
 越田賢一郎 2007「東日本・北海道と北方地域の鉄鍋・土鍋」「北東アジア交流史研究－古代と中世－」培書房
 古代の土器研究会 1994「古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3 施釉陶器－」
 桜井準也 2004「近世の鍋被り人骨について」「墓と埋葬と江戸時代」吉川弘文館
 高橋照彦 1995「縁結陶器」「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社
 太宰府市教育委員会 2000「大宰府条坊跡XV－陶器類分類編－」
 田中照久・木村宏一郎 2005「越前」「中世窯業の諸相 資料集」
 奈良国立文化財研究所 1993「木器集成図録 近畿原始篇」
 藤澤良祐 2008「中世瀬戸窯の研究」高志書院
 増山 仁 1997「金沢城下における近世墓・久昌寺墓地を中心として－」『西日本近世墓の諸様相』
 関西近世考古学研究会
 森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会
 山下峰司 1995「灰釉陶器・山茶碗」「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社
 山田昌久 2003「考古資料大観」第8巻 小学館
 吉岡康暢 1994「中世須恵器の研究」吉川弘文館
 四柳嘉章 1997「北陸の漆器考古学－中世とその前後－」「北陸の漆器考古学－中世とその前後－」
 北陸中世土器研究会
 四柳嘉章 2006「漆I・II」法政大学出版局



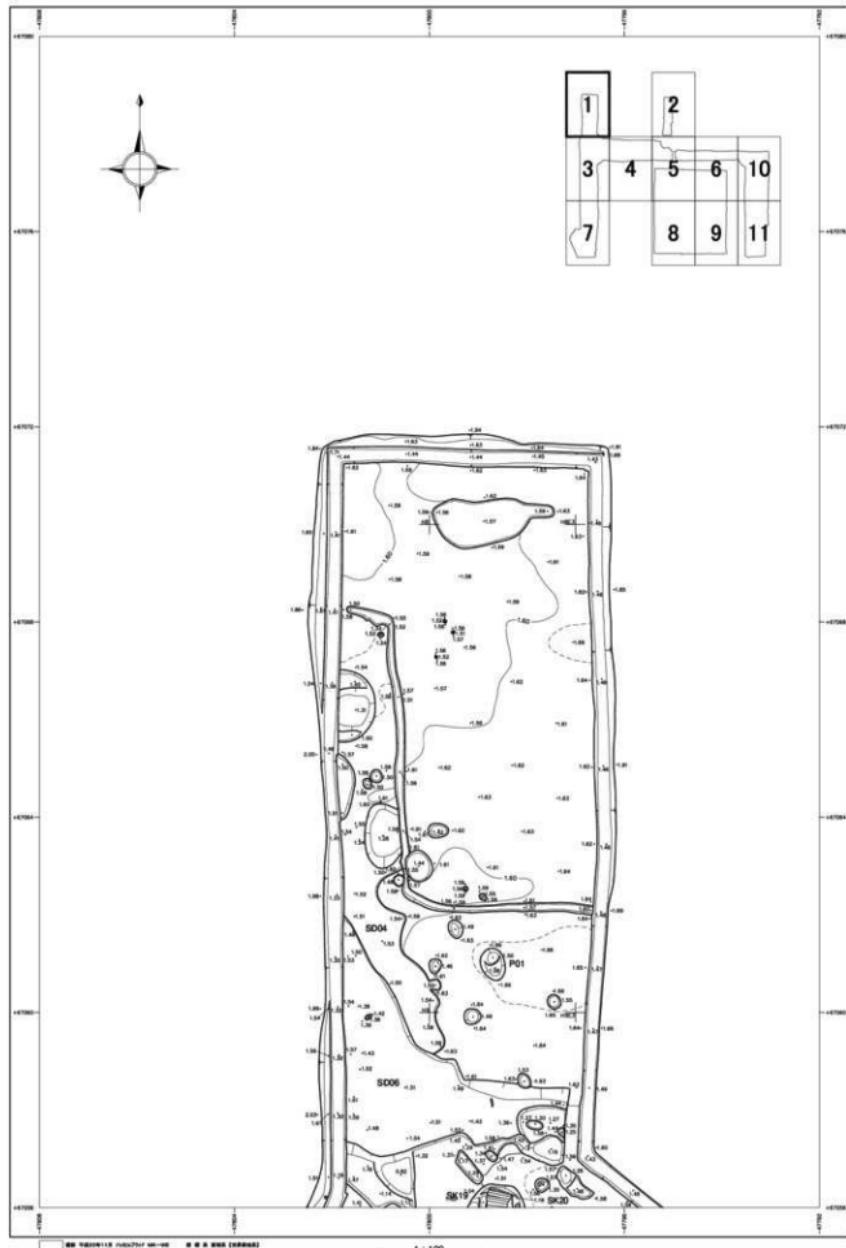
第74図 直江ポンノシロ遺跡出土墨書き器赤外線像(左上:230、右上:331、左下:332、右下:333)



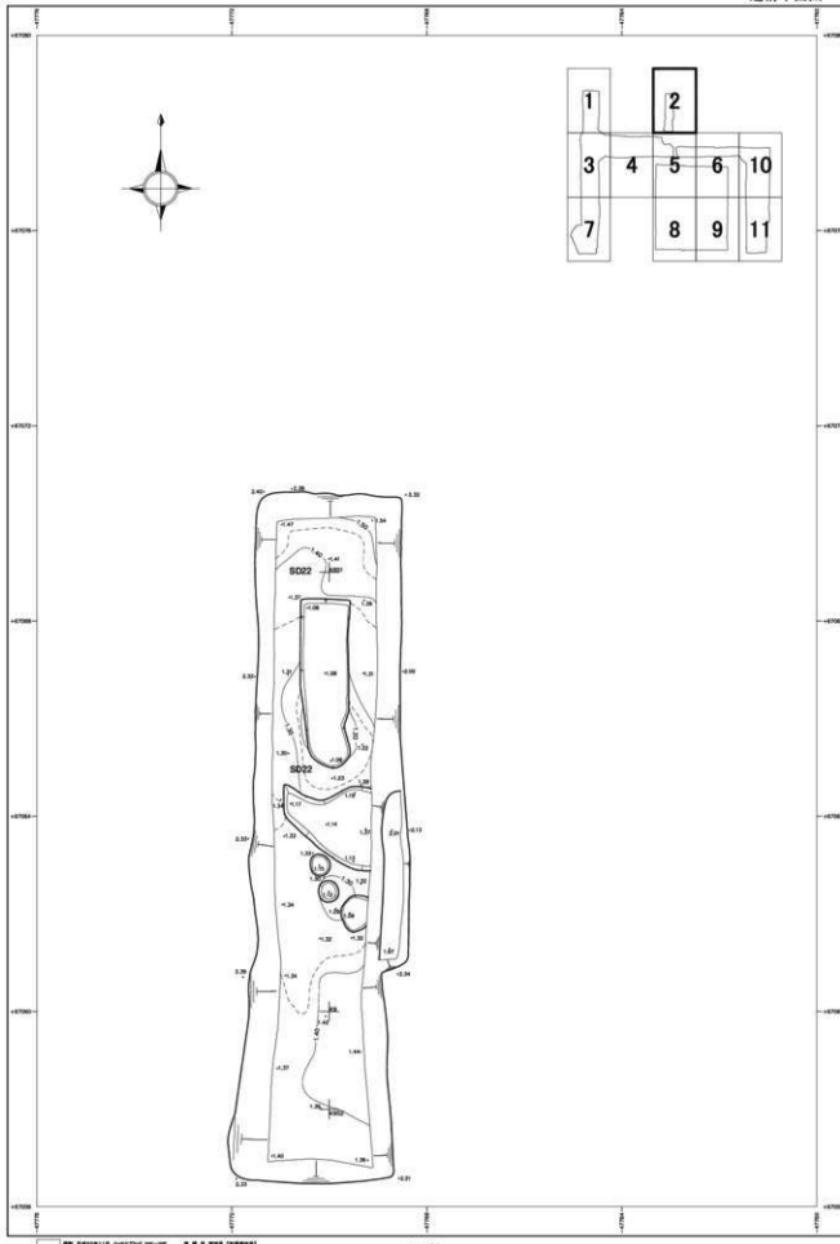
第75図 直江南遺跡遺構平面図(1) [S=1/100]



第76図 直江南遺跡遺構平面図(2) [S=1/100]



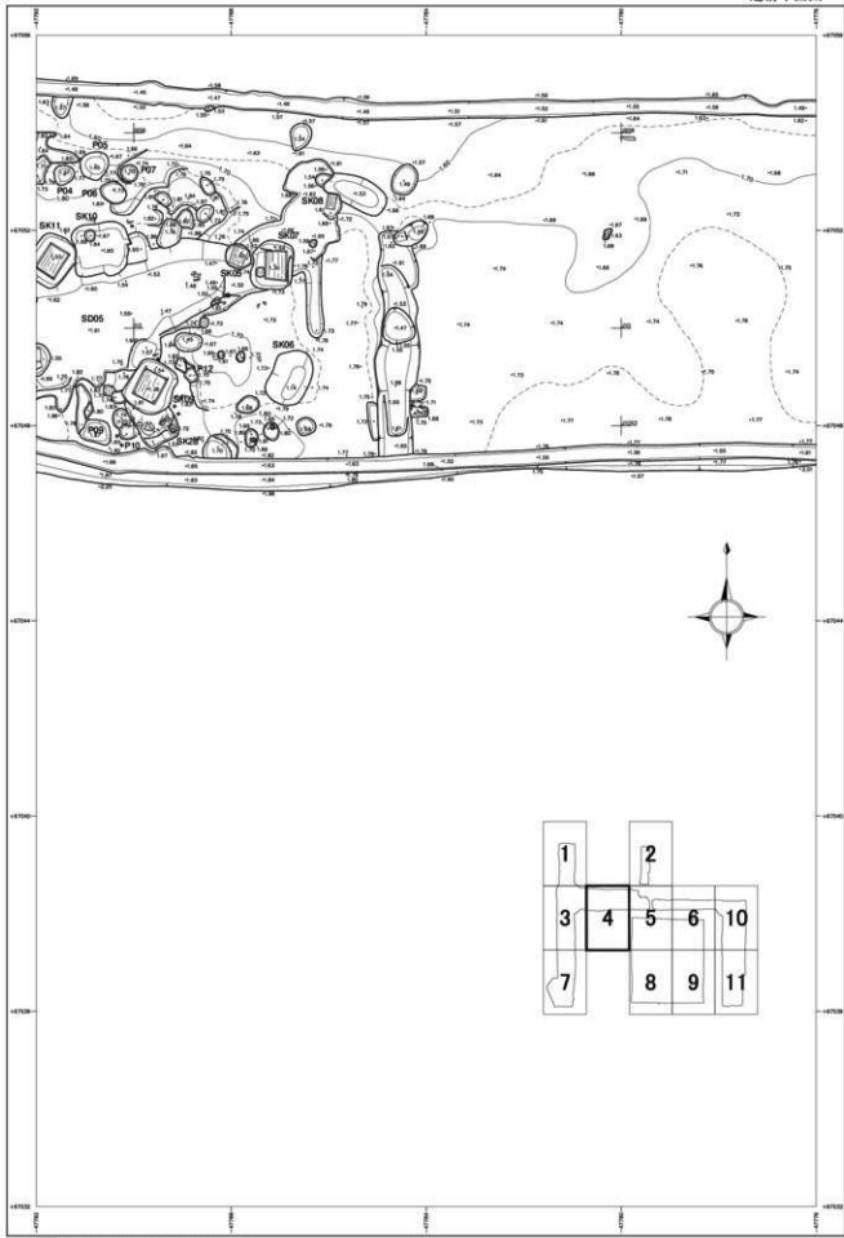
第77図 直江ポンノシロ遺跡遺構平面図(1) [S=1/100]



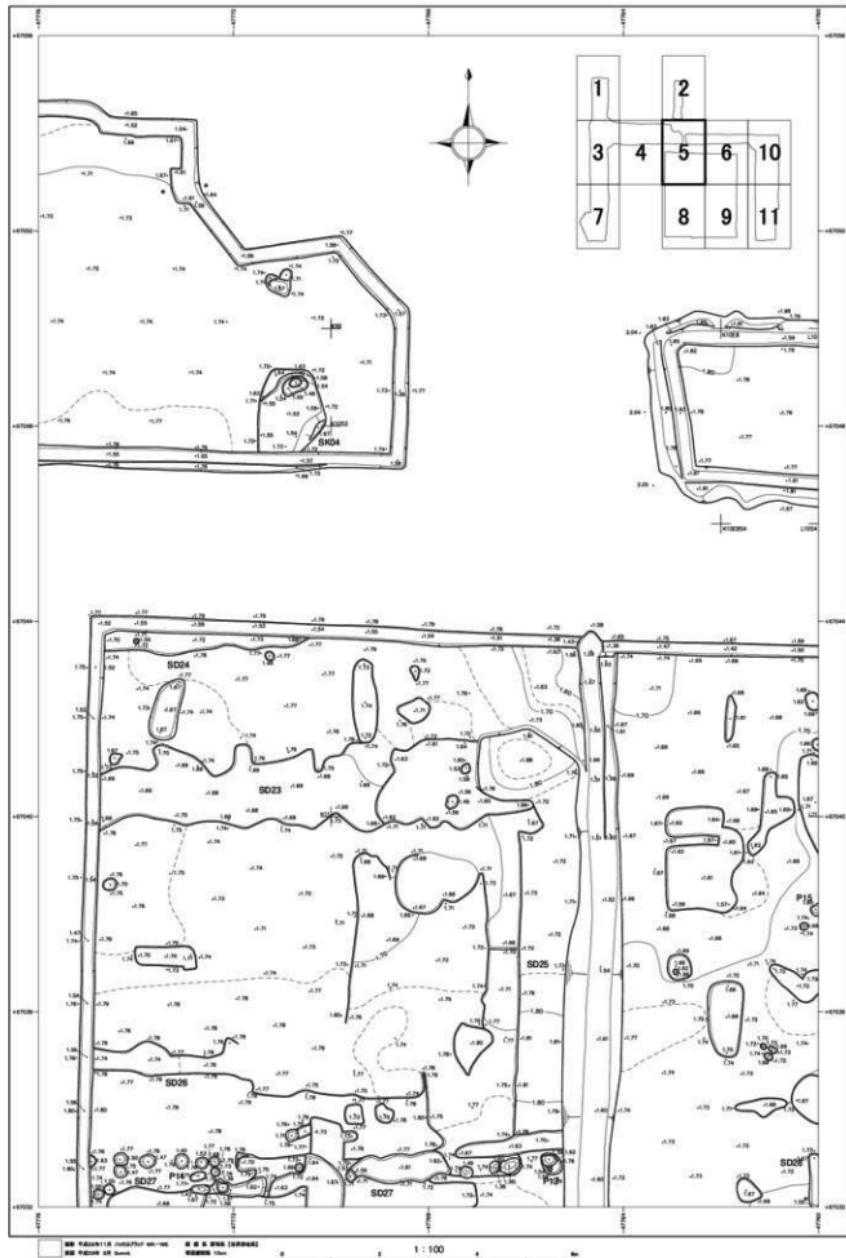
第78図 直江ポンノシロ遺跡遺構平面図(2) [S=1/100]



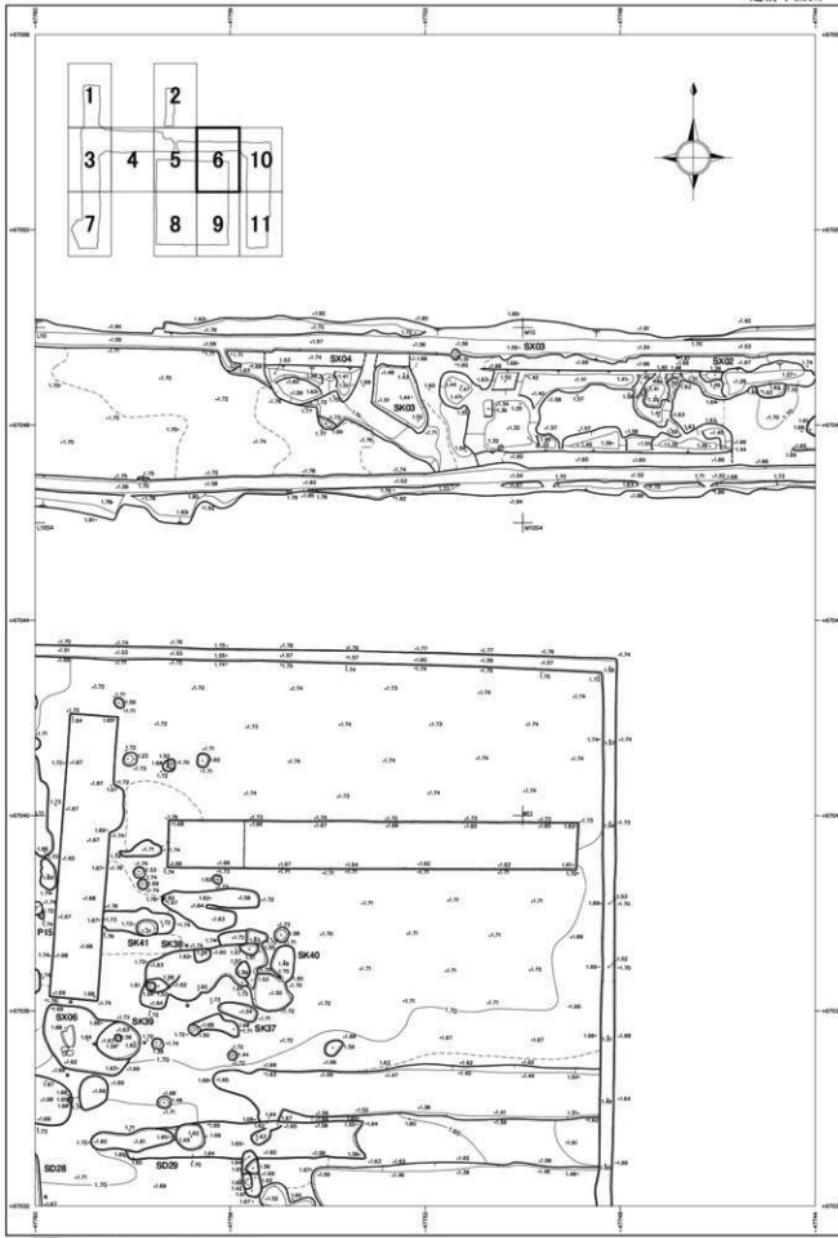
第79図 直江ポンシロ遺跡遺構平面図(3) [S=1/100]



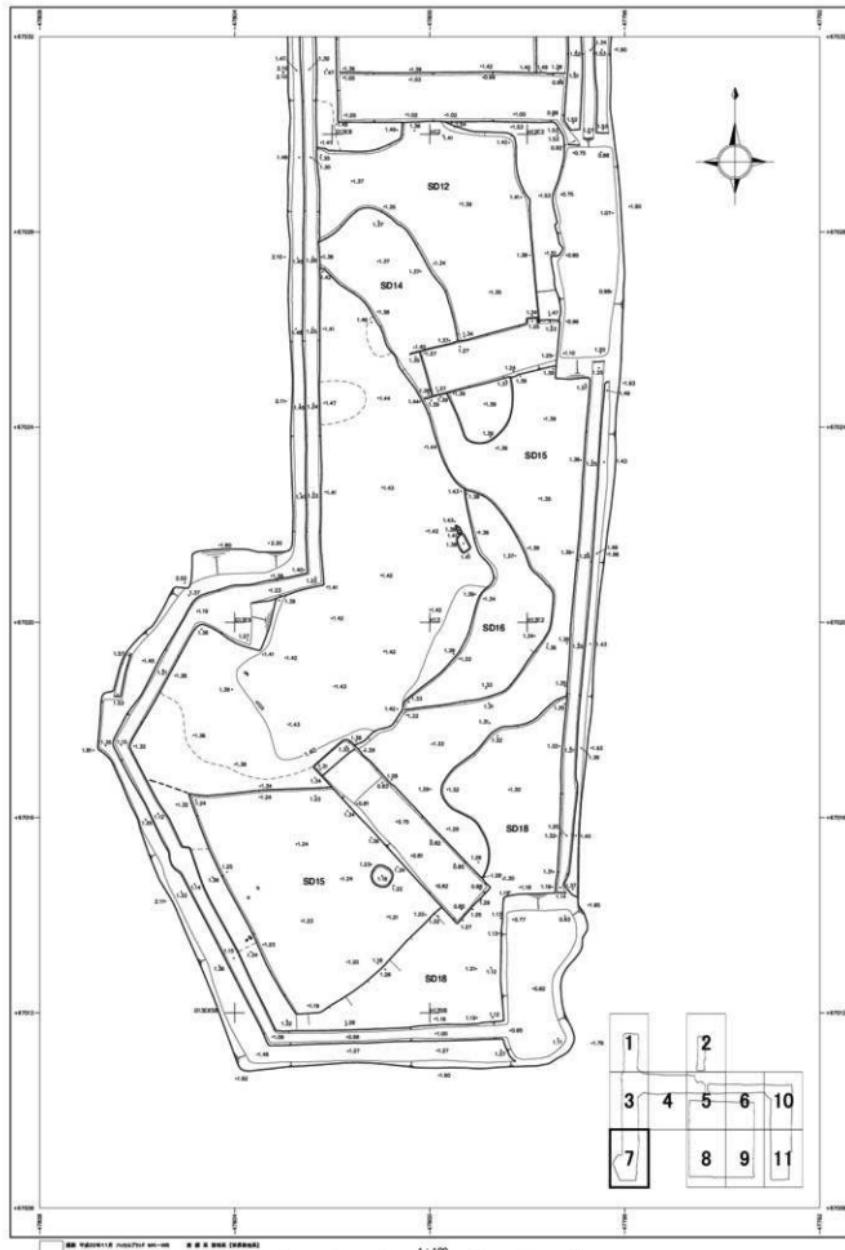
第80図 直江ポンノシロ遺跡遺構平面図(4) [S=1/100]



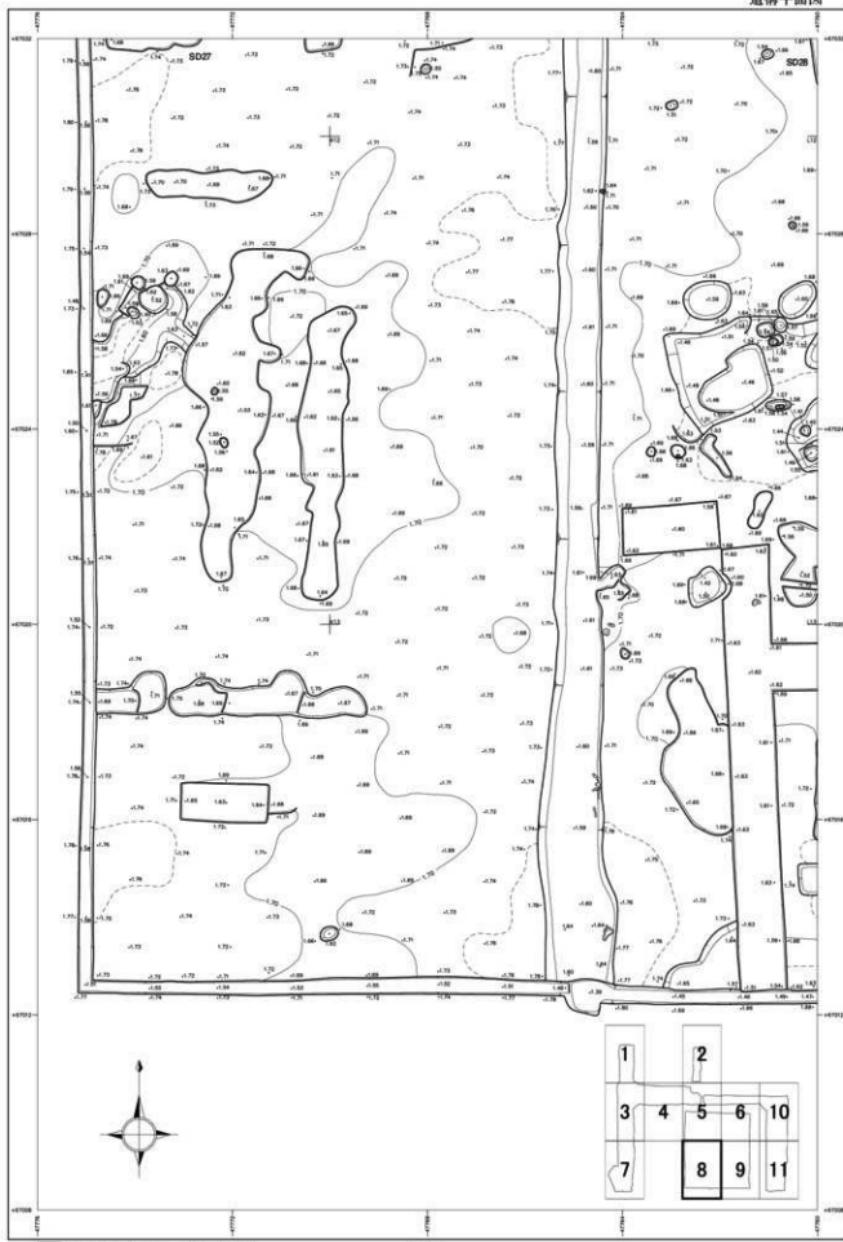
第81図 直江ボンノシロ遺跡遺構平面図(5) [S=1/100]



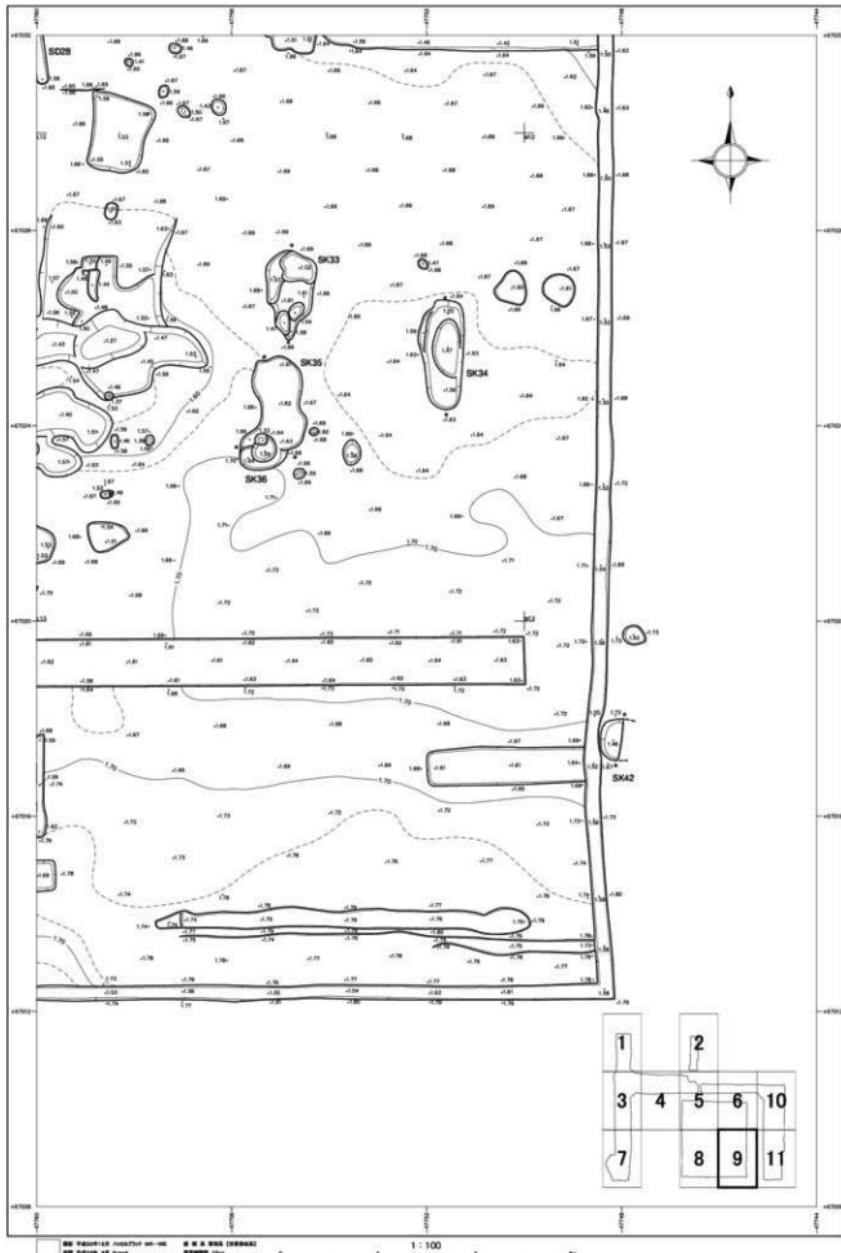
第82図 直江ポンノシロ遺跡遺構平面図(6) [S=1/100]



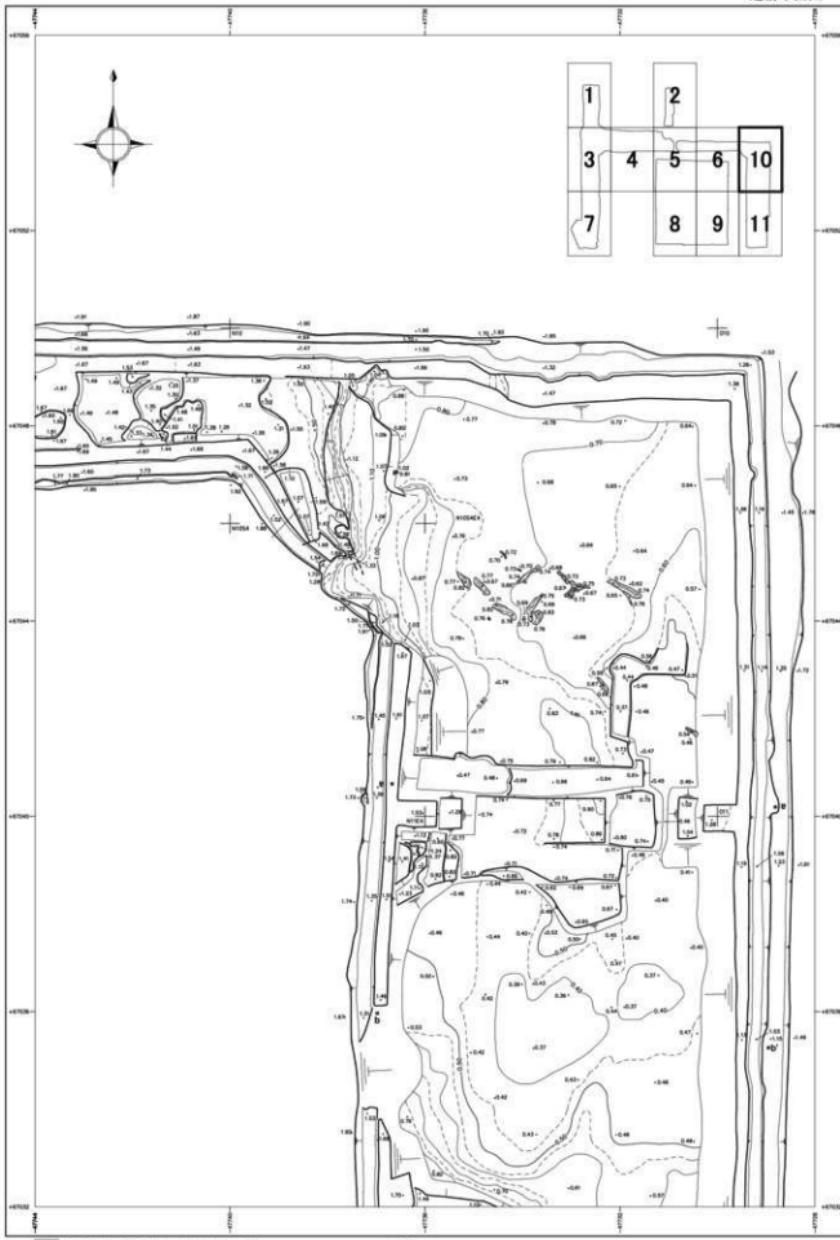
第83図 直江ボンノシロ遺跡遺構平面図(7) [S=1/100]



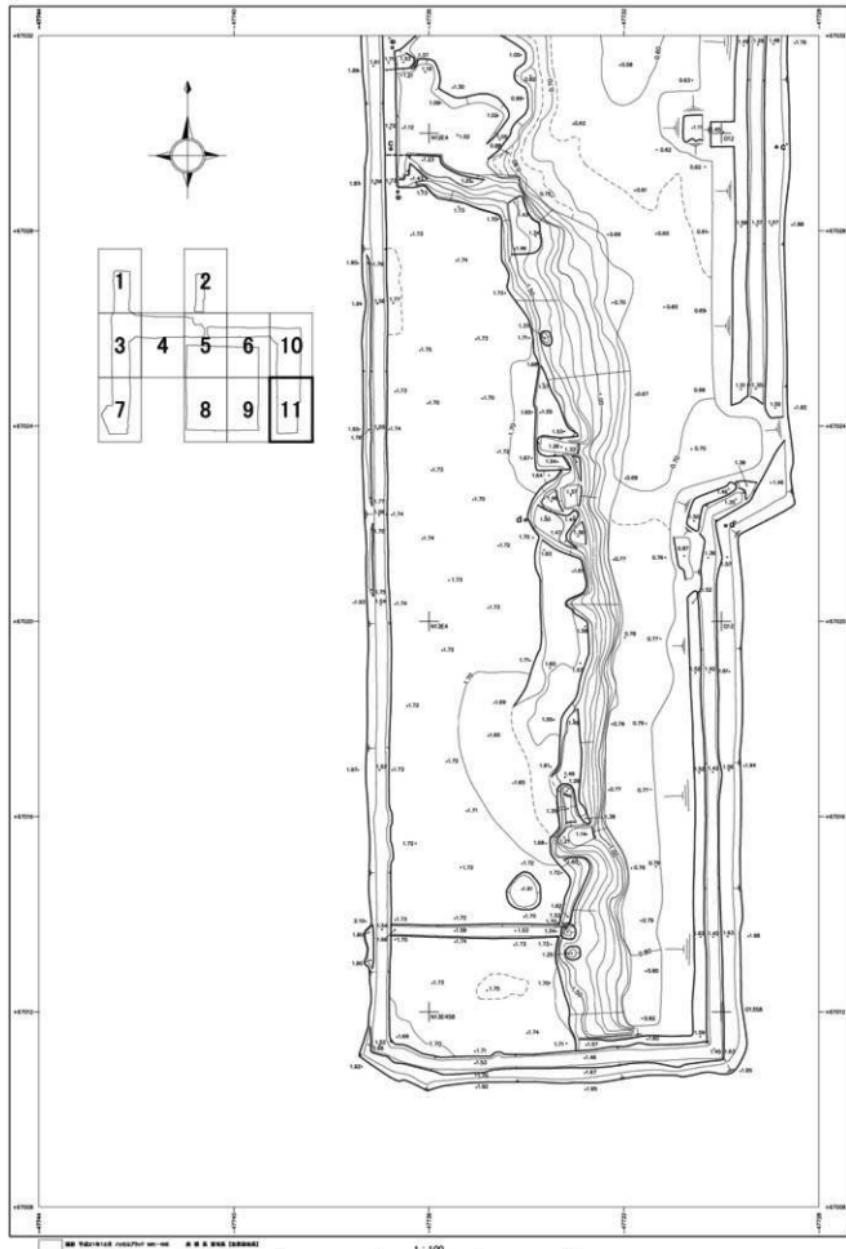
第84図 直江ボンノシロ遺跡遺構平面図(8) [S=1/100]



第85図 直江ボンノシロ遺跡遺構平面図(9) [S=1/100]

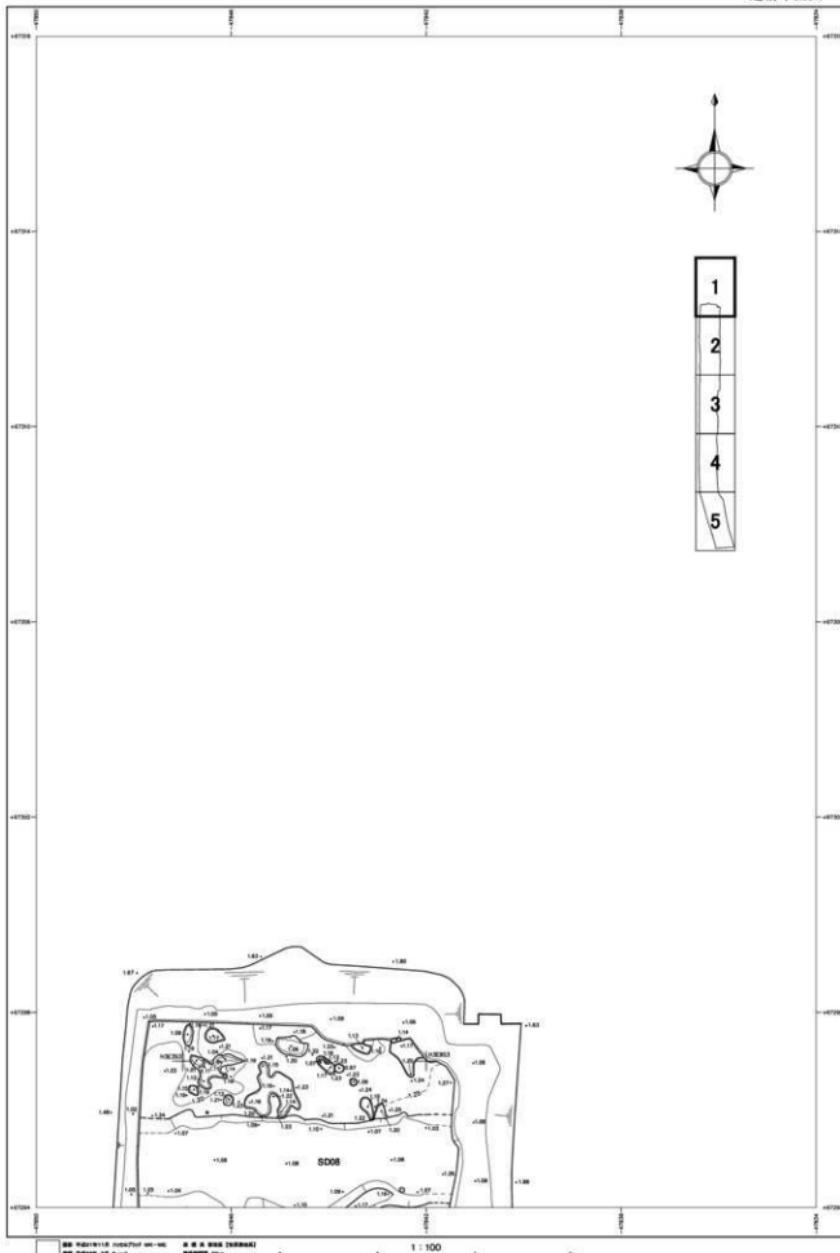


第86図 直江ポンノシロ遺跡遺構平面図(10) [S=1/100]

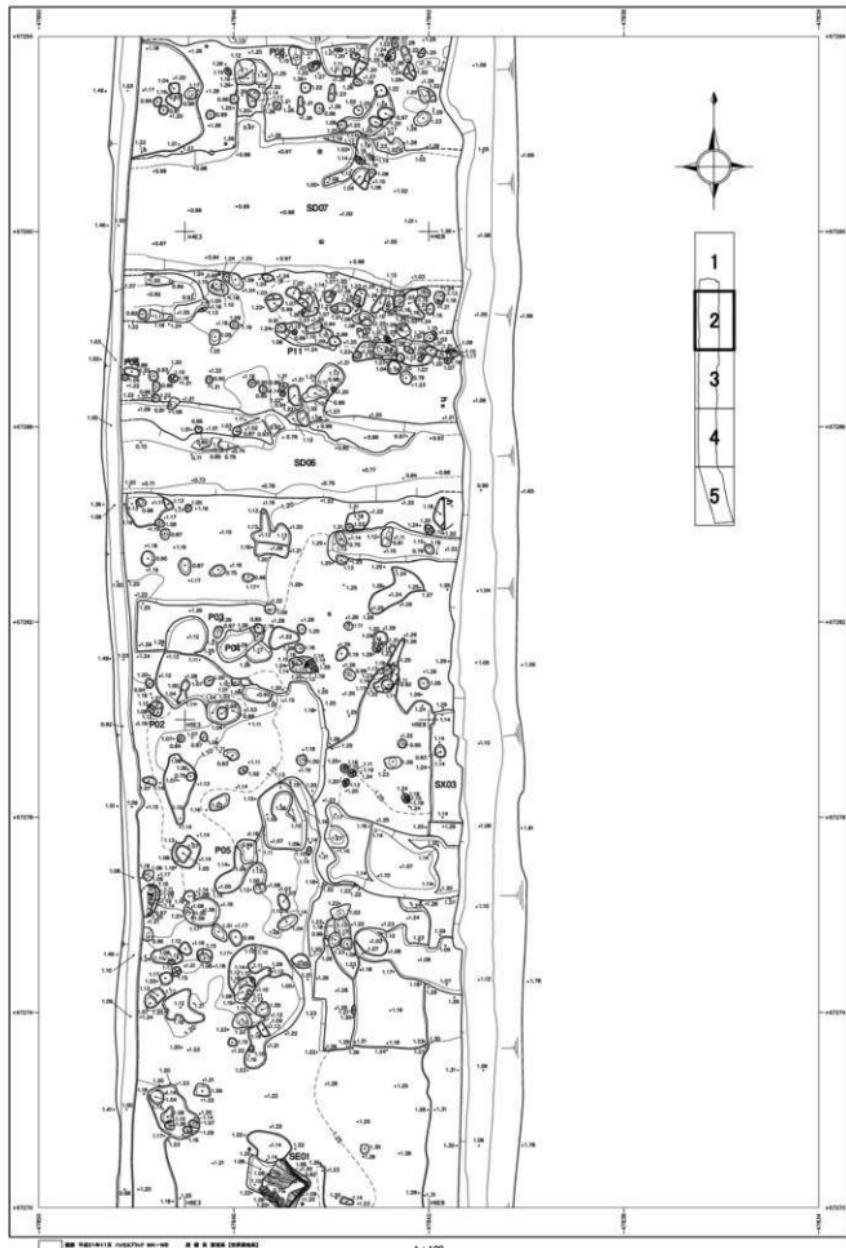


第87図 直江ボンノシロ遺跡遺構平面図(11) [S=1/100]

造構平面図

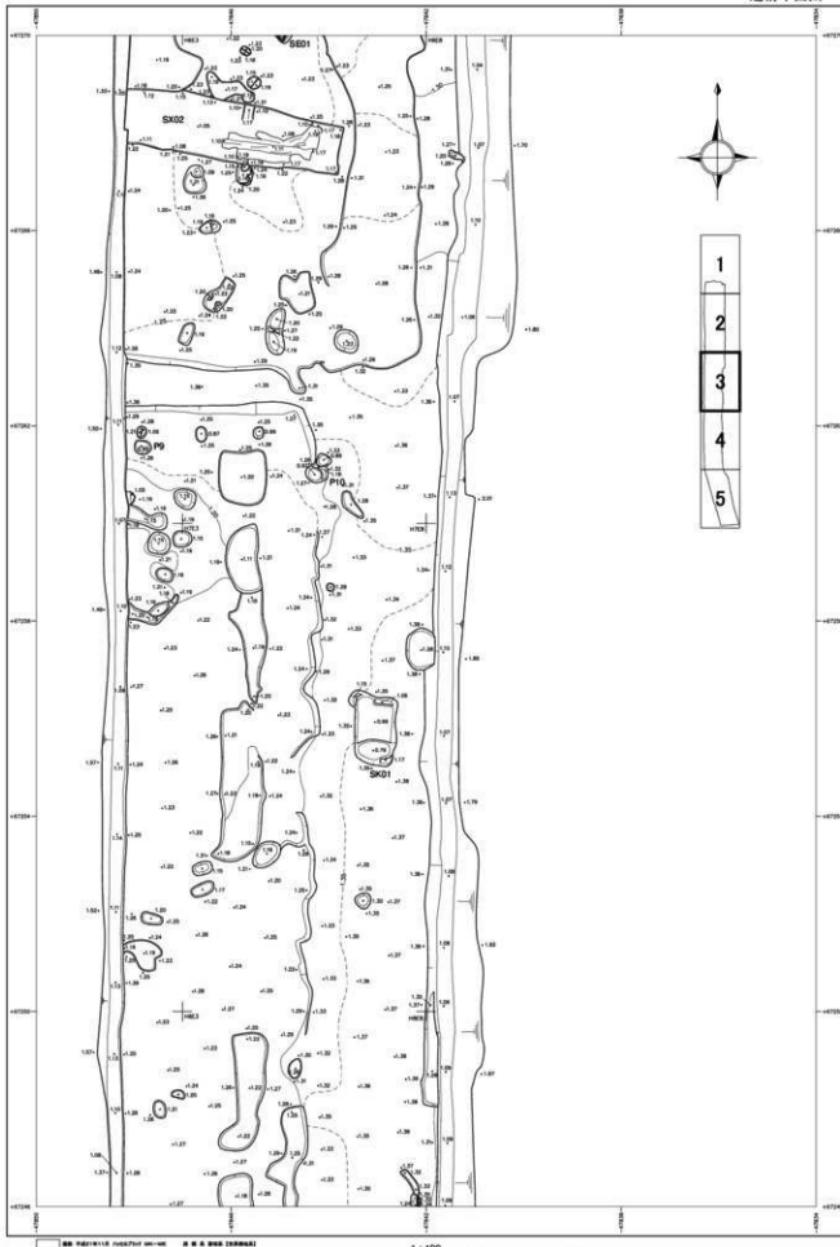


第88図 直江ニシヤ遺跡遺構平面図(1) [S=1/100]

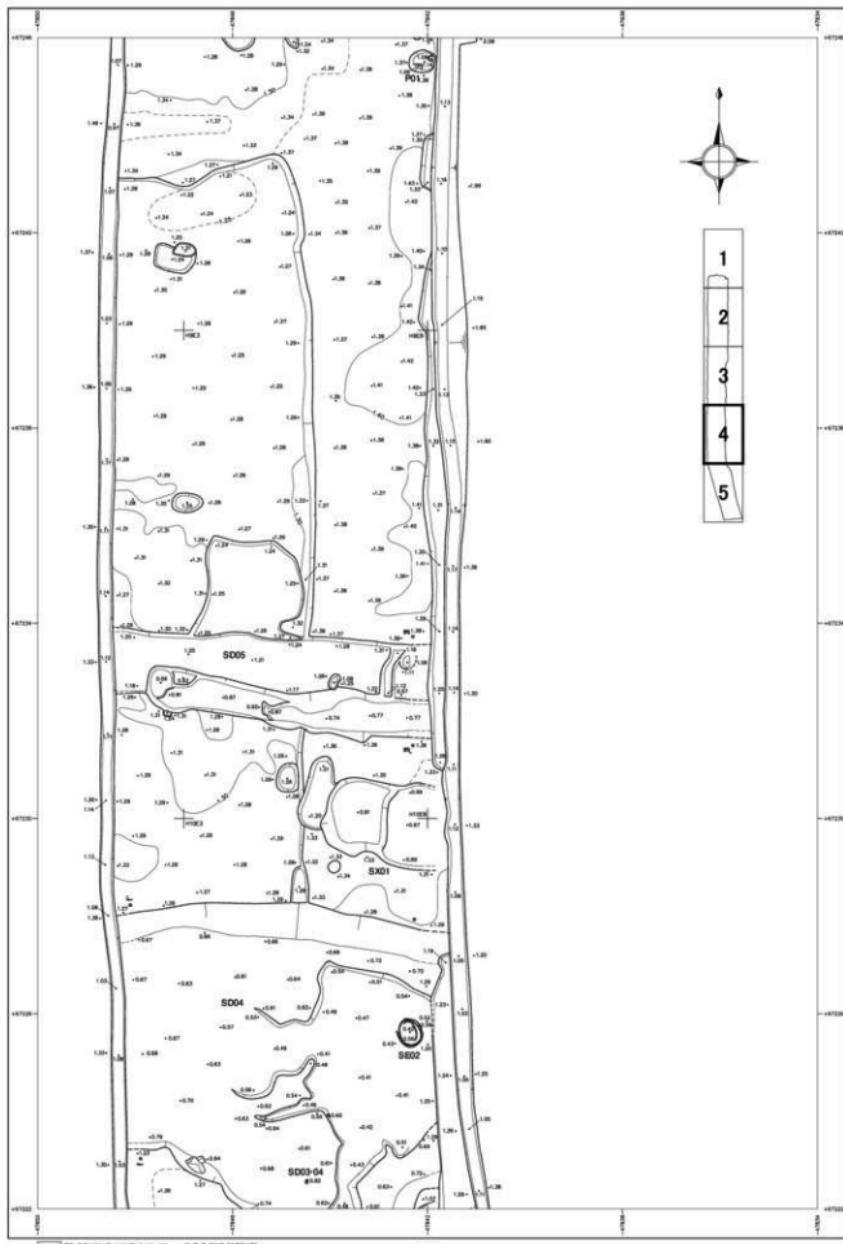


第89図 直江ニシヤ遺跡遺構平面図(2) [S=1/100]

造構平面図

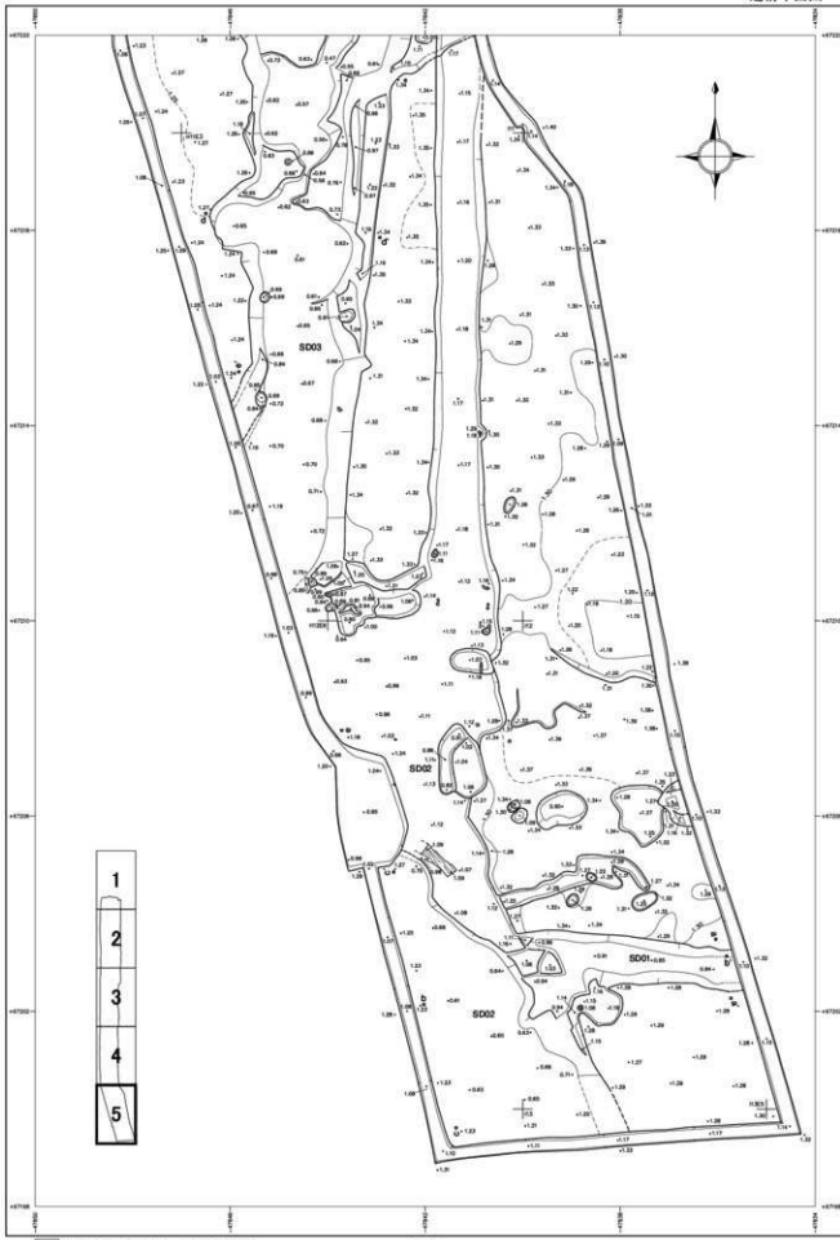


第90図 直江ニシヤ遺跡遺構平面図(3) [S=1/100]

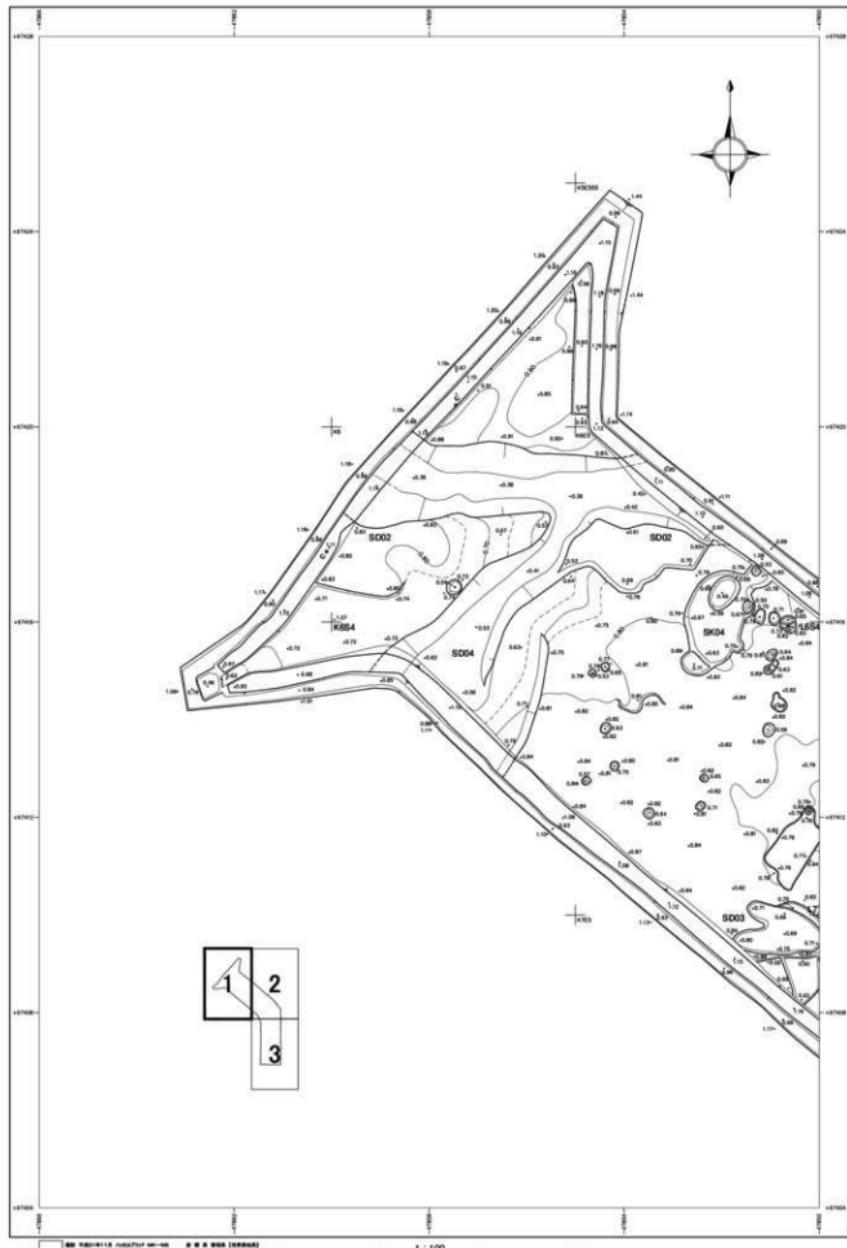


第91図 直江ニヤ遺跡遺構平面図(4) [S=1/100]

造構平面図

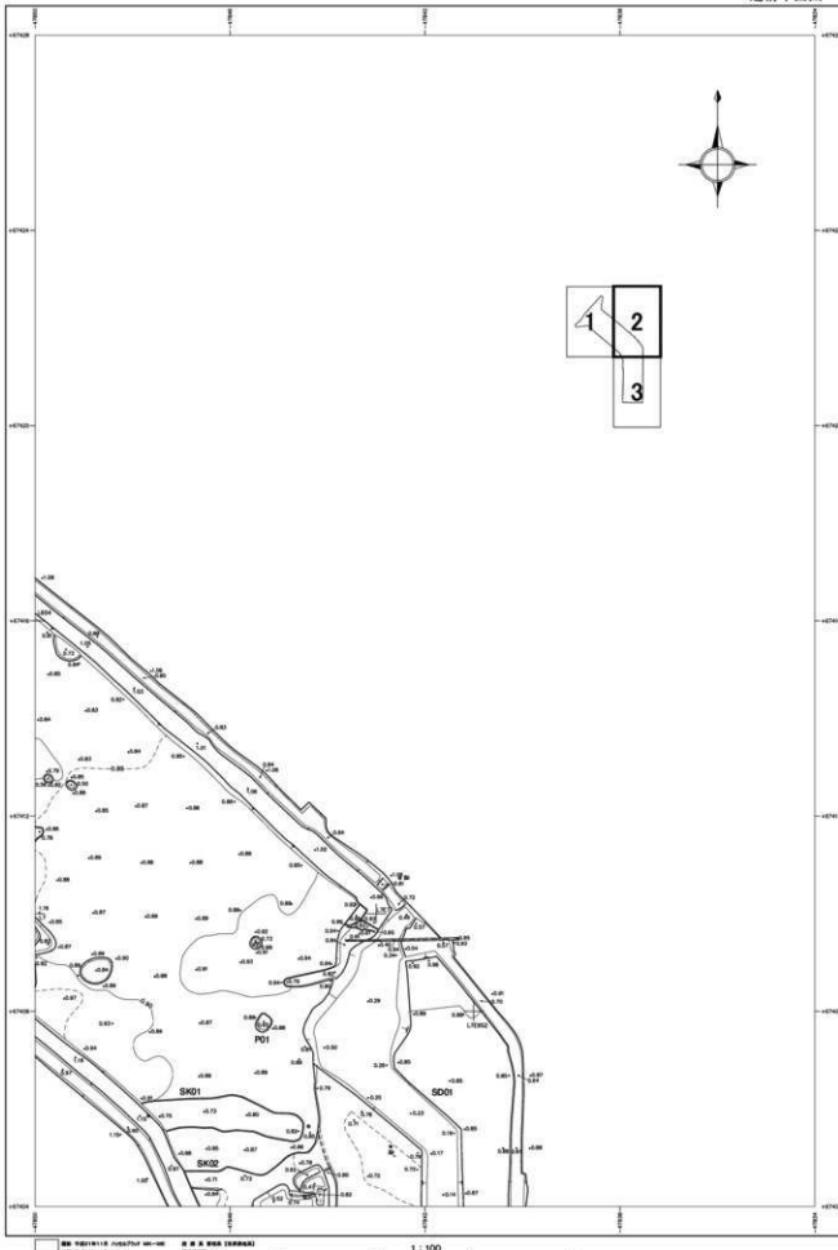


第92図 直江ニシヤ遺跡遺構平面図(5) [S=1/100]

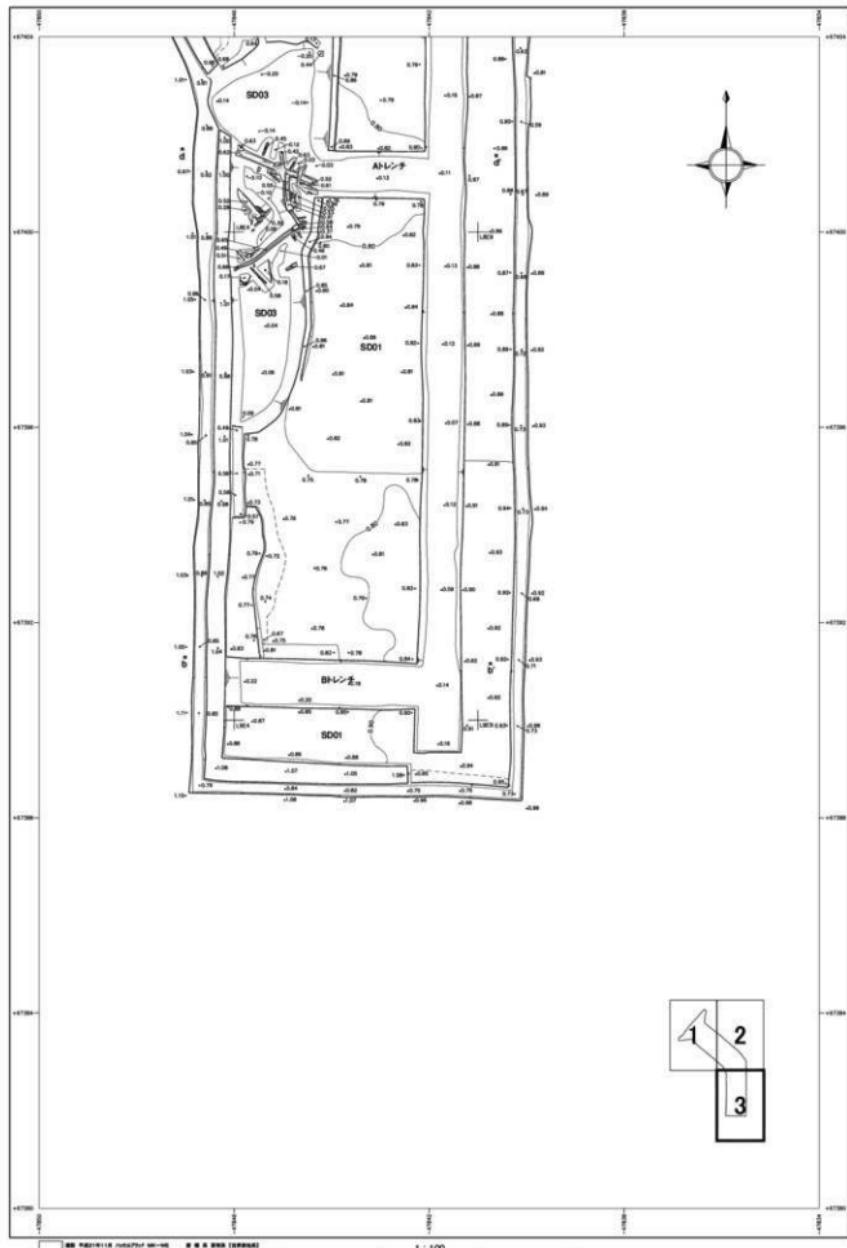


第93図 直江西遺構遺構平面図(1) [S=1/100]

遺構平面図



第94図 直江津遺構遺構平面図(2) [S=1/100]



第95図 直江西遺構遺構平面図(3) [S=1/100]

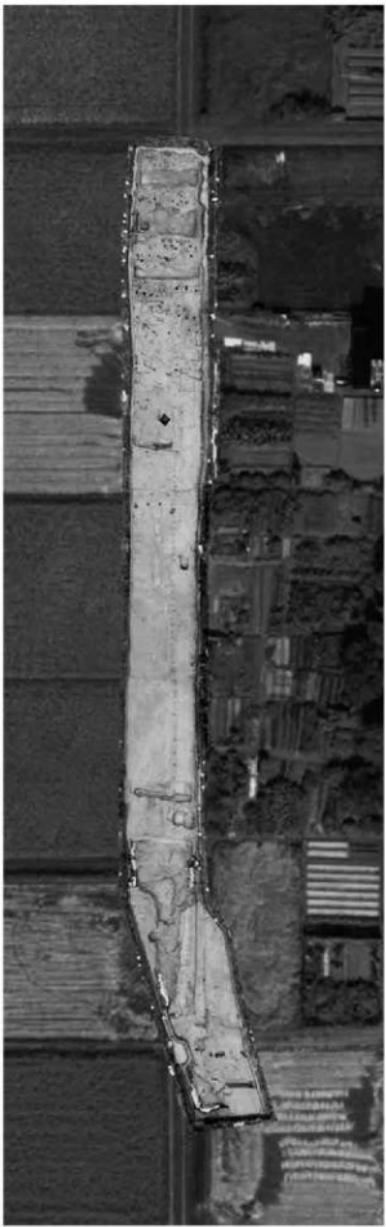
写真図版1（直江西遺跡・直江ニシヤ遺跡・直江南遺跡）



直江西遺跡全景(オルソ画像、S = 1/500)



直江南遺跡全景(オルソ画像、S = 1/500)



直江ニシヤ遺跡全景(オルソ画像、S = 1/500)



直江ボンノシロ遺跡全景(オルソ画像、S = 1/500)



SE01(直江南遺跡)



SE01(直江南遺跡)

写真図版3（直江南遺跡・直江ポンノシロ遺跡）



SE02(直江南遺跡)



SE03(直江南遺跡)



SE04(直江南遺跡)



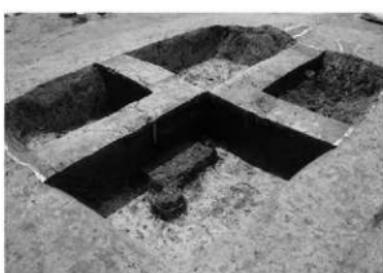
SE04(直江南遺跡)



SE05(直江南遺跡)



SE05(直江南遺跡)



SI01(直江南遺跡)



SD01・02(直江ポンノシロ遺跡)

写真図版 4 (直江ポンノシロ遺跡)



SD01・02(直江ポンノシロ遺跡)



SD01・02(直江ポンノシロ遺跡)



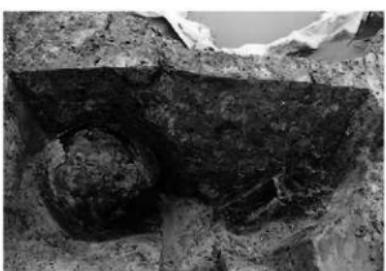
SD02(直江ポンノシロ遺跡)



SD03(直江ポンノシロ遺跡)



SK19(直江ポンノシロ遺跡)



SK28(直江ポンノシロ遺跡)



SK31(直江ポンノシロ遺跡)



SK32(直江ポンノシロ遺跡)



SE01(直江ニシヤ遺跡)



SE01(直江ニシヤ遺跡)



SE01(直江ニシヤ遺跡)



SE02(直江ニシヤ遺跡)



SD03・04(直江ニシヤ遺跡)



SD06～08(直江ニシヤ遺跡)



SD01・03(直江西遺跡)



SD03(直江西遺跡)



76(直江南遺跡)



102(直江南遺跡)



94(直江南遺跡)



86~89(直江南遺跡)



99・95~98・未実測品(直江南遺跡)



101(直江南遺跡)



井戸枠 47(直江南遺跡)



井戸枠 49(直江南遺跡)



井戸枠 55(直江南遺跡)



28(直江西遺跡)



29(直江西遺跡)



6・7・8



20



30



32



33



25



28



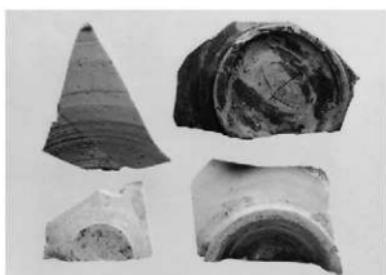
1



31



83



写真図版9（直江ポンノシロ遺跡・直江ニシヤ遺跡出土遺物）



391(直江ポンノシロ遺跡)



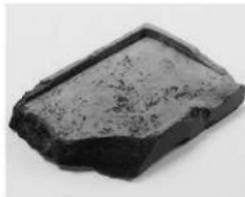
401(直江ポンノシロ遺跡)



403(直江ポンノシロ遺跡)



421(直江ポンノシロ遺跡)



433(直江ポンノシロ遺跡)



121(直江ニシヤ遺跡)



422・423(直江ポンノシロ遺跡)



3・4(直江ニシヤ遺跡)



105・106・107(直江ニシヤ遺跡)



28(直江ニシヤ遺跡)



95(直江ニシヤ遺跡)



78(直江ニシヤ遺跡)



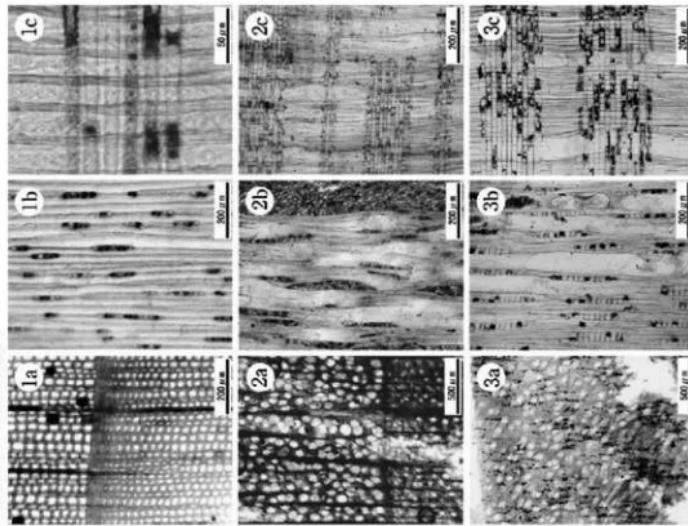
108(直江ニシヤ遺跡)



136(直江ニシヤ遺跡)

木製品の光学顕微鏡写真(1)

木製品の光学顕微鏡写真(2)



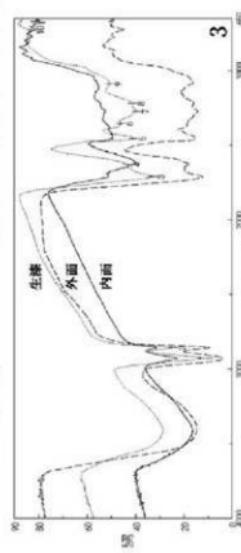
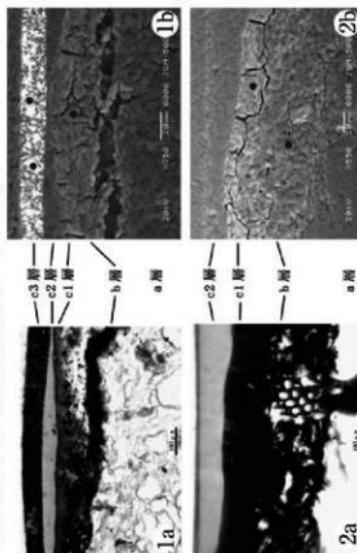
木製品の光学顕微鏡写真(2)

木製品の光学顕微鏡写真(2)

1a - 1c : スギ (No.9) 2a - 2c : カナダ杉 (No.10) 3a - 3c : コロラドスギ (No.11)
a : 横断面 (スケール=200 μm) b : 径断面 (スケール=100 μm)
c : 放射断面 (スケール=1 : 25 μm × 2 = 3 : 100 μm)

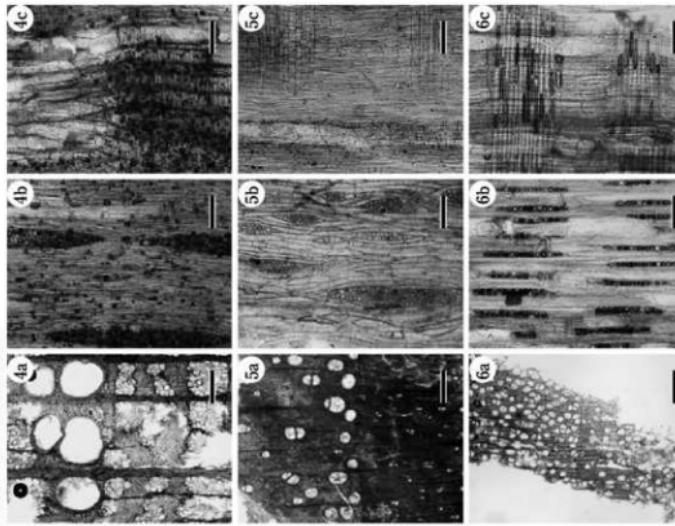
1a - 1c : アスナロ (No.1) 2a - 2c : ブナ属 (No.1) 3a - 3c : ハチノヘ (No.4)
a : 横断面、b : 径断面、c : 放射断面

塗膜の断面構造と塗膜表面の赤外分光スペクトル図(1)



1a. 測定機 No.3 内面側断面の光学顕微鏡写真
1b. 測定機 No.3 内面側断面の赤外分光断面の反射電子像
2a. 測定機 No.3 外面側断面の光学顕微鏡写真
2b. 測定機 No.3 外面側断面の赤外分光断面の反射電子像
3. 塗膜表面の赤外分光スペクトル図 (縦軸は透過率、横軸は波数)

木製品の光学顕微鏡写真(3)

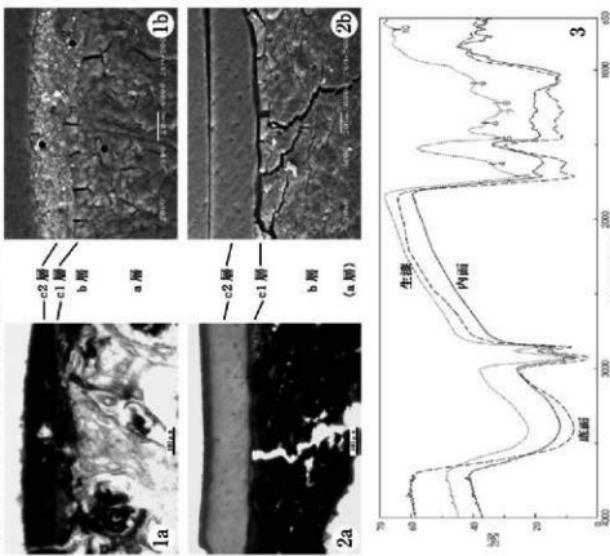


カワ属(Na.11) 6a - 6c, ケヤキ属(Na.11) 4a - 4c

a : 横断面(スケール = 200 μm) b : 長幅断面(スケール = 100 μm)

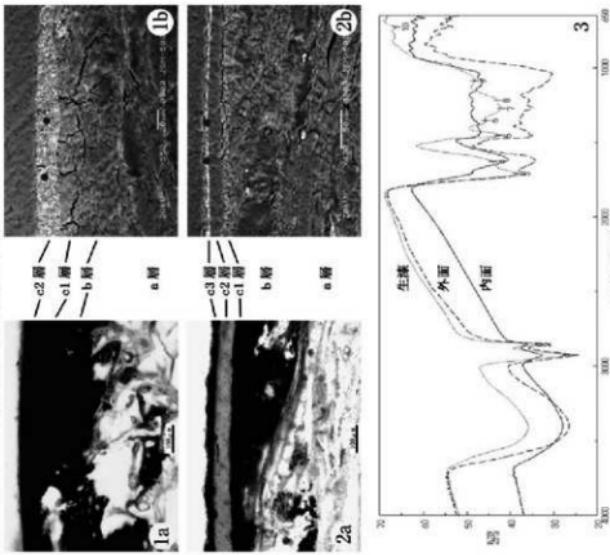
c : 断面(スケール = 100 μm)

塗膜の断面構造と塗膜表面の赤外分光スペクトル図(3)



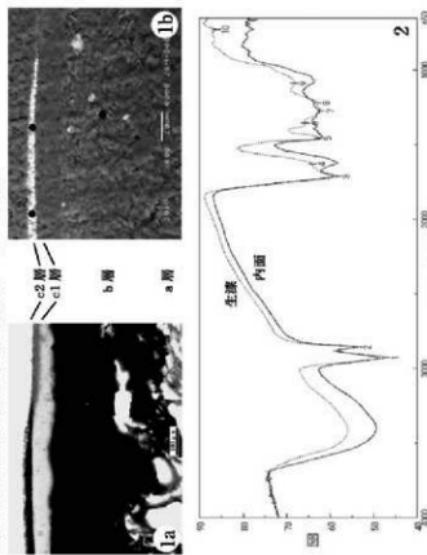
1a. 塗装機 No.5 中面剖面断面の光学顕微鏡写真 1b. 塗装機 No.5 内面剖面断面の反射電子像
2a. 涂装機 No.5 外面剖面断面の光学顕微鏡写真 2b. 涂装機 No.5 外面剖面断面の反射電子像
3. 塗膜表面の赤外分光スペクトル図 (縦軸は透過率、横軸は波数を示す)

塗膜の断面構造と塗膜表面の赤外分光スペクトル図(2)

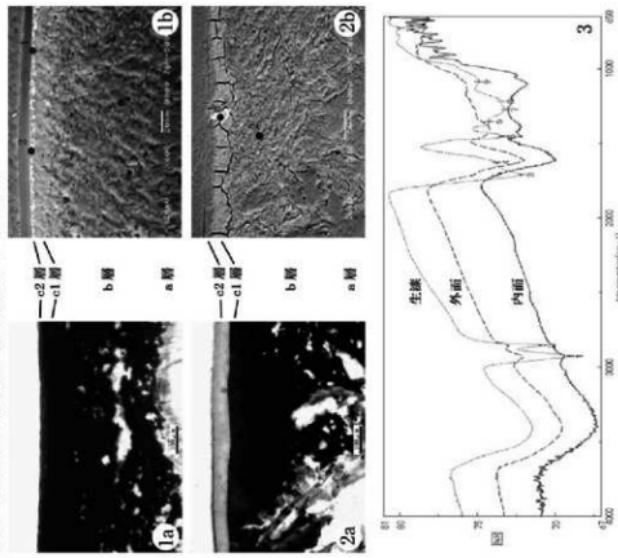


1a. 塗装機 No.4 内面剖面断面の光学顕微鏡写真 1b. 塗装機 No.4 内面剖面断面の反射電子像
2a. 塗装機 No.4 外面剖面断面の光学顕微鏡写真 2b. 塗装機 No.4 外面剖面断面の反射電子像
3. 塗膜表面の赤外分光スペクトル図 (縦軸は透過率、横軸は波数を示す)

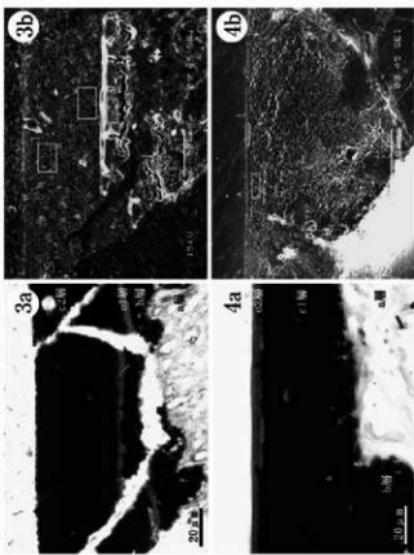
塗膜の断面構造と塗膜表面の赤外分光スペクトル図(5)

1a. 漆器輪 No.6 内面塗膜断面の光学顕微鏡写真
1b. 漆器輪 No.6 内面塗膜断面の反射電子像
2. 塗膜表面の赤外分光スペクトル図
(縦軸は透過率、横軸は波数を示す)

塗膜の断面構造と塗膜表面の赤外分光スペクトル図(4)

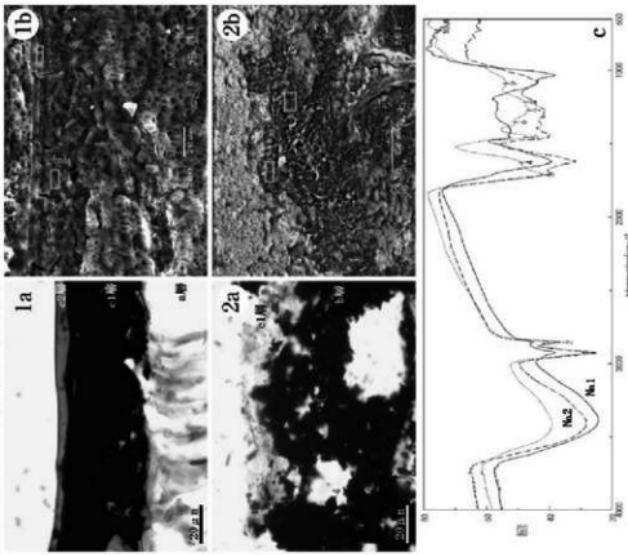
1a. 漆器輪 No.6 内面塗膜断面の光学顕微鏡写真
1b. 漆器輪 No.6 内面塗膜断面の反射電子像
2. 塗膜表面の赤外分光スペクトル図
(縦軸は透過率、横軸は波数を示す)
3. 塗膜表面の赤外分光スペクトル図
(縦軸は透過率、横軸は波数を示す)

塗膜の断面構造と塗膜表面の赤外分光スペクトル図(7)



3a. 塗膜薄片の光学顕微鏡写真(試料No.3) 3b. 塗膜断面の反射電子像とX線分析位置(試料No.3)
4a. 塗膜薄片の光学顕微鏡写真(試料No.4) 4b. 塗膜断面の反射電子像とX線分析位置(試料No.4)
c. 赤外分光スペクトル回帰線は透過率、横軸を波数を示す。吸収(Na)は主な吸収位置を示す

塗膜の断面構造と塗膜表面の赤外分光スペクトル図(6)



1a. 塗膜薄片の光学顕微鏡写真(試料No.1) 1b. 塗膜断面の反射電子像とX線分析位置(試料No.1)
2a. 塗膜薄片の光学顕微鏡写真(試料No.2) 2b. 塗膜断面の反射電子像とX線分析位置(試料No.2)
c. 赤外分光スペクトル回帰線は透過率、横軸を波数を示す。吸収(Na)は主な吸収位置を示す

報 告 書 抄 錄

ふりがな 書名	いしかわけんかなざわし なおえみみないせき・なおえほんのしろいせき・なおえにしやいせき・なおえにしいせき 石川県金沢市 直江南遺跡・直江ポンノシロ遺跡・直江ニシヤ遺跡・直江西遺跡							
副書名	金沢市副都心北部直江土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2							
シリーズ名	金沢市文化財紀要							
シリーズ番号	277							
編著者名	向井裕知、前田雪恵							
編集機関	金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)							
所在地	〒920-0374 金沢市上安原南60番 TEL (076) 269-2451							
発行年月日	平成24(2012)年3月30日							
所 取 遺 跡	所 在 地	コード		北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なおえみなみ 直江南遺跡	いしかわけん 石川県 かねざわく 金沢市 ながえまち 直江町	172014	新発見の ためなし	36° 60' 27"	136° 63' 27"	090707 ～ 091209	200 m ²	区画整理
ながえまち 直江ポンノ シロ遺跡	いしかわけん 石川県 かねざわく 金沢市 ながえまち 直江町	172014	新発見の ためなし	36° 60' 28"	136° 63' 38"	090713 091209 101015 101126	450 m ² 750 m ²	区画整理
ながえまち 直江ニシヤ 遺跡	いしかわけん 石川県 かねざわく 金沢市 ながえまち 直江町	172014	新発見の ためなし	36° 60' 49"	136° 63' 16"	090714 ～ 091209	700 m ²	区画整理
ながえじ 直江西遺跡	いしかわけん 石川県 かねざわく 金沢市 ながえまち 直江町	172014	新発見の ためなし	36° 60' 47"	136° 63' 17"	090721 ～ 091209	300 m ²	区画整理

所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
直江南遺跡	集落跡	鎌倉時代	井戸 土坑 竪穴遺構	土師器 国産陶器 中国磁器	
要 訳	本遺跡では、主に中世前期の遺構が見つかっており、複数の井戸と方形の竪穴遺構が検出されている。井戸は縦板組横枝留めや曲物積みによる構造がみられる。竪穴遺構からは完形品の漆器が出土しており、埋納の可能性が高く、墓などの信仰対象施設を推定している。				
直江ポンノシロ遺跡	集落跡	弥生・古墳時代 奈良・平安時代 中・近世	土坑 溝・川 墓坑	土器・石製品 土師器・須恵器 陶磁器・漆器	
要 訳	本遺跡では、古墳時代の川跡や平安時代から室町時代の遺物が確認できる川跡とその川跡と重複する江戸時代から明治時代頃の川跡、また江戸時代から明治時代頃の墓跡が見つかっている。遺物は古墳時代の土器や木製品、平安時代の土師器、須恵器、鎌倉時代から室町時代の土師器や国産陶器、中国産陶磁器などが多く出土している。				
直江ニシヤ遺跡	集落跡	古墳時代 奈良・平安時代 中・近世	溝 土坑 井戸・土坑・溝	土器 土師器・須恵器 陶磁器・木製品	
要 訳	発掘調査では、平安時代の溝と鎌倉時代の井戸、室町時代から江戸時代にかけての大溝を検出している。大溝覆土からは近世の遺物が出土しているが、地山近くの砂層から室町時代頃の遺物が出土しているため、室町時代頃につくられたものが、江戸時代まで使用されていたものと考えられる。				
直江西遺跡	集落跡	弥生・古墳時代 奈良・平安時代 中・近世	土坑・川 川	土器 土師器・須恵器 陶磁器・木製品	
要 訳	発掘調査では、弥生時代末頃から古墳時代前半頃の土坑と川を検出している。川は近世の川と重複しているために形状や規模は不明である。川からは土器の他、履物状木製品や火切り臼などの木製品が出土している。				

石川県金沢市
**直江南遺跡・直江ポンノシロ遺跡
 直江ニシヤ遺跡・直江西遺跡**

(『金沢市文化財紀要』277)
 平成24年3月30日発行
 (2012)

編集 金 沢 市
 発行 金沢市埋蔵文化財センター
 〒920-0374
 石川県金沢市上安原南60番
 TEL (076) 269-2451
 印刷 株式会社 荣光プリント